
蒼空の軌跡 FC

風花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蒼空の軌跡 FC

【Nコード】

N5109L

【作者名】

風花

【あらすじ】

導力革命により拓かれし新時代。

技術の進歩が、時代に福音と混沌をもたらすとき、刻の歯車は再びまわり始める。

これは若き遊撃士たちが辿る運命の軌跡　オリキャラを入れて
いますが、基本は原作どおりに進む予定です

出会いと始まり

夜…とある家で茶色の髪を頭の斜め後ろで結んだ女の子が一人大きなテーブルの横に置かれたイスに座って誰かを待っていた。外は既に常闇に包まれており暖炉の火が女の子や部屋を優しく照らしていた。

「うーん……とーさん遅いなあ。今日帰るってギルドから連絡があったのに……」

女の子は退屈そうに呟くとイスから降り窓の外を見つめた。

「シエラねえは修行で王国一周旅行してるし……あー、つまんない。ゴハンの前にもういちど棒術の練習でもしよっかな」

そう呟いた時、ドアが開き誰かが入ってきた…否、帰ってきた。

「おーい、今帰ったぞ」

「おとーさん！」

女の子は嬉しそうに父を呼び声のした方に走った。

ドアの前には女の子と同じ色の髪に髭を生やした男が何かを包んだ布を大事そうに抱えて立っていた。

男の名前はカシウス・ブライト

さつき女の子が呼んだが女の子の父親である。

「ただいま、エステル。待たせちゃったようだな。いい子で留守番していたか？」

「ふふん、あつたりまえよ　とーさんの方も何もなかった？魔獣と戦ってケガしてない？」

女の子：エステルは心配そうではないが訪ねる
カシウスは笑いながら言葉を返した

「おお、ピンピンしてるぞ。それよりエステル。実はお前にお土産があるんだ」

お土産、と聞いたところでエステルは満面の笑みを浮かべる

「え、ホント！？釣りザオ？スニーカー？それとも棒術の道具とかっ？」

「……………育て方、間違っちまったかな。お前ねえ、女の子だったら服とかアクセサリーじゃないか？」

カシウスは心底呆れたように聞いた
ただエステルはけるつとした顔で返した

「キレイな服は好きだけどすぐに汚しちゃうんだもん。アクセサリーも遊んでて壊したらヤだし。それより、とーさん。その大きな毛布、どうしたの？ひよつとして、それがお土産？」

「お、鋭いな……………よつと……………」

カシウスは毛布の端をつまみ広げるとそこには黒い髪に包帯を巻いた男の子と銀色の髪の男の子が静かな寝息をたてて眠っていた

「……………ふえっ?……………」

さすがのエステルも眼を丸くした

「まあ、こついうわけだ。わりとハンサムな坊主たちだろ?」

カシウスは笑いながら茶化して言う

一方のエステルは

「な、な、な……………」

途切れ途切れに言った後、

「なんなのー、この子たち!?!」

叫んだ

まあ、無理も無いだろう。いきなりお土産と言われて子供を連れてきたら誰だって驚く

カシウスはそんなエステルを小声で注意した

「大きな声出すなって。起こしちまうじゃないか」

「起きちゃうって……………一人は多分、寝ているだけだけど……………黒髪の子、生きてるの?なんかグツタリしてるけど」

エステルは心配そうに尋ねる

「手当ては済ませたからもう命の危険はないはずだ。だが、とりあえず……………休ませる必要はありそうだな。ベッドに運ぶからエステルはお湯を沸かしてくれ」

「らじやー!」

そう言つてエステルは湯を沸かしに走りカシウスは男の子たちを運んでいった

男の子たちはカシウスのベッドに寝かされた

「よく寝てる……この子たち、あたしと同じくらいのとシだよ。こんな、真っ黒と銀色のカミ、はじめて見るかも」

エステルは起こさないように小声で呟く

「確かに見事な黒髪に銀髪だな。ちなみに瞳は黒髪はアンバーで銀髪は赤銅色だぞ」

「ふーん」

エステルはそれだけ返すと険しい顔でカシウスの方を振り返った

「それはともかく……そろそろ話してもらおうか？」

「ギクツ……」

「この子たち、ダレなの?なんでケガしてるの?どうしてとーさんがウチまで連れてきたの?ひよっとして隠し子?おかーさんを裏切つてたの?」

さすがの最後の言葉にはため息を出さずにはいられないカシウス

「ふう、どこでそういう言葉を仕入れてくるんだか……ってシエラザードに決まってるか」

「うん、そー」

エステルは笑顔で頷く

「まったくあの耳年増め……この子たちは、父さんも仕事関係で知り合ったばかりなんだ。まだ名前も知らなかったりする」

「仕事って、遊撃士の？」

「まあな。おっと……」

そう言うとカシウスは少しベッドに近づいた

「えっ？」

「眼を醒ますぞ」

カシウスに言われエステルは男の子…黒髪の男の子を見る

男の子は小さくうめき声をあげると眼を開いた

「ん……」

「わ、ほんとにコハク色……」

エステルは驚く。黒髪の男の子は頭だけエステルとカシウスの方に

向けると小さな声で呟く

「……………」

「坊主、目を醒ましたか。ここは俺の家だ。とりあえず安心してい
いぞ」

その言葉に男の子は僅かに眼を鋭くさせる

「……………どういづつもりです?」

「ふえっ?」

「正気とは思えない……………どうして……………放っておいてくれなかったん
だ」

「どうしてって言われてもなあ。いわゆる、成り行きってヤツ?」

カシウスは笑いながら答える
それに男の子は怒鳴る

「ふ、ふざけないで!カシウス・ブライト!あなたは自分が何をし
ているのか……………」

その時、男の子の言葉をエステルが遮って、

「!」

叩いた。怪我人に…

「ケガ人のクセに大声出したりしないの！ケガにひびくでしょっ！」

男の子は初めてエステルの存在を認識したように尋ねた

「……………だれ？」

「エステルよっ！エステル・ブライト！」

「俺の娘だよ。お前さんと同じくらいの娘がいるって話しただろう？」

そこで男の子は考える素振りを見せる

「そういえば……………って、そんな話をしてるんじゃない！」

また話を戻そうとして大声を出すときまたエステルが叩いた

「あたっ」

「おおきな声を出さないっ！」

「わ、わかったよ……………でも、君の行動の方がよけいに怪我に響くんじゃ、」

男の子は正当な事を口にしようとしたら

「なんか言った？」

エステルは、

「だから怪我を悪化させる……」

「な・ん・か・言・つ・た？」

「何でもないです……」

笑顔で黙らせた

それを見てカシウスは笑う

「ま、この家の中ではエステルに逆らわん方がいい。本気で怒らせたら俺も敵わんくらいだからな」

「そつみたいですね……」

「ところで、あんた。なんか忘れてることない？」

「え……？」

男の子は何だろうと考えたが何も思いつかなかった
エステルは笑顔で答えを言う

「名前よ、名前。あたしもさっき言ったでしょ。銀髪の方はまだ寝てるしこつちだけが知らないのってくやししいし、不公平じゃない」

「……あ……」

男の子は少しカシウスは睨んだ

「まあ、道理だな。今さら隠しても仕方あるまい。不便だし、聞かせてもらおうか？」

「……………わかり……………ました……………」

男の子はまた眠りに入る前に告げる。自分の名前を

「僕は……………僕の名前は……………」

これが少年少女たちの出会いだった……………

出会いと始まり（後書き）

新投稿です

携帯で書いており不定期更新ですがよろしくお願ひします
基本的『リリカルなのはETERNAL』が優先的です

序章の序章 memory:?

ある森の中に建てられた木造の家の二階で一人の少女が眼を醒まそうとしていた

「……………う……………まぶし……………」

そう呟き大きな欠伸をしながら起き上がる

「ん……………つ、よく寝たあ……………つ！」

それから少し考える

「……………えつと……………今朝の当番は父さんだったっけ。それじゃあ……………ヨシユアとイクスはまだ寝ているのかな」

その時、外からハーモニカの音色が響いてきた
それを聞いただけでエステルは笑顔になる

「あは、起きてるみたいね。よし……………あたしも早く支度しよつと」

そう言いながらエステルはベッドから降りた

家の二階にあるバルコニーで少年が二人居た。一人は青い服を着てその上に小さな緑のジャケットを着用しており服より濃い青のズボンに茶色のブーツを穿いている黒髪の少年。手にハーモニカを持つ

ている事からさっきの音色は彼が吹いていると判る

もう一人は黒を中心とした身体にぴったりのタンクトップの上に黒い着物のような物を羽織り、ズボンはズボンと袴を足して二で割ったような物を穿いて手すりに持たれてハーモニカの音色を聞いている銀髪の少年だった

黒髪の少年が吹き終わるとドアが開かれ少女：エステルが拍手をしながら出てきた

ちなみにエステルは動きやすい白いランニングシャツの上に赤い半袖の上着を着て、ズボンはスパッツと上着と同じ色のスカートを着き更に前掛けみたいな物を着用していた

「ひゅーひゅー！」

「おはよう、エステル。ごめん。もしかして起こしちゃった？」

「おはよう。またドベチンだなエステル」

「うっん。ちょうど起きたところよ。どうせイクスがドベニでしょ」

そう言うとエステルは二人に近づいた

「でも、ヨシユアってば朝っぱらからキザなんだから。や、お姉さん、思わず聞きほれちゃったわ」

「何がお姉さんだか。僕とイクスと同年のくせにさ」

「いや、むしろ俺がお兄さんだ！」

二人のツツコミにエステルは得意げに笑い指を振りながら答えた

「チツチツチツ、甘いわね二人とも。同い年でもこの家ではあなたの方が先輩なんだから。言うなれば姉弟子ってやつ？」

「しまった！その規則があった！嫌だあー！エステルをお姉さんなんて呼びたくない！！」

「はいはい、良かったね」

イクスは悪乗りして嘆いたがヨシユアは簡単にあしらった

「あゝ、なんか投げやり。せっかくイクスは乗ってくれたのに…まあ、いいや。でも、ホント良い曲よね。明るいんだけど、どこか切なくて…他の曲も好きだけどやっぱりその曲が一番好きかな」

「それにはエステルに賛成だな。あれ…何て名前だった？」

そうやってイクスはエステルを見たがエステルもド忘れしたらしく何だっけと考えている

ヨシユアは怒りもせずに答えてくれた

「『星の在り処』だよ」

「そうそう、『星の在り処』。あーあ、あたしもハーモニカ、うまく吹けたらいいんだけどな。簡単そうに見えてこれかけっこう難しいよね」

エステルはため息と共に言う

「俺も吹けるけどさすがにヨシユアほどじゃないからな」

「君たちがやってる棒術と較べたらはるかに簡単だと思うけど……
要は集中力の問題だと思うよ」

「うーん、全身を使わない作業って何だか眠くなってくるのよね」

「俺はそういう訳じゃないが……それより、ヨシユアは逆に動けよ」
イクスは手すりに座り足をブラブラさせながら言う
エステルは賛成の言葉を口にする

「そうね。ヨシユアも、ハーモニカもいいけどもっとアクティブに
行動しなくちゃ。ヨシユアの趣味って、あとは読書と武器の手入れ
くらいでしょ？」

「今時インドアばかりじゃ女は口説けないぜ」

「悪かったね、ウケが悪くてそういう君たちこそ趣味に偏りがある
と思うけど。エステルは釣りとか虫取りとかスポーツシューズ集め
とか。イクスは裁縫に調理、掃除とか」

「むぐっ……いいじゃん、好きなんだもん。って言うか、虫取りな
んかとつくの昔に卒業したってば」

「エステルに同意。ってそういやあ、俺ヨシユアにああ言ったけど
俺だってインドアじゃねえか！」

「それは先に気づくべきだよ、イクス」

イクスは叫びヨシユアはツッコミ。その光景を見てエステルは笑う。
仲の良い兄弟みただった

いつものやり取りをしていると下から自分たちを呼ぶ声が聞こえてきた

「……おい。エステル、ヨシユア、イクス」

三人はバルコニーから顔を出して見ると下には自分たちの父親、カシウス・ブライトが見上げていた

「あ、父さん、おはよ！」

「おはよう父さん。朝食の用意、もう出来たんだ？」

「出来てなかったら一週間ずっと当番だぜ」

エステルたちは元気よくあいさつする

「安心しろ、バッチリだぞ。三人とも、冷めないうちにとっとと降りてこい」

「「りょーかい！」」

「すぐに行くよ」

そう言って三人は家のなかに戻っていった

朝食を食べ終わるとエステルがしゃべりだした

「ごちそうさま〜！うーん。お腹いっぱいになっちゃった」

「朝からよく食べるなあ……」

「いいじゃん。食つ子と寝る子は良く育つよ」

「まあ、しっかり喰ってせいぜい気合いを入れるんだな。お前たち、今日はギルドで研修の仕上げがあるんだろう？」

その言葉にヨシユアは頷く

「うん。今までのおさらいだけどね」

「それが終われば、俺たちも親父と同じ『遊撃士^{フレイサー}』だな」

「もう、子供扱いさせないんだから！」

エステルがフフンと言うとカシウスもまたフフンと言うように言った

「フフン、まだまだ青いな。最初になれるのは『準遊撃士』。つまり見習いにすぎん。一人前になりたかつたら早く『正遊撃士』になることだな」

「むむつ、上等じゃない」

「売られたケンカは倍にして返す。絶対功績を上げて親父を追い越してやるよ！」

そんな二人の言葉に笑みを浮かべるカシウス。それは嬉しさからくる笑みだった

「はっはっはっ。やれるもんならやってみろ」

「なに張り合ってるんだか……エステル、イクス、油断は禁物だよ。今日は最後に試験だってあるんだからね」

「もちろん。全力全開でいくぜ」

と、イクスは自信満々に返したがエステルは

「え……………試験ってナニ？」

さすがにこれには驚いた

「ま、まさかな……………エステル、もしかして覚えてないとか言わねえよな？」

「研修が身に付いているかどうか確認するためのテストだよ。合格できなかったら補習だってシエラさんが言ってたじゃないか」

二人にそう言われて何となく思い出したエステル

「やつば……………カンペキに忘れてたわ……………そういえばシエラ姉がそんなこと言ってたよな気も……………まーでも、何とかなるって」

ものすごい前向き思考にヨシユアとイクスとカシウスは同時にため息をついた

「はあ、君って子は……………」

「……ノンキっていうかそそっかしいつか」

「まったくもって嘆かわしい。この楽天的な性格はいったい誰に似たもんだろうな」

「「父さん（親父）にだよ」」

二人のツツコミがはいるとエステルはムツとしながら答えた

「し、失礼ね。父さんほどじゃなあってば！」

「まったく似たもの父娘だな。まあいいや。エステル、イクス、そろそろ町に行こう」

「そうだな。ギルドでシエラ姉さんが待ってるからな」

「ん、わかった。シエラ姉を待たせると怖いもんね」

そう言い合い三人は出掛けようとしたがエステルは何かを思い出しカシウスに話しかけた

「あ、そうだ父さん。今夜の食事当番、あたしだけど何か食べたいものでもある？リクエスト、受け付けとくよ？」

カシウスは少し考えると考えた表情のまま答えた

「ふむ、食べたいものか………ルーアン風、魚の蒸し焼き
キサルサミコ酢風味なんてでどうだ？」

「な、なにソレ？」

「あれ、作れるの俺だけだぜ、親父。エステルにはちょっと無理があると思うけど……」

「うむ、言ってみただけだ。いつもと同じ、魚のフライかオムレツでいいさ。無理をしないで喰えるものだけを作ってくれ」

そんな事を笑顔で言うカシウスにエステルはまたムツとした

「し、失礼なオヤジねえ。反論できないのが悔しいけど……」

「ああ、そのかわり頼みがある。雑貨屋で『リベール通信』というニュース雑誌を買ってきてくれ。今日、最新号が入荷するはずだ」

「わかった。雑貨屋で『リベール通信』ね」

エステルは頷くとカシウスから小遣いをもらい三人で家を出て町に向かった

序章の序章 memory…? (後書き)

イクスはオリキャラです
近いうちに紹介します

序章の序章 memory:?

エステルたちの住むブライト家は町…地方都市ロレントの南西のは
ずれの森のなかに建っている

エステルたち街道に出て北東の道を進みロレントに向かった
ロレントではたくさんの子供たちが元気に遊んでいた

「ちょうどいい時間だね。早すぎもせず、遅すぎもしないってとこ
かな」

「そうだな。しかし、気持ちいいな」

イクスはそう言って伸びをしていたがエステルは何故か憂鬱な表情
をしていた

「うう、教会の日曜学校を卒業したばかりなのに…遊撃士にな
るためにこんなに勉強させられるなんて夢にも思わなかったよ…
…」

「それも今日が最後じゃないか。好きで志望したんだからこのくら
いは苦勞して当然だよ」

ヨシユアがそう言うとエステルは「それもそっか」と言い気合いを
入れ遊撃士協会ブレイサーキルドに足を運んだ

遊撃士協会では一人の女性が三人を迎えてくれた

彼女の名はアイナ・ホールデン。遊撃士協会ロレント支部の受付を担当している

アイナは三人を確認すると笑顔で迎えてくれた

「あら、おはよう。エステル、ヨシユア、イクス」

「アイナさん、おはよう！」

「「おはようございます」」

三人は挨拶を返すと受付に近づいた

「シエラ姉、もう来てる？」

「ええ、二階で待ってるわ。今日の研修が終われば晴れてブレイサーの仲間入りね。三人とも頑張ってる」

「うん、ありがとう！」

「頑張ります」

「全力全開でクリアしますよ」

口々に言つと二階に上がっていった

二階では一人の少し青に近い銀髪の女性がタロットと呼ばれるカードを使って占いをしていた

「……………『星』と『吊し人』……………『隠者』と『魔術師』……………そして逆位置の『運命の輪』……………これは難しいわね。どう読み解いたらいいのか……………」

この女性がシエラザード・ハーヴェイだ

その時階段からエステル元気な挨拶が聞こえてきた

「シエラ姉、おっはよー！」

エステルたちはシエラザードに近づくと何気に意外そうな顔をされた

「あら、エステル、ヨシユア、イクス。めずらしいわね。こんな早くに来るなんて」

「えへへ、最後の研修くらいはね」

「ま、とつとと終わらせてブレイサーになってやりますよ」

二人の意気込みにシエラザードは喜ぶのかと思ったが何故かため息をついた

「はあ……………いつも意気込みはいんだけど。ま、その心意気に応えて今日のまとめは厳しく行くからね。覚悟しときなさい」

「よっしやー！やってやるぜー！」

「え、そんなあ……………」

イクスはやる気満々なのだがエステルは厳しくと言われただけでや

る気が少し無くなった

「お・だ・ま・り。毎回毎回、教えたことを次々と忘れちゃって…
…そのザルみたいな脳みそからこぼれ落ちないようにするためよ」

「え〜ん、ヨシユアあ！イクスう！シエラ姉がいぢめるよ〜！」

「大丈夫ですよ、シエラさん」

「そうそう。エステルって、勉強が嫌いで予習復習も滅多にやんねえけど……」

「ついでに無闇とお人好しで余計なお節介が大好きだけど……」

最後の言葉をヨシユアとイクスは同時に言う

「「カンの良さはピカイチだからオープメントも実戦で覚え（ます）（るぜ）」」

「はあ、こうなったらそれに期待するしかないわね……」

シエラザードはため息を吐きエステルはイヤな眼でヨシユアとイクスを見た

「ちょっとヨシユア、イクス……なんか全然フォローしてるように聞こえないんですけどっ？」

「心外だね。君の美点を正直に言ったのに」

「正確には誉め三でけなし六だがな」

「まったくもう……」

エステルは気にするのを止めるとシエラザードの方を向いた

「あ、ところでシエラ姉。タロットで何を占ってたの？なんだか難しい顔してたけど」

シエラザードは「ああ、これね」と言っていると教えてくれた

「近い将来、身の回りで起こる事を漠然と占って見たんだけど……ちよっと調子が悪いみたい。読み解くことが出来なかったわ」

「読み解くことが出来ない??」

「つまり、予想が出来ないってことだよ」

「へえ……そんな事ってあるんですか？」

エステルが？の顔になりイクスが簡単に教えヨシユアはシエラザードに質問してみた

「あまりに意味深な形になると逆に解釈に困ることがあるのよね。まあ、それはいいわ。最後の研修を始めるわよ」

そう言われエステルたちはシエラザードと共に今まで習ったことを一通り復習していった

「さてと……復習はこのくらいで勘弁してあげるか。今日はやる」とが山ほどあるんだからとつとと実地研修に進むわよ」

その時エステルが質問する

「ねえ、シエラ姉。実地研修って今までの研修と何が違うの？」

「実地っていうのは現場を体験してもらってことよ。これから3人には遊撃士の仕事に必要なことを一通りやってもらわ」

「……それってつまり。机でお勉強、じゃないってこと？」

「ええ、もちろん違うわよ。あちこちに出かけて行って実際に身体を動かしてもらわ。たっぷり汗かいてもらわつたから楽しみにしてなさい」

その辛そうになる言い方に何故かエステルは笑顔になった

「えへへ、助かったわ。身体を動かせるんなら今までの研修よりずーっとラクよ。もう、心配して損しちゃった」

「オイオイ。急に元気になったよ」

「その笑顔が最後まで続くといいんだけど……さて、と最初の実地研修に行きましようか」

「おう！」

「レッツゴー」

「やれやれ」

そう言つてシエラザードを含めた4人は最初の実地研修場所に向かつて行つた

イクス

「イクスと」

エステル

「エステルの」

イクス・エステル

「蒼空キセマテリアル」

イクス

「はい、こんちは。イクスヴェリア、通称イクスです」

エステル

「エステル・ブライトよ。まずはこの蒼空キセマテリアルの紹介をするわね」

イクス

「この蒼空キセマテリアルはこの『蒼空の軌跡 FC』の事について知ってもらおうと俺たちが作者を脅して考案したものだぜ！」

エステル

「脅した、じゃなくて頼んだでしょ、もう」

イクス

「細かいことは気にするな。それより今回は何について話すんだ？」

エステル

「えーっと……上、真ん中、下。どれか選んで」

イクス

「クジかよ！ったく上だ」

エステル

「それじゃあ、今回はオーブメントについてに決定よ」

イクス

「説明も俺かよ……まあ、いいか。それじゃあオーブメントについて説明するぞ」

……オーブメントとは『導力』と呼ばれるエネルギーで動く機械仕掛けのユニットが『導力器』の事だ

セラチウム七耀石を加工した結晶回路クォーツついでというのが中に組み込んであり、その機構に応じて様々な現象を引き起こすことができるものだけ

最初に発明されてから確か……50年くらいしか経ってねえが今では照明、暖房などの日用品から兵器、魔法、飛行船まで、あらゆるものにオーブメントの力が利用されている。いわば無くてはならないものになった

ちなみに、この技術革命は一般的に『導力革命』と呼んでいるけど俺たちの所持しているオーブメントはほとんど身体能力を高め、魔法が使えるようになる『戦術オーブメント』って言うんだ。これは

個人の適性に合わせて作れる特注品だから一見、同じように見えても絶対に構造が違うんだ
具体的には、属性限定のスロットやスロットを結ぶ線ラインの形が違うらしいが今回は止めておこう

イクス

「と、こんなもんか？」

エステル

「へえ、意外と覚えてるのね。意外だわ」

イクス

「……それじゃあ、次回は遊撃士についてエステルに答えてもらおう！」

エステル

「ちょ、ちよつとイクス何勝手に決めてるのよ」

イクス

「それじゃあ、今回の蒼空キセマテリアルはここまで！みんなまたな！質問も受け付けるぜ」

エステル

「無視すんなー！！」

序章の序章 memory:?(後書き)

今回は早く出せませた

何か質問があればエステルとイクス、その他がお答えします

序章の序章 memory:??

エステルたちはシエラザードに連れられギルドの一階にいた。どうやら最初の実地研修はここでやるようだ

「最初の研修は仕事内容の確認よ。……その前に、まず3人に渡すものがあるわ」

そう言うと受付のアイナの方を向く

「アイナ。もう用意できてる?」

「ええ、いいわよ」

「じゃ、3人とももらってきなさい」

「?」
「?」
「?」

3人は何かなと思いつながらアイナの前に立った

「大切なものだからなくさないようにね」

そう言って渡してくれたのは真新しい手帳だった

「それはブレイサー手帳といって仕事の記録を残すための公式な手帳よ。どんな話を聞いたのか、どこで何を見つけたのか……些細な出来事が手掛かりになることも多いわ。細かいことでも必ず記録を残すようにね」

その返事は

「分かりました」

がヨシユア

「努力します」

がイクス

「げっ、ちよつと面倒かも……」

がエステルだった

それをシエラザードは目敏く尋ねた

「あら？気のせいかしら。返事がふたつしか聞こえなかったけど？」

「あ、あははは……」

もう笑うしかないエステルだった

「記録を残すことはブレイサーの大事な義務よ。面倒くさがらずに
しっかりやりなさい」

「はあ、いい、分かりました」

本当に分かったかどうか分からないがシエラザードは一先ずよしと
した

「ふむ、分かればよろしい……じゃ、実際にやってみらっわよ」

そうやって今度は階段の逆方向にある掲示板を見た

「出口の方を見て。掲示板があるでしょ？掲示板のところまで行って仕事の内容を確認してきなさい」

シエラザードに言われた通りエステルたちは掲示板に近いて1つだけ貼り出された依頼を確認した

「えーつと……『実地研修・宝物の回収』つと……それから……『地下水路を捜索し、宝箱に収められているものを回収してくること』……こんなもんか。エステル、ヨシユア、書けたか？」

「う、うんなんとか」

「しっかり写したよ」

3人は手帳に書くと一旦、シエラザードに見せた

「うん、いいわね。ちゃんと確認できたじゃない。掲示板のチェックはブレイサーにとって基本中の基本。緊急の仕事がないかどうか常に確認しとくのも大事な義務よ」

「ふう、義務ばかりで聞いているだけでも息苦しいわね」

「確かに規則は多いけど、それだけの責任がある仕事だからね」

「まあ、いい加減な気持ちでやっていたらとても務まらないわ」

自分たちの目指す仕事がとても大事ということを改めて知る3人

「……うん、そうだよ。もっと気合い入れていかなきゃ」

「フフ、ちょっとは気持ちが切り替わったかしら？」

「うんっ、もうバツチリ」

シエラザードはそんなエステルの笑顔を見ると一つ頷き話始める

「じゃあ、その気合いが抜けないうちにさっさと次の研修に行くわよ」

「今度はどんな内容ですか？」

ヨシユアが聞く

「お向かいにあるメルダースさんの工房に行つて工房の利用法について勉強するわ。わざわざ営業中に時間をとってもらってるんだから失礼のないようにね」

「はい」

そう言うつてからアイナに挨拶をしてギルドを出ていった

「ここでは工房の利用法を勉強するわ。工房では、オーバー導力魔法アイツを使うための専用のオーブメントを改造したり支援用のクオーツを合成したりできるの。アイツには多彩な効果があるから使いこなせるよう

になれば色々と便利よ。ブレイサー稼業っていうのは危険と隣り合わせの職業だから工房とも長いお付き合いになるわ。……ま、あたしが説明できることはこれくらいね。技術的な説明は専門家にお任せするわ。……というわけでメルダースさん、あとは宜しく」

早口というわけではないがそれでも一気に言うとメルダース工房の主、メルダースに後を頼んだ

「おう、任しとけ。で、何を知りてえんだ？」

エステルたちはまだあやふやなことから術について、材料の事を尋ねた

一通り尋ね終わるとシエラザードが話しかけてきた

「もう質問はないみたいね。なら次は実際に工房を利用してもらうわよ。そのためにはまずセピスが必要ね」

そう言うとシエラザードは一人一つずつ各属性の入ったセピスをエステルに渡した

「それだけあればいくつかのクオーツを合成できるわ。やってセツトまでしてもらおうわよ」

エステルたちはひとまずもらった全てのセピスをクオーツにして役割をどうするか話し合った

「どうする？一応作れる全てのクオーツはあるけど」

「役割としてエステルは前衛に向いているから前衛になってイクスが中央、僕が後衛はどうかな？」

「いや、ヨシユアは状況判断が一番良いからどちらにも動ける中央になってほしいんだけど」

「分かった」

そう言つて3人は自分のオーブメントにクオーツをセットした

「そうね。そうやって3人でアーツを使い分けると戦いやすいわよ。ちなみに、どのクオーツをセットするとどんなアーツが使えるようになるかはブレイサー手帳に載っているわ。より強力なアーツが使いたいんだつたらアーツ表やクオーツ表を見て自分なりに工夫してみるといいわ」

自分の手帳を見せながら教えていくシエラザード

エステルたちはそれをしっかりと自分の手帳でも確認した

「これで一通り工房での研修は終わりよ。さあて、次はいよいよお待ちかねの認定試験ね」

その言葉にエステルは意外そうな顔をした

「……………え？し、試験つてなにそれ？」

「まさか、本気で忘れたの？」

「今朝話し合つたばかりかだろ……………」

そのヨシユアとイクスのジト眼で思い出したようだ

「あ……そう言えば、聞いたような聞いてないような……」

「はあ……ホント期待を裏切らない子ねえ」

「仕方ありませんよ。エステルですから」

「まあいいわ。とにかく試験場に行くわよ」

「えっ!?も、もう!?ちょ、ちょっと待ってまだ心の準備が……」

そんなエステルをシエラザードが無理矢理連れていく

「ほらっ、きりきり歩きなさい」

エステルは連れ去られながらもヨシユアとイクスに助けを求める

「ヨシユア、イクス、お助け」

ヨシユアとイクスは少し考えたあとメルダースたちの方を向いた

「メルダースさん、フライディさん。色々ありがとうございます
た」

「これからよろしくお願いします」

…どうやらエステルのことを見捨てたようだ

「……、ヨシユア、イクス覚えてなさいよ」

エステルは引つ張られヨシユアとイクスはシエラザードと歩いて4人は教会の裏に案内された

「ようやく研修も大詰めね。これから3人に認定試験を受けてもらうわ、今までの研修の成果が発揮されることを期待してるからね」

「はい」

「全力全開、頑張るぜ」

ヨシユアとイクスは返答したがエステルは何故か呆気にとられていた

「……………」

そのことに気づいたヨシユアがエステルに尋ねる

「エステル、どうさたの？」

だがエステルはヨシユアの質問に答えずシエラザードに質問した

「……………ねえ、シエラ姉」

「なに？」

「……………もしかして、試験ってペーパーテストじゃないの？」

さすがのシエラザードもその質問には呆気にとられる

「はあ？エステル、あんたさっき掲示板を見たでしょ」

「うん、見たけど」

「メモまでとらせたのに覚えてないの？地下水路の搜索をするって書いてあったと思うんだけど。あれが最終試験よ」

「……………」

エステルはまた驚くと深い深い安堵のため息を吐いた

「はああ、良かった〜」

エステルは空を見上げると笑顔で言った

「ああ、空の女神さま……………地下水路を作って下さった情け深いお心に感謝を捧げます」

エステルがキラキラ輝いているのは目の錯覚ではないだろう……………

「エステル……………お前、筆記試験かと思ってたのか？」

「だから工房であんなに騒いでたのか……………」

イクスとヨシユアはため息まじりに呟いた

「ふっ、懐かしいわね。今となつてはいい思い出だわ」

「……………イクス。本当に僕たちちゃんと卒業できるのかな……………」

「ああ、今俺もそう思ったよ……はあ」

「なぐによ、失礼しちゃうわね」

「はいはい、3人ともお喋りはここまで。試験前なんだからもつと緊張感を持ちなさい。試験に落第したらキツイ補習を受けてもらうわよ」

そんなシエラザードの厳しい一言もエステルにとっては気にもとめないようだ

「えへへ、大丈夫だってば さつ、早く試験しちゃいませよ！」

「ま、自信があるなら結果で証明してもらいませよ……さて、と、掲示板にもあったように試験の課題は地下水路内の搜索よ。搜索対象はどこかにある宝箱の中身でそれを回収することが目的になるわ。水路の構造はすごく単純だから迷う心配はないと思うけど……油断してると痛い目に遇うからね」

「そうか……うん、分かった。それじゃあヨシユア、イクス、行くか」

エステルは頷くとヨシユアたちに声を掛ける

「うん、実戦だと思って慎重に行動しよう」

「そんじゃ、まレッツ・ゴー！」

そう言って3人は地下水路に降りていった

イクス

「イクスと」

エステル

「エステルの……」

イクス・エステル

「蒼空キセマテリアル（）（……）」

イクス

「つてくらっ！暗すぎだぞエステル！」

エステル

「うるさいわね……イクスのせいなんだから」

イクス

「まあ、いいか。それじゃあ、第2回目の今回は遊撃士についてエステルに答えてもらおうか」

エステル

「やっぱり……しかたないわね」

……えつと、遊撃士…遊撃士とい^{プレイヤー}うのは地域の平和と民間人の保護のために働く調査と戦闘のスペシャリストのことよ

魔獣退治や犯罪の防止だけではなく荷物の護衛から落とし物の搜索

まで様々な形で地域に貢献する主な仕事……のはず
あとは……各地の遊撃士たちを束ねているのが大陸全土に支部を持つ遊撃士協会フレイサーギルド。ちなみに私たちの支部はロレント支部よ
最後に遊撃士には二種類あって、全ての支部に認められた人が正遊撃士。私たち、見習いのことを準遊撃士って呼ぶのよ
と言ってもまだ試験中なんだけどね

エステル

「ええと、こんなところかしら」

イクス

「へえ、意外と覚えてるじゃん」

エステル

「意外とは余計よ。それより次回はヨシユアに任せましょ」

イクス

「良いけどさあ……あいつ完璧だからな」

エステル

「良いわよ。それじゃあ今回はここまで。質問も受け付けているわよ。じゃあね」

序章の序章 memory:?

エステルたちは少し薄暗い地下水路を慎重に進んでいた

全員、手にはそれぞれ得物を持っておりエステルとイクスは身の丈以上の長さをもつ棒術具スタッフと言つものである

イクスのスタッフはエステルの物と較べると若干短い

ヨシユアは鋭利な双剣ツインエッジを腰に差しいつでも抜けるようにしていた
しばらく歩くと目の前に小さな魔獣、ダーティーラッチュウが現れた

「……出たわね」

「エステル、背後を取られないように気をつけて」

「分かったわ!」

「あつちはまだこちらに気づいてねえな……一気に仕留めるぞ!」

「了解つ!」

イクスが言うつとエステルはさつき決めた役割通り、前衛としてダーティーラッチュウに気づかれる前に二匹のうち近い方にスタッフを上段から斜めに振るつた

ダーティーラッチュウは驚きかわせず直撃し倒された

「よしっ!」

エステルはダーティーラッチュウが倒れるのを確認すると小さくガツポーズした

するとヨシユアがそんなエステルを見て一言

「まだ終わってないのに……」

そう言つてエステルを後ろから襲おうとしていたダーティーラッチ
ユウを斬り伏せた

「い、ごめん」

「まったく」

「でも思つたより楽勝ね。よし、この調子で先に進むわよ」

そんなエステルを何かを書いていたイクスが止めた

「エステル、ちょっと待ち。今、戦つた魔獣の情報を手帳に記して
いるから」

「え、でもそんな手帳ないわよ」

エステルは自分の手帳を見たりするがそんなページは見当たらない

「ああ、実はさっきシエラ姉さんから貰つたんだよ」

イクスはそう言いながらブレイサー手帳とは別の手帳を見せた

「へえ、便利なものね」

「これからは俺が書いていくから初めて見る魔獣を発見したら特徴
を教えてくれよ」

そう言つてイクスはさつき戦つたダーティーラッチュウの大まかな情報をさらさらつと書いていった

「そんじゃ、書き終えたし先に進むか」

「うん」

「分かつた」

エステルたちが進んでいると今度は羽虫魔獣が集まつた魔獣、ガーフェイスに遭遇した。その数、3匹

まだこちらに気づいておらずまたさつきみたく攻めようとしたエステルをヨシユアが止めた

「エステル、イクス、あの魔獣には武器による攻撃はほとんど効かないんだ」

「じゃあ、どうすれば?」

「エステル、こんな時こそアーツを使うんだ。いつでも発動できるようにしとけよ」

「おう!」

エステルは返事をするとかーフェイスに向かっていった

「はぁぁぁぁっ!」

エステルはスタッフを掛け声をあげながら降り下ろす。やはり集合体だけあって数匹は潰れても痛手にはなっていない。3匹はエステルを囲むように飛び回る

エステルは囲まれていたが実はこれが狙いだった

「エステル、しゃがめ！『ファイアボルト』！」

「『ソウルブラー』！」

後ろではイクスとヨシユアがガーフェイズがエステルに気を取られている隙に魔法を詠唱しイクスは燃え盛る火球をヨシユアは黒い時の波動を放った

それらはガーフェイズに当たると簡単に燃やしつくし、切り刻んだどうやら武器による攻撃には強くてモーツには弱いようだ

最後の1匹が戸惑っていると真下から声が聞こえてきた

「『アクアブリード』！」

重い水の塊を避けることなどガーフェイズにはできず水に吞まれて消えた

「ふふつ、チヨロイチヨロイ」

エステルは今度は周囲を確認して声をあげた

「2人ともナイスコンビネーション」

「エステルこそ今度はしつかり状況が把握できてたね」

「ああ、これなら何とかいけそうだな」

「イクス、何とかじゃなくて絶対よ」

「……そうだな。よし！そんなじゃ進むか」

エステルたちは頷くとさらに奥に進んだ

奥に進むと最初に戦ったのと同じダーティーラッチュウが行く手を阻んだ。今回はバレている

「そんなじゃ、そろそろ戦技クラフトを使うか」

「うん。クラフトには攻撃の他にもいろんな効果があるからね。練習しておかないと」

「うん、了解！」

エステルは突撃しながら射程に入ると

「はあああああ！『金剛撃』！！」

気力をスタッフに込めながら先ほどより強力な強さで降り下ろすダーティーラッチュウは呆気なく潰された
もう一匹はヨシユアに突撃したがヨシユアは簡単に避けるとダーティーラッチュウの身体に刃を滑らすように二回斬りつけた

「…せい！はっ！『双連撃』！」

その二撃にダーティーラッチユウは断末魔をあげることなく倒された。残った一匹は逃げたそうとしたがイクスが逃げ道を塞いでおり逃げ出せなかった。

「おおおおおっ！『白虎撃』！」

イクスは下から掬すくい上げるようにダーティーラッチユウに打ち上げ、浮き上がらせると逆方向に回しダーティーラッチユウごとスタッフを地面に叩きつけた。
ダーティーラッチユウは断末魔を叫びながら倒された。

「戦闘終了、だね」

ヨシユアは剣に付いた魔獣の血を振り払いながら言った。

「ふう、やっぱり町の中でも魔獣は多いわね」

「仕方ねえよ。それよりさっさと宝箱を見つけようぜ」

イクスの言葉に2人は頷くと奥に進んだ。

一番奥に到着すると箱が置いてあった。

「あれが目的の宝箱かー。やっと見つけたわね」

そう言つてエステルは宝箱に近づき蓋を開けた
中には小さな小箱が3つ入っていた

「ふうん、宝箱の中にまた箱がしまつてあるなんて変ね」

「ああ。しかも3つつてところも気になるな。中には何が入っているんだ？」

興味深そうに小箱を眺める2人にヨシユアが一応言つておく

「エステル、イクス、今回の任務は搜索と回収だよ。対象の調査は任務に入つてなかつたと思うけど」

「もう、ヨシユアってホントお堅いんだから。仕事じゃなく純粹な好奇心の問題よ。……………ねえ、誰も見てないしちょっと開けてもバレないわよね？」

「……………」

それには聞いていた2人は啞然とした

「エステル…………俺はお前が落第したいなら止めねえぞ」

「ら、落第い？」

「そついう可能性もあるつてこと。もし、これが本当の仕事だったらそれは依頼者の持ち物だからね。非合法の物でもないかぎり自身を確認する権利は無いはずだよ」

ヨシユアの説明に「言われてみればそうかも」と納得するエステル

「どうしても気になるならあとでシエラさんをお願いしてみれば？」

「今見てシエラ姉さんに怒られるよりはマシだな。そうしろ、エステル。……さてと、戻るとしますか」

「うん、帰り道も集中して行こう」

「オツケー！」

そう言つて3人は来た道を引き返して行つた
帰り道でも魔獣に会つたがさほど脅威にならずエステルたちはさつさと地上に戻つて行つた

イクス

「イクスと」

ヨシユア

「今回はエステルに代わり僕、ヨシユアの」

イクス・ヨシユア

「蒼空キセマテリアル」

イクス

「はい、始まったぜ！蒼空キセマテリアル。今回は勉強が大嫌いなエステルに代わって……」

ヨシユア

「僕がリベール王国について喋るんだよね」

イクス

「イエスっ！さすがヨシユア話が早い。というわけで頼む」

ヨシユア

「うん、いいよ」

……エステル達の住む、このリベールはゼムリア大陸の西部に位置する豊かな自然と伝統に育まれた王国で大陸でも有数の七耀石セブチウムの産地でそれを利用したオーブメントの開発でも高度な技術を誇っている

リベールにとってオーブメント技術は周辺の大陵と渡り合いながら独立を守っていくための重要な柱になっている

10年前、エレボニア帝国に侵略された時も最後に王国を救ったのは、導力機関オハルエンジンで空を駆ける飛行船を利用した作戦だった

帝国とは今も微妙な関係にあるが現在の女王、アリシア女王陛下の優れた政治手腕もあって今のリベールは、おおむね平和と言えるかな

ヨシユア

「こんなところでどうかな？」

イクス

「……さすがヨシユア。無駄なく完璧に言ったよ」

ヨシユア

「これくらい復習をしつかりやればできる範囲だよ」

イクス

「ま、俺も多少サボってたからな。それじゃあ、次回は何をしようかな」

ヨシユア

「イクス、その事なんだけど一旦僕達について紹介した方が良くと思うよ」

イクス

「ああ、そういやあのバカ作者の奴がオリキャラの俺を紹介するって書いてたな。仕方ねえ、次回からはしばらくキャラ紹介にするか」

ヨシユア

「その間も質問を受け付けます。僕達について、気になった事などイクスと誰かが答えていきます」

イクス

「それじゃあ、今回の蒼空キセマテリアルはここまで！じゃあな」

序章の序章 memory:??

序章の序章 memory:??

地上に戻るとシエラザードは労いの言葉を掛けた

「3人とも、お疲れ。一応、規則があるんで搜索対象を確認させてちょうだい」

そう言われてエステルは宝箱の中にはあった小箱を全てシエラザードに渡した

「……うん、本物ね。途中で開いた形跡もなし、と」

(あ、あぶな〜)

(よかった〜……)

(……やっぱりね)

エステル、イクスは安堵しヨシユアはやはりと思う

シエラザードは小箱を確認し終わると笑顔で3人に向けた

「3人ともおめでとう。実技試験は合格よ」

「ふふん、あのくらい楽勝よ。……で、シエラ姉。その小箱には何が入ってるの？」

「それは研修が終わってからの楽しみ。さあ、お喋りはこれくら

いにしましょう。まだ研修が終わったわけじゃないんだから」

はぐらかすシエラザードの言葉にエステルは驚く

「あれ、そうなの？だって試験は合格なんですよ？」

「いや……そうだ、報告だ。確か実際では依頼の報告があったはずだ」

イクスの言葉に頷くシエラザード

「そうよ。報告についての研修が残ってるわ。お疲れのところ悪いけどこのままギルドに戻るわよ」

「はあ、まだあるのかあ。でも、仕方ないわ。ここが踏ん張りどころね」

「そうだね。あとちょっとみただし」

「そうじゃ、行きますか」

そう言ってエステルたちはギルドに戻った

ギルドに着くとシエラザードは受付前まで行くと説明を始めた

「最後の研修は報告の仕方についてね。どんな仕事でも、達成したら必ずギルドに報告しないとだめよ。どう解決したのか、その経過

を報告するのもブレイサーの仕事なんだから。じゃ、とにかく自分達で報告してごらんさい」

そう言われエステル達は簡単に報告した

「お疲れさま。無事に目的を達成できたみたいね。仕事の手際によつては報酬が増減することもあるから注意してね」

アイナが言つとシエラザードがまた声を掛けた

「さあ、残るは最後の仕上げね。ようやくギルドの2Fに戻れるわ。じゃあまたね、アイナ。忙しいトコごめん」

「ううん、気にしないで。大事な戦力を育てるためだもの。3人はバリバリ働いてもらつつもりだし」

「ば、バリバリ……」

「あははは……お手柔らかに」

「……覚悟しといた方がいいみたいだね」

4人はアイナに挨拶すると二階に戻ってきた

「3人とも、お疲れさま。これで研修の全課程は終了よ。あとは実際の経験で身に付けるようにね。さて……と」

そう言つとシエラザードは3つの小箱を取り出した

「あ、その箱は……」

「そう、さっきの試験で回収してもらった小箱ね。中に何が入ってるか随分、気になってたみたいけど」

「ひよっとして、開けていいのか？」

「ええ、いいわよ。3人とも中身を確認めてご覧なさい」

「えへへっ、やった」

「それでは……」

「何かな何かな？」

3人は小箱を開けた。中には腕が描かれた紋章エンブレムが入っていた

「この紋章エンブレムは……」

「じゃあ、これで僕たちも？」

「あははは、やったな」

エステル達が驚いているとシェラザードはいつになく真面目な口調で喋り始めた

「……コホン。エステル・ブライト。ヨシユア・ブライト。及びイクスヴェリア・ブライト。本日15:00をもって三名を『準遊撃士』に任命する。以後は、遊撃士協会の一員として人々の暮らしと平和を守るため、そして正義を貫くために働くこと。……3人ともおめでと。これからはお仲間ってわけね」

最後は砕けた言い方だったがシエラザードらしかった
もちろんエステル達は喜んだ

「やったねヨシユア！イクス！これで晴れて、あたしたちもギルド
の一員よ」

「そうか、僕がブレイサーか……………はは、少し不思議な気分だ
な」

「なんだそれ？まあ、ヨシユアらしいと言えばヨシユアらしいけど
もっとパーッと喜ぼうぜ！」

「そうそう。イクスの言う通りよ。…………ひゃっほー、やったあつ」

大声で喜ぶエステルに

「はしゃぎすぎだ（よ）、エステル」

イクスとヨシユアは注意したが今のエステルには何を言っても無駄
だった

シエラザードはそんなエステルを見ると微笑みながら席を立った

「ふふ、さてと…………あたしはそろそろ失礼するわ。たまってた仕事を
片付けなくちゃいけないしね」

「そっか、忙しい合間に毎日付き合ってくれたんだ。シエラ姉、ホ
ントありがとね」

「お世話になりました」

「あんがと、シエラ姉さん」

「ま、新人を育てるのもブレイサーの義務ってやつよ。あたしも昔、カシウス先生に研修でお世話になったもんだわ」

「あ、それで父さんのこと先生なんて呼んでるんだっけ？」

「それだけが理由じゃないけどね。あんた達も早く一人前になって後輩を指導できるようになんなさい。そして、ゆくゆくは先生みたいな立派なブレイサーになれるようにね。それじゃあ、またね」

そう言っただけでシエラザードは二階から降りていった
それでもエステルは疑問が残っていた

「うーん、判らないわね」

「なにがさ？」

ヨシユアが聞く

「『銀閃のシエラザード』といえば若手ブレイサーの中でも1、2を争う凄腕って聞いているけど、どうして父さんのことをあんなに高く買っているのかな？。娘のあたしが言うのも何だけどしょっちゅう家を留守にしてる不良中年にしか見えないんだけど」

「不良中年ね……」

「まあ、エステルから見ればそう見えるのも判るわな。実際俺もたまにそう思うし」

「えっ？」

2人の小さな呟きにエステルは聞き返したが2人は「何でもないと
言った

そしてカシウスに報告するためにギルドを出た

イクス

「今回は俺だけの！」

イクス

「蒼空キセマテリアル」 どんどんぱふぱふ（自分で効果音出している）

イクス

「え〜今回はオリキャラである俺のプロフィールと質問に答えていこうと思う。そこ！絶対に寝るなよ？」

イクスヴェリア・ブライト 通称イクス

七曜暦1186年2月17日生まれ。16歳

5年前、ヨシユアと共にブライト家に引き取られてきた、白髪に近い銀髪と明るい赤銅色の瞳を持つ少年

エステルとカシウスには自分を家族として迎え入れてくれた事を感謝している

趣味は料理と裁縫と掃除

服装から東洋人と間違えられる時があるがこれは以前ファッション雑誌で見た和という服が気に入り以来、自分で作っている

ちなみにエステル達の服もイクス作

得物はエステルより短い棒術具^{スタッフ}

実はこのスタッフにはある秘密が……？

口癖は「全力全開」滅多に使わないが「少し頭、冷やそうか？」の二つ

イクス

「ちなみに俺とエステル達はエステルが義姉、ヨシユアが義兄なんだよな。ま、気にしないけど」

イクス

「それじゃあ、質問いくか。^{ハンドルネーム}HN、『漆黒の牙』さんから『質問なんですけど、イクスのオーブメントの属性は何属性ですか？』俺のオーブメントはエステルと同じで無属性なんだよ。もっと言えばラインは左に一本線なんだぜ」

イクス

「さて、そろそろ時間のようだ。次回はエステルの紹介だな。あ、どんな質問でも待ってるぜ。じゃあな！」

序章の序章 memory:??

序章の序章 memory:??

外に出ると2人の子供がいた。その2人のことを3人は知っており
エステルは声を掛けた

「あれ、あんたたち……」

「げげっ、エステル!？」

「あ、ヨシユアお兄ちゃん。イクスお兄ちゃん」

ちなみにエステルに驚いたのはルックでヨシユアとイクスの事をお
兄ちゃんと言ったのはパットだった

「失礼ね〜。なによその『げげっ』ってのは?急いでるみたいだけ
どどこかに遊びに行くつもり?気をつけないとダメよ〜。街道には
魔獣もいるんだからね」

そんな注意にルックはそっぽを向いた

「ふんだ、うっさいな。オトコのやることにオンナが口を出さない
でくんない?ブレイサーでもないくせにさあ」

……なかなか口が悪いガキのようだ
だがエステルは逆に笑った

「ふっふっふっ……甘い!甘すぎるわよルック!バーゼル農園のミ

ルクより甘いわ!」

ちなみにバーゼル農園のミルクは新鮮で甘く美味しく評判がいい。
まあ、今はどうでもいい情報だが
まあ、そう言われたルクは驚いて最悪の結果(？)を思ってしまった

「ま、まさか……」

「ホホ、つい先程をもちましてあたくし遊撃士資格を得ましたの。
真正正銘、本物のブ・レ・イ・サ・あ」

「何でお嬢様風？っていうか大人げないぞ、エステル……」

イクスはツツコミ、ヨシユアはエステルの言葉にちゃんと訂正を加えた

「見習いみたいなもんだから威張れるような立場じゃないけどね」

「そこ、水をささないの!」

パットはエステル達の襟に着いているエンブレムを見ると驚き嬉しそうに言った

「わ、すごいすごい!お姉ちゃんたち、やったね!」

「あー、パットはいい子ね。小生意気な悪ガキやヒネクレたお兄さん達と違って」

一方、ルクの方はまだショックを受けていた

「そ、そんな……オレの方が先にブレイサーになるハズだったのに……ヨシユアにーちゃんやイクスにーちゃんならともかくエステルなんかには先を越されるなんて……」

「なによう！その『なんか』ってのは！大体ねえ、16歳以上じゃないとブレイサーにはなれないんだから！教会の日曜学校に通っているお子ちゃまには無理なんだからね！」

「さつきイクスも言ったけど本当に大人げないなあ。本気で張り合ってるし……」

「まあ、それがエステルだもんな」

そんな2人の話し合いを他所にまだエステルとルックは言い争っていた

「くっそ、覚えてるよ！オレも秘密基地で特訓してすぐにブレイサーになってやる！」

ルックはそう言ってパットを誘い駆け足で行ってしまった
パットは律儀にエステル達に挨拶してルックを追いかけた

「まったくルックったら……すぐ突っかかってくるんだから。あたし、嫌われてるのかなあ？」

「いや、むしろ逆だと思うけど」

ヨシユアは含み笑いを浮かべながら言ったがエステルは

「ギャグ？」

まったく違うポケを見せてくれた

「まあ、男の子ってことだな。しかし秘密基地か。少し気になるな……」

「イクスも？確かに気になるね……」

「うんうん！なんか、そそられる響きよね。幼いころのピュアなハートを揺さぶられるっていうか……」

「いや、気になるってそういう意味じゃないんだけど……まあいいか。雑貨屋で雑誌を買いに行くか」

イクスは首を横に振ると気持ちいを切り替えてメルダース工房の隣にあるリノン総合商店に向かった

店内には色々な雑貨が置かれていた

エステル達は店長のリノンと軽く挨拶を交わすと目的の雑誌、『リベル通信』をカシウスの分と俺も買おうと言い出したイクスの分と二冊購入した

それからリノンから遊撃士になれたお祝いとしてレシピ手帳という物をもたらった

これは新しい料理を食べたらそのレシピを書き込んでいくいわば魔獣手帳の料理版だった

エステル達はリノンにお礼を言って店を後にした

そのまま家に戻ろうと町を出ようとした時、後ろからアイナの声が聞こえてきた

「エステル、ヨシユア、イクス！いいところで見つけたわ！」

「あれっ、アイナさん？」

「どうしたんですか？やけに慌ててますけど」

アイナは息を整えるとエステル達に説明を始めた

「少し面倒なことになったの。今日はカシウスさん、自宅にいらっしやるのかしら？」

「うん、家で書類の整理をするとか言っていたけど。ねえ……何かあったの？」

「ルックとパット、知ってるわよね」

「ああ、さっき会ったばかりかな」

「彼らがどうしたんですか？」

「それが……ユニちゃんが教えてくれたんだけど2人して、北の郊外にある《翡翠の塔》に行ったらいいのよ」

それには3人も驚く

翡翠の塔とは大昔に建造された建物で今は滅多に人が来ないので魔獣の住み処になっている

「《翡翠の塔》！？あそこ、たしか魔獣の住み処になっていなかったっけ!？」

「ええ、その可能性が高いわ。シエラザードも出かけてるからカシウスさんに保護を頼みたいの」

「なに言ってるの、アイナさん！今すぐ追いかけてなくちゃ！あたしたちが連れ戻して来るよ!」

「でもねえ、あなたたちは資格を取ったばかりだし……」

渋るアイナにイクスが「だったら……」と提案する

「俺が親父を呼んできますからその間にエステルとヨシユアに行ってもらおうのはどうだ?」

「アイナさん。ここはエステルとイクスが正しいと思います。急げば、塔に着く前に追いつけるかもしれません。万が一塔に入っていたとしても父さんが来てくれれば心強いです」

「……………」

アイナは考えていたが決心したようだ

「わかったわ、責任は私が持ちます。遊撃士協会からの緊急要請よ。一刻も早く子供たちの安全を確保して」

「了解ッ！」

「わかりました」

「翡翠の搭は、マルガ山道の途中を西に折れた先にあるわ。マルガ山道は、町の北口方面よ。私はギルドで待機しています。何かあったら連絡してちょうだい」

アイナはそう言うとギルドに戻っていった

「さっそくの初仕事ね……」

「それじゃあ、俺は親父を呼んでくる。先に頼むぜ」

イクスは言うど町を出ていった

エステルはそれを見届けるとヨシユアに話し掛けた

「ヨシユア、急ぎましょ！」

「ああ！」

ヨシユアも頷くと急いでルックとパットを追い掛けるために翡翠の搭に向かった

イクス

「恒例の〜…」

エステル

「蒼空キセ〜…」

イクス・エステル

「マテリアル〜〜!」

イクス

「皆さん、こんばんわ。蒼空キセマテリアルのお時間です。司会は俺、イクスと」

エステル

「あたし、エステルが勤めさせて……ってニュースキャスターになった覚えはないわよ!」

イクス

「いいじゃんかよ。ノリくらい……よし、それじゃあ今回はエステルの紹介といこう」

エステル

「しっかりやりなさいよ」

イクス

「へいへい」

エステル・ブライト

七曜暦1186年8月7日生まれ。16歳

本作の三人の主人公の内の一人。遊撃士協会の見習い遊撃士。どん

プレイヤー

な状況でも決して諦めない、思い込んだら一直線の元氣娘

5年前、父が引き取ったヨシユアとイクスとは家族同然の關係にある
武術の腕はかなりのもので、イクス以上に長い棒術具スタッフを自在に操る
趣味はストレガー社製のスニーカー集めと釣り

口癖は「あんですって〜!」と「〜ですけど」、「モチのロンよ!」

イクス

「どうだ!」

エステル

「普通。平凡。凡々」

イクス

「酷でーっ!?!?」

エステル

「……………あら、拗ねちゃった。さて質問コーナーに行きたいところだけど……………何よ。全く無いじゃない」

イクス

「うるさいやい。質問来てねえんだからしょうがないだろ」

エステル

「まったく……………質問はあたし達のどんな些細な事でも構わないから
どんどん聞いてよね。次回はヨシユアの紹介。それじゃあ、またね」

イクス

「ばいばい……………」

序章の序章 memory:~? (後書き)

質問、感想お待ちしております

序章の序章 memory:??

序章の序章 memory:??

マルガ山道はロレントとマルガ鉱山をむすんでいる

マルガ鉱山は七耀石が多く発掘される鉱山で地域産業としてロレントをそしてリベール王国を支えているのだ

エステル達は途中襲いかかる魔獣を倒しながら先を急いでいた

だがルック達に追い付く前にエステル達は翡翠の搭まで来てしまった

「翡翠の搭まで来たけど……山道にいなかったってことはあの子たち、中に入っちゃったのかな？」

「その可能性が高そうだね。中に入ろう。……急ぐ必要がありそうだ」

「うん……そうね!」

エステルとヨシユアはそう言う中に入ってしまった

中に入るとさっそく、パットとルックの声が奥から聞こえてきた

「く、暗いよ〜っ……………こわいよ〜っ……………」

「…そんなに恐がるなよ〜!……………まだ最初の階じゃないか……………」

「やっぱり入ってたか……すうう……」

「エステル？」

エステルはため息を吐くと息を思い切り吸い込んだ
そして、

「ルック！パット！聞こえるなら返事しなさい！」

大音量の声で呼び掛けた
だが返答はなかった

「あ、あんにやろども〜！あたしを無視するつもり！？」

エステルは怒っていたがヨシユアは冷静に判断した

「いや、ひよっとしたら……2階に上がったのかもしれない。とにかく奥に進んでみよう」

エステルとヨシユアは魔獣がないのを確認すると一気に階段を駆け上った

2階に上がりまず耳にしたのは2人の叫び声だった

「うわわわわっ！？」

「た、助けてええっつ！」

エステルは声が出た方に全力疾走しようとしたが思いとどまりヨシユアに声をかけた

「ヨシユア！」

「了解！」

2人は武器を構えると走っていった

ルックとパットはたくさんの翼が生えた猫みたいな魔獣、飛び猫に壁際に追い詰められていた

「あ、あっち行けよ、おまえらっ！！」

「うわわあああん。来ないでよ、バカあああっ」

その時、迫ってきた飛び猫に声をあげながらエステルが一匹、ヨシユアがその隙を突いて一匹を倒した
ルックとパットは自分を助けてくれた人物の名を呼んだ

「エステルねーちゃん!？」

「ヨシユア兄ちゃんだあ！」

エステルとヨシユアは2人と飛び猫の間に入りながら後ろを見ずに叫んだ

「あんたたち！危ないから下がってなさい！」

「すぐに片付けるからね！」

そう言うと飛び猫に向かっていった

「はあああつ！『金剛撃』！」

エステルはスタッフを叩きつけるが飛び猫はそれを簡単に避け蹴りを放ってきた。それをエステルはスタッフで防ぎ体勢を崩した所でもう一度スタッフを降り下ろした
今度はしつかり決まり飛び猫は倒れた

ヨシユアは冷静に飛び猫の攻撃を避けたり双剣で捌き最後はアーツで倒した

その時残りの一匹が2人の間をすり抜けルック達に迫った

「うわわわわわ！エステルねーちゃん！」

「しまった！ルック！パット！」

エステルが慌てて2人の下に向かったが間に合う距離でない
飛び猫の爪がルックに襲いかかる瞬間、

「俺達の弟分に手え出すんじゃねえよ」

飛び猫がエステルのは違うスタッフの一撃に地面に陥没した

「イ、イクスにーちゃん！？」

「本当なら今すぐにもお前を叱りたいが今はこいつらが先だ」

イクスは呟きながら言つと奥からさらに数匹の飛び猫が現れた

「イクス、危ない所ありがとう。それより父さんは？」

エステルはヨシユアと共にイクスの隣に来ると尋ねた

イクスは横を見ずに答える

「あのクソ親父、のんびり歩いてたから置いてきた」

「ちょっと……意味ないじゃない」

「かまわねえよ。さて、と……エステル、ヨシユア、残りは俺がやる」

イクスは冷たい口調で告げるとスタッフを振った

エステル達は「……魔獣たち、ドンマイ」と言いながらルック達を下がらせながら魔獣達に合掌した

「さあ……少し頭、冷やそうか？猫モドキが」

イクスはそう宣告してスタッフを腰だめに構えた

その戦闘は1分にも満たない時間の中の出来事だった

どうやらイクスは怒ると、とっつても恐くなるらしい。そうあの管理局の魔王のように……（さあ、何の事でしょうね）

「よっし、片付いた」

いつものイクスに戻るとルックがいの一歩に近寄ってきた

「すっげえええっ!」

ルックは興奮しながらイクスの周りをぴよんぴよん飛び回る

「イクスにーちゃん、かつこよかったぜ!」

イクスは「ああ、サンキュ」と言った後、エステルがルックに近づいてきた

ルックはエステルに気づくとエステルにも言葉を掛けた

「エステルもけっこう強いんだな!オナナのくせにやるじゃん!」

「このおバカ!」

ただしエステルは怒って叩いた。思いつきり

「いってえ、何すんだよー!」

「まったく、あんたはもう!乗り気じゃないパットまでこんな所に連れてきたりして……」

ルックは先の事が分かったのか逃げたそうとしたがあっさりとエステルに捕まった

「反・省・し・な・さ・い!」

そう言うとエステルはルツクの頭をグリグリした。見ているこっちも痛い気分だ

「いたた、やめろってば！暴力オンナ！馬鹿エステル！」

「おまけに命の恩人に対してその口の利きよう……きついオシオキが必要みたいね」

そう言っただけでまたグリグリするエステル

「いっただだっ！エステルねーちゃん！許して、ボクが悪かったです
！」

「あ、あの……お姉ちゃん。そのくらいで許してあげてよ」

「いーのよ、この悪ガキにはこれくらい許した方が身のため……」

その時ヨシユアがエステルの後ろにいた魔獣を発見した

「エステル、後ろ！」

「あ……下がれエステル！」

「え……」

エステルが振り向くと魔獣が本当にいた

「やば……」

「……ちいッ！」

「……くそっ！」

ヨシユアとイクスは同時に走り出し近寄ってくる魔獣を倒そうとしたがそれは神速の如く現れた男性の青いスタッフが行った
エステルもポカンとしてしまった

「……へ？」

「遅せえぞ、馬鹿親父」

そうエステルを助けたのはエステル達の父、カシウスだった

「まだまだ甘いな、エステル。見えざる脅威に備えるため常に感覚を研ぎ澄ませておく。それが遊撃士^{ブレイサー}の心得だぞ」

「と、父さん！？ど、どうしてここに？イクスに置いてかれたんじやなかったの？」

「なに、行く途中で魔獣に囲まれてな。すぐに塔に向かった行動力ととっさの判断は評価できるが……詰めが甘かったようだな、ん？」

カシウスの言葉に同意せざるを得ないエステルだった

「うっ、面目ないです……」

「助かったよ、父さん。ゴメン、僕が付いていながら」

「まあ、守る事に関してはお前もまだまだということだ。精進すれ

ばそれでいい」

「……うん」

ヨシユアが頷くとイクスが話しかけた

「それにしても相変わらず親父の棒術は見切れねえな」

「そう易々とお前に見切られてたまるか。それでは帰るとしようか。おーし坊主ども、歩けるな？」

カシウスが尋ねる

「は、はい……！」

「か、かっくいい……カシウスおじさん！エステルの何倍もかっこいいよー！」

どうやらルックはカシウスに惚れてしまったようだ（別の意味は絶対無いが）

カシウスは当然のように笑った

「はっはっは、あたりまえだ。それじゃあ町に戻るぞ」

「うん！」

カシウスはそう言ってルック達を連れて歩き出した
一方エステルは唸っていた

「……む………助けてくれたのは感謝するけど………なんで父さ

んとイクスがいいところを全部持っていったらどうよ!?」

そして後ろ向くと

「納得いか「うるせーよ」「きゃうっ!」

後ろにいたイクスに頭を叩かれた

「うるせーよエステル。俺だって親父には納得いかねえけど我慢してんだからよ」

「はは、2人ともそれは仕方ないよ。何ととっても……カシウス・ブライトだからね」

あまり納得いかない2人だったが仕方ないという事でカシウス達を追い掛けていった

イクス

「毎度毎度、始まるぜ!」

エステル

「蒼空キセマテリアル、始まるわよ」

イクス

「やゝ始まったな、蒼空キセ」

エステル

「もちろん、やるわよ。今回はヨシユアの紹介だったっけ？」

イクス

「ああ。それじゃあ、さっそくやるか」

ヨシユア・ブライト

七曜曆1185年12月20日生まれ。16歳

5年前、イクスと共にブライト家に引き取られた少年

漆黒の髪と琥珀色の瞳を持つ、涼しげな容貌の持ち主。冷静沈着で頭も切れるため、いつも突っ走りがちなエステルを、たまに走るイクスをフォロ―する事が多い。実際はイクスと2人でエステルを止める方が多い

2人と同じく見習い遊撃士で、得物は鋭利な双剣ツインエッジ

実はロレントではヨシユアの知らない所で女子達の間でヨシユアのファンクラブが出来ている。これを知っているのはイクスのみ

エステル

「……すっかり分かったけど、ヨシユアってモテるの？」

イクス

「（ぼそっ）鈍感ってすばらしいスキルだな、うん」

エステル

「何か言った？」

イクス

「いや、何も。それより質問がきたからいつてみよう。HN、『漆黒の牙』さんから『エステル達の現時点でオーブメントにセットされてるクオーツはなんですか？また、セット中以外で所持しているクオーツはなんですか？そういえば気になったんですけど、この小説はFCで完結ですか？個人的には、hardまでいってほしいです』俺たちのオーブメントにセットされているのはHP1、行動力1、防御1、攻撃1、回避1といった初期に作れるクオーツだな」

エステル

「1人1つずつセットされているから予備は無いのよね。2つ目は作者の風花から聞いたけどFC、SC、the3rdは分けて連載するそうよ。珍しく2つ目の質問よ。HN、『ケイン青川』さんから『イクスのクラフトの名前なんですけど…『白虎撃』ときたら『四神』関連でこれからもつけていくことになるのでしょうか？そうなる某超級機械人大戦のロケットソウルパンチの人が思い浮かんでくるあとはステータスが気になるwそちらの返信のさいにメタ発言になるかもしれませんがアガツトのような脳筋型（弱）かwジンのような脳筋型（強）かwこのキャラに近いかな…くらいでもいいのでよろしくお願いします。注：ステータスは全裸時のものをお願いします要注w：脱ぐなよ、武器・防具・アクセ・クオーツなしでという意味だ。けして、脱ぐなよ…』だって…なんか恥ずかしい単語が出るわ!？」

イクス

「違っぞ、エステル。全裸というのは俺の普通の服装の事だぞ。…さて1つ目は技については無いな。ただ風花がエステルの『金剛撃』みたいにかっこいい名前がよくて白虎を付けたらしいぞ。それから2つ目の質問…ふざけるなー!!俺をあの筋肉バカと一緒にすんな!俺はだいたいエステルの前向きとヨシユアの冷静、そして

先輩作である『リリカルなのはETERNAL』の森羅のチャラさを合わせた感じだ！」

エステル

「森羅って分かるわけ無いわよ！あたしとヨシユアで良いでしょ！」

イクス

「むう……それでいいよ。それじゃあ、今回はこれで質問はお終いだ。次回は誰の紹介をしようかな？」

エステル

「それじゃあ、またね！」

序章の序章 memory:?

序章の序章 memory:?

ギルドに戻ったエステル達をアイナは優しく迎えてくれた

「フフ、大変だったみたいね」

「まったく父さんたら……町に到着するなり『報告は任せた』とか言っつてとつと家に帰っちゃうし……ホント、いい性格してるよね」

「まったく同感だ。あのクソ親父、いつか模擬戦してブツ飛ばしてやる」

「まあ、いいじゃないか。あの子たちも無事だったんだし。……とりあえず報告は以上です」

報告をしている時イクスはこんな事を考えてた

(それにしても……相変わらず親父のスタッフを振るスピードが見えないな。あの時からまったく……いや速くなったのか？まあ、どちらにせよ頑張らねえとな)

その間に報告は終わった

「初任務、お疲れさまでした。報告を聞いた感じだとあなたたちも頑張ったみたいね。胸を張ってもいいと思うわよ」

「そ、そうかな……？」

「大丈夫、次はもっと上手くやれるわ。また何かあったらよろしくね」

「……………」

「……………それじゃあエステル、イクス、帰ろうか？」

「そうね……………帰って夕飯の支度をしなくちゃ」

「そついやあ、腹減ったな。帰るか」

そう言う3人にアイナは思い出したように声を掛ける

「あ、ちよつと待つて。カシウスさんに手紙が届いてたの。さつき渡しそびれてしまったから届けてもらえないかしら？」

エステルは言われ手紙を受け取った

「……………仕事関連の連絡かな？」

「そうだと思うわ。外国の支部からみたいだけど」

「外国の支部から……………かよ」

「遊撃士協会があるのはリベルだけじゃないからね。カシウスさんは顔が広いからそつという手紙は時々届くのよ。それではよろしくお願いね」

アイナのそのお願いを了承して3人はギルドを後にした

家に戻るため街道を歩いているとふとエステルが歩みを止めた

「ね、ヨシユア、イクス……」

「ん、なにさ？」

「どした、エステル？」

2人も歩みを止めエステルを振り返った

「……あたし……遊撃士に向いてるかなあ？」

「……」

ヨシユアとイクスは少し考えてから言葉を紡いだ

「まあ、父さんゆずりの武術の腕もそれなりのレベルだと思うし……
…困っている人がいたら放っておけないお節介な性格にも合ってる
と思うけど」

「えへへ、そっか……」

「なんだ？ひょっとして塔の出来事を気にしてんのか？」

「うん……あの時、あたしの不注意でルックまで巻き込むところだった。父さんが来てくれてなかったら大ケガを負わせてたかもしれないな

い。これから先、こんな調子でやっていけるのかなって……」

「……………」

また2人は黙ったが次の瞬間には笑顔になっていた

「何、らしくない事言ってるかな」

「あははは。エステルがそんな顔をするなんて明日は槍が降るか？」

「えっ……………」

エステルは驚いた

2人は続けて喋る

「今日の失敗は、明日取り戻せばそれでいいじゃないか」

「明日よりもっと先の事を考えて尻込みしてんなんてお前らしくもない。ずっと憧れていた仕事だろ？この程度でへこたれてどうすんだよ」

「ヨシユア……………イクス……………うん、そうだよね……………こんなの、あたしらしくないよね！」

どうやらさっきの迷いは吹っ切れたようだ。とっても良い笑顔をしている

「そうそう、エステルに深刻な顔は似合わないから。能天気になんて笑ってる方が自然だよ」

「って、どついつ意味よっ！」

「ははは……でもな、エステル。お前きつと遊撃士以外の職業は絶対無理だぜ」

「あ、アンタも一言多いんだから……」

「はは、それは認めるぞ」

「まあいいや……ありがと、2人とも。元気づけてくれて。それじゃあ、早く家に帰りましょ、なんか急にお腹が減って来ちゃった」

そう言つて元気よく歩き出したエステルを見て2人は一言

「「やっぱり能天気だ……」」

と呟いた

家に戻つたエステル達はカシウスの部屋を訪れた

「ただいま、父さん。報告、終わらせてきたよ」

「うむ、ご苦労だった。報告内容は、各支部で検討されて報酬や昇級などに影響してくる。これからも忘れずにな」

「分かってますって。そうだ父さん。『リベール通信』買ったから。それと、ギルドからの預かり物」

そう言ってエステルはリベール通信と手紙をカシウスに渡した

「ふむ、手紙か……」

「それじゃ、あたしは夕飯の支度があるから」

エステルは立ち去ろうとしたが思い出したようにカシウスを振り返った

「……今日はありがとね。危ないところを助けてくれて」

照れるように言うエステルを見てカシウスは少し驚いた

「ほう、いつになく殊勝だな？ ようやく父の偉大さを理解してくれたようで嬉しいぞ。さあ、遠慮するな。どーんと胸に飛び込んでくるがいい」

……やっぱり相当の親バカだな

イクスはそう考えた

考えているうちにエステルは怒ってさっさと部屋を出ていってしまった

「思っていたよりも落ち込んでいないようだが……ヨシユア、イクス、お前達のおかげか？」

「大した事はしてねえよ」

「イクスの言う通り。ちょっとハツパをかけただけさ。もともと強い子だからね」

「ふん、まだまださ。ブレイサー稼業をしていれば迷ったりする」とは幾らでもある。それを乗り越えてこそ一人前だ」

口調は真面目に言っているが言葉の中にはエステルを思いやるものが含んでいた

ヨシユアはそんな父の言葉にクスリと笑みを浮かべた

「くす、相変わらず娘思いだね」

その時部屋の外からエステルの声が聞こえてきた

「あっちゃあ〜っ……もう1回やりなおしだよ……いきなり挑戦するのはさすがに無理があったかも……否、料理は気合い！何度も挑戦あるのみよっ！」

その後色々ものすごい音が聞こえてきた

「まったく……落ち着きのないやつだ」

「あ〜っ、もう！少し手伝ってくるわ。あの調子だといつ飯にありつけるか分からんからな」

イクスはそう言って飛び出し、ヨシユアも「僕も手伝ってくるよ」と言って部屋を出ていった

カシウスは少し笑うとさつき貰った手紙の封を切り内容を読み始めた

「ふむ……帝国方面からの連絡か……」

カシウスは読み始めはさつきと同じ表情だったが読んでいく内に陰

しい表情になっていった
そして、

「……なんだと……！」

驚きを口にした

それは料理に勤しんでいたエステルとそれを手伝っていたヨシユア
とイクスには聞こえなかった

イクス

「イクスの〜」

エステル

「蒼空キセマテリアル！」

イクス

「おし、始まった。今日は前置きをかつ飛ばして行くぜ」

エステル

「まずはあたしたちの姉貴分であるシエラ姉の紹介よ」

シエラザード・ハーヴェイ

七曜曆1179年5月14日生まれ。23歳

『ぎんせん銀閃のシエラザード』の異名を持つ女遊撃士。カシウスの弟子で

エステル達にとっては姉のような存在。姐御肌で面倒見もいいが、大酒飲みのカラミ上戸という悪癖を持っておりよくエステル達を（特にイクス）巻き込んでしまう

イクス

「……シエラ姉さんの酒にはほとんど疲れるぜ。それじゃあ質問行ってみよう。HN『漆黒の牙』さんから毎度有難う！』質問なんですけど、現在のイクス達のレベルはどのくらいですか』うーむこれはたぶん……」

エステル LV5

ヨシユア LV5

イクス LV5（魔王時+10）

イクス

「こんなかんじだろ」

エステル

「魔王つて……アンタ本気で言うの？」

イクス

「いや、だってよ。風花が俺の口癖を作ったとき高町なのはイメージしたから結果的に魔王化も入っちゃったんだよね」

エステル

「それってあたしたち、キャラ崩壊しないかしら？本気で心配だわ。ま、それじゃあ今回はこれでおしまいね。気軽に質問してくれて構わないわよ」

イクス

「エステルの胸のサイズはいくつとかも大歓迎……」

エステル

「金剛撃!!」

イクス

「うにゃアアアア!!」

序章の序章 memory:~? (後書き)

ずいぶん遅れました
すみません

序章の序章 memory:fin

その夜の夕食

カシウスはエステルの料理の出来に驚いていた

「ほう、驚いたな……」

「どうよ、エステル特製、ふわふわ玉子のチキンオムライス！心して味わいなさいよねっ」

「へえ、うまいじゃん……って言ってあげたいけどお前、それ俺がしょうがないから心を天使にして手伝ったからだろ！」

「うん。美味しく出来てるよ、これ」

イクスは食いながら叫びヨシユアは自分も手伝った事を黙ってそつなく感想を言った

エステルはヨシユアの言葉しか聞こえていないように胸を張った

「ふふん、これが真の実力よ」

「俺の言葉は無視かよ！……まあ、いいや。それにしても今日はすごく充実した一日だったな」

「うんうん。遊撃士の資格も貰ったし初めての任務も経験したし……オムライスも成功したしね」

エステルの言葉にまたイクスは訂正しようと思ったがオムライスが美味しいので止めた

カシウスも考え深げに食べている

「ふむ……初めて作ったわりには喰えるな。覚悟していたのに拍子抜けだ」

作った本人の前でとてつもなく失礼な言葉を言うな、オイ

「失礼ね。素直に美味しいって言ってよ」

「いや、こんな上出来なものが出発前に喰えるとは思わなかった。やるじゃないか、エステル」

エステルはえへへと笑っていたが一つの単語に疑問を持った。よく見ればヨシユア達も食べるのを止めカシウスを見ていた

「……出発前？」

「父さん、ひよっとして……」

「仕事か……？」

「うむ。急な仕事が入ってな。しばらく家を留守にするぞ」

エステルは驚く

「ちょ、ちょっと待ってよ！それって……いつからなの？」

「明日からだ」

「あんですってっ！？」

「早っ！いくらなんでも急すぎやしないか？」

イクスも驚くがヨシユアは冷静に質問した

「さっきの手紙だね……なにか事件でも起こったの？」

「なに……単なる調査だ。色々な場所を回るから1ヶ月くらいはかかるだろう。そういう訳で、留守を頼んだぞ」

さすがにエステルはキレて怒鳴った

「なにが『そういう訳で』よ！まったくもう、いつもいつも勝手なんだから……」

「仕方ないよ、エステル。頼まれたらそれに應えるのが遊撃士の仕事なんだから」

「それは判ってるけど……ロレント支部の仕事はどうすんの？依頼とか受けてるんじゃない？」

「5、6件ほどな。そこで考えたんだが……」

カシウスは水を飲みながら一つ提案を出す

「お前たち、俺の代わりに幾つか依頼を受けてみないか？」

「えっ……」

「はっ……？それって親父がやる予定だった仕事の事か？」

突然の提案に驚く2人

「うむ、新米のお前たちでもやれそうな仕事を回してやろう。難しいのはシエラザードに頼むことにする。どうた？」

カシウスの提案にエステルはすぐに乗ろうとしたが塔での出来事を思いだし返事は消却的になった

「やってみたいけど……失敗した時のことを考えると……本当に、あたしたちみたいな新人でもできるような仕事なの？」

「比較的簡単なものばかりだが中には人の命を預かる仕事もある。強制はしない。よく考えてみることだな」

エステルは考えたが答えは出ずヨシユアとイクスに尋ねてみた

「ヨシユアとイクスはどう思う？」

「僕は賛成だよ。良い経験になると思うしね」

「俺も賛成だ。それに俺たちは半人前だけど3人合わせれば1人前くらいにはなれる。お互いにお互いを全力全開でフォローし合えば何とかいけるだろ」

「3人合わせれば1人前……うん、そうだよね！」

エステルはヨシユアとイクスに頷くとカシウスに笑顔で言った

「父さん！あたし、やってみるよ！って言うか、凄くやってみたい

「！」

「決まりだな。明日、出発前にギルドに話を通しておう」

「ところで父さん。明日はどっちの飛行船に乗るの？王都行き？それともポース行き？」

「王都行きだ。朝の10時に出発だな」

「だったら明日はちょっと早起きしなくちゃね。目覚まし時計、ゼツトしとこつと」

そう言つてエステルは食器を片付けて自分の部屋に戻った

夜中

エステルが夢の中でスタッフをグルグル回していた時、カシウスは一人外の椅子に腰掛け酒を飲んでいた
するとそこへヨシユアとイクスが家から出てきた

「……父さん」

「よっ、親父」

「ヨシユアとイクスか。」

カシウスは2人の名前を呟きながらグラスを煽る

「あんまり飲み過ぎるとまたエステルに叱られるよ？」

「旅立ち前の景気づけさ。どうだ、お前たちも付き合わんか？」

「遠慮する。てか、未成年の息子に酒を勧めんなよ。シエラ姉さんじゃあるまいし」

「はは……あれは俺以上のウワバミだからな」

はははと笑っていたがカシウスはすぐに笑みを消した

ヨシユアとイクスは同じように黙った後、口火を切った

「……かなりの事件みたいだね？」

「まだ確証はないが……帝国の方で動きがあるらしい」

「エレポニア……帝国で……ね。どうにもキナ臭いな、そりゃ」

「目立った動きではないが……それが却って気にかかる。まずは帝国大使館に探りを入れてみるつもりだ」

「わかった。エステルのことは任せてよ」

ヨシユアはしっかりと頷きながら言う

「あまり甘やかすんじゃないぞ？遊撃士になったからには自分の面倒くらい見られないとな」

「エステルなら大丈夫だろ」

「うん。天性のカンを持つているし、荒削りだけど、武術も天才的だ。きつと一流の遊撃士になれるよ」

「今は、世間知らずのヒヨコ子さ。いずれ自らの意志で進むべき道を選ばなくてはならん。……ヨシユア、イクス。それはお前達にも言える事だ」

カシウスはグラスを置いて2人を見つめた

ヨシユアとイクスは少し考えるように目を瞑った

カシウスはそんな2人に言葉を続けた

「もう5年になるか……正直、あつという間だったな」

「うん……本当にあつという間だった」

「ああ……時が過ぎるのはホントに早い」

「ヨシユア、あの時の言葉……まだ撤回するつもりはないか？」

「……僕にとって最後の一線だから。それすら守れなかったら僕は……自分が許せなくなるから。だから……ゴメンなさい」

ヨシユアはそう言って謝った

カシウスは気にもせず首を振る

「……謝る必要はない。イクスはどうだ？」

イクスは聞かれ、笑って答えた

「俺は元々、身寄りの無い孤児に加え7年前からの記憶が名前以外

無いからな。この5年間と同じように『イクスヴェリア・ブライト』
として生きていくぞ」

「そうか……だがな、これだけは覚えておけ。お前達がどんな道を選ぼうとこの5年間を消すことはできん。俺もエステルも、お前達の家族だ。どんな事があるつとな」

カシウスの言葉に静かに頷くと2人は部屋に戻っていった

イクス

「イクスの」

エステル

「蒼空キセマテリアル！」

イクス

「序章の序章、つまり序章前の話しも今回で最終。次回からはやつと物語に入っていけるぜ」

エステル

「うんうん。それじゃあ人物紹介に行く？」

イクス

「おう！今回は俺たちの親父を紹介するぜ！」

カシウス・ブライト

エステルの父親。引き締まった体格とダンディな口髭が印象的な中年男性

ベテラン遊撃士であり、エステル、ヨシユア、イクスのほかシエラザードの師匠でもある。45歳

エステル

「どこがダンディよ！不良中年に訂正しなさいよ！！」

イクス

「しょうがないだろ。俺だって書きたくねえよ。親父のファンが増えちまうじゃねえか」

エステル

「まったく……それじゃあ質問、いきましよう。HN『漆黒の牙』さんから『質問です。イクスの所持しているクラフトの白虎撃の性能を教えてください（出来れば原作効果で）』原作？確かこれはオリ技でしょ」

イクス

「まあ、どっちだっていいさ。んじゃ、ゲームのように書くか

白虎撃

使用CP20

攻撃クラフト：単体・攻撃、技・アーツ駆動解除

下からと上からの揺さぶる攻撃で、技・アーツの駆動を解除する

とまあこんなところだ。それじゃあ次の質問。HN『風花』……つて何出してんじゃ馬鹿作者！！てめえ、自分で自分の小説に質問す

んじゃねえよ!!」

エステル

「それでも読んでみよ。『先に言うよ。気にするな』気にするわよ！ああ、あたしもイラついてきちゃった。『このそらリアルは君達がやっていることであって私には無関係なんだよ。だから質問。エステルは胸って何カップ？』答えられるかアアアアア!!!!」

イクス

「作者アアアア！もう二度と質問なんかしてくんじゃねえエエエエエ！今回はおしまい。次回からもよろしくな！」

序章 く父、旅立つ memory:?

序章 父、旅立つ memory:?

次の日、ロレント発着場にはエステル、ヨシユア、イクスそしてシエラザードがカシウスの見送りをしていた

「さて……そろそろ時間だ。エステル、あまり無茶をしてヨシユアの手を焼かせるんじゃないぞ」

カシウスがエステルを見て言った

「もう、耳タコだつてば。父さんも無理しちゃだめよ。もう若くないんだからね」

「そうそう。若い奴に世代交代でもしてお茶でも啜っているよ」

エステルとイクスが茶化すように言った

「ふん、まだまだ若いもんには負けられんさ。シエラザード、お前にも急な仕事を押しつけてすまん」

カシウスがシエラザードに謝った

「いえ、気にしないでください。先生の代わりが務まるか、自分ではちょっと心配ですけど」

シエラザードは控えめに笑いながら言う

「謙遜するな、銀閃ぎんせんの。ついでに悪いが、何かあったら3人を頼むぞ」

カシウスはエステルたちを見ながら言った

「フフ、それは任せてください。決して甘やかさずに厳しく見守ればいいんですね？」

シエラザードはさらりと怖いことを言う

「さすが判ってるじゃないか」

カシウスは笑いながら言った

「なによそれえ……」

エステルはむくれた

「はは、このあたりが師弟だね」

「ははは、確かに」

ヨシユアとイクスがそう言って笑った

その時、案内放送が流れた

……王都方面行き定期飛行船、《リンデ号》、まもなく離陸します。ご利用の方はお急ぎください

「おっと、いかんいかん……」

カシウスが慌てて飛行船に乗った

「父さん、行ってらっしゃい。こっちは心配いらないから」

「仕事が終わったら遊んでないでとっとと帰ってきてよね」

「なんか新しい料理のレシピあったら頼むぜ、親父」

「人聞きの悪いことを言うな。だがまあ……なるべく早く帰ってくるさ。それとレシピは見つけたらな。それでは、3人も元気でな」

カシウスがそう言って飛行船の中に乗り込むと、飛行船は離陸した

「行っちゃったね」

「うん……」

「おいおい、寂しそうな顔すんなよ。どうせすぐ戻ってくるよ」

「そうね。何の調査かは知らないけど先生だったらあつという間だわ」

イクスとシェラザードが励ますように言つとエステルはちよつと怒って言い返した

「さ、寂しくなんか無いってば！父さんが留守にするなんていつもの事だもん」

「はいはい。そういう事にしといてあげる。それじゃ、あたしは先生から引き継いだ仕事を片付けるけど……困ったことがあったら遠慮なく頼ってきなさいよ？」

その言葉には頷くエステル

「うん、でも最初のうちは自分たちの力で頑張ってみるよ。どこまでやれるか試してみたいし」

「フフ、ナマ言っちゃって。まあヨシユアとイクスが付いていればそれほど心配することもないか。3人とも頑張りなさいよ」

「うんっ！」

「頑張ります」

「いつも通り、全力全開でクリアしますよ」

3人がそう言つとシエラザードは頷いて発着場を後にした

「さてと……どうする？さっそくギルドに行こうか？」

「うん、どんな仕事をするのかアイナさんに聞いて確かめなきゃ」

「そんじゃま、レッツ・ゴー！」

エステル達はギルドに着くとアイナに挨拶した

「あら、エステル、ヨシユア、イクス。カシウスさん、もう出発したの？」

「うん、さつきね。それで早速、父さんがやるはずだった仕事を紹介してもらおうと思って」

「わかったわ。あなたたちをお願いする仕事は全部で3つあるんだけど……」

そう言っただけで依頼の紙を取り出すアイナ

「まず最初は西にある農園に行つて欲しいの」

「西の農園って、テイオの家？」

「テイオ？聞いたことがあるような……」

「テイオ・パーゼル。俺たちと同級だった奴だよ。パーゼル農園の娘なんですよ」

首を捻るアイナにイクスが説明する
アイナは納得したようだ

「ああ、そうだったの。ええ、そのパーゼル農園で魔獣退治をしてもらいたいのよ」

その言葉にエステルは驚いた

「ええっ……魔獣が出たの!？」

「幸い、ケガ人は出てないけど畑が荒らされて困ってるらしいわ。それでギルドに要請があったのよ」

「そんな事があつたんだ……」

「それなら、すぐにでも行こうぜ」

「では、これを渡しておくわね」

アイナはそう言うとエステルにギルドのマークが入った封筒を渡した

「それはあなた達が、ギルドから派遣されたという証明書よ。農園のご主人に渡してちょうだい」

「ティオのお父さんたちなら知ってるから必要ないと思うけど……
まあ一応、受け取っておくわね」

「それじゃあ、エステル、イクス、行こうか？」

「うん」

「おう」

エステル達は言い合いパーゼル農園に向かった

イクス

「イクスの！」

ヨシユア

「蒼空キセマテリアル始まります」

イクス

「って今回はヨシユアがアシスタントか」

ヨシユア

「うん、そのようだね。それで？今回は何をするんだい？」

イクス

「ああ、それなんだが……」

ヨシユア

「……まさか無いとは言わないよね……？」

イクス

「（ギクッ）そ、そんなことないぜ。今回は……紹介や質問じゃなくて考え事の雑談だ」

ヨシユア

「考え事の雑談？」

イクス

「そうそう。実は風花がこの話の合間にリベール通信を書くこと考えてるんだよ」

ヨシユア

「へえ。良いじゃないか。でも何でイクスが悩んでいるんだい？」

イクス

「おう。実は風花を真似て俺も1つ載せようかなと思ってているんだ」

ヨシユア

「イクスが……何を書くんだい？」

イクス

「時々、店や人づてで貰う『カーネリア』って奴だ」

ヨシユア

「それってゲーム内で全て集めると最強武器と交換してもらえるあの？」

イクス

「……ヨシユア、お前がそれ言っているのか？」

ヨシユア

「気にしないで。それより良いんじゃない？」

イクス

「そうか？それじゃあ、風花に頼んでみようかな？」

ヨシユア

「頑張りなよ、イクス。……さて、今回は僕とイクスの雑談だけに

なってしまいました。がこれでお仕舞いです。それではまた次回」

イクス

「質問、ビシバシ待ってるぜ！」

序章 く父、旅立つ memory…? (後書き)

今回はリベル通信を載せます

少ししたら蒼空キセでもありましたようにカーネリアをイクスが出
すそうです

楽しみに待っていてあげてください

リベール通信 第1号

リベール通信 第1号

【特集】まもなく女王生誕祭

節目の年の生誕祭

本年60歳とされるアリシア女王陛下。そのご生誕を祝賀する生誕祭までいよいよあと半年を切った。

記念すべき節目の年ということで、例年を上回る盛り上がりが期待されているが、今年は王国全土を戦火に包んだ『百日戦役』からちよつと10年の節目でもある。

あの悲劇を繰り返さぬため我々には何ができるのか……陛下のもとに国民の集う生誕祭。王国の歩みを振り返り、その将来を展望するのにはまたとない機会なのではないだろうか。

王都グランセル 進む生誕祭の準備

目抜き通りでは早くも市民たちが飾り付けの準備を始めているが気の早いことでは商人たちも負けてはいない。来る祭典に向けて着々と新商品を開発中だ。

「毎年が勝負なんですよ」と東街区で評判のアイス屋を営むソルベさん。工夫をこらした新メニューは祭の当日まで秘密だそうだ。

「お店は増えていく一方ですから」お祭りがにぎやかになるのはいいこと、と笑顔で語りながらも、ソルベさんの目はすでにライバル店の動向に注がれている様子だった。

武術大会 今年の優勝者は？

王立競技場では今年も生誕祭に先立ち女王陛下主催の武術大会

が開催される。1対1の真剣勝負が人気を呼び、今ではすっかり祭の華となった感もあるこの大会。さて、今年の栄冠は誰の手に？

【社会】ボースで強盗事件

本誌に入った連絡によると、ここ数日ボース市を中心とした一帯で強盗事件が多発。ハーケン門駐留の王国軍国境師団は警戒を強めている模様だ。

軍からの公式発表はいまだないものの、目撃情報からグループによる犯行であることが明らかになっている。一刻も早い犯人の逮捕が望まれる。

【リゾート】たまに行くならこんな宿

ヴァレリア湖畔の宿屋《川蝉亭かわせみ》が今静かなブームだ。火付け役は王都の若い女性客。

たまにはのんびり釣糸を垂らす休日はいかが？

「…………ふんなるほどな。おっ、今回から連続でレシピ紹介？ラッキー！何々…………ゴールデンリゾート？うわっ、すげえ美味そうだな。えーと作り方は…………」

イクスはふんふん〜と鼻歌を歌いながら調理を始めた

ゴールデンリゾートのレシピを覚えました

リベール通信 第1号（後書き）

リベール通信はゲーム内で入手した時期に書いて出していきます

序章 く父、旅立つ memory…?

序章 父、旅立つ memory…?

エステル達はロレントの右に位置するミルヒ街道を進む途中、依頼にもあつた手配魔獣を倒しミルヒ街道の途中を南に折り進んだ所にあるパーゼル農園に辿り着いた

パーゼル農園はパーゼル家が家族ぐるみで経営する農園で、新鮮な野菜の生産を中心に、酪農や養鶏なども行っている王国では有名な農園なのだ

「はあ。いつ来ても、のどかな場所よね。魔獣に襲われているなんてちょっと信じられないけど……」

エステルは感慨深げに呟く

「たしかに今はそれらしい気配や姿は感じねえし、見えないな……とにかくティオに事情を聞きに行こうぜ」

「そうだね。ティオはどこにいるかな？」

エステル達は家の前で元気に遊んでいた双子のウィルとチエルにティオの場所を聞いた。どうやら牛舎にいるようだ

エステル達が牛舎に行くと1人の青い髪をショートカットにした少女がいた。あれがティオだろう

「やつほー、ティオ！」

「やあ、久しぶりだね」

「ういゝす。久しぶりだな、ティオ」

3人が挨拶をするとティオは驚いたように振り向いた

「エステル？それにヨシユアとイクスマまで……もしかして遊びに来てくれたの？」

「ううん、ブレイサーの仕事だよ。なんでも魔獣が出たそうじゃない？」

それに続いてヨシユアが父、カシウスの仕事を代わりに引き受けた事を説明した

ティオはまず始めにエステル達がブレイサーになったことを喜んでくれた

「研修が終わったんだ……おめでとう、良かったじゃない。うん、あなた達だったら何とかできるかもしれないわね」

「やっぱり出るの、魔獣？」

「ええ、ここ数日ずっとよ。おかげで私まで寝不足になっちゃって……」

そこでティオは眠そうに欠伸をした。こっちまで眠たくなりそうだ

「つつ事は……魔獣は夜に出現するの？」

イクスがティオにつられて欠伸をしながら言う

「ご明察」

詳しい話しはお父さんたちに聞いてとテイオが言ったのでエステル達はテイオにお礼を言った

ちようどテイオの両親が家の中に入っていくのが見えたのでエステル達も家の中に入っていった

「こんにちは！おじさん、おばさん」

エステルが中に入りながら元気良く挨拶をすると2人が振り向いた

「ご無沙汰しています」

「お久さ〜ですね」

「おやまあ……エステルとヨシユア、それにイクスじゃないか」

3人の突然の来訪に驚きながら迎えるテイオの母、ハンナその横に立っていたのは父、フランチ

「こりゃ久しぶりだね。テイオに会いに来たのかい？」

「あ、テイオとはさつき会ったわ」

「今日は、遊撃士協会の用事で来ました」

ヨシユアは紹介状を渡し、自分達がカシウスの仕事を代わりに引き受けたことを説明した

「……なるほど、事情は分かったよ。でもあんただちだけで魔獣退

治なんて危険じゃないかねえ？」

「そうだなあ。君らにケガをさせるわけには……」

ハンナとフランツは少し迷っていたがエステルは胸を叩きながら言った

「心配しないで。これでも一応ブレイサーだもん。魔獣退治だったらお手のものよ」

「一応ギルドからの許可も出ているし、それに……」

「？ それに」

フランツが聞き返すとイクスは笑いながら言った

「ふふ……少し頑張りたいですよ。だから任せて貰えませんか？
ふふふ……」

フランツは何故笑っているか気になったがあえて詮索は止めておいた。イクスのあの笑いは何かよくない事を考えている笑いだと思っていたからだ

「よ、よし、それではお任せしようか」

「ありがとうございます、おじさん」

笑い声を引つ込めたイクスはお礼を言った

「それで……どんな魔獣が出たの？」

「正体はよく判らないが……丸っこい猫のような魔獣だね。夜中に3、4匹くらい現れて畑の野菜を喰い散らかしていくんだ」

「凶暴じゃなさそうだけどとにかく動きが素早くってねえ。捕まえようとしてもすぐに逃げられちまうんだよ」

フ란ツとハンナが魔獣の特長を言いエステル達は手帳に書き込んでいく

「ふーん、なんか変な魔獣ね」

「夜中に現れるということはそれまで待つ必要がありますね」

「ああ、夜になるまでゆっくり寛くわんいでほしい」

「もちろん3人も夕食に付き合ってくれるだろう？」

ハンナの誘いに喜ぶエステルとイクス

「えへへ、もちろん」

「やрий。ハンナおばさんの料理は参考にしたいたいほどつめえから楽しみだな」

その言葉にハンナは嬉しそうに笑った

「嬉しい事を言ってくれるじゃないか。それじゃ、期待に沿えるよ。うはりきって作るとしようかねえ。イクス、もし良かったら手伝っ

てくれるかい？」

「全力全開で了解」

イクスは嬉しそうに敬礼をしながら返事をした

イクス

「イクスの」

エステル

「蒼空キセマテリアル！」

イクス

「うっし、今日も元気に質問に答えていくか エステル、よろしく」

エステル

「はいはい。HN『漆黒の牙』さんから、漆黒の牙さん毎回質問ありがとうね。今回の質問は風花さんはFC・SCの1周目のラスボス戦のメンバー（固定2人以外）は誰ですか。自分は両方アガットとクローゼです。」

二つ目は、イクスのステータスの成長傾向（ゲーム的な）は物理寄り（アガットみたいな成長）ですか？それともアーツ（クローゼみたいな成長）寄りですか？それとも物理もアーツも両方強力になるんですか（リシャルルみたいな成長）？教えてください」風花はFCはオリビエとクローゼ、SCはクローゼとケビンさんらしいわ」

イクス

「おい、エステル。何故ケビンだけさんを付けた？」

エステル

「さあ？自分でも何でさんを付けたか判らないわ」

イクス

「そうかい。さて二つ目は俺の成長傾向は基本、物理が上がりやすいタイプだがアーツも上がりやすい。比率で言うと物理6、アーツ4だな」

エステル

「ある意味チート級ね。さて次はHN『ガイア』さんから『初めて読みましたが読みやすく面白いです。』

質問はイクスの得意料理は何ですか』これからもよろしくねイクスの作る料理ってどれも美味しいけど何が得意なのかしら？」

イクス

「俺の得意料理はフライドポテト、パッパパエリア、健康おじや等あるが中でも一番得意なのはこれだ」

そう言ってイクスが取り出したのは鍋の中が真っ黒の料理だった

エステル

「ちよつ、何よこれ！？こんなもの食べたこと無いわよ！」

イクス

「この名は暗闇鍋《覚悟》ま、いわゆる闇鍋だ」

エステル

「……ちよつと一口」

エステルは恐る恐る鍋の汁を掬い飲んだ
途端、

パターン

倒れた

イクス

「ちなみにもし当たりを引いちまうと体力が大幅に下がるぜ。その様子だと当たりのようだな」

エステル

「ばっ、……ばか……イクス……覚え、て……なさいよ……」

イクス

「あちゃ〜、エステル気絶しちゃったよ。アシスタントが氣い失っちゃまったから今回はここまでだな。それじゃあ次回も楽しみに！」

序章 く父、旅立つ memory:?

序章 父、旅立つ memory:?

あれからパーゼル一家と共に食事を終えたエステル達はエステルはテイオと別室に、ヨシユアとイクスはテイオの弟、妹と遊んでいたエステルはテイオとベットに腰掛けながらのんびりとおしゃべりしていた

「はあ、美味しかったなあ。ハンナおばさん、相変わらず料理が上手よね」

「ふふ、うちのお母さん、お客さんが来ると張り切るから。イクスの料理だって美味しかったわよ」

「そうね。ま、でもおばさんには程遠いけど」

エステル、それはいつも食べているからよとテイオはツッコミたかったが止めておいた

「それより、ヨシユアとイクスには悪い事をしちゃったわね。チビたちの相手をさせちゃって」

「あはは、良いんじゃない？2人って意外と子供になつかれる事が多いし。どちらかと言うとヨシユアは堅苦しいタイプでイクスは無邪気なタイプ。不思議よね」

「あら、そんな事ないわよ。ヨシユアは確かに礼儀正しく他人行儀な雰囲気もあるけど……いざ知り合ってみるとけっこう面倒見がい

いのよね」

ティオはそれからヨシユアの良い点をつらつらと述べた

「さりげない気配りがまたポイント高いっていうか」

「そ、そうかなあ？」

「加えて、整った顔立ちと神秘的な琥珀の瞳、漆黒の髪……女の子に騒がれるのも当然よね」

「……………」

エステルは暫し呆然としながら1つ聞いてみた

「ヨシユアってモテるの？」

「何を今さら……イクスもだけど交際を申し込んだ子は1人や2人じゃないって噂よ。彼ら、全部断ったみたいだけど」

どこか憂い顔で独り言のように言うティオ

「し、知らなかった……2人つてばあたしに何の相談もしないで……まったく水臭いというか、薄情というか！」

エステルは微妙に怒りながら言った

「いや、ま、同性ならともかく異性に相談できる話でもないし。それに……ヨシユアの場合はエステルには尚更ねえ」

「へっ……なんで？」

エステルがテイオに尋ねた時、ドアをノックする音が聞こえた

「エステル、いいかい？」

どうやらノックしたのはヨシユアのようにだ

「そろそろ見回りの時間だよ」

「あ、うん……わかった」

エステルはヨシユアにそれだけ伝えるとベットから降り脇に立て掛けておいたスタッフを手にした

「それじゃ、お仕事を片付けてくるわ。今の話、また後で聞かせてね？」

「あー、はいはい。気を付けて行ってきなさい」

エステルは頷くとすぐに部屋を出ていった
1人残ったテイオはポツリと漏らした

「相変わらずこの手の話には疎いと言うか、鈍いと言うか……」
「りや、ヨシユアも苦勞してるわね」

「全くだ。エステルの鈍感ももう少し鋭くなれってんだ」

テイオは驚きながら自分の咳きに相づちを打った人物を見た
相づちを打ったのは扉にもたれたイクスだった

「イ、イクス、アンタ聞いてたの？」

「ああ、ちなみにエステルとヨシユアは外だから大丈夫だ」

「そう。それよりイクスって結局どうなの？」

「うん？何が？」

「エステルよ。エステルが好きだから私も含めた数人の女の子の誘いを断ったんでしよう？」

イクスは微妙に顔を赤く染めたテイオを見ながら笑顔で首を横に振った

「……確かに俺はエステルが好きだな。だけどそれは家族愛ってやつだ」

「……そう。なら2人を……ヨシユアを応援しなさいよ」

「モチのロン。それじゃあ、そろそろ行かねえとエステルに怒られそうだな」

「イクスも気を付けて行ってきなさいよ」

イクスは後ろを振り向かず、手を振り部屋を出ていった
テイオはまたポツリと呟いた

「……やっぱりイクスはイクスね。私の好きなイクス………だけどイクス、アンタも鈍感よ」

イクスが外にでるとエステルとヨシユアが話していた

「は、話はそれだけ！とつとつと見回りを始めましょっ！」

エステルは一方的に言うつと走って牧舎の方に向かった
イクスは？しながらヨシユアに近づいた

「ティオに何か吹き込まれたのかな？……………隠し事、か……………」

「どうした、ヨシユア。何かエステルに吹き込まれたか？」

「イクス…………いや、何でもない。それよりエステルを追いかけてから見回りを始めよう」

「良いぜ。どついつ風に見回ればいいんだ？」

「そつだね…………」

ヨシユアは少し考えてから言葉を発した

「家の周り、畑、牧舎、温室を一通り回つてみるといいかもね。農場全体をカバーできると思う」

「ん、了解。うんじゃま、レツツ・ゴー！」

そう言つてエステルと合流して見回りを開始した

牧舎

牛がのんびりしている以外変わった事は無かった

「……魔獣、いないみたいね」

「そうだね、他を回ってみよう」

畑

「静かね〜……虫の音しか聞こえないわ」

エステルが言つた

「まだ農園の中に入ってきてないみたいだね。僕たちを警戒してるのかな」

ヨシユアが言つた

「ねえねえ、ヨシユア。小さいころ聞かされなかった？赤ちゃんつてキャベツ畑で生まれるって」

エステルがヨシユアに聞いた

「また唐突だね……僕は、銀の翼を持つ天使が届けてくれるって聞かされたけど」

ヨシユアが答えた

「ふーん、土地によって違うのね……………」

エステルは黙った

「……………」

ヨシユアも何も言わない

「見回り、続けようか？」

ヨシユアが切り出した

「うん」

そうして再開した

その時イクスは

(……………大人は子供にホントの事は言えないからって物凄い嘘をつくんだよな。あれ？俺は何て言われたっけ？)

つてな事を考えていた

アンタ記憶無いんだろ？

温室

「……………」

「さすがには入ってねえな」

「でも、オーブメントの光が幻想的な雰囲気でイイ感じよね。ちょっと得した気分かも」

「ノンキだなあ、君って」

「ま、気持ちは分からんでも無いけどな」

それにはエステルもムカツとして言い返す

「ヨシユアとイクスがトーヘンボクすぎるの！」

温室を出た時、エステルが声を上げた

イクス達が何を見たんだろうと思うたらそれは呑気に農園に入ってきた魔獣、畑あらしだった

「みやおんっ！」

エステル達に気づくと猫のような声を上げて慌てて畑の方に逃げた

「あつ、逃げたっ!」

慌ててエステルは叫んだ

「待ちなさいよ、こらあつ!」

「まだ気配は消えてない……農園内に留まっているみたいだ」

「はっ、上等だ……ふふふ……覚悟しとけよ、猫魔獣!」

イクスは叫ぶとスタッフをヨシユアに預けて全力で駆け出した

畑あらしは逃げ切れたと思いい牧舎の近くにいた

暫くすると他の数匹の畑あらしと一匹の大畑あらしがやってきた。

これが全部だろう

「みやおおんっ!」

大畑あらしが一声あげる。どうやら作物を荒らすようだ

その時、畑あらし達の耳に一声掛けられた

「ねえ、猫ちゃん達よ。知ってつか?人の間にはこんな言葉があるんだぜ。『食べ物への恨みはとくっても怖い』ってな」

畑あらし達が冷や汗を滴ながら後ろを振り向くとそこには物凄く良い笑みを浮かべたイクスが立っていた

だが焔あらし達にはとてつもなく黒いオーラが見えていた

「だからさ〜……少し……いや、永遠に眠るほどすんごく頭を冷やそうか」

結局、今、ここで焔あらし達が思うことはこれだけだったと思う

……あれ？これ死亡フラグにやのか？

数分後

「……最近あたし思っただけど……なんかあたしとヨシユアの活躍無くない!？」

「エステル、気持ちは分かるよ。でも堪えて。色々まずいから」

そんな事を叫んだエステル達の後ろには先ほど、イクスの魔王の裁きによってフルボッコにされた焔あらし達が泣きながらロープでぐるぐる巻きにされていた

「みゃあお〜っ……」

「みゅっ〜っ……」

いや、見てるこっちが可哀想になってくるよ
外にはパーゼル家全員が出てきていた

「いやはや、さすが遊撃……イクスだ」

「おじさん、直さないで。悲しくなってくるから」

「失礼。まあ、でもこのすばしっこい連中を見事、捕まえてしまうとはね」

「ははは、食いものの敵は俺の敵だ。さて、コイツら、どうする？」

イクスが笑いながらエステルに尋ねた

「うーん、イクスが完膚なきまでに痛い目に遭わせたからもつ悪さはしないと思うけど……」

「エステル……情けをかけてどうするのか。僕たちは魔獣退治に来たんだよ？」

「で、でも……」

粘るエステルにヨシユアはさらに追い打ちをかける

「それに、今の僕たちは父さんの代理でもある……次に同じ被害が起これたらどう言い訳をするつもりだい？」

「うつつ……そうなんだけどさあ……」

「ヨシユア、キビシー」

と、言い合っている中、ティオが助け船をだした

「ま、被害にあったのはうちの野菜だけなんだし……見逃してもいいんじゃない？」

そこにハンナも賛成する

「そうだねえ。これだけ痛い目に遭ったらさすがに……っていうか絶対懲りるってもんだろう」

「ティオ、おばさん……」

「ですが……」

喜ぶエステル。ヨシユアはそれでも食い下がろうとしたがフランツも言葉を並べた

「……私も殺すのは反対だ。彼らも私たちも同じ土地で暮らしている存在だ。ある程度、折り合いをつけて暮らしていく必要があると思う。ヨシユア君……今回は見逃してくれないかな？」

「……………」

ヨシユアは目を瞑り少し考えたがすぐに答えた

「……わかりました。被害に遭われた皆さんがそう仰るのなら反対はしません」

「すまないね。せつかく来てもらったのに。私たちも、柵を強化したりして被害が起こらないように工夫しよう」

「それじゃ決まりね」

エステルは笑顔で言うとロープを外した

「そういう事だからみんなに感謝しなさいよ？」

笑顔を畑あらし達に見せると畑あらし達はエステルの足に擦りよってきた。さっきイクスが見せた笑顔が魔王ならば今のエステルの笑顔は天使みたいだったからだ

「次、やったら、今度はお前達の身体で料理を作ってやるよ。もちろん余すところなくな」

イクスがまた魔王の笑顔を浮かべる

「みぎやあああっ！！」

「みぎゅっつっつ！！」

畑あらし達は汗と涙を大量に流しながら一目散に農園から出ていった。それほどイクスが怖かったのだろう
エステル達はフランツの強い勧めで泊まって行くことにした

部屋にはベットが二つずつしか無かったのでエステルとヨシユアは相部屋になりイクスはテイオとなった

「はー、もうクタクタだね。もう夜も遅いし、さっさと寝るとしますか」

「……………」

「あれ……どうしたの、ヨシユア？」

不思議そうに聞いたエステルにヨシユアはゆっくり振り向くと謝った

「……………ごめん。みんなに嫌な思いをさせた」

「え、さっきのこと？バカね、そんなこと思っている人なんていないわよ。普通に考えたらヨシユアの意見が正しいもんね」

笑顔で言うエステルだがヨシユアの憂い顔は晴れなかった

「正しいわけじゃない。……ただ、心が冷たいだけさ。今だって、情けをかけずに退治すべきだったと思っている。エステルやイクス、テイオたちと違って可哀想という気持ちが湧かないんだ」

「……………」

ただ坦々と喋るヨシユアにエステルは笑みを引っ込める。ヨシユアはそれに気づかず話を続ける

「こういう時……自分がたまらなくイヤになる。人として不完全じゃないかって。はは、心のどこかが壊れてるのかもしれないな……………」

さすがにエステルはキレてヨシユアを至近距離から怒鳴り付けた

「ヨシユアのばっかっ！勝手に自分のこと決め付けるんじゃないわよっ！」

「エ、エステル？」

「この5年間、あたしはヨシユアの事をずっと見てきた！良いところ、悪いところは誰よりも知っている自信がある！たぶん、ヨシユア本人よりもね！」

「……………」

ヨシユアは啞然としていたがエステルは続けて怒鳴る

「そのあたしを差し置いてふざけた事、言わせないからね！壊れるだなんて…………絶対と言わせないんだからっ！」

「……………ごめん、バカなことを言った」

「分かればよし。これがイクスだったら頭、冷やそっか物だったわよ」

「それは…………嫌だな」

「確かに…………ふふ、でもちよっと嬉しかったな」

突然の言葉にヨシユアは驚く

「ヨシユアってさ。いつも一人で溜め込むじゃない。苦しい時も、悩んでいる時も…………平気そうな顔をしながら一人で解決しようとするのよね。それって…………家族としては寂しいよ」

「……………エステル、僕は……………」

「でも今日は、自分をさらけ出して弱い部分を見せてくれたじゃない。少しはあたしのことを頼りにしてくれたんでしょ？だから、ちょっと嬉しいんだ」

「……そうかい……それじゃあ、おやすみエステル……それからありがとう」

「どういたしまして。おやすみヨシユア」

そうして夜が明けていった

シエラザード（これからはシエラと表記）

「イクスの」

イクス

「蒼空キセマテリアル！」

シエラ

「今回は前回イクスの鍋でダウンしたエステルの代わりに私がアシスタントさせてもらうわ。ちなみにヨシユアはエステルの看病をしてるわ」

イクス

「あらら〜そこまでキツかったのか。ま、それはさておき質問行くぜ！HN『漆黒の牙』さんからの質問で『今回の質問 イクスって

料理のレシピをどうやって入手していますか？あと蒼空の軌跡関係ないけど、SCとthirdのゼムリアストーン製の武器は1周目は誰の作って装備しましたか？自分は、SCはヨシユアとクローゼで、thirdはヨシユアとクローゼとリシャルとアガットです』だとさ。シエラ姉さん、このクローゼやリシャル、アガットって誰ですか？」

シエラ

「他は知らないけどアガットは同業者よ。二つ目の質問は風花はSCはエステルとヨシユア、THIRDはヨシユア、リース、リシャル、ケビンらしいわ。まったく知らない人がいるけど」

イクス

「きつとこれから出るキャラだな。それから二つ目は俺は大抵自分で考案したり雑誌に載っている物のレシピを覚えたり……あとは精々親父の土産で貰うレシピかな？それじゃあ、次HN『ガイア』さんから『風花さん質問です。』

魔獣を捕らえるのに苦労しましたか？ 自分はしました。結構イライラしました。

あとエステル達の装備は、何ですか？』です。シエラ姉さんよろしくお願いします」

シエラ

「しょうがないわね。まず一つ目は確かに苦労したらしいわ。何でも暗くてよく分からなかったらしいわ。二つ目の質問はエステルは武器に白木の杖、防具にレザーベスト、スパイク。ヨシユアは防具が同じで武器はダーク」

イクス

「俺は改良型白木の杖、布の着物、皮の草履だな。すべて俺特製だ

ぜ
」

シエラ

「あんたはホント我を貫くわね……さて、今回はここまでね」

イクス

「おう、それじゃあまたな！」

序章 く父、旅立つ memory…?

序章 父、旅立つ memory…?

翌日

エステル達はパーゼル一家に見送られていた

「ありがとう。今回は本当に助かったよ。それと、悪かったね。中途半端な結果にしてしまつて」

フランツがお礼と謝罪の言葉を告げる
ヨシユアは笑いながら首を横に振つた

「気にしないでください。色々と勉強させてもらいました。また困つたことがあつたら遊撃士協会に連絡してください」

「是非、そうさせてもらつよ」

「エステル、ヨシユア、イクス。今度は仕事抜きに遊びに来てね」

「また泊まりがけでおいで。ご馳走させてもらつからさ」

ティオとハンナの言葉にエステル達は笑顔で頷く

「ありがとう、ティオ、おばさん」

「必ずお邪魔させてもらいます」

「今度は俺が作りますよ」

その言葉でエステル達はパーゼル農園を後にした

ミルヒ街道に出たエステル達はロレントに向けて歩いていった

「さてと、ギルドに戻ろうか。今回の報告をしてから次の仕事を紹介してもらおう」

「おう、がってんだ。次もこの調子で行くわよっ！」

「エステル、はりきり過ぎて滑るなよ」

イクスがエステルをやんわり諫めながら言った

ロレントに戻ると3人は真っ直ぐギルドに向かった
ギルドに戻るとアイナが笑顔で迎えてくれた

「ご苦労さま。農園での仕事、うまく行った？」

「うん、色々あったけど……」

「一応、報告しておきます」

そうしてヨシユアが農園での出来事を報告した

「なるほど。魔獣を逃がしてあげたのね。少し甘いと思うけど……それは不問としておきましょう」

「え、いいの？」

「嬉しいけど何故ですか？」

エステルとイクスが驚いて聞き返す

「遊撃士の使命は人を守り、正義を貫くこと……だけど守り方は色々だし、正義も星の数だけ存在するわ。それを見極めるのもあなたたちの仕事ってわけ」

「なるほど……ずいぶん奥が深いんですね」

ヨシユアが真剣に頷く

「まあ、魔獣退治だけじゃなくて国家間の争いも調停する組織だから。上位ランクの遊撃士だと戦闘力以上に、総合的な判断力と柔軟な問題解決能力が要求されるのよ」

「判断力と……問題解決能力、ねえ……」

「ひよええ〜……一流への道は険しそうだわ」

エステルがため息を吐きながら言う

それを見たアイナは励ますように笑いかけた

「ふふ、日々精進あるのみよ。さてと……次の仕事をお願いしよう

かしら」

「待ってました！どーんと来いってもんよ。」

「相変わらず切り替え早っ！」

「うるさいわね。それで、今度も魔獣退治系？」

「いいえ、物品運搬の仕事よ。依頼主は、何とクラウド市長」

アイナが紙を見ながら告げると3人は驚いた

「えっ、市長さんからの？」

「これまた驚いたな。最近の依頼主は驚かすのが得意なのか？」

イクス、それは違う。たまたまだ

「いいんですか？僕たちに任せてしまって」

「簡単な仕事だと聞いているわ。まあ、詳しい仕事内容は市長さんから伺ってちょうだい」

「了解しました。それじゃあエステル、ヨシユア行こうぜ」

「うん」

「それでは失礼します」

アイナにそれぞれ挨拶するとクラウド市長の自宅に向かった

市長の家はロレントの中央通りを東に進むとある大きい質素な家だ
エステル達は一応ノックをしてから中におじやました

「さてと……市長さん、いるかしら？」

「忙しい人だからどこかに出かけてるかもな」

「いや、そうでもないみたいだね」

ヨシユアがそう言った時、階段から声が聞こえてきた

「おお……エステル君とヨシユア君とイクス君か」

階段の上を見ると白髪に柔和な表情を浮かべた老人がいた。彼がこの
ロレントの市長、クラウスだ

「あっ、市長さん」

「お邪魔します。今日は遊撃士協会から来ました」

「うむ、話しは聞いておるよ。カシウスさんの代わりに仕事を引き
受けてくれるそうじゃな？」

「うん、そのつもりだけど……」

途端、エステルが申し訳なさそうに謝る

「ごめんね、市長さん。父さんがいい加減な約束して」

「いやいや。カシウスさんほどの人であれば多忙を極めるのは当然じゃろう。それより……こんな所で話をするのもなんだな。詳しい話は書齋でさせてもらおうよ」

そう言つて3人を自分の書齋へ案内した

「……頼みといつてもそんな難しい事じゃあないんだ。正直、ギルドに頼むのも厚かましいとは思つたんだがね。なかなか手が空かないものでな。つい頼んでしまつたんじゃ」

「なるほどね。それじゃあ、その頼み運搬つて聞いたけど實際何を運べばいいんだ？」

イクスが手帳を取り出しながら尋ねる

「うむ、北のマルガ鉱山から七耀石セプチウムの結晶をここに届けて欲しいのじゃ」

「セプチウムつていうと……あたしたちが良く手に入れる『セピス』と同じものよね？」

「正確には、宝石にするほど大きくない七耀石セプチウムの欠片をセピスつていうんだ」

「んでこのセピスを精製・加工したものが俺たちが持っているオーブメントに付ける結晶回路クォーツになるわけだ」

「なるほど……なんとなく理解できたかも」

エステルの疑問が解消されたのでクラウドスが話を戻した

「昔から、マルガ鉱山ではそのセプチウムエスメラスの一種である翠耀石エスメラスが採れるんじゃないが……大きな結晶が採掘されたので鉱山長に保管してもらっておるのさ」

「その結晶を、鉱山長から受け取ってここまで運んでくればいいんですね？」

ヨシユアが簡潔に依頼内容を復唱する
クラウドスは頷きながら言った

「その通りじゃ。どうかな、頼めるかね？」

「宝石の運搬か……魔獣退治とは違って別の意味で緊張しそうだけど……」

「ま、やってみる価値はあるな。」

「うん。そうね」

イクスとエステルの言葉にクラウドスは一瞬で嬉しそうな表情になった

「ありがたい。それではこれを持っていつてもらおうかの」

そう言つてエステルに渡したのは市長の紹介状だった

「それを見せれば鉱山の中に通してくれるじやろ。よろしく頼んだよ」

その言葉に3人は頷きマルガ鉱山に向かった

エステル

「イクスの……」

イクス

「蒼空キセマテリアル！つて元気ないな。どうした？」

エステル

「アンタの暗闇鍋《覚悟》のせいに決まってるでしょ！」

イクス

「それは当たりを引いたエステルが悪いんじゃない……わっ、ごめん！だからスタッフをこっちに向けるな！」

エステル

「もう……それじゃあ質問行くわよHN『漆黒の牙』さん。『質問は、今回畑荒らしをどうやってボコボコにしたんですか？

そつえば自分は一回で畑荒らしを捕獲してあいつらの技に笑つたな。死んだふりって』うん、あたしたちも実際見たわけじゃないな

いけど……どうなのイクス」

イクス

「知りたいのか？」

エステル

「ええ」

イクス

「ほ・ん・と・う・に？」

エステル

「……ごめんなさい、『漆黒の牙』さん。イクスが怖すぎるので、想像に任せるわ」

イクス

「世の中知らないことがあっても大丈夫だ。さて今回はこれだけだ。誰か質問してこねえかな？」

エステル

「いつも書いてくれている『漆黒の牙』さんに失礼よ。質問をくれるだけでもありがたいんだから我慢しなさいよ」

イクス

「こうなりゃ、風花脅して質問増やさせるか」

エステル

「やめえいつー!!」

序章 く父、旅立つ
memory...? (後書き)

少し遅くなりました
すみません

序章 く父、旅立つ memory…?

序章 父、旅立つ memory…?

エステル達は以前来た時通った道とは反対の道を通りマルガ鉱山に進んだ

マルガ鉱山に到着し中に入ろうとすると側で立っていた鉱員のラングに止められた

「よう、ここはマルガ鉱山だ。関係者以外は遠慮してもらおうか」

「ふっふーん、関係者だもんね」

「ロレントのクラウド市長に頼まれて七耀石の結晶を受け取りに来ました」

「ま、これが市長の紹介状だ。確認してくれ」

イクスがそう言うとエステルが市長の紹介状を見せた
ラングも納得したようだ

「ふーん、なるほどなあ。そういうことなら話は別だ。悪いが、中に入って親方に直接聞いてくれないか？俺は、ここで番をしてるからよ」

「いいけど……親方って？あたしたち鉱山長に会いに来ただけけど」

エステルの疑問にラングは笑いながら答えてあげた

「へへ、その鉱山長つてのが俺たち鉱員を束ねるガートン親方よ。七耀石の鉱脈を発見するのが三度のメシよりも好きな穴掘だ。今日も地下の坑道に潜ってると思っぜ」

「わかりました。それでは捜してみます」

「あれ？そっぴや、地下に降りるってどうすりゃいいんだ？」

「ああ、そりゃエレベーターを使って……あ、そっだ。君にこれを貸しておくよ」

ラングがそう言ってイクスにカギを渡した

「これはエレベーターを起動させるのに必要のカギだ。暫く貸してあげるよ」

「サンキュー、鉱員さん。後で返すわ」

お礼を済ますとエステル達は中に入っていった
導力駆動のトロッコを使い奥に進みエレベーターに乗り地下に降りていった

地下に降りても近くには誰もいなかった。皆、作業に熱中しているのだろっ

エステル達は少し奥に進んでみる事にした

「しっかし広いな。親方どこにいるんだ？」

「うーん……結構奥まで来たしもしかしたらあの人かも知れないわね」

「そんじゃ、聞いてみるか」

イクスがそう言って採掘に熱中していた1人の男性に声をかけた。男性は呼ばれるとすぐに振り向いた

「おや、嬢ちゃんたちは……」

「あなたが鉱山長さん？良かった、やっと見つけたわ」

「遊撃士協会の者です。クラウド市長の代理として来ました」

「はい、これが証拠の紹介状だ」

イクスが市長の紹介状を親方に渡した

「ほお、なるほどねえ。お前さんたちが遊撃士か。若いのに大したモンじゃないか」

「えへへ、それほどでも。それで……結晶はどこにあるの？」

「ああ、ちよいと待ってくれ」

親方は腰に提げていた鍵付きの箱を取り出すと鍵を外し始めた

「なにぶん、滅多にお目にかかれない貴重なシロモノだからなあ。

肌身離さず保管しているわけさ。……よし、開いた」

箱を開き親方は大粒の結晶を取り出した
結晶からは淡く翠の光が零れていた
エステルも驚きながら結晶を見つめる

「うわ〜っ……こんな大きな結晶、見たことないわ」

「すごい……内部から光が弾けているみたいだ」

「これが翠耀石エスメラスの結晶……」

ヨシユアとイクスも少なからず驚いているようだった

「そう。これがセプチウムの1つ——風力を秘めた翠耀石エスメラスの結晶だ。これだけ大きいと宝石としての価値は莫大なものになる」

そう言うと結晶をエステルに渡した

「間違いなく市長さんに届けてくれよ」

「う、うん……」

エステルは慎重に受け取ったがあまりの美しさに見とれていた

「はあああ〜……キレイ……妖精を持つてるみたいな感じね〜……」

エステルは何かを思い付いたのか結晶を持ったまま円を描くように歩いてみた。零れた光が歩いた所に軌跡を描く

「あはっ、面白〜い！見て見て、ヨシユア、イクス！」

「確かに綺麗だけど……」

「はい、ストップ。落としたら不味いからそこまでな」

ヨシユアとイクスはたしなめるようにエステルを注意した
エステルはゆっくりと止まると立っていた場所まで戻った

「ちえっ、張り合いがないんだから」

呟きながらもエステルは腰のポーチに結晶をしまった

「これでよしっ……それじゃあ親方さん。間違いなく市長さんに
届けるわね」

「おう、よろしく頼んだぜ……ん……？」

「どっしたの？」

エステルが聞くと親方は顎に手をやりながら答えた

「……………妙だな。空気が変わりやがった……………」

「空気の流れ…………？」

エステルは首を傾げたがヨシユアとイクスだけは違った

「（この匂いは…………）」

「これは……」

その時、

「んなつー!!」

「きゃあっ!?!」

「……………」

「……っ……………」

突然、大きな揺れが発生した

親方は驚き、エステルは叫び声をあげ、ヨシユアとイクスは驚かす
ただ立っていた
暫くすると揺れは収まった

「お、収まったみたいね……今のって、ひよっとして地震?」

「いや……坑道のどこかで崩落が起きたらしい。地盤の緩い場所に
ブチ当たったか?こりゃあ、被害状況を確認しないと……」

その時、ヨシユアとイクスが突然飛び出し得物を振るった

「え?」

エステルは驚きの声をあげる。すぐにそれは確認できた
ヨシユア達の足下には蟹のような魔獣、キラークャンサーが倒れて
いた

「ど、どうして魔獣が……親方さん、ここって魔獣とか出るの？」

「で、出るには出るがこんな奥に出たのは始めてだ！」

親方は驚きながら答える

「魔獣はセプチウムの輝きに惹きつけられる性質がある……だから、今までにも入口近くに迷い込んで来ることはあったが……」

「ひょつとしたら……さっきの崩落で、坑道の一部が魔獣の巣に繋がったのかもしれない」

冷静なヨシユアの判断にエステルはまた驚く

「ま、魔獣の巣ですって〜!？」

「考えられない事じゃないわな……」

「こ、こりゃいかん。作業している連中を脱出させねえと！」

親方は急いで向かおうとするがそれをイクスが止めた

「待ちな。俺達も手伝うぜ」

「な、なにい!？」

「今、ヨシユアと俺が仕留めたがそれほど強くない。だが一般人であるアンタにはキツイぜ」

「それに一刻を争うんだもの。遠慮しないで」

イクスとエステルの言葉に親方は感動し頭を垂れた

「すまん……力を貸してくれ」

「よし、それじゃあ僕とエステルが前を行くからイクスは後ろを頼む」

「任せろ！」

エステル達は親方を守りながら他の鉱員を探し始めた。鉱員の数は4人

エステル

「イクスの」

イクス

「蒼空キセマテリアル！」

エステル

「はい、始まったわね蒼空マテ」

イクス

「何だよ、不満そうだな」

エステル

「べつにつに。それじゃあ質問いくわよ。HN『ガイア』さんから
『質問は、エステル達は、町の外に出たら、イベント以外の戦闘しているんですか?』ええ。戦闘はするわね。ティオの家から戻るときにも襲われたし」

イクス

「そついやあ、なんか天使みたいなぶによつとした魔獣がいたけど何だったんだろつな。ま、いいか。それじゃあ次。HN『漆黒の牙』さんから『質問は、ちよつと気になつたんですけど、掲示板の依頼はどうしてますか?』これもさつきと似たような質問だな。書いてはいないが実際はちよつかり受けてんだよ俺達」

エステル

「確か最近受けたのは……キノコ狩りや兵士との訓練ね。それじゃあ最後の質問。HN『空牙刹那』さんから『脅されました!いくつか質問します。』

「イクスが好きな食べ物(料理)はなんですか?」

「イクスが嫌いな食べ物(料理)はなんですか?」

「イクスが得意な料理は何ですか?(作れるやつ)」

「イクスは何故、エステルと同じスタッフを使っているのでしょうか?」

やはり、戦術や戦力と言つた面、イクスの戦闘スタイルにあつている

からでしょうか?しかし、やはりほかの武器でもよかつたのではないのでしょうか?

例えば…槍とか?何故、スタッフにした理由も教えてください

「エステルさんに質問ですが、イクスのことをどう思っているの」

でしょうか？

釘は刺しますが、ノーコメは俺版「スコシ、アタマヒヤソウカ」
が待っております」

では、じかにきたいしております』です……って長いわ！」

イクス

「良いじゃねえか。サンキュー、空牙刹那。さて、質問の答えだな

1、俺が好きな料理はブライト家の食事だ。なんかあつたけえ

2、嫌いな食べ物は……シエラ姉さんの酒だな

3、これは以前答えたが得意料理は暗闇鍋《覚悟》だ

4、確かに他の武器も使えるがスタッフだけは俺の“もう一つ武器”
と適しているからな。これにしたんだ

それから“もう一つの武器”については触れないでくれ

5、はエステル、頼む」

エステル

「え？別に仲の良い家族で姉弟だけど？」

イクス

「だそうだ。それじゃあ、今回はここまでだな」

エステル

「ええ。次回もいつになるか解らないけど中途半端で終わるつもり
はないからね」

イクス

「それじゃあな！」

序章 く父、旅立つ memory…?

序章 父、旅立つ memory…?

「こ、こつちに来るんじゃないっ！おらぁ自慢じゃねえがスジが多いから美味くなんかねえぞ！」

「オ、オイラだってマズいぞっ！脂肪がプヨプヨだから喰ったら健康に悪いんだからなっ！」

ある場所で作業していた鉱員の所にも蟹の様な魔獣、キラーキャンサーは現れていた

もちろん、そんな言い訳が魔獣に通用するわけなくジリジリ、ジリジリ追い詰められていた

後、一歩でキラーキャンサーが襲い掛かろうとしたその時、

「『エアストライク』！」

「『ソウルブラー』！」

空気の塊と黒い時の波動がキラーキャンサーを襲った

呆気なく倒れ、残ったキラーキャンサーは先の一撃に恐れ、逃げ出した
が、

「悪いな。逃げられると後が面倒なんだ。すっつ……『白虎撃』！」

そのイクスの一撃に絶命した

そのイクスの後ろには親方がいた。親方はイクスから許可を得ると

急いで鉱員の下に向かった

「大丈夫か？ポonz、ティント！」

「親方！た、助かった〜……」

「ふええ〜、もう2度とご飯が食べられなくなるところだったあ…
…」

「安心してないで脱出しろ！グズグズしていたら仲良く魔獣の腹
ん中行きだぞ！」

安心しきっている鉱員、ポonzとティントに親方は怒鳴り先に脱出
させた

「後、2人だな」

「ああ。頼むぞ！」

エステル達が作業する場所を探していると声が聞こえてきた。何や
ら祈っている様子だ

「おお、女神エイドスよ……我らにどうか救いの手を……」

「バ、バカ野郎っ！神頼みしてるヒマがあつたらちつたあ追っ払う
のを手伝いやがれ！」

急いで向かってみると3匹のキラークャンサーに囲まれながら祈っている鉱員とそこら辺の石ころなどを使って何とか追い払おうとしている鉱員がいた

「何やってんのよ！はああああ！『金剛撃』！」

エステルが呆れながらも2匹のキラークャンサーを一度の攻撃で倒し、残りはヨシユアが、

「『双連撃』……」

で倒した

辺りを確認し、他に魔獣がない事を確かめるとヨシユアが鉱員に話しかけた

「ケガはありませんか？」

「だ、大丈夫だ……君たちのおかげで助かったよ。うーん、これもエイドスのお導きだね」

「全くめでたい奴だぜ……女神が導いてくれるんだったらそもそもこんな目に遭わないっつーの」

「き、君のような不信心者がいるから不幸な事故が起きるんじゃないか！」

「あんだと〜！？」

言い争いが始まりそうだったので何とかイクスが止めて地下から脱出させた

「これで全員ですか？」

ヨシユアが尋ねると親方は頷いた

「よし、なら俺達もさっさと脱出するぞ」

イクスの言葉に全員が頷きエレベーターを指した
後少してエレベーターのある所に着くと思ったその時

「ひいひいっ！こゝ、こんなつもりじゃ……助けてえ〜〜〜っ
！」

逆の方から声が聞こえた

これには親方も驚いた

「なんだと！まだ残っていやがったのか！？」

「早く助けに行かなくちゃ！」

そう言って向かった先にいたのは4匹のキラークャンサーに囲まれていた、いかにも見習いの鉱員がいた

「くそっ！『ファイアボルト』！」

イクスが火球を撃ち出した

しかしキラークャンサー達はそれをなんなくかわしてエステル達に襲い掛かってきた

「こいつら……さっきのと比べて強い！？」

「焦らないで、エステル、イクス。さっきより強くても倒せない訳じゃない！慎重に確実に倒していこう。『双連撃』！」

ヨシユアは冷静にキラークャンサーと間合いを詰めたり取ったりしながら1匹を仕留めた

エステルも1匹、仕留めたが近くにあった煙が湧いている空洞から2匹、キラークャンサーが現れた

「彼処から来てるのか！なら彼処が魔獣の巣だな？」

「うん。だけど僕たちじゃ、中に入るのは無理だ」

「じゃあ、どうするのよ！このままじゃずっと終わらないじゃない！」

叫びながらも更に3匹倒したがまた5匹、巣から現れた

「（このままじゃ、拉致があかねえ……何かないか？なにか……待てよ……そうか！）エステル！！」

「な、何？」

「お前が持つてる結晶を出せ！」

「イクス？……あなた、まさかそれを囿に！？」

「残念ながら不正解だっ！早く寄越せ。それからアーツでも何でもいいからその魔獣供、あんに吹き飛ばせ！」

イクスの考えが分からないまま、エステルは結晶をイクスに渡し、ヨシユアと協力して全ての魔獣を巢に吹き飛ばした

イクスはそれを確認すると後ろ手に結晶を持ちもう片手を前に出した

「結晶つつーことは要はセピスの集まりみたいな物だろ？ならそれで魔獣を倒すんじゃないやあなく……」

イクスの手に風が集まる

「入り口を塞げばイける！『エアストライク改』！」

イクスがアーツを発動し、先ほど発動した空気の塊よりも大きい塊を空洞の上部にぶつけた

ぶつかった箇所から崩れ始め暫くすると入り口のほとんどを埋め尽くした

「た、助かったぜ……」

「安心して、もう大丈夫だからね。遊撃士ブレイサーの手にかかれば魔獣の5匹や10匹、軽いもんだわ」

エステルが安心させるように言ったが逆に見習いは驚いていた

「ブ、ブレイサーあ！？どうしてこんなところに……」

「おや、お前さんは……たしか昨日入った新入りだったな。どうして地下に掘りに来てるんだ？」

親方が聞くと見習いはしどろもどろしながら答えた

「そ、それが……少しでも先輩がたの仕事ぶりを見学しようと思っ
たんですよ……そしたら、いきなり壁が崩れて向こうの方から魔獣
がドバーツと！」

「やはりあつちが魔獣の巣に繋がったのか……兄ちゃんの推測通り
だったみてえだな」

「ええ……」

ヨシユアは慎重に頷いた

「そ、それじゃあ俺はこれでっ！」

そう言い切る前にピューツと走って行ってしまった

「すごい逃げ足……よっぽど恐かったみたいね」

「……そうだね」

「……うん」

「あれ？イクス、どうしたのよ」

イクスの返事が一言だった為、エステルは聞いてみた

「いや……アーツの無理矢理発動は、身体に堪えるなと思ってな。
EPがもう無え」

「それじゃあ、僕たちも早く上に登ろうか」

ヨシユアの提案に全員、賛成し急いで上に登った

上に登ると上で作業をしていた者を含めた鉱員がいた

「親方、大丈夫ですか!？」

「ひええ〜っ、よく無事だったなあ!」

「この嬢ちゃんたちのおかげだよ。ところで、全員揃っているな？」

親方が辺りを見渡して聞く

「へい、全員いますぜ。さっき、見習いのヤツが慌てて走り去っていききましたが……よっぽど恐かったんだなあ、あいつ」

鉱員の1人が先ほどのエステルと同じ言葉を言う

「そうか……こんな事で挫けなきゃいいんだが……とにかく、地下にはまだ魔獣が残っている可能性が高え。安全の確認が取れるまでエレベーターは使っんじゃないぞ」

鉱員は頷き、地下には行かず地上で掘り始めた

親方は色々とやらなければいけないようになったのでエステル達と一言一言話し、仕事に戻った

エステル達はそれを見た後、その場を後にした

その頃、鉱山の入り口に1人の鉱員が出てきた。先ほど、走り去って行った見習いだった

「まったくんだ誤算だぜ……魔獣は湧き出してくるわ、遊撃士は出張ってくるわ。はあ、仕方ねえ……正直に報告するしかなさそうだな」

そんな事を呟くと見習いは鉱山を後にした

エステル

「イクスの」

イクス

「蒼空キセマテリアル!」

エステル

「はい、始まったわね、蒼空キセ」

イクス

「ま、これは風花が疲れてようが寝ていようが関係ねえコーナーだからな。幾らでもやれるぜ」

エステル

「へえ〜……そういえば、今回、オリジナルの技を出したわね。確か……」

イクス

「『エアストライク改』だろ？」

エステル

「そうそう、それ。効果とか書かないの？」

イクス

「普段、使えねえアーツだから教えたって……まあ、いつか。下に書いてみたぜ」

エアストライク改

必要属性値

風×1

風結晶・翠耀石×1
エスマラス

エアストライクよりも濃密に圧縮された空気の塊を撃ち出すアーツ
欠点は身体に負担が掛かる事と、使いすぎると結晶が壊れてしまう事

イクス

「元々、無理矢理発動したからな。このアーツの登場はこれが最初で最後だ」

エステル

「ちなみに風花は新たなオリジナルアーツを考えているみたいよ。もしかしたら募集をかけるかもしれないわ。その時はよろしく頼むわ。それじゃあ、質問に入るわね。HN『ガイア』さんから『民間人をどう守りながら戦うのか楽しみです

質問は、セピスをいくつ持っているのですか？

よく使うアーツ、クラフトは、何ですか？

次も期待しています！」

イクス

「セピスの数かー……ひい、ふう、みい、よお………」

エステル

「今、イクスが数えているから先に2つ目の質問に答えるわ。あたしたちはアーツは、火、風、時を多様するわ。戦技は、あたしは『金剛撃』、ヨシユアは『双連撃』、イクスが『白虎撃』よ。……イクス。数え終わった？」

イクス

「ああ……こんな感じになった

火、 1 2 5

水、 4 8

土、 9 3

風、 1 6 1

時、 2 5

幻、 1 8

空、 1 0

だった。やっぱり少なえな」

エステル

「そう……………」

イクス

「……………」

エステル

「……………」

イクス

「あれ？終わり？」

エステル

「うん」

イクス

「あらら〜……………今回は少ないな。ま、仕方ない。今回はここまでだ」

エステル

「面白い質問、待ってるわよ〜」

序章 く父、旅立つ memory…?

序章 父、旅立つ memory…?

マルガ鉱山を出たエステル達は結晶を持っているせいかいつもより多くの魔獣に襲われたが何とか切り抜けロレントに戻った
エステル達は真っ直ぐクラウス市長の自宅に向かった

「なるほど……あの時計台にはそんな逸話が。わたくし、とても感動しましたわ」

「戦争の悲惨さを語るのはたやすい。大切なのは、哀しみを乗り越えて平和を築こうとする強さだと思っのじゃ」

エステル達が書斎に入ると市長は制服の少女と話をしていた。今は出直した方が良くかなと思っ時、市長がこちらに気付いた

「……………おや？」

「こんにちはは、市長さん。例の品を届けに来ただけ……………えっと、お邪魔だったかな？」

「おお、エステル君たちが。邪魔なんて事があるもんかね。ちょうどいい、紹介しよう」

市長はエステル達に笑顔を向けると向かいの席に座っていた少女を

紹介した

「こちらはジヨゼット君。ジェニス王立学園の学生さんじゃ」

「ジェニス王立学園……」

「聞いたことがあります。ルーアン地方にある全寮制の高等教育学校ですね」

「ええ、その通りですわ。お初にお目にかかります。ジヨゼット・ハールと申します」

制服の少女、ジヨゼットが挨拶するにつられてエステル達も挨拶を返す

「あたしはエステル。よろしくね、ジヨゼットさん」

「ヨシユアです、よろしく」

「……イクスだ」

「実はこの3人、ブレイサーでう。個人的なことで仕事をお願いしていたところなんじゃ」

「ブレイサー！？あの、いかなる権力にも屈しない平和を愛する誇り高き自由騎士！？」

ジヨゼットは物凄く驚き、感動した口調で聞いた

「ああつ、感動ですわ！本物の遊撃士に巡り合えるなんて！」

「そ、そんなに感激されるとくすぐったくなっちゃうわね……と」
「……あ、ジヨゼットって呼んでいい？」

「ええ、そう呼んでくださいな」

ジヨゼットが了承するとエステルはお礼を言いながら話を続けた

「ジヨゼットはどうしてここに？市長さんと知り合いなの？」

「いえ、お目にかかったのは今日が初めてですわ。わたくし、自由研究の一環として各地の重要文化財を調べているんです。それで、お忙しいとは思ったのですが市長にお話を聞かせていただくこうと……」

「……ふーん、勉強熱心なこった。こりゃ、邪魔だな」

イクスは普段と違って変わったようにぶっきらぼうに喋る
エステルは少し気になったがあえて聞かなかった

「いえいえ。もう充分お話は伺いましたから。それより……わたくしの方がお邪魔でしょうか？」

「いやいや、そんなことはないよ。エステル君、せつかくの機会じやから例の品を彼女にも見せてくれないかね？」

「あ、うん。イクス、あれを出してよ」

「……………」

「イクス？」

「いや、何でもない。ほい」

イクスは机の上に風の結晶、エスメラス翠耀石を慎重に置いた
それを見た途端、ジヨゼットはまた驚きの声をあげた

「まあ……！それはセプチウムですわね。なんて素晴らしい輝きかしら……」

「うむ。見事な大きさじゃ。まさにロレント市民全員の感謝を表すにふさわしい贈り物じゃ」

「贈り物？」

「感謝を表すにふさわしい……」

エステルは首を傾げたがヨシユアにはピンと来たようだ

「なるほど、生誕祭の贈り物ですね？」

「鋭いのう、ヨシユア君。そう、これを使ったオーブメント細工をアリシア女王陛下に贈るつもりじゃ。60歳におなりになる陛下へのロレント市民の感謝のしるしとしてな」

「ええっ、女王様への贈り物!？」

「まあ、素晴らしいですわ!」

エステルは驚き、ジヨゼットは口に手を当てながら驚いていた

「我々リベール国民は、女王陛下にいつも世話になっておるからなあ。定期飛行船が簡単に利用できるのも王家が援助してくれておかげじゃ」

「リベール国内の遊撃士協会も王家の援助を受けていると聞きます。確かに……色々な形でお世話になっていますね」

「うわ〜っ！それってなんかすごい！」

エステルはそう言うと2人の方を向いた

「ねえヨシユア、イクス、どうしよう！？あたしたち、女王様への贈り物をこの手で運んじやっただよ!?」

「あまつさえ、思いつきり振り回してたもんね」

「んで、無理矢理アーツも発動させちまったし」

「あ、バラしちゃだめだつてば！」

ヨシユアの告白にエステルはあたふたする

「くすくす……」

「はは、エステル君らしいのう」

「も、もう……まあ、いいや。それじゃあ市長さん。間違いなく渡しておくわね」

エステルの言葉に市長は頷き机の上に置いた結晶を持った

「うむ、確かに受け取った。それでは謹んで……」

市長は立ち上がると書斎の奥にあった金庫に結晶をしまい、ダイヤルでロックした

「……これでよしと。後はメルダース工房でこれを使ったオーブメント細工を仕上げてもらうだけじゃな。今から仕上がりを楽しみじやのう」

「あ、ずるい市長さん！完成したら、あたしにも見せてね？」

「ああ、残念ですわ……この目で確かめられないなんて。でも今日は、お話に加えて素敵なものを見せていただきました。もう、お礼の言葉もありませんわ」

ジヨゼットは残念そうに告げる

「いやいや。これくらい市長の務めじゃよ」

「本当にありがとうございます。それでは……わたくしはこれで失礼いたします」

「あ、待って。ついだからあたしたちも失礼しちゃうわ」

「そうだね。市長、それでは失礼します」

「また何かあれば、遊撃士協会に連絡してくれよ」

ヨシユアとイクスも挨拶する

「うむ。お世話になったのう」

そう言われて4人は外に出ていった

「それじゃあ、明日にはもう定期船で帰っちゃうんだ？」

「ええ、そうなんですの。すぐに学校も始まってしまいますし」

「なるほど、学校の休みを利用して調べに来てたんだね」

「あーあ、残念だな。せっかく仲良くなれそうだったのに。また会えるといいね？」

エステルは残念そうに言う。ジヨゼットも頷く

「はい……わたくしもそう願っております。それではご機嫌よう。エステルさん。ヨシユアさん。イクスさん」

ジヨゼットは頭を下げると歩いて市長宅を出ていった

「やー、いい子だったわねー良い所のお嬢さんっぽいのにそれを鼻にかけたところがないし」

「……………うん……………」

「……………」

エステルの言葉に頷くところだったがヨシユアは弱々しく、イクスは黙って目を鋭くしていた

「ヨシユア？イクス？あれれ〜ひよつとして〜今みたいなのがタイプだったり？」

「えっ…………？」

「……………は？」

2人は呆気にとられてから慌てて否定した

「な、なに変なこと言ってるのさ！」

「お前、物凄い事言うな！」

「あせってる、あせってる やー、お姉さん驚いちゃったな。ヨシユア君とイクス君の好みがお嬢様タイプだったなんてね〜今度会う時まで、気の利いた口説き文句を用意しとかなきゃね」

はしゃぐエステルを他所にヨシユアとイクスはため息を吐き出す

「フン、勝手に盛り上がってなよ。まったく、人の気も知らないで……………」

「仕方ねえよ、ヨシユア。こいつが気づくのは多分ねえよ」

「フォローになってないよ、イクス……………まあ、確かにね」

「え……何か言った？」

エステルはよく聞こえなかったのもう一度尋ねるが2人は声を揃えて言った

「……なんでもない（ねえよ）」

そこで話を打ち切り、ギルドに戻って行った

エステルは終始、首を傾げていたという

行く間にヨシユアとイクスはエステルに聞こえない声量で話していた

「（どう、思うよ、ヨシユア）」

「（ジョゼットの事だね。……まだ何にも言えないな）」

「（そうか……）」

イクスは少し考える仕草をした

「（ヨシユアでも分からないか……なら……導力銃の匂いがしたのは気のせいだったのか？）」

風花

「私の」

バキツ！

イクス

「俺のだ！蒼空キセマテリアル！大体、何でエステルじゃなくて作者のお前がアシスタントなんだよ！？」

風花

「エステルちゃんに今回、替わってもらいました。今回は質問が1つも無いので私から色々発表したいと思います」

イクス

「待て。今、質問が1つも無いって言ったか？」

風花

「うん」

イクス

「何でだよ！」

風花

「ぶっふぶー！君だからだよ」

イクス

「変な笑い方すんじゃないよ、『白虎撃』！」

風花

「作者ガード！」

イクス

「なら、直接揉みしだいてやらああああ!!」

風花

「きゃーっ!?!」

ケンカが終わるまで暫しお待ちください

……

……

……

イクス

「はあっ、はあっ……それで?……発表って何を発表すんだよ」

風花

「はあっ、はあっ、はあっ、はあっ……実は……これから無期限と
いう位の長さで二つ応募しようと思っているんだ」

イクス

「応募……なにをだ?」

風花

「1つ目は、アーツの募集。2つ目はこの蒼空キセに出演できる募
集」

イクス

「何だよ。質問コーナーからゲストとトークに変わんのかよ」

風花

「ま、そこところはイクスに任せた」

イクス

「適当だなあ。まあ、いいぜ。それじゃ、今回はこれで」

蒼空キセ終了後

風花

「イクス。さつさとカーネリア書くなら出しなよ」

イクス

「はいはい。気が向いたらな」

序章 く父、旅立つ memory…? (後書き)

アーツは完全に好きなように考えて下さい
多少変わるかも知れませんが

キャラ募集は出来る限り自分が書いている小説のキャラにしてください
さい

それでは

序章 く父、旅立つ memory…?

序章 父、旅立つ memory…?

エステル達はギルドに戻った

ギルドは相変わらずアイナ以外おらず（リッジはいるのかいないのかわからない）掲示板にも依頼が張り出されていた。半分ほどはエステル達が引き受け、達成していたが
まずエステル達はアイナに話しかけた

「ご苦労さま。鉱山では大変だったみたいね」

「え、何で知ってるの？」

「鉱山から連絡があったのよ。あなたたちにはとても感謝していたわ。そのあたりも含めて報告をよろしくお願いするわね」

「はい、それでは」

ヨシユアが大まかに鉱山で起こった事を報告した

「ふふ……期待以上の仕事をしてくれたわね。突発的な事故に対処するのもブレイサーとしての使命の1つよ。その点ではイクスのアーツ発動は正解ね」

「どもっ」

イクスは突然褒められて驚いたが必要最低限の挨拶にしておいた

「これからも頼むわね」

「うん、どーんと任せてね」

「まあ、エステルの場合は頼まれなくても首を突っ込むけどね」

「はははっ、言えるわなそりゃ」

「そうそう……」

エステルは得意気に頷いていたが褒められていない事に気づくとヨシユアとイクスの方を向いてツツコミを入れた

「って、人のことをお節介魔みたいに言わないでよ！」

「「みたいも何も、ズバリそのもの（だし）（じゃねえか）」

さすがに2人同時に言われるとへこみそうだな

「お人好しと、野次馬根性と直情的性格のなせるワザだろうね」

「むしろ技って言うよりスキルだな」

さらなる追い討ちにエステルは首を落としながら尋ねてみる

「……ヨシユア、イクス、最近なんかツツコミが激しくない？」

「気のせいじゃないの？」

「むしろ、エステルのボケ（鈍感）が成長してんだろ？」

「ほらほら、ケンカしないの。最後の仕事を紹介するわよ」

アイナの言葉に一応言い合いを止めてアイナを見た

「《リベール通信》って知ってる？あそこの取材に協力して欲しいのよ」

「えっ、それって……この前買ったあの雑誌じゃない」

「これだろ？」

イクスはポーチから丸めた雑誌を取り出した。確かにリベール通信と書いてある

「へっ、面白い偶然もあるもんねえ」

「取材協力というと……具体的に何をすればいいんですか？」

「危険な場所に取材に行くから腕の立つ案内人が欲しいそうよ。詳しくは本人たちから聞いてみて。雑誌社の記者とカメラマンが《ホテル＝ロレント》に滞在中だから。あ、これはギルドの紹介状ね」

アイナに場所を教えてもらい、紹介状をヨシユアが受け取った

「それじゃあ、早速ホテルを訪ねてみよっか？」

「そうだね、行ってみよう」

「そんじゃ、アイナさん。行ってきやーす」

「ええ、気をつけてね」

その言葉に見送られエステル達はホテル「ロレント」に向かった

エステル達はホテルに着くと経営者のヴィーノに場所を聞いた
2人共ホテルにはおらず記者は酒場にいると言われたのでエステル
達は酒場に向かった

ここの酒場はエステル達の幼馴染みの1人であるエリツサの両親が
経営している店である

そこに広いわけではないので普段見かけない人物を見つけるのは簡
単だったのでカウンターに座っていた濃い緑の髪に不精髭を生やし
た男性に話しかけた

「すみませーん」

「あん、何だお前さんたちは？」

「あなた、ひょっとして……《リベル通信》の記者さん？」

エステルが訪ねるとやさぐれた雰囲気を一層濃くした

「その通りだが……なんで知ってやがるんだ？オレは人を取材する
のは好きだが人から詮索されるのは嫌いでね。どついう用件だ、い
つたい？」

「遊撃士協会から来ました。護衛の依頼をされたようですね？」

「おお、ようやく来たか！ホント待ちくたびれちゃったぜ。それで……」

不精髭の男性はキョロキョロ辺りを見渡した。誰かを探している様
みたいだ。だいたい察しがつくが

「カシウス・ブライトはどこだよ？」

「それなんだけどさあ……あのバカ、別の仕事が入っちゃったんだ
よ。んで、ロレントを離れたし……」

「な、なんだとお！？せつかくだから噂の遊撃士に取材してやろう
と思ったのに……ちつくしょう……アテが外れちゃったじゃねえか
！」

不精髭の男性が悔しそうに呟く
エステルは笑顔で慰める

「よく判らないけど……まあ、そんなに悲観しないでよ。あたした
ちがしっかりと代わりを務めさせてもらうから」

「ち、仕方ねえな……今回はそれで手を打つか………いま、
なんて言った？」

「？ 『そんなに悲観しないでよ』？」

「そうじゃねえ！ 『代わりを務めさせてもらう』だ！どっいつこと
だ、そりゃあ」

「だから、あたしたちが代理のブレイサーなんだけど。あ、これ紹介状ね」

エステルはさも普通に喋りヨシユアから紹介状を受け取りそれを渡した

不精髭の男性はげんなりしたように言う

「おいおい、冗談キツイぜ……お前らみたいなガキがブレイサーだつていうのかよ？」

「ガ、ガキですつてえ？乙女に向かってなんて言い草よ！」

「なーにが乙女だ。色気のねえ格好をしゃがって。悔しかったらスカートでも穿いて年頃の娘らしくしてみやがれ」

「これは棒術用の服装なの！スカートだと見えちゃうでしょ！」

エステルがぶつぶつ言っている時、イクスがコソコソ男性に近づき耳打ちをした

「旦那、エステルに娘らしくしろと言っても無理な話だぜ」

「？ なんでだ？」

「だってあいつ、まな板な」

「『金剛撃』……！」

「ぎゃああああ……！」

イクスは最後まで言う前にエステルは絶妙な棒術に叩き潰された

「何言ってるのよ、変態イクス！」

「だ、だって本当の『金剛撃』連打アアアア！」ぎゃああああ
あ！！ミンチになるうううう！！！」

まだ何か言おうとしたイクスにさらに怒涛の振り下ろしをかけるエステル

そんな2人を呆気に見ていた男性にヨシユアが話しかける

「とにかく記者さん。僕たちがブレイサーでギルドから派遣されたのは確かです。他の人を紹介してもいいですけどその場合、いつになるか判りませんよ？」

「ま、まあ、これ以上、締め切りは伸ばせねえし……背に腹は替えられねえか。頼むぜ」

「よろしくお願いします。僕はヨシユアといいます。あつちで棒を振るってる女の子がエステル。潰れてカエルのような声を出しているのがイクスヴェリア、通称イクスです。あなたは？」

ヨシユアが隣に座りながら自分達の名前を言い男性の名前も訪ねる

「ナイアル・バーンズ。《リベール通信》きつての敏腕記者だ。…

……ところであいつらは放って置いていいのか？」

ナイアルがチラリとエステル達の方を見た

さっきの状況に理由を聞いたエリツサが加わり「最低よあんた！」
と言いながらイクスを踏みつけていた

「イクスなら死ぬことはないので大丈夫ですよ」

ヨシユアは笑顔で言いきって飲み物を頼んでいた

風花

「イクスの蒼空キセマテリアル。今回は、私、風花とヨシユアでお送りしたいと思います」

ヨシユア

「ちなみにイクスは未だにエステルに痛め付けられていますので気にしないで下さい」

風花

「って言うか、本当に大丈夫なの？死なない？」

ヨシユア

「大丈夫ですよ。以前もエステルの裸を見て半殺しにあったけど完治、1週間だったから」

風花

「そうですね。……さて、アーツ募集ですが大変、多くのNEWSアーツが集まっています。こんなに送って下さってありがとうございます」

ヨシユア

「アーツ募集は、まだまだ続けますので皆さん、どしどし応募下さい。それでは、最後に質問に答えていきたいと思えます。HN『ガイア』さんから『質問は、導力銃は匂いがあるんですか？ するならどんな匂いですか？』……確か、導力銃自体は匂いなんか出ないと思うけど、多分、多少の硝煙の匂いだと思います」

風花

「少し無茶振りし過ぎましたか……それでは最後の質問です。HN『漆黒の牙』さんから『質問は、現在所持しているセピスの数はどうなってますか？あと、前の質問の時よりどれだけレベルが上がりましたか？』

質問は頑張つて考えます。（今回質問が無かったから少し申し訳なくて。）後、イクス達にアイテムを送ります。（食材全種類50個づつと、回復アイテム全種類（FC効果）25個づつと、闘魂ベルトと闘魂八チマキを各5個）使うかわらないかはそちらの判断に任せます。それでは、また。』先に道具の感謝を。ありがとうございます。きつと、食材はイクスが喜びます。一つ目の質問は以前と変わらず

火、 1 2 5
水、 4 8
土、 9 3
風、 1 6 1
時、 2 5
幻、 1 8
空、 1 0

という感じになります。二つ目の質問は3LV位だと思います」

ヨシユア

「質問も終わりましたし、僕はそろそろエステルを止めに行きます。それでは」

風花

「それでは、今回はこの辺で失礼します」

序章 く父、旅立つ memory:?

序章 父、旅立つ memory:?

《リベール通信》の記者、ナイアルはカメラマンがまだ工房から戻ってないと言ったので迎えついでにメルダース工房に足を運んだ。エステル達が工房に入ると濃い桃色の髪をした眼鏡の女性が情けない声を上げていた

「ああ、どうかそれだけはっ！どんな事でもしますからカメラだけは返してください！命よりも大切なものなんですっ！」

「こ、困ったなあ……なあ親父、どうしたらいい？」

「お前が受けた仕事だ。自分でケリをつけるんだな」

そんなメルダースの言葉にフライデイも情けない声を上げた。エステルは首を捻りながら「何か揉めてるわね」と言いヨシユアはナイアルに「ひよつとして、あの人が？」と聞き、ナイアルは思いつきり間を置いて「まあな」と呟き、イクスはアーツで身体の回復を試みていた。ていうかものすごく酷いな。ナイアルは眼鏡の女性に近づくと怒鳴った

「こら、ドロシー！いつまで待たせやがるんだ!？」

ドロシーと呼ばれた女性は驚きながら振り向いた

「ああ、ナイアル先輩！いいところに来てくれましたあ！うっ、どうか助けてくださいっ！」

「今度は何をやらかした？無駄遣いして、カメラの修理代が足りなくなっただんじゃねえだろうな？」

ドロシーの泣き寝入りにため息を吐きながら予想を聞いてみるとドロシーはまた驚いた

「わ、びっくりですう！どうして分かるんですか？先輩、ひよつとして超能力者！？」

「同じことを繰り返されればアホでも分かるに決まってるだろ！」

まるで漫才コンビを見ている様だ

その様子を見てフライデイがナイアルに声を掛ける

「お客さん、この人の関係者？それじゃあ悪いけど修理代、立て替えてくれますかね？」

「仕方ねえ……経費で落とさせてもらっせ。いくらだ？」

「ええと……カメラと飾り時計の修理でしめて2000ミラですね」

これにはナイアルも驚いた

「ちょっと待て！カメラはともかく……その飾り時計ってのはなんだ？」

「あの、修理してもらっている間店内を見学させてもらったんですよ。で、キレイな置き時計があったんで手にとって見てみたら壊しちゃって……でもでも、よかったあ。それも経費で落とせるなん

て〜」

「……経費に入るかつ?!?!」

ドロシーののんびりとした言葉にナイアルはともかくフライデイ、イクスもツッコんでしまった

その後、ナイアルは泣く泣く自腹で修理代を払いドロシーと共にエステル達の下に戻った

「あれ先輩、この子たちは？」

ドロシーの疑問にナイアルは簡単に答える

「護衛兼、案内役のブレイサーだ。予約していたカシウス・ブライトの代理だよ」

「わっ、こんな若い子たちが……」

驚くドロシーにエステル達は自己紹介をする

「あたしはエステル、よろしくね」

「僕はヨシユアといいます」

「やっと治った……ん、ああ、俺はイクスだ、よろしく」

「エステルちゃんにヨシユア君、それとイクス君か。若いけど頼もしい感じだねえ。わたし、ドロシー・ハイアット。《リベール通信》に入ったばかりの新人カメラマンなの〜。目下、ナイアル先輩の下で鍛えてもらっている最中でーす」

ドロシーの自己紹介にナイアルはため息を吐きながら「何で俺が……あのヒゲ編集長め」と愚痴っていた
だが煙草の煙を吐くと

「それじゃあ、メンツも揃ったことだしとつと取材に向かうとするか」

と言った

「目的地は《翡翠の塔》ですね」

「それじゃあ、レッツ・ゴー！」

エステルのそんな掛け声にドロシーは「おーっ！」と、イクスは「……おー……」と疲れた声で言って5人で翡翠の塔に向かった

翡翠の塔に着いたエステル達は疲れていた。それはもう、ヘトヘトにそれには理由がある。それは、

「何で花と勘違いして、リリームーパーに近づいちゃうのドロシーさん!？」

と言ったドロシーの天然の行動によって、だった
ちなみにリリームーパーとは花みたいな姿をした魔獣である
だが当の本人は、

「わぁ……けっこう高い建物ですねえ。これって、何階建てなのか

なあ？」

「無視して質問かよ！」

天然質問をしていた

質問については呼吸を整えたエステルが答えた

「……うーん、この前は2階までしか行かなかったから……でも、規模からいって5〜6階くらいじゃないかしら？」

「5階建てのはずだよ。ウチにある資料に書いてあった。かなり前に調査されたけどその後、放置されたみたいだ」

「……確か、他の地方にも似たような塔があるって聞いたことがあるな」

エステルの答えにヨシユアがフォローをいれ、イクスはうる覚えの事を言ってみる

「ああ、その通りだ。ポース、ルーアン、ツァイスにも同じ様式の塔が建っているらしい。なんでも、リベール王国が建造された時代のものらしいぜ」

それについてはナイアルが補足しておいた

「へー、そうだったの。歴史のロマンを感じちゃうわね」

「それを伝えるのが今回の仕事だ」

ナイアルはそこでドロシーを見ると、「ローアングルで何枚か撮れ」

と言い、ドロシーは「は〜い!」と言って少し塔から遠ざかる。エ
ステル達も撮影の邪魔にならないように移動する

「さあ……行くわよ」

真面目な雰囲気になるとドロシーは押し黙りレンズを覗いた

「……………」

「(す、すごい気迫……カメラを持つと性格が変わる?)」

「(さすがプロだね…………)」

ヨシユアも誉める
だが、

……………

……………

……………

「すか〜っ…………ZZZ…………」
寝ていた

「…………いや、寝てる(の)(の)かよ()んですか(!?)」「」

これには3人同時に、ヨシユアでさえもツツコんでしまった
もちろん、その後、ナイアルがドロシーを殴り起こしいつもの様に

撮らせた。それはまるで人を撮っている様だったので3人はこう思った

……ドロシーさんのキャラが分からない

と

蒼空そうら語り 終

イクス

「はい、タイトル題名変わって始まりました蒼空語り。この蒼空語りは後書きを書くのがめんどくさいという作者に代わって俺が喋ったり、読者の質問に答えていくコーナーだ」

エステル

「……結局、蒼空キセマテリアルと同じってことでしょ？あ、遅れただけのアシスタントを勤めるエステルよ。よろしくね」

イクス

「気にすんなって。それより今回は超天然キャラが登場したな」

エステル

「そうね、ドロシーさんでしょ？あんなキャラは初めて見たわ」

イクス

「ま、天然だけならエステルも一部同じだな。さてと……これ以上喋るとネタバレになるからそろそろ質問コーナーに移ろうか」

エステル

「ネタバレって、先に読む人なんているのかしら？ ま、いいや。それじゃあ、今回最初で最後の質問はHN『漆黒の牙』さんから」
イクス：あれは言っちゃ駄目だろ。次から気をつけたほうがいいぞ。次は翡翠の塔か。自分はあるところ以外の塔は中で道に迷ったな」。

質問は、現在所持しているレシピは何種類ですか？ ……イクス、また後で頭、冷やそうか」

イクス

「事実だ「黙ろうか？」…質問の答えはそうだな…自分で独自に開発したり、リノンさんのばあちゃんから教わったり、親父の土産だったりだから…30種類くらいはあるかな？」

エステル

「はい、質問は以上よ。最後は以前から出しているnewアーツを少し発表したいと思うわ。はい、それじゃあ、どうぞ」

漆黒の牙さん作

フォルテ改：火：EP40：味方単体：STR+50%：火7・

風5・空4・幻2

クレスト改：地：EP40：味方単体：DEF+50%地7・水

5・空4・幻2

セイント改：幻：EP80：味方単体：幻8・地5・火5・水4・

風4・空4

ダークレイン：時：EP60：中円・地点指定：ダメージ+即死

20%：時10・空6・幻4

バーニングクロス：火：EP30：中円・対象指定：ダメージ＋
気絶50%とSTR-40%：火11・風5・空5

切裂 刃さん作

アーツの合体

ファイアボルト＋エアストライク⇨ファイアストライク

イクス

「いやー、良い案ばつかじゃねえか」

エステル

「作者が今、何を考えているかあたしには分からないけど、確かこの章では切裂 刃さんの案、合体アーツを出すらしいわ。最初から使うことの出来るアーツだからね」

イクス

「まだ、アーツはあるけどその発表はまたにするわ。それじゃあ、今回はこの辺で」

イクス・エステル

「蒼空語り、完」

序章 く父、旅立つ memory…? (後書き)

楽しんで頂けたでしょうか

後語りは書いていきますがこの後書きも多少は書きます

最近は暑さのせいで夏バテになってしまったり部活で怪我をするなど様々な不幸が押し寄せて来ました。こ、これは神の試練なのか！
?と思うほんです(笑)

まあ、そんなわけ無いんですが

現在私は執筆する時間が限られており最低で一週間、最悪で二週間は掛かってしまうかもしれません。ですが途中で止めるつもりだけはありませんのでこれからどうぞかよろしくお願いします

それでは

序章 く父、旅立つ memory:?

序章 父、旅立つ memory:?

エステル達は外の写真もほどほどにして中に入った

中は以前と全く変わらず魔獣の巣になっている。どうにか勝手に行こうとするドロシーを押しさえ進んで行った

「『ファイアボルト』！」

イクスは火球を発動し魔獣を倒す。斜め後ろにいたエステルとヨシユアも同じように戦技クラフトやアーツを使い魔獣をナイアルとドロシーに近づかせない

そんな調子でエステル達は屋上に着いた

「まぶし……」

エステルはいきなり太陽の下に出たので手で顔を隠しながら眩いた。太陽に慣れてくると手を下ろし笑顔になった

「やっと屋上に到着したわね」

「うわー、いい景色ですねえ！」

「ほお、こりゃ驚いた。予想以上にいい絵が撮れそうだな」

ドロシーとナイアルは屋上から見える景色に驚いている
ナイアルは少しすると視線を変えた

「そして、あつちが例のブツか……」

その言葉に全員がナイアルの視線の先を見るとそこには円形状の機械が置かれていた

「？ なんだあれ」

「なんか、オーブメント仕掛けのどっかいお釜って感じですねえ」

イクスは首を傾げドロシーは見たまんまの感じを告げる

「資料によるとどうやら古代の装置らしいぜ。使用目的は判っていないらしいがな」

「ふーん……ねえ、ヨシユア。こんな物があるって知ってた？」

エステルは聞いてみるがヨシユアは答えず武器を構えながら目を鋭くした

「……隠れても無駄です。出てきた方が身のためですよ？」

「へっ……」

「……っ！」

ヨシユアの言葉にエステルは驚いたように声を出し、イクスは急いで武器を構えた

「で、出て行きます！ 今すぐ出て行きますからっ！」

だが予想に反し隠れていた人物は慌てて姿を表した
青い髪をオールバックにした眼鏡の男性だった

「な、なにこのヒト……」

相変わらず武器を構えず呆けているエステル

「なんと、先客がいたのかよ」

「うわあ、びっくり。ヨシユア君、よく気付いたねえ」

ナイアルとドロシーも驚いている

「……あなたは……」

ヨシユアは武器を納め訪ねてみる。イクスも構えを解く
男性は慌てながらペコペコ頭を下げる

「すみません、ごめんなさいっ！ 手持ちのミラは全部あげますか
らどうか命だけは助けてくださいっ！」

その言葉にエステルは飽きた。ただの一言でここまで慌てる人は
見たことがないと思うくらい
実際初めて見た

「ちょっとオジサン……盗賊か何かと勘違いしないでよ。この紋章
を見れば分かるでしょ？」

エステルは襟からギルドの紋章を外し男性に見せた
それを見た男性はやっと落ち着いた

「おお、それは遊撃士協会の……ひょっとして……君たちはブレイサーですか？」

「えへへ、その通りよ。あたしは、エステル。こっちの銀髪がイクスで黒髪がヨシユア」

「で、俺たちは《リベル通信》の記者だ。この塔の取材をするためにこいつらに護衛をしてもらっている」

2人が自己紹介すると眼鏡の男性は安堵のため息を吐きながら前まで出てくる

「はあ〜っ。もう、驚かさなくてくださいよ……。こんな場所に入り込んでくるから怪しい人達と思ったじゃないですか」

「「そういう（あなた）（あんた）も、充分、怪しいと（思いますけど）（おもっただけど）……」」

安堵感のボケ（？）にヨシユアとイクスが同時にツツコミを入れる

「いったい何者なんですか？」

「これは申し遅れました。私、考古学者のアルバと言います。古代文明の研究のためにこの塔を調べに来たんですよ」

「たった1人で？ よくここまで無事でしたねえ」

ドロシーの驚きと疑問の混じった感想にアルバ教授は頭をポリポリ掻きながら答える

「いや、ははは。遺跡調査は慣れていきますからね。魔獣から逃げ回る足腰には自信があるんです。……さすがに今回は死にそうな目に遭いましたけど」

「む、無茶苦茶な学者さんね」

「しかし、考古学者ってことはこの塔の由来には詳しいのかい？」

「まあ、人並み以上には……。調査を始めたばかりなので判っていない事も多いのですが」

ナイアルの質問にアルバ教授は持っている資料を見ながら答える

「それでもいい。何か面白そうな話はないか？ 記事のネタにさせてもらうぜ」

やはりナイアル、根っからの記者だ。使える物は何だって使うどこか無理矢理な所があるが

「ふむ、そうですね……」

アルバ教授は資料をペラペラめくりながら考え、考えがまとまると資料を閉じて話始めた

「皆さんは《セプト》「テリオン」という言葉を聞いたことがありますか？」

「それって、教区長さんから教わったことがあるような……」

「《セプトⅡテリオン》……。古代人が女神エイドスから授かったと言われる力を秘めた『七の至宝』……」

イクスが淡々と言う。そこには感情が一切入っていないかった

「ええ、その通りです！ 彼らは、この至宝の力を借りて海と大地と天空を支配したそうです。さらに、生命や時間の神秘すら解き明かしたと伝えられるのですが……。およそ1200年前、謎の災厄によって古代文明が滅びた時、《セプトⅡテリオン》も失われました」

「七しち耀やう教会きやうかいの聖典にも記されている伝説だな。で、それがこの塔とどう関係するんだ？」

「七至宝の1つが、このリベールに眠っているという伝承があるんです。——その名も『輝く環』オリオール」

アルバ教授は少しほんの少しだが眼を開きながら言った
まるで、自分の物の様に
だがエステルはそれに気付かずにはいた
精々、気付いたのは……イクスとヨシユアだけだろうか？

「『輝く環』オリオール……。なんだか不思議な響きの言葉ね」

「その伝承が本当ならばリベール最古であるこの塔に何か手がかりがあると睨みましてね。それで調査に来たわけなんですよ」

既に眼を笑顔のように戻したアルバ教授はそれで話を閉めた

「はー、夢のあるお話ですねえ」

「そうでしょう!?! 古代のロマンを感じますよね!?! いやあ!
判ってくれる人がいて嬉しいなあ!」

ドロシーの言葉を聞いたアルバ教授はテンションがハイになっていた

「それで……手がかりは見つかったんですか?」

「い、今のところは……」

すぐに戻ってしまったが

「その装置の謎が解明されれば何か分かるとは思いますがねえ」

「面白い話だとは思いますが現状では憶測止まりってことか。話しても
らって悪いが記事にするにはイマイチ弱いな」

「そうですか……ガツクシ」

結局、テンションは下がる一方らしい

逆にエステルはナイアルの行動に微妙に驚いていた

「ふーん、意外。案外マジメに記事書いてるのね?」

「不確実なニュースソースを記事にするわけにはいかねえからな。
ゴシップ載せてもヨタは載せねえのが《リベール通信》のポリシー
なんだ。まあいい、予定通りに行くとするか」

そう言うとドロシーにロレント全景を収めた物を数枚と感性の赴く
ままに撮れと言った。ドロシーは笑顔で頷くと屋上をあちこち動き

自分の気に入った所をビシバシ撮っていった

その間、ナイアルは記事をどうまとめるか考え、アルバ教授は高台にある装置を調べて、エステル、ヨシユア、イクスは邪魔にならない場所で景色を眺めていた

「うわ、いい眺めねえ。この高さからだとロレント地方全体が見渡せるわ。これ観光名所にしたら儲かるかもね」

「うん……そうかもね」

「たぶんな……」

2人の生返事にエステルは少し驚いた。普段だったらイクス辺りから「がめついな」。そこまでしてスニーカー欲しいのか「くらいは言われそうなのに」

「どうしたの、2人とも？　なんか、元氣なくない？」

「はは、君はごまかせないな」

「まったくだ。なに、ヨシユアは知らないけど屋上に出てから気分が悪いんだよ」

「……実は僕も同じだ」

「だ、大丈夫なの？」

エステルは心配そうに額とかをペタペタ触ってくる

ヨシユアとイクスは、苦笑しながら大丈夫と言い、見学しておいでよと言った

エステルは最初、渋ったがヨシユアのうまい言葉に仕方無しに頷いて見学に行った
それを見るとイクスはため息を吐きながら手すりにもたれ掛かった。
その顔は若干青い

「大丈夫かい、イクス」

「ああ……。って自分の心配をしる」

「はいはい」

五分後

見学を終えたエステルが戻ってくるのと同時にドロシーも撮影が終わったので町に戻ろうとした

その頃には、ヨシユアとイクスの気分も良くなったので難なく塔を降りていった

原因が分からないまま……

それが分かるのはヨシユアは三ヶ月程、イクスはそれより更に数ヶ月くらい後になる

蒼空語り 終

イクス

「はい、今日は。蒼空語りの時間だ」

エステル

「アシスタントはあたし、エステルが勤めるわ」

イクス

「さて、二話連続で新しいキャラが出たな。その名も考古学者アルバ教授」

エステル

「そうね。なんかいかにもひ弱そうな感じなおじさんよね」

イクス

「それは失礼だろう。……確かに37歳だからおじさんだろうけど」

エステル

「何で知ってんのよ!? あんた、超能力者?」

イクス

「何で風花から教えてもらった情報で超能力者扱いされなくちゃいけないんだ俺は!？」

エステル

「なんだ、タネを持ってたのか……。はあ……」

イクス

「だから何で期待されてんだ!？」

エステル

「もう、うるさいわね。こんな奴ほつといて質問、行きましょ。HN『漆黒の牙』さん。『天然娘ドロシー登場。蒼空ではどうボケをかますか。もうやったか（笑）。確かにリリムーパーは花に見えるけど、動きで分かるんだよね。」

弟の（切裂 刃）考えたアーツがでるのか。どんなアーツになるか楽しみだな。あと、元々はこつちのミスですけどセイント改の効果（STR・DEF+50%）の表記が無いです。一応前に感想でいれてます。（まあ、表記し忘れた自分が悪いんだけど）自分が考えたアーツは使いにくくてすいません。

蒼空マテリアルが改名しましたね。今回質問が少なかつたけど、増えると信じます。

最近、リシャール一人でthe3rdのラスボス撃破しました。しんどかつたけど。セプトクライシス（柱との連携技）はアーツなので、ジエネシックバリアで防御可能です。

今回の質問は、現在の準遊撃士ランクとBPはどのくらいですか。更新速度が遅くなったとしても自分は見ますよ（ETERENALの方も）。

アーツの方は思い浮かんだら投稿します。それでは、また。『毎回質問くれたり先輩作の『リリカルなのはETERENAL』も読んでくれる常連さんね』

イクス

「『漆黒の牙』さん、毎回ありがとうございます！ んで？ 何で質問以外も出してんだ？」

エステル

「風花が必ず一言欄全てを読めよってうるさいから」

イクス

「へんな性格だなあいつ……。質問の答えは遊撃士ランクは現在、

準遊撃士・8級。BPは15だ。それじゃあ最後HN『美空』さんから『それから、質問なんです。』

え、つと、イクスは、『エステル』のことは、家族として好き』
と言っているのですが、ほんとーに家族として、何でしょうか？

すみません、どうしても気になってしまったので……』」

エステル

「何、どゆこと？」

イクス

「気にすんな。簡単に言えば俺はお前の事が家族として、姉として好きだつて事だ」

エステル

「どこか釈然としないけど……まあ、あたしもイクスの事、家族として好きよ」

イクス

「Thank You。それじゃあ時間もきたし終わるか。ヨシユアも誘ってエリッサン所食いに行こうぜ」

エステル

「そうね。それじゃあまたね」

イクス・エステル

「蒼空語り 完」

序章 く父、旅立つ memory…? (後書き)

随分お久しぶりです

やっと見つける事が出来たので急いで投稿します

以前どこかの後書きにも書いたかもしれませんが私は途中で投げ出しはしませんので最後までお楽しみください

それではご機嫌よう

序章 く父、旅立つ memory:???

序章 父、旅立つ memory:???

エステル達は町にローレントローに戻る事ができた。しかしその疲労は行きより溜まっていた

もちろん、その理由は天然娘と遺跡マニアのせいだとは記さなくてもいいだろう

行きはよいよい帰りはこわい、だ

「ーいやあ、助かりました。こんなに安全に遺跡から帰れたのは初めてです。エステル君、ヨシユア君、イクス君。本当に何とお礼を言つてよいやら」

「は、ははは……当然の義務だからな……」

「で、できれば次の調査では最初からブレイサーを雇つて。ホントお願い」

イクスとエステルは汗だくになりながら懇願する

涼しげな風を装っているヨシユアでも内心ではそう思っていた
アルバ教授は気にした風もなく

「はは、財布と相談してみます。それではみなさん……。またどこかで会えるといいですね」

そう言つて立ち去つて行つた

「さてと……。俺たちもここで失礼させてもらうぜ。最初はどうか

と思ったがなかなか良い働きをしてくれたな。一応、礼を言っておこう」

「ふふん、これが実力よ」

無い胸を張るエステルにナイアルはアホと言った

「俺が知ってるブレイサーに較べたらお前なんざヒヨっ子もいいところだ。せいぜい精進するんだな」

「う……肝に銘じておくわ」

「ところでお2人はすぐに雑誌社に戻るんですか？」

ヨシユアが尋ねてみる

「いや、今日1日くらいはロレントでゆっくりするさ。原稿も書かなきゃならねえしな」

「わたしは工房に行つてさっそく現像してきますねー。それじゃ、まったねー！ エステルちゃん、ヨシユア君、イクス君」

そう言つて2人も立ち去つて行つた

ドロシーは近くのテラスで寝ていた猫に目を向けて目を輝かせていたが本当に行くのだろうか？

カシウスの仕事を終え取り敢えずエステル達はギルドに戻ることにした

ギルドに戻るとカウンターにはアイナの他にシエラザードもおり何かを話していた

中に入るとこちらを向いて話し掛けてきた

「あら、エステル、ヨシユア、イクス」

「あれ、シエラ姉？」

「珍しいですね。いつもは飛び回ってるのに」

「先生から引き継いだ仕事がようやく終わったところでね。ちょうど報告をしてたってわけ」

「ということ自分達が受け持った依頼より難しい依頼を自分達より早く終わらせたらしい
こんなところからもシエラザードの力量が自分達より上を行いっている事が伺える」

「シエラ姉も終わったんだ」

「まあ、なんとかね。アイナから聞いたんだけどあんたたちも頑張ったみたいね？ やれやれ、毎日苦労してシゴいた甲斐があったもんだわ」

「あ、あはは……その節は感謝してます」

イクスは乾いた笑いをしながらお礼を言う

エステルも苦笑するとアイナに記者の護衛任務の報告を済ませた

「はい、ご苦労さまでした。どうかしら、シエラザード。なかなか頑張っていると思わない？」

アイナは報告を聞き終わるとシエラザードに聞いてみる
シエラザードは、少し考えると思ったことを口にした

「そうね……。新人にしてはやるわね。でも、ここで満足しちゃダメよ。特にエステル、あんたはすぐ調子に乗るタチなんだから」

「はいはい。……ってイクスはどうなのよシエラ姉!？」

「ああ、イクスは調子に乗る事があるけど最後にはヨシユアみたい
にきつちりこなすからいいのよ」

「そんな〜」

「ははは、勝った」

エステルとイクスのほか騒ぎにヨシユアも苦笑する
アイナもいつも通りの風景に微笑む

「ふふ、エステルとヨシユアとイクスもシエラザードもご苦労さ
までした。カシウスさんの抜けた穴がこんなに早くカバーできるな
んてね。これではらくはのんびり出来るんじゃないかしら?」

「それはそれで少しいくつな気もするけど……」

「街道の巡回や魔獣退治みたいな細かい仕事はちゃんとあるから大
丈夫だよ」

それに退屈なら模擬戦するのも悪くないしねとヨシユアは付け加えた。イクスはヤル気満々らしいだが、

「むふふ……。久しぶりにゆっくりできるわね。よし、今夜は思いつ切り飲むぞお！ エステル、ヨシユア、イクス。あんたたちも付き合いなさいよね」

シエラザードの嬉しそうな言葉にイクスはびくうつと身体を震わせると掲示板に隠れた

エステルとヨシユアは冷や汗を流しながら一步下がった

「え〜っ……。酔っ払ったシエラ姉の相手すんの？」

「あら、エステル。あたしの誘い、断るつもりね？ ふーん、いい度胸してるじゃない。胸は無いのに」

「いくらシエラ姉でも……。むしろシエラ姉に言われたくない！自分だけそんなでかくなっちゃってええええ！！」

エステルは絶叫した後、泣きながらアイナに飛び込んだ。アイナはエステルと同じ貧乳なので同意するかの様にうんうんと頷く

「というかシエラさん、酒癖、悪いですからねえ……。以前なんか人前で脱ごうとしましたし……。目のやり場に困るんだよね」

「シエラザード……。未成年相手に何をしているのよ」

エステルの頭を撫でながらアイナが呆れたように言う。シエラザードは「ただの酒の余興じゃない」とあしらってから鼻を鳴らした

「ふんだ、そんなにイヤならエステルとヨシユアは勘弁してあげるわよ。ただし……」

シエラザードはそこで掲示板の裏に隠れていたイクスを連れ出すと顔を自分の胸に埋めさせた

「ふにゃ……ッ!？」

「2人の分までイクスに付き合ってもらうから」

「え……」

「ちょ、ちよつとお!」

シエラザードの爆弾的発言にヨシユアは情けない声を上げエステルはアイナから離れ叫んだ

「んふふ、イクスってヨシユア程じゃないけどしつかりしてそうで奥手だからね 酒にしても、その他にしてもお姉さんが色々仕込んであげよっか?」

その言葉にエステルとヨシユアは顔を赤くする
イクスは、

「い、いや、シエラ姉さん。以前も酔った勢いで俺に抱きついたまま寝ちゃって朝、半殺しにされちゃいましたからね俺! 断固遠慮しますッ!! っていうか離して下さい」

顔を赤くはしてないものの青くし胸から離れようとした

シエラザードはそんな抵抗何のその、更に己の胸にイクスを埋めた

「なによう、私の胸が嫌なのかしら？」

「男として全力全開で嬉しいですが、すぐに怖くなりました。理由はシエラ姉さんだからです！」

イクスは抜け出そうともがく。もがいているなかよく手が胸にむにむにと当たっていたがシエラザードはさして気にしてない。弟分だからだろう

そんなばか騒ぎをしていた時だった

「た、大変じゃあ！」

そんな声と共にギルドに入ってきた者がいた
誰であろう、クラウド市長だった

蒼空語り 終

エステル

「はい、始めました蒼空語り。今回イクスは、交流戦に行っているからいないわ。代わりに……」

シエラザード

「どうも、エステル達の美貌の先輩、シエラザード・ハーヴェイがアシスタントを勤めるわ」

エステル

「自分で美貌のとか言ってるよシエラ姉……ただの凄腕遊撃士ですよ」

シエラザード

「さあ、どんどん行きましょ。次は質問コーナーね」

エステル

「さくつとスルーされちゃったわ！」

シエラザード

「HN『ガイア』さんから『毎回楽しく読んでいます。』

質問は、依頼がない時は、訓練以外何をしているんですか？

イクスが料理の腕を上げて暗闇鍋の効果は、上がりしましたか。

次も楽しみにしています。』上がるわけないでしょおおおお！

！」

ビリビリビリビリッ！

シエラザードは思いつきり紙を破いた

エステル

「ちよつとシエラ姉っ！？ 何破いてんのおおお！？」

シエラザード

「あの闇鍋が簡単に変わるなら私はアイナよりも酒に強くなってるはずよ！」

エステル

「……暴走してるシエラ姉はほつといて質問に答えるわ。1は街道の周回や街を散歩したり……あ、たまに釣りなんかもするわね。2は……シエラ姉の反応通りよ。まったく上がってないわ」

シエラザード

「うっ、えぐっ……」

エステル

(半泣き状態!?)

シエラザード

「っ、続いての質問はHN『漆黒の牙』さん、からで……ぐすっ」

エステル

「シエ、シエラ姉、後はあたしがするから……えーっと、『質問・戦闘回数、勝利回数、逃走回数は何回ですか。(実はネタ切れ寸前です)』

新アーツ ストームフレア：火・風の複合：EP30：単体：ダメージ+封技10%+気絶10%：火4・風4・空2

複合属性アーツ作ってみました。微妙に使いにくいかも(汗)『戦闘回数は56回くらい、勝利回数も56回よ。結果、逃走回数は零よ。新アーツ、どうもありがとう!』

シエラザード

「……………(泣)」

シエラザードが泣きそうになっている時、

イクス
「たっただいまー」

イクスが帰って来た
それを見た途端シエラザードが動いた

シエラザード

「イクスウウウウー!!」

イクス

「へ……にゃああああつ!?!」

泣き顔のままシエラザードはイクスに近づき、イクスの顔を自分の胸に埋めさせた

エステル

「ちょ、ちょっと、シエラ姉! / / /」

シエラザード

「あんたのせいで、あんたのせいで~~~~!!」

イクス

「な、何がなんだか分からねえっ! こゝこゝは一先ず……エステル!」

エステル

「りよ、了解! せーの、」

イクス・エステル

「蒼空語り 完!」

イクスとエステルは泣き続けるシエラザードを酒で溺れさせた後、
長い長いため息を吐いた

序章 く父、旅立つ memory:?? (後書き)

蒼空語り - - - それはキャラ崩壊が起きる場所……

なんて そんな訳ありません。キャラ崩壊は私の趣味です

ただキャラ崩壊が嫌いな方がいてそんな感想が来ればすぐに止めます

それでは御機嫌よう

序章 く父、旅立つ memory:???

エステル達はシエラザードと共にクラウド市長の家に来ていたそれは先ほどギルドに飛び込んで来たクラウド市長から言われた一言が原因だった(その言葉を聞くのに3分は要した)

『私が家を留守にしている時に家に強盗が入ったらしい』

クラウド市長の話によるとクラウド市長が教会に行っている間に犯行が行われたという

家にいたクラウド市長の妻、ミレーヌ、メイドのリタは無事だった。人に被害が及ばなかったのは不幸中の幸いだったとその時シエラザードが言った

そして現場検証の為、書斎に入った

「うわー、メチャクチャだわ」エステルの第一声はそれだったその言葉通り、部屋の中は本や書類が散乱していた。これを片付けるのは苦労するだろう

「そして……やられたな」

イクスはそう言って金庫に近づいた

金庫も開けられており中にあつた翠耀石が無くなっていた

「そう。……女王陛下に贈るはずだったセプチウムも盗まれてしまったよ。せつかく君たちが運んでくれたのに申し訳ない……」

市長が申し訳なさそうな謝る

「謝ることはないですよ。悪いのは犯人たちなんですから。ところで……他の部屋の様子はどうですか？」

「他の部屋はほとんど荒らされておらんよ。家内たちが押し込められた屋根裏部屋が散らかった程度じゃ」

そこまで聞くとシエラザードが仕事の分担をした

エステル、ヨシユア、イクスの3人は屋敷の内部を調べること
シエラザードはこのままクラウス市長に事情聴取を続行する
そして仕事が始まった

書斎

「さすが市長さん。難しそうな本が一杯あるわね」

「価値の高え稀覯^{きこう}本も並んでいるみたいだからな。ま、犯人は価値を知らなかったのか、あるいは……」

そこでイクスは金庫の方を見た

金庫ではヨシユアがボタンに何かをしている

「ヨシユアは何をしているの？　なんかボタンを集中的に調べてるけど」

「一目見て暗証番号を解読されて開けられたと分かったからな、ヨシユアはそれを調べてんだよ」

「解析なんてできるの？」

エステルは驚きながら尋ねる

イクスは「プロじゃねえと難しいがな……確か簡単な手があったな」と言いエステルがその方法を尋ねた

「いいか。まず特殊なパウダーを気付かれずにボタン全体にまぶしてやる。そいつは吸着性があって微細だから壁に付いてるボタンに付けても落ちにくいし見えにくい。その代わり、青い光に当てると発光するんだ」

「ふんふん。……それで？」

「その状態でじーさんが暗証番号を入力すると仮説をたてるとするか。そうすりゃ、ボタンの上のパウダーが指にくっついてボタンから取れちまう。これで、どのボタンが押されたのか分かるってわけだ」

イクスは机の下にはらまかれた書類などを一つに整理し机に置きながら説明を終えた

ただエステルは一つ疑問が残り本を床に整頓しながら聞いてみた

「ちょっと待って、イクス。それだと順番までは分からなくない？」

「そうでもないんだよ、エステル」

答えたのはヨシユアだった。ヨシユアは倒れた花瓶を見て起こしながら答えた

「指についたパウダーが増えるとボタンから取れる量は減っていく。

つまり発光量の少ない順からボタンを押していけばいいんだ」

数字が重複してたら難しいけどねーと、しめた

「で？ どうだったヨシユア」

「予想は正解。さっきの例えで間違いないと思う」

「やっぱか……。問題は誰が、いつ、どうやって、パウダーをまぶしたかってことだな。ま、大体は予想がつくけど」

一通り書斎の調査が済むとその場を後にした

テラス

犯人が逃走に使った経路は二つある

一つは文字通り玄関から。二つ目はここ、テラスからだ

エステル達は隅々隈無く調査してみると奥の方の手すりに傷があるのを見つけた

まだ新しい

金属製の何かを引っかけたような跡だった

おおよそ、犯人は逃走する時にここから鉤爪ロープか何かを使ったのだろう

それ以外には何も見つからなかったのでエステル達は家の中に戻っていった

別室

とある部屋の一室には二人の女性がベットに座っていた
初老の方がクラウス市長の妻、ミレーヌ。メイド服を着ているのが
リタだ

「ミレーヌおばさん、リタさん、大丈夫？」

エステルが声を掛ける

「ええ、心配はいりませんよ。私たちは乱暴をされたわけじゃありませんからね」

「でも、びつくりですよ！ 私が屋根裏の掃除をしてたらいきなり覆面の男たちが入ってくるんですもん！」

「男たち……。って事は単独犯じゃーないわけだ」

「あの、他に気づいた事がありますか？ 何人ぐらいの集団だったとか……」

イクスは考えヨシユアは質問してみる
ミレーヌとリタは少し考えたと話した

「そうですね……。3、4人だと思いましたが。あ、そういえば1人は背が低かったんですよ。女性だったかもしれませんが」

「ああ、そういえばたしか玄関には鍵がかかっていたはずなのよ。
ウチの人が教会に出掛けて女2人だったから用心のためにね。あの
人達、いったいどこから入って来たのかしらねえ」

どうやら先に見つけたテラスの跡は侵入してきた跡だったらしい
エステル達はお礼を言い次の現場に向かった

屋根裏部屋

あまり整頓されているとは言えないがそれでも足場は大きくとって
あった

「ここでリタさんは捕まったのよね」

「うん。何かしら痕跡が残っていると良いんだけど……」

しばらく床などを探していると床に一枚の葉が落ちていた
よくよく見るとそれはセルベの葉だった

重要な証拠品になること間違いなしだったのでエステル達は回収し
一階に向かった

一階

エステル達は市長から事情聴取しているシェラザードの所に向かう
前にある事を思い出していた

「たしか、犯行当時は鍵がかかっていたって言ってたよね？」

そう玄関である

試しにエステルが扉をガチャガチャやってみた

「鍵も壊れてなさそうね」

「なら、テラスからって事で間違いないな」

それを確認してからエステル達はシエラザードの所に向かった

「あんたたち、何か収穫はあった？」

頷く三人

シエラザードはそれを見ると確認に入った

「それじゃあ、まず、犯人たちが狙ったのは？」

これは間違いなく金庫の中にあったセプチウムだ。重要な書類類は荒らされたがそれだけだった

「犯人たちの規模は？」

リタの証言により男女含めた3、4人のグループ

「どこから侵入したの？」

まず玄関の鍵は壊されず閉まったままだった。その他の場所はまったくと言っていいほど荒らされなかったので金属製の何かを引っかけたような跡があった2階のテラスから侵入したのであろう

「ずばり、今回の犯行に関係すると思われる人物像は？」

これが今までの質問で最も難しい質問と思うかもしれないが実はこれが一番簡単な質問なのだ

一番身近なのがミレーヌとリタなのだが2人は捕まっており除外される

次に怪しいのはロレントの人間だがいつも温厚な彼らがするはずもなく、ましてやそんなセプチウムがあるなんて知らないのだ
なら知っている人間ならどうか？

これもまた線の薄い人ばかりなのだ

市長の家にセプチウムがあるのを知っているのは精々、鉱山員と作る依頼を受けた工房のメルダースくらいだ

鉱山員は先ほど落盤事故があつたので戻るに戻れない。メルダースも盗まなくてもセプチウムは来るのだしましてや自分が細工したセプチウムが女王陛下に渡されるのだ。職人としてこれ程嬉しい事は
そうそう無い

結果、犯人は、

「最近、しかも昨日今日市長宅を訪れた旅行者だ！」

イクスは格好つけながらそう宣言した

「へえ、よく調べたじゃない。これで犯人は特定できそうね」

シエラザードは嬉しそうに言うと真剣な表情になり市長に尋ねた

「市長さん。ここ2、3日の間に初対面の人物を書斎に通した？」

「そ、そうじゃな。何人かいることはいるが……ああ、雑誌社の記

者諸君もそうじゃ」

「なんだ、あの人たちも市長さんを訪ねていたんだ」

記者諸君ということならナイアルとドロシーであろう

なら彼らはエステル達と《翡翠の塔》に行っていたので無実である
一応、訪ねてはいないだろうがアルバ教授も除外だろう

「なるほどね……。市長さん、それ以外には？」

「それ以外というと……。ジヨゼット君しかおらんが。ははは、でも、まさかのう」

「あはは、さすがにあの子が犯人つてのは無理があるよね。何と言つても王立学園の生徒だし」

市長の冗談めいた言葉にエステルもつられて笑ったがそれをイクスが遮った

「残念ながら、エステル。俺はお前を否定する」

「へっ……」

「僕もエステルの意見とは逆だ」

「ヨ、ヨシユアも!？」

2人の言葉に驚くエステル

2人はそのまま喋り出す

「あれは良くできてはいたが……フェイクだ。上手く隠していたが所々、ほつれがあった」

「それにあの時……市長さんがセプチウムを金庫に入れた時。あの子、まるで狩人のような獲物を見る目をしていたんだ。もちろん確証はなかったから問い質せなかったんだけど……。たしか、イクス、何か気になる事があったよね？」

「ああ。俺も確証はなかったから問い質せなかったが……。あいつから導力銃の匂いがしたんだ。あいつは……。ただの女子生徒なんかじゃねえ」

2人の言葉に愕然とするエステル。だが2人は嘘を言ったことがないのだ

「信じられんのう……」

クラウド市長も驚きを隠せないでいた
取り合えずジョゼットから話を聞くためにエステル達はホテルに向かうことにした

ホテル・ロレント

ホテルに着いた3人は真つ先に支配人であるヴィーノを訪ねた
イクスだけは1人単独で別の場所に行ったが
だが、一足遅かったようだ

既にチェックアウトをし出ていったそうだが
エステル達が急いで発着場に向かおうとするとホテルにイクスが入

ってきた

「あ、イクス、どこ行ってきたの？」

「発着場だ。だけど飛行船が遅れていたしアランにも聞いたが見ていないそうだ」

「ということは、飛行船を使わずに街道沿いでロレントに来たのか……。ふむ、困ったわね」

シエラザードは顎に手をやりながら唸る

街道で来たのなら搜索範囲が軽く二倍くらいに膨れ上がったのだ全員が考えこんでいるとエステルがあっ、と声をあげポーチから一枚の葉を取り出した

それは市長宅の屋根裏部屋にあったセルベの葉だった

「コレ、拾ってたのを忘れてたわ。何かの手がかりにならないかな？」

「そっか、それがあつたね。シエラさん、この近くでセルベの木が生えている場所を知りませんか？」

ヨシユアがシエラザードに尋ねる

「セルベの木か……。たしか、ロレントの南にあるミストヴァルトに生えていたわね」

シエラザードが言う

場所は家の逆の道を進んだ先にある

4人は頷き合い、ミストヴァルトに向かった

そこで真実が分かると信じて

蒼空語り 終

イクス

「はい、蒼空語り、始めました。司会は『先輩の戦いを見て興奮して夜も寝れない遊撃士』ことイクスでっす！」

エステル

「何なのよそのキャッチコピーは……えー、『そんなイクスを諦めながら支える義姉』エステルよ」

イクス

「いやーっ、レイン先輩と銀時の戦いは何時思い出しても震えが止まらないぜ。俺も何時かあんな壮絶な戦いをヨシユアとしたいぜ！」

エステル

「はいはい。……それで？ どんなアーツや技を使ったの？」

イクス

「それがアーツなんて使ってないんだよ。魔法や魔術つつったかな？ 技だって今の俺たちじゃ到底歯が立たないだろうな」

エステル

「へえ……。いつか私も会ってみたいわね」

イクス

「俺もだ」

エステル

「それじゃあ、感想もすんだ所で質問コーナー、行くわよ？」

イクス

「どんどこい」

エステル

「最初はHN『ガイア』さんから『質問は、今まで一番よく戦った魔物は、なんですか』

更新楽しみにしています。』一番よく戦ったのは……飛び猫かしら？」

イクス

「かもな。数はいちいち覚えなから曖昧だもんな。それじゃあ、次。HN『漆黒の牙』さんから『質問は、それぞれが現在装備しているクオーツは何ですか。出来ればライン別で。（例：ライン1に と 、ライン2に 、みたいな感じで）』

新アーツ ヘル・テンペスト：時と空の複合属性：EP80：中円の対象指定：ダメージ+気絶30%+DEF・SPD-40%：火2・風2・時7・空7・幻3（ぶつちやけ名前はヘル・ゲートとテンペストフォールを合わせただけ。）』これまた難しい質問がきたな。それから『漆黒の牙』さん。質問はもつと砕けた……：さながら『銀』並みの質問でも構わないと風花は言ってたぜ。ま、票にするとこんな感じだぜ。ちなみに俺はラインが1つしかないから格好よくライン0と呼んでるぜ」

イクス

【ライン0】

攻撃 1

防御 1

行動力 1

妨害 2

精神 1

回避 1

エステル

【ライン1】

攻撃 1

防御 1

回避 1

妨害 1

行動力 1

HP 1

ヨシユア

【ライン1】

行動力 1

防御 1

HP 1

駆動 1

攻撃 1

エステル

「……分かったかしら？ それじゃあ、最後HN『美空』さんから
『こんにちわ

新アーツ

リファインメタル：火：EP15：中円指定地点

ダメージ：火10幻5空2

イクスつって、シエラさんのお気に入りなんですネ……

ご愁傷様です。

あ、質問です。

エステルたちは、ご近所(?)付き合いは
上手くいつているんですか？

リノンさんたちが、あまり出てこないの。『ご近所付き合いは
よくするわよ。ただ最近研修やらなんやらで忙しかったから立ち
話くらいだけだね。あ、そうだ。今日、終わったら久しぶりにスニ
ーカー入っていないかリノンさんとこに行こつと」

イクス

「……エステルはスニーカーマニアだからねえ。それじゃあ早めに
仕上げるか」

エステル

「おう、がってんだ」

イクス・エステル

「蒼空語り 完」

序章 く父、旅立つ memory:fin

普段、エステル達は三又の道をロレント方面と舗装されていない道のブライト家方面しか使わないが今回の目的地、『ミストヴァルト』は王都方面の道に位置するのだ

最近は使っていないがエステルは昔からよく『ミストヴァルト』に虫取をしていたので近道も知っていた

おかげで早く『ミストヴァルト』に着いた

地面にはまだ新しい足跡が複数残っていたので潜伏しているのは間違いないようだ

エステル達はできる限り音を立てずに奥へ、奥へと向かった

東側に彼らがいた。その中にはジョゼットも含まれており手にはセブチウムが収まっていた

エステル達は会話が聞こえる所まで隠れながら進みちようどいい場所でしたと隠れた

「ふっふっふ……。まったくチヨロイもんだよね。あの程度の下準備でこんな極上品が手に入るなんて。これで兄ィたちに自慢できるよ」

ジョゼットは以前とは違う笑みを浮かべながら言う
市長宅での笑みが天使なら今のは悪魔だ

「しかし、お嬢にはビツクリだぜ。いくら制服着てたからってあんな演技ができるなんてよ」

「さすが元・貴族令嬢だねえ」

部下であるフリクスとディノの誉め言葉にジヨゼットは少し苦虫を潰した顔をする

「フンだ……。昔の事はどうだっていいだろ。しかし、この格好をしてりゃ大抵のヤツは騙せるから助かるよ。あの、お人好しの市長といい能天気な女遊撃士といい……あはは、おめでたいヤツら！」

それに合わせて部下も大笑いする

それを見ていたエステルはキレか掛かっていた
何とかイクスとヨシユアが止める

何とかエステルを抑えるとまだ話を続けているジヨゼット達に耳を立てる

「でも、あのガキどもけっこう手強そうでしたぜ？ 鉱山に現れた魔獣をことごとく退治してたし……」

ライルが言う

「鉱山？ ああ、キミが失敗したやつか。成功してたら、ボクがわざわざ猿芝居を打つことなかったのにさ」

「すまん、お嬢……」

「まあ、気にすんな。終わり良ければ全て良しだよ。それにしても……あんな連中が遊撃士とは笑わせてくれるよね。特に、あのノーテンキ女！ ボクのことを毛ほども疑わずに『仲良くなれそう』だつてさ！ あはははは！ 笑いをこらえるのに必死だったよ！」

ジヨゼットの笑いにまたつられて笑い出す部下達
だがそれはもう少し後の方が良かった
何故なら……『白銀の魔王』がそれを聞いていたからだ

「あ、はは……はははははははは！！」

突然の笑い声に慌てて声のした方を見る。そこには笑っているイクスを筆頭に怒りを露にしているエステル。ため息を吐いているヨシユア、真剣な表情で睨むシエラザードが得物を構えて立っていた

「ア、アンタ達は……」

「はは、はははは！ 黙って聞いてりゃあ、能天気だの、おめでたいだの人の姉弟きょうだいを好き放題言うとは……」

そこで俯いていた顔を引き上げて文字どおり、魔王の笑みで一言叫んだ

「頭、冷やす覚悟はできてんだろーな！？」

その言葉にその場にいた全員が戦慄した。マジで怖い

「（イ、イクス……あたしのために怒ってくれるのはありがたいんだけど味方にもダメージを与えないでよ！）」

とエステル

「（……どうやってイクスを止めよう？）」

とヨシユア

「ゆ、遊撃士協会に基づき家宅侵入・器物破損・強盗の疑いであなたたちの身柄を拘束するわよ。……っていつかしたほうが身のためよ?」

と冷や汗をたらだら流しながら告げるシエラザード

部下達は焦っているがジヨゼットだけは服に手を掛けながら叫んだ

「ビ、ビビ、ビビることはないよ! い、いくら遊撃士とはいえしよせんは女子供の集まりさ! ボクたち《カプア一家》の力を骨の髄まで思い知らせてやるんだ!」

そう言つて制服を剥ぎ取る。その下には緑を基調にしたジャケットを着て部下が何処からか取り出した飛行服を羽織つた。そして懐から導力銃を取り出した。やはり隠してたか

「キミたち、やっちゃんいな!」

「がってんだ!」

そう言つてジヨゼットを最後列で突撃してくる

「エステル。お前、あのボクっ子をやれ。部下は俺たちがやる」

「あつたりまえよ!」

イクスの言葉にエステルは満面の笑みで返した

「『ファイアボルト』!」

ジヨゼットが放つアーツをしっかりと避けるとエステルは左から迂回しながらジヨゼットを狙う
イクス達は右から部下達を引き付けながら離す
ちなみに部下の数は八

「くっそお、お嬢から離されちまう!」

「こ、こうなったら……あいつらを早く片付けないと」

「だ、だけどよお……」

思いは一緒に異口同音

「（銀髪がすげえ笑っているのが怖え!!）」

さっきの笑みがトラウマになったらしい

「何、突っ立ってるのよ?」

シエラザードは分かっているながらも尋ね鞭を振るう。それは寸分た
がわず2人の部下に当たる。多分内出血くらいだろう

「ヨシユア、あれやろっぜ」

「かまわないけど……大丈夫なの?」

「へーき、へーき、こいつらの頭を冷やすには十分な威力だ」

「……了解」

イクスとヨシユアは背中合わせになるとアーツを発生させた

「『エアストライク』+……」

「『ソウルブラー』」

「『『エアハンマー』！』」

イクスの不安定な『エアストライク』をヨシユアの『ソウルブラー』が波動で安定させ打ち出すアーツ。それが『エアハンマー』
そしてこれがイクスが以前から考えていた融合アーツ。その名は

『ユニゾンアーツ』

「ア、アーツを合体させ……ぎゃっ!？」

「ラ、ライル! ……ぶぎゃー!」

ユニゾンアーツは驚いている部下2人の顔面に直撃し地に倒した文字どおりハンマーで殴られるくらいなのだ

「さて……エステルはっ」と

イクスが警戒しながらエステルを見る

そこには

「はああああ！」

イクス顔負けの笑顔でスタッフを振るいジョゼットを追い詰めるエステルがいた

「うひゃあっ!?!」

ジョゼットは声を上げながら避け導力銃を撃つ

エステルは楽に避ける

はつきり言つてこの勝負

キレたイクス達を相手にジョゼット達に勝ち目はこれっぽっちも無かった

そしてジョゼットはうまく部下達と合流できたのだがそれは失敗だった

何故なら……

「『ストーンハンマー』+……」

「『ソウルブラー』+……」

「『エアリアル』+……」

「『エアリアル』! 〓……」

エステル、ヨシユア、シエラザード、イクス全員がアーツを合成させまとめて発動する

「『スターダスト』! ……」

エステルの石塊をヨシユアの波動で砕き、その石をシエラザードとイクスの烈風に巻き込みジヨゼット達をも巻き込む
まさに星屑スターダスト……

吹き飛ばされたジヨゼット達は腹からびたん！ と地面に落ちた。
痛そう……

「そ、そんなバカな……」

「ふふん、参ったか　遊撃士を舐めるんじゃないわよ」

「そんじゃま、アレは返してもらっぜ」

イクスはそう言ってジヨゼットからセプチウムの結晶を取り戻した。
あの攻撃でヒビすら入ってない。魔王の手加減は伊達じゃないな

「ああ、ボクの七耀石セプチウム……」

「あந்தのじゃねえ。ロレント市民全員のものだ！」

「まったく図々しいんだから……」

エステルがため息を吐きながら言う「今度はシエラザードがジヨゼット達の前に出た」

「さて、結晶も取り戻したことだし告白タイムと参りましょうか」

先ほどのイクスとエステル程ではないがそれでも笑みを浮かべ鞭を構える

「面白い名前を言ってたわね？　たしか《カプア一家》とか……」

「ギクツ……。さ、さあね、なんのことやら」

「フフ、強情じゃない。そういう子は嫌いじゃないわよ」

シエラザードは言うや否、鞭をジヨゼットの足下、しかもぎりぎりといったところに叩きつけた

「ひゃあッ！ あ、危ないじゃないのさ！」

「口を開くつもりがないなら身体に聞くしかないじゃない？ 大丈夫、優しくしてあ・げ・る・か・ら」

「ひっ……」

ジヨゼットは「近寄るなー、あっちいけー！」と言ってはいるがシエラザードは笑顔のままにじりよる

イクスが『白銀の魔王』ならばシエラザードは『ドSの女王』だろう事実、ロレントの裏サークルではシエラザードにぶたれたくらい罵倒されたくらい 等のドM集団がいるのだからちなみにイクスは、

「ハ、ハハハハ。鞭がー、鞭が来るよー」

と壊れかけていた

エステルとヨシユアはそんな2人を見て小声でボソツと

「ー絶対、楽しんでるよ、このドS女王……」

と呟いた
その時、

「シエラさん、あぶない！」

ヨシユアが叫ぶ

シエラザードはその言葉に疑問を抱かず、真横に飛んだ瞬間、シエラザードがいた辺りに銃弾が叩き込まれた

「オィバルカノン導力砲だと!?!」

復活したイクスがスタッフを構えながら警戒する
どんな敵がと辺りを見るとなんと――

「ひ、飛行艇!?!」

緑を基調とした高速飛行艇だった

「あはは、形勢逆転だねっ！」

ジヨゼットは笑うと部下と共に飛行艇に近づいた
飛行艇の上部から同じような髪色に服装をした青年が現れる

「ジヨゼット、大丈夫か!?!」

「キール兄! ずいぶん遅かったじゃないか! まあいいや、早く加勢してよ!」

キール兄と呼ばれた青年はその言葉に首を横に振り早口で捲し立てた

「いや、ロレント進出はお預けだ。お前がいない時にボースで面倒な事が起きたんだ」

「め、面倒なこと？」

「いいから早く乗りな！ グズグズしてると置いてくぞ」

キールは一方的に話を打ち切り艇内に戻った

ジヨゼットは苦虫を潰したような顔を見ると急いで足に乗った

「ま、待ちなさいよ、こらあー！」

「勝負はおあずけだ！ これで勝ったと思わないでよ！ いずれ決着をつけてやるからね！」

悪人らしい捨て台詞を吐くとジヨゼットを乗せて飛行艇は飛び立っていった

それを4人はなす術なく見ていた

「参ったわね……。まさかあんなモノまで出してくるとは。あはは、一本取られちゃった」

「笑い事じゃないってば！ うっっ、くやしいよっ！..！」

「いいだろ。元々の目的はセプチウムなんだし」

イクスが息を吐きながら警戒を解き言う

「それにしても……彼らは空賊だったみたいですね」

ヨシユアは神妙な赴きで言う
空賊とは文字どおり空の賊だ
海賊の領分が海、山賊の領分が陸、そして空賊は空

「ええ、間違いなそうね。どうやら、ボース地方を根城にしてる連中みたいだけど……まさかロレントみたいな田舎に出張してくるとは思わなかったわ」

「空賊だろうが山賊だろうが海賊だろうがどうだっていいわよ！」
エステルはムスツとした表情を崩さず空に向かって叫んだ

「あの生意気ボクっ子、今度会ったらギタギタのパーにしてやるんだからー！」

「ギタギタのパーって……」

「どうせならボコメキヨのダーだ！」

「ボコメキヨのダーって何だよイクス……」

こうして市長邸から強奪されたセプチウムの結晶は無事に取り戻された
結晶を市長に返したエステル達は事件の報告をするためにギルドに戻った

「大変なことがあったわね。まさか空賊が現れるなんて……逃がしてしまったのも無理はないわ」

アイナも神妙な顔で報告を聞いた

「いや、今回はあたしのミスだわ。もっと用心してしかけるべきだった。まだまだ先生の域には遠いわね……」

「シエラ姉さんの責任じゃねえよ。俺があそこで笑っちゃったからだ」

「あたしも頭に血が上っていたわ……」

「……僕も迂闊でした」

3人が同様に言うなかシエラザードはそれには反対した

「いや、あんた達はよくやったわ。市長邸の現場検証も完璧だったしね。そうね……アイナ、推薦してもいいんじゃない？」

「そうね、私もそう思います」

アイナはシエラザードの問いに頷いた。エステルは首を傾げる

「推薦？」

「どついつことですか？」

「まずはこれを受け取ってちょうだい」

アイナはエステル達、3人にそれぞれ羊皮紙を手渡した

そこには『正遊撃士の推薦状』と書かれていた

「こ、これって……」

「今のあなたたちは準遊撃士。つまり見習いみたいなものね。正遊撃士になるためには王国にある全ての地方支部で推薦を受ける必要があるの。これはここ、ロレント支部の推薦状よ」

これには驚く3人

「い、いいの？ そんなもの貰っちゃって……」

「正遊撃士になるにはそれなりの実績を上げる必要があるって聞きましたけど……」

「俺たち、つい先日遊撃士になったばかりなんですよ？」

「代理の仕事と今回の活躍。実績としては充分だと思っわ。……ただし、あくまでロレント地方での実績だけだね」

アイナの説明にシエラザードがつけ足しする

「他の各支部でも実績を上げて推薦をもらう必要があるってわけ。ボース、ルーアン、ツァイス。そして王都グランセル……。まだまだ道のりは長いわよ」

茶化すような言い方だったがエステルはとても嬉しそうだった

「でもでも、すっごく嬉しい！ 一生懸命やった甲斐があったわ！
ねえ、ヨシユア、イクス、こうなったら他の地方にも行くっきゃ

ないよね!」

「はは、言うと思った」

「俺たちは賛成だが、勝手には決められねえな」

「うん。父さんが帰ったら相談してみよう」

ヨシユアとイクスの言葉にエステルは頷いた
とその時、

ジリリリリン! ジリリリリン!

壁に掛けてあった通信器が音をたてた
アイナが出る

「はい、こちら遊撃士協会。リベール王国・ロレント支部です。あ
ら、ご無沙汰しております……」

どうやら知っている者からの連絡らしい
だが直ぐにその顔は真剣なものになった

「……………本当ですか? そ、それは……………大変な事になりました
ねー…ええ、確かに先日から出張で出かけておりますが……………」

そして数秒の沈黙のあと、

「なんですって!?!」

叫んでいた

「し、失礼しました。にわかには信じられません……ええ、わかりました。家族には私から伝えておきます。……大丈夫です。本人たちも遊撃士ですから。はい……何か判ったら宜しくお願いします」

そう言つて通信器を切るアイナ
しかししばらくの間、そのまま、立っていた

「アイナさん、何かあつたの？」

「珍しいこともあるもんね。あんたがそこまで驚くなんて。で、どこからの連絡だったの？」

2人の言葉にゆっくりとカウンターに戻るアイナ
そして、言葉を発する

「ボース支部からよ。……大変なことが起こつたわ。定期飛行船《リンデ号》がボース地方で消息を絶つたの」

その言葉に全員が驚く

確かに驚くことだがアイナの驚きようは違う何かを聞いたことだった

「詳細はまだ判らないわ……。現在、王国軍が出動して大規模な捜索をしているそうよ。そのせいで、他の定期船も運航を見合わせているらしいの」

だから先ほど飛行船が来ていなかったのか
イクスはそう思った

だが驚きはこれからだった

「そ、それで……………」

「アイナさん？」

「まだ、なんかあるんですか？」

「エステル、ヨシユア、イクス。気をしっかりもってちょうだい」

そして真実を口にした

「…………行方不明になった定期船にカシウスさんが乗っていたらしい」

真実を聞いたエステル達はしばし固まった
そして

「…………え」

「まさか!」

「…………っ!」

「う、嘘でしょう!?!」

だがアイナは否定した

「乗客名簿に名前があったらしいの。リベール遊撃士協会、ロレント支部所属、正遊撃士……カシウス・ブライト、45歳って……」

「……それが彼らの始まりを告げる瞬間だった」

蒼空語り 終

イクス

「蒼空語り、始まったぜ。司会はこの俺、イクスが勤めるぜ」

ヨシユア

「今回のアシスタントは僕、ヨシユアです」

イクス

「や〜っと序章が終わったな。序章でこれなら、これからの章はどれくらいになるんだ？」

ヨシユア

「たぶん、memory:20はいくと思うよ。それもそんな話があと4章も続けばきつと読者の方は飽きるだろうね」

イクス

「……真顔で、んなこと言うんじゃないよ。怖いわ……。まあ、確かに同感だ。これ、1作品終わるのに1年はかかんじゃねえか？ そんな亀の子みたいな歩みだからな」

ヨシユア

「同感。……さて、無駄口はそろそろ切り上げて質問コーナーに移ろうか」

イクス

「今の大事な話を無駄口と見なしやがった！」

ヨシユア

「HN『ガイア』さんから『今回も楽しく読みました。』

次は、セプチウム奪還ですね。

どうなるか楽しみです。

質問は、一番苦労した魔獣は何ですか。

次もがんばってください。『苦労した魔獣か……イクス、あるかい？』」

イクス

「あー……、苦労つーか倒せないだな。ほら、光っててぶによつとしてる魔獣」

ヨシユア

「ああ、『ガイア』さん。というわけで苦労してる魔獣はシャイニングボムでした」

イクス

「あいつ、シャイニングボムって言うんだ。今度体力の続く限り追
い回してやる」

ヨシユア

「それは色んな意味で難しいと思うよ」

イクス

「む、言ってくれるじゃねえか。何時か狩ってやる」

ヨシユア

「がんばれ」

イクス・ヨシユア

「蒼空語り 完」

第一章 く消えた飛行船 memory…?

夜中・ブライト家

「……………」

ヨシユアは一人エステルの部屋の前に立っていた
しばらくしてコン、コン、とドアをノックした

「エステル、いいかな？」

「…………ヨシユア？」

ドアの奥からか細いがエステルの声が聞こえた。その声いつもの
元気はない

「イクスが食事、出来たって。今夜はゴールデンリゾートとオニオ
ンスープだよ」

「…………美味しそうだね…………。うん、後で行くから先に3人で食べ
ててよ…………」

「そっか…………。わかった。冷めないうちにおいでよ。じゃないとい
クスが怒るから」

ヨシユアはエステルのうん、という声を聞き一階に降りていった

キッチンではイクスがスープを作り、テーブルではシェラザードがタロットカードで何かを占っていた

「『運命の輪』……。またこのカードが出たか。やはり、何か起きてきているのは疑いよのない事実……。でもその何かはまだ見えてこない」

と、そこでヨシユアが戻ってきた

「あら、エステルはどうしたの？」

「先に食べててくれって……。あまり食欲がないみたいです」

「そうか……。リゾットは長持ちしねえから失敗したな」

イクスが三人分のスープをテーブルに配りながら席に座る

「やっぱり今回ばかりはあの元気娘も応えたみたいね」

「……無理、ないですよ。なんだかんだ言っただけのいい父娘ですか
ら……」

「確かに、ファザコンに親バカだ」

「そうね……。イクスのそれは否定するけど」

そこでヨシユアはシェラザードの対面に座り食事を始める

あら、美味しい　とシェラザードが誉める

光栄です　とイクスが返す

しばらく食べた後でヨシユアが切り出す

「シエラさんはどう思います？ 今回の件、事故なのかそれとも事件なのか……」

「……正直、何とも言えないわ。先生は一流の遊撃士よ。こと危機管理に関してはケタ外れの能力を持っている。事故だろうが、事件だろうがその場に先生がいるんだっただらすぐに解決されているはずだわ」

「だが実際、定期飛行船は親父ごと行方不明になった……」

イクスがシエラザードの言葉を継ぎ、シエラザードが頷く

「ありえない事が起きた……。つまり、そういう事ですよね」

「ふふ、そんな顔しなさんな。あんたたちはどっしり構えてエステルを支えてやんなさい。明日、あたしの方で動いて……」

とそこまで言ったとき、大きな声が聞こえた

「はあ、いい匂いっつ。もうガマンの限界だよ」

驚く三人にどたどたと足音が聞こえすぐにエステルが降りてきた

「えっ……？？」

「は……？？」

流石のヨシユアとイクスも目を真ん丸にして驚いていた

「エステル……あんだ、大丈夫なの？」

「もーダメダメ。お腹空いて倒れる寸前だよ。うわ、美味しそーじやん！ イクス、早くあたしの分、持ってきて〜」

「あ、ああ……」

イクスは慌ててキッチンに行きエステルの分のリゾットとスープをよそい持ってきた

「いったただきまーす！」

そう満面の笑みで言うのとガツガツ食べ始めたそれを3人は目を真ん丸に見ている

「うわっ、美味しいじゃん、このリゾット。溶けたチーズがよく合う。さつすがイクス。いい仕事してるじゃない あ、このスープも美味しい！」

「し、至極光栄だな……」

イクスはなんか難しい言葉で返しちゃった

「ほらほら。シエラ姉も遠慮しないでお代わりしてよ。あ、父さんが隠し持つてる秘蔵のブランデーでも飲む？ 確か《スタインローゼ》の20年物だったかなあ……」

「ス、スタインローゼ？ しかも20年物ですってえ！？」

バン！ とテーブルを叩きながら立ち上がるシエラザードに呆れる
ヨシユアとイクス

「シエラ（姉）さん……」

「……はっ。コホン、遠慮しときます。ところで部屋で何をしていたのよ？ ヨシユアが呼んでも降りて来なかったじゃない」

シエラ姉さん、威厳、まったくありませんぜ

と、イクスは本気でそう思った

エステルはお代わりを要求しながら答える

「んー？ ああ、替えのパジャマを探してたの。奥にしまったお気に入りがなかなか見つからなくてさ」

「パ、パジャマあ？」

ヨシユアがヨシユアらしからぬ声を上げる

そんなことで僕が呼んだときに来なかったのか……

と、ヨシユアは本気で凹みそうになった

「それと旅行用具一式。どれだけかかるか判らないし備えあれば憂いなしってやつよ」

「あ……」

「エステル、お前……」

「あんだ、もしかして……先生の消息を確かめにボースに行ってみるつもり？」

シエラザードの問いにエステルは満面の笑みで答える

「モチのロンよ。あの悪運の強い父さんに何かあったとは思えないけど……じっとしてるのは性に合わないしちよっくら行って確かめてくるわ」

エステルの言葉に全員が啞然としたが、すぐに笑い始める

「はは……まったく君って子は……」

「前向きっつーか、凶太いっつーか……」

「なによ、失礼しちゃうわね。どうせヨシユアとイクスも付き合っってくれるんでしょ？」

エステルの言葉に二人は

「エステル、それこそ……」

「モチのロンだ」

三人でわいわい盛り上がるなかシエラザードはため息を吐いた

「あんたたちは……。その話、あたしも乗らせてもらっわよ」

「えっ……シエラ姉も来てくれるの？ でも、仕事が忙しいんじゃない……」

エステルの疑問にシエラザードはポカリと頭を叩きながら言った

「こら、あたしは先生の弟子よ？ 師に何かあったと聞いて留守番なんかしてられますかっての。協会の仕事は、アイナに頼んで他のメンバーに回してもらおうよ」

「シエラ姉……」

「シエラさん、ありがとう」

「恩に着るぜ、シエラ姉さん」

「礼を言われる筋合いはないわ。これだけの事件を新人だけに任せるわけにはいかないってこと」

「む、悔しいけどその通りかもしれない。まあいいや、シエラ姉が一緒だったらすごく心強いし」

「よろしくお願いします」

「たのんます」

「ふふ、こちらこそ。とりあえず、明日の朝出発前にギルドに寄りましよ。アイナに事情を説明しなくちゃね」

頷く三人

そして夜がふけていく

翌朝・ギルド

準備を終えた四人はギルドでアイナに事情を説明していた

「話はわかりました。正直、カシウスさんに続いてシエラザードに抜けられるとかなり人手不足になるけど……他ならぬカシウスさんのことだもの。遠慮せずに行ってきてちょうだい」

「恩に着るわ、アイナ。ま、精々リッジのヤツをめいっぱいコキ使ってやって。普段の仕事量の3倍は行けるはずだから」

「さすがにひどくないっすか!？」

イクスが苦笑しながら言う

アイナが逆に穏やかに笑っていた

「ふふ、いざとなったら王都支部に応援を頼むから心配しないでね。ところで、シエラザード。少しだけ時間をもらえない？ 仕事についてちよつと……」

「ん、わかったわ」

「あ、俺も手伝いますよ」

「あら、ありがとイクス。ならエステル、ヨシユアは2階で待っててくれる?」

シエラザードの言葉にヨシユアは頷いたがエステルだけは少し考えてから言葉を発した

「……ね、シエラ姉。待つんだったら時計台の前でもいいかな?」

ちよつと……挨拶したい人もいるし」

「……？」

「そつか……。うん、そうだったわね。ええ、いいわ。用事が済んだらあたしとイクスも行くからね」

ヨシユア、イクスは分からなかったがシェラザードには分かったようであつさり承諾してくれた

エステルはいつも通り返事をするヨシユアを連れてギルドを出た

ロレント時計台前

時計台には以下の年表が記されていた

《七耀暦1075》

リベール王家、七耀教会、ロレント市の合同で建立される

《七陽暦1192》

百日戦役中、ロレント攻囲にてエレボニア帝国軍の砲撃により倒壊

《七陽暦1197》

市民の協力により再建される

時計台にはそう刻まれていた

「この時計台を見るたびに思うんだけど……戦争でいったん壊れた後、よくここまで直したものだね。ロレント市民の気概を感じるな」

ヨシユアが感心しながら言った

「……………」

エステルは目を閉じながら黙っている

「エステル？」

ヨシユアがエステルを見て言った

「……ね、ヨシユア。シエラ姉が来るまでちょっと上に登ってみたいな？」

「時計台の上？ 別に構わないけど……………」

「それじゃ、行きましょ」

エステルはヨシユアを急かしながら時計台の上に登った。上はちょっとした展望台になっているのだ

エステルは風で靡く髪を押さえながら唸った

「うっん。朝の空気が気持ちいい……。ねえ、ヨシユア。ここからだと家が見えるよ」

「本当だ、屋根が見えるね」

ヨシユアは笑顔で返したが一つ気になることがありそのまま尋ねた

「それより、いつもはここに登りたがらないのにどういう風の吹き回しだい？ この場所、君はあんまり好きじゃないと思ってたけど」

「……………」

その質問に少し暗くなるエステル

ヨシユアから顔を逸らし景色を見ながらエステルは話し出す

「この場所は好きだよ。でも、気軽には登れないんだ。ここは……お母さんが……亡くなった場所だから」

「……………え……………」

「10年前の戦争の時ね……。ロレントを包囲した帝国軍が市民の降伏を促すために象徴であるこの時計台を砲撃したの」

それが先ほど刻まれていた文の一つだろう

「その頃、父さんは王国軍の軍人として戦っていて……あたし、父さんが戦っている相手が見たくてこの時計台に登っていて……そして……………」

逃げるヒマもなく巻き込まれた

そこでヨシユアはどうしてか分からないがその後の顛末が読めた。だがあえて口を挟まずエステルへの告白を聞く

「でも、気付いた時にはあたしはほとんど無傷だった。お母さんがね、助けてくれたの。腕の中にあたしを抱き締めてたくさんの瓦礫から守ってくれて……それから、泣きじゃくるあたしにまるでなんてこと無いように笑顔で大好きな子守唄を唄ってくれて……それで……それで……瓦礫が取り除かれた時には……」

そこは聞かなくても分かるだろう
もうダメだったのだ

「……戦争が終わってここは元通りになっただけどあまり来ないよう
にしていた。辛い思い出があるからじゃないの。この場所に来ると、
心のどこかでお母さんに頼っちゃいそう……。頼ってばかりじゃ、
お母さんみたいに強くなれないような気がして……」

「エステル……」

ヨシユアはただ、名前を呟く

何か、言葉を見つけようとするがその前にエステルが言う

「でも、いいよね？ 今日くらいは頼っても……父さんが無事に帰
ってくるようにお母さんをお願いしても……」

「当たり前だよ」

ヨシユアは断言し、一步、エステルに近づいた

「大丈夫……。父さんはきつと無事にいる。君のお母さんが守って
いるんだ。無事に決まってるじゃないか」

「……………」

「万が一、無事じゃなくてもエステルが助けてあげればいい。お母さんに助けられた君が今度は、父さんを助ければいい。僕もイクスも一緒に手伝うからさ」

「ヨシユア……」

「君の悲しみを、完全に分かち合う事はできないけど……こうして側にいることはできるから。僕でよかったらいつでも、どこでも、いくらでも貸してあげるから。だから……」

ヨシユアはそう言う

エステルはしばし、目を閉じていると突然、微笑した

「あははははっ！ ヨシユア、格好つけすぎっ！」

「えっ？」

「もっ、そんなこと軽々しく言ったりしないのっ」

「えっ、ええっ……？」

ヨシユア、軽く困惑している
しどろもどろだ

「他の女の子だったら完全に誤解してるところだって。ヨシユアって、将来絶対、色恋沙汰で苦勞するタイプよね。はっ……お姉さん、心配になってきちゃった」

「わ、悪かったね、軽々しくて！ なんだよもう……人がせっかく

心配してるのに」

「えへへ……。ありがと、励ましてくれて。なんか元気、出てきちゃった」

「ふん、そう言ってくれると格好つけた甲斐がありますよ。まったくもう……。ぶつぶつ」

ぶつくさ文句を言うヨシユアを笑いエステルはそのまま時計台を降りた

母親に父親を連れて帰る事を約束して

その後、それをダシにからかわれたがまったく気にも止めず逆にため息をつかれた

とにかく、これで準備は整った

エステル達は歩き出す

目指すは飛行船が消息不明になった地方

ボースへ

蒼空語り 終

イクス

「そんじゃ、蒼空語り、始めようぜ。司会は俺、イクスだ」

エステル

「アシスタントのエステルよ」

イクス

「さて、やっとこさ話が進み始めたな。ここまでで現実時間、およそ4ヶ月。短いようで実はクソなげーな」

エステル

「うん。先輩作の『ETERENAL』だつてたしか1ヶ月くらいだったと思うわよ」

イクス

「それほど、本編が書くの面倒くさいんだな。うん、後でお仕置きだ」

エステル

「失礼極まりないわ……。それじゃあ、質問コーナーに移るわよ？」

イクス

「オーライ。んじゃ最初は常連様でお馴染みのHN『漆黒の牙』さんから『おお、合体アーツが出た。ジヨゼット達哀れなり。まあ、イクスを怒らせたらあなるわな。そしてイクスの異名が白銀の魔王なのは今までで分かってたが、シエラザードの異名がDS女王って似合うな（笑）」。

質問は最近受けた依頼はなんですか？前にもあつたけど話が進んだからまたこの質問（まあ、俺が出した訳じゃないが）。

新アーツは、プロミネンスソウル：火：EP150：全体：ダメージ＋気絶50%：火12・空7・時5・風3

シャドウフレア：火と時の複合属性：EP30：単体：ダメージ＋気絶20%＋即死20%＋アーツ解除：火4・時4・空2

名前の由来：プロミネンスソウルの名前の元ネタはモンスターハンターの俺が愛用している炎属性ランスの名前。シャドウフレアはシャドウスピアと何か合わせようと思つたらFFにある技名が思い

浮かんだからそれを使った。そのため、火属性を追加した。後悔も反省も無い』……最近、受けた依頼は手配魔獣だったと思うわ」

イクス

「たしか、ミストヴァルトに続く道の真ん中に居座ってたから3秒で殴り捨てたな。いや、どっちかって言えばシエラ姉さんの鞭が効いたのか？」

エステル

「確かにそうね。それじゃあ、次。『空牙刹那』さんから『ゲスト』として「ティータちゃん」に質問です。

ヒツジンを「見るだけなら」かわいいと思えますか？

自分はかわいいと思います…ああ、あの毛…モフモフしたい…

(キラキラ

…以上です／＼／』……ティータちゃんって誰かしら？」

イクス

「とにかく呼んでみようぜ。せーの」

イクス・エステル

「ティータちゃん！」

ティータ

「はあ〜い。あなの、初めまして、ティー……」

イクス・エステル

「か〜あ〜い〜い〜！」

思いきり萌え、ティータを抱き締める二人
戸惑うティータ

ティータ

「ふえっ……！ あ、あの……質問に答えられませうん」

イクス

「はっ……。ああ、つい可愛すぎて抱き締めちゃった」

エステル

「ごめんね、ティータちゃん。それじゃあ、質問に答えてね」

ティータ

「はい。えと……かわいいです！ あのヒツジンの体毛にダイブしたいですう」

イクス

「そうか。ティータちゃんサンキュー」

エステル

「これで、今回の質問コーナー及び蒼空語りを終了するわ」

イクス

「みんな、またな」

イクス・エステル

「蒼空語り 完」

リベール通信 第2号

【速報】定期船《リンデ号》失踪！^{しっそう}

つかめぬ消息 定期船はどこへ？

昨日午後、ロレントへ向かっていた定期船《リンデ号》が、東ボース上空にて消息を絶った。王国軍の懸命な捜索にも関わらず、一夜開けた今もその行方はつかめていない

定期船は全便欠航

捜索活動を優先するため、王国軍は東ボース上空を飛行禁止区域に指定。この影響で現在のところ定期船は全便が欠航している

搭乗者17名、その安否は

飛行船公社の公表した乗客名簿によると、出港当時《リンデ号》には乗客乗員合わせて17名が乗船していた模様。乗客の家族は不安を募らせている

専門家の見解「事故の可能性は低い」

事故なのか事件なのか。専門家に話を聞いてみた

中央工房・マードック工房長：現在の導力機関は技術的にも成熟^{オバルエンジン}

し、墜落に直結する故障が発生するとは考えにくい。事故の可能性は低いと思う

錯綜する情報

帝国軍の一部派閥や、諸国で暗躍する傭兵部隊《イーガー獵兵団》による謀略説から、身代金目的の乗客誘拐説、果ては「古代竜」の生き残りによる襲撃説まで、現在《リンデ号》の失踪について実に様々な憶測が飛び交っているが、いずれも噂話の域をでるものではない。その一方、先日ボース地方を騒がせた強盗事件との関連性については、まだ何の情報もない

こうした混乱はすべて、王国軍による情報の規制によって引き起こされている。規制は市民の不安を増すばかりだ。早期の情報公開が望まれる

【社会】七耀石盗まれる！ ロレントで強盗事件

ロレント市長邸に保管されていた七耀石が何者かによって強奪された。現地支部所属の遊撃士が追跡、七耀石は奪還したものの犯人は逃走。市長と家族に怪我はなかった。「(犯人を)逃がしたことは残念だが遊撃士は最善を尽くした」(同支部代表)

【文化】遺跡探訪

～ロレント地方《翡翠の塔》～

ロレント市から山道を行くこと百数十セルジュ。荒涼とした風景の中に、青緑色に輝く塔が現れる。王国に点在する《四輪の塔》の1つ、《翡翠の塔》だ

建国と同時期に建てられたとされるこの塔だが、その建造理由は
いまだ謎のまま。最新の導力技術を駆使した近代的な研究が待たれる

「 ナイアルがふらふらになりながらも走ってポースに向かったのはこの為だったんだな。あれ？ それにしちゃあ、少し情報入手が俺たちより早かったような……」

イクスがぶつくさ考えていると前方から声が掛かった

「イクスー！ 早く来ないとおいてくよー！」

「……っと、はいはい！ 今行く！ 考えるのは後だ。今は親父探しに集中しねえと『あれ』の作業が終わらねえ。つつつても材料が無いんだから意味ねーんだけどな」

イクスは呟きながら《リベル通信》をポーチの中にしまい駆けていった

リベール通信 第2号(後書き)

次回を出す前にカーネリアでしようか？

イクス

「うん……。どっかつつーと次話をやってから、だな」

そう

なら次回書いたらカーネリアをよろしくね

イクス

「委細承知。んじゃあな」

第一章 く消えた飛行船く memory:?

エステル達はギルドを出る前に見ておいた依頼　　デバイン教区
長の頼みで親書を届けるのを引き受けてからロレントを出発した
ミルヒ街道を西に172セルジュ（作者も単位の変換は出来ません
悪しからず）進んだいわばロレントとボースの関所であるヴェルテ
橋に着いた

ここは王国軍が管理しているが隊長のアストンは以前、《翡翠の塔
》に勝手に入ったルツクの父親だった

「アストンさん、こんにちは」

「おや、君たちは、エステル君、ヨシユア君、それにイクス君じゃ
ないか。そちらの人は……確かシエラザード君だったか？」

やはり、同じロレント市民として覚えていたのだろう
シエラザードも軽く挨拶する

「ごきげんよう、隊長さん。ボース地方に渡りたくて通行許可証を
貰いたいんだけど」

「ひよつとして……例の事件に関係しているのかね？」

「ああ。実は……」

一応、信頼に足る人物なのでイクスが行方不明になった定期船に力
シウスが乗っていた事を話した
これにはアストンも驚きすぐに通行許可証を発行してくれた

「ありがとう、アストンさん。でも、いいの？　こんなに簡単に発
行しちゃって」

「なに、君たちは顔見知りだ。それに、王国軍としても遊撃士協会
に協力は惜しまない。ああ、ただ……」

「ん？　どうかしたのか？」

「……北にあるハーケン門に用事がある時は注意したまえ。君たち
が遊撃士であることは伏せていたほうがいいかもしれん」

難しい顔でそう言われる

これは何かあるのかもしれない

「どういふことですか？」

ヨシユアが尋ねる

しかし、アストンは首を横に振る

「すまない、これ以上は私の口からは言えないんだ。だが、事件を
調べるつもりならくれぐれも慎重に行動したまえ。私もカシウスさ
んの無事を空の女神エイドスに願っているよ」

エステル達はお礼を言うと部屋から出ていった

その後、門兵に通行許可証を見せ扉を開けてもらっていよいよエス
テル達はボース地方の最初の街道　　東ボース街道を進み始めた

東ポース街道はロレントのミルヒ街道と比べると道幅が狭く森の中に存在しそうな道だ

しかし舗装されている面ではこちらの方が上だ

さらに、たった橋を渡っただけで魔獣が変わっている

ここ、東ポース街道には蛇やクラゲの類いに似た魔獣が多い

そんな街道を歩いていると前方から軽鎧を纏い背中に大剣を背負った

赤髪の男性と貨物を引いている導力車がこちらにやってきた

赤髪の男性は三人を　　正確にはシエラザードを見て声をかけた

「よう！　シエラザードじゃないか」

「グラッツ、久しぶりね。何してるの、こんなところで？」

「見ての通り護衛の仕事さ。例の事件のおかげで定期船が運休してるのは知ってるだろう？」

グラッツは言う

「それで積荷を、こうして陸路で王都まで運んでいるってわけさ」

「なるほど、ご苦労様ね」

「そういうお前さんは若いの連れてどうしたんだい？　まさか……例の事件を調べるつもりかよ？」

「そのつもりよ。……なによ、何かあるの？」

先ほどもアストンから言われたので気になって聞いてみた

「まあな……。詳しくは、ポース支部にいるルグラン爺さんから聞

いてくれや。それじゃあ、またな」

グラッツはそう言う導力車を引き連れ行ってしまった

「アストンさんといい……なんか引つ掛かる言い方よね」

「事情がありそうだね。それも遊撃士協会がらみで……」

「……何もねえよりはましか」

「何にせよ、彼の言う通りボース支部で聞けば分かるわ。先を急ぐわよ」

エステル達はそれに同意し襲ってくる魔獣だけを相手にしボースに向かった

ボースまでおよそ420セルジュ

商業都市・ボース

ロレントとは比べ物にならないほど大きい街

都市だ

「やっと到着したわね。ここがボース地方の中心地、商業都市ボースよ」

「うわ……いかにも都会って感じね」

「確かりべール五大都市の中では王都に次いででかい街らしいからな。否、都市か」

「そうだね。ロレントと較べると建物が石造りで大きい感じだな」

エステル、イクス、ヨシユアの順で感想を言っていく
エステルはふと目にした建物についてシエラザードに聞いてみた

「ね、シエラ姉。あそこにてーんとあるメチャメチャ大きな建物、
何かな？」

「あれはボースマーケット。色々な店が集まった屋内市場ね。食料
品、衣類、雑貨、家具、書籍……武器やオーブメントを除いた大抵
の買物はあるよ」

「マジでっ！？ うわ、食料品市場、すげえ全力全開で見たい！」

調理が得意なイクスは食材にこだわる
現に今のイクスの目はキラキラ二倍ほど輝いて見えた

「はいはい、それは、またの機会にね」

「むー……まあ、仕方ねえ。俺は教会に手紙届けてくるからみんな
は先にボース支部に行っててくれや」

「了解。……寄り道しないで来なさいよ？」

「ギクツ……ハッハッハ、アタリマエジヤナイカ」

……
信頼性、まったくないよイクス
と、エステルは本気でそう思った

ボース支部に入ると待っていたのは編み帽子をかぶった白髪の老人だった

「おお、シエラザード。思ったよりも早く着いたな。わざわざロレントから歩いてご苦労様だったのう」

「ルグラン爺さん、久しぶりね。もしかして、あたしたちが来るっという連絡があったの？」

「うむ、先程アイナからな。それでは、その嬢ちゃんたちがカシウスの子供たちというわけか」

「ええ、1人、届け物をしているけどお察しの通りよ」

そこでエステル達が挨拶する

「えっと、初めまして。エステル・ブライトです」

「ヨシユア・ブライトです。よろしくお願いします」

と、ちょうどその時、イクスが入ってきた

「ちわー、手紙届けて来たぜ」

「あ、これがさっき言っていた、3人目」

「ん？ ああ、ども。イクスヴェリア・ブライトです。イクスって呼んでくれじーちゃん」

初対面なのに失礼極まりないよこの人

「ほっほっほ。わしはボース支部を預かるルグランというじいじや。お前さんたちの親父さんとは色々懇意にさせてもらってある。じーちゃんでも良いがルグラン爺さんと呼んでくれ」

だがルグランはまったく気にも止めなかった
好々爺だ

「うん、ルグラン爺さん。それで……例の事件がどうなってるのかさっそく教えてくれないかな？」

「うむ、それなんじゃが……王国軍による搜索活動はいまだに続けられておるらしい。じゃが、軍の情報規制によって状況がまったく伝わって来ないのじゃ。一般市民だけでなく　ギルドにも何の音沙汰なしでなあ」

それには驚く四人

「ええ〜っ！？　なんでよ、軍とギルドって協力関係にあるんじゃないの？」

「エステル、確かに様々なところでそう言われてるが結局、それは一部なんだ。実際は、色んな場面で対立してんだよ。つまりは

「

「縄張り争い、だね」

「そ。じーちゃん、どうだ?」

イクスの質問にルグランはため息を吐きながら頷いた

「残念ながらその通りじゃ。しかも、今回の事件に関してはモルガン将軍が絡んでいるらしい」

「げ、モルガン将軍……それは面倒な話になってきたわね」

「なに、そのモルガン将軍って?」

エステルはまた疑問が増える

「10年前、帝国軍の侵略を撃退した功労者として有名な人さ」

「あゝっ、あのおっさんか……会ったこと無いのにどうにも会いたくないって思うわ」

エステルの疑問をヨシユアが答えイクスは一人呟いた
きつと無い記憶の中で会ったんだな
と、イクスはそう結論づけた

「ふゝん……で、その有名人がどう問題なの?」

「聞いた話だと、その将軍……大のブレイサー嫌いらしいのよ。遊撃士協会なんか必要ないって日頃から主張してるらしいわ」

「む、無茶苦茶なおっさんね」

「頭、全力全開で冷やしてやるのかな？」

「やった瞬間にカウンターされるよイクス」

すかさずツツコムイクス

ボケ役はエステル、イクス

ツツコム役はヨシユア時々イクスで決まりだ

「じゃあ何、その將軍のせいで情報が入ってこないってわけ？」

「……………それどころではない。軍が調査している地域にはブレイサーを立入禁止にしよる。おかげで、他の仕事にも支障を来しておるのじゃよ」

ある意味最悪なことだ

それではカシウスの足取り、安否を確かめるどころか仕事にも支障が出てしまう

「そ、そんなぁ……………せつかくロレントから来たのに。こうなったら、その將軍と勝負してどっちが事件を調べるか決めるしかっ！」

「ない！……………わきゃねーだろ馬鹿エステル」

「なに無茶苦茶言ってるかな……………」

「まあ、そう焦るでない。実は、今回の事件に関してボースの市長から依頼が来ておる。軍とは別に、ギルド方面でも事件を調査して欲しいとの話じゃ」

それは渡りに舟だ

ポース市長の正式な依頼書があれば例え軍の規制が強くとも大義名分として使えるのだ

「それじゃあ、あたし市長さんに会いに行ってくるね！」

「あ、おい、待ちなさい！」

そんなルグランの言葉を無視しエステルは一人、飛び出して行ったヨシユアとイクスは互いに見合うとため息を出してカウンターの脇に置いてある紙に自分の名前とエステルの名前を書いた

「じーちゃん、すまねえな。後であの馬鹿エステル、怒っとくからさ？」

「ま、いいじやろう。遊撃士ヨシユア、ならびにイクスヴェリア、エステル。本日13：20をもって三名のポース支部所属を承諾する。……ちなみに市長邸は西口の入り口横じゃ」

「全力全開で」

「しっかりと」

「了解しました」

もちろんこれは後で市長邸がまったく分からず戻ってきたエステルを叱るための承諾だった

蒼空語り 終

イクス

「実はこの蒼空語り、風花が好きな刀語をパクってるんだぜと、紹介するイクスです」

エステル

「何さらつと言ってんのよ。……正確には公式サイトに載っている後語りからパクってますと、言うエステルよ」

イクス

「お前もさらつと言ってるじゃねーか。……あ、ごめんなさい。だからスタッフ降ろして、ね？」

エステル

「……ふう。さ、今回は第二の街、ボースに着いたわね。王国軍つてめんどくさい事してくれるわね。これじゃあ、父さんを探せないじゃない」

イクス

「ほんと。全員アストンになりやいいのに……」

エステル

「それはそれで怖いわ……さて、そろそろ質問コーナーに入りましたよ」

イクス

「待ってました。それじゃあ、HN『ガイア』さんから『次も楽し

みにしています。

質問は、武器や防具は壊れたりしないのですか？』えー、刃零れや棒術具が欠けることはあります。ただ今現在は簡単に修復することができくらいにしか壊れていません」

エステル

「それじゃあ次、『漆黒の牙』さんから『これからボース地方が。定期船搜索頑張れ。』

（質問に対して）手配魔獣って、あのサイみたいなやつか？よく3秒で沈めたな。

質問だが、皆の今のレベルはどのくらいだ？（ジヨゼット撃破時の状態）

新アーツは アースグラビティ：地・時の複合：EP200：敵・味方全体：敵に特大のダメージ+MOV-8+気絶50%・味方にMOV+4+STR・DEF・SPD+50%：地12・時12・幻8・空8

まあ、SC以降向きのアーツかもな、これ。

複合アーツの属性効果 例えば火・風の複合アーツを使う時、相手の属性耐性値が火が100より低い値で風100より高い値だとする。この場合、耐性値100扱い。まあ、そうしないと使いにくいからね。ちなみにさっきの属性で両方100より低い場合は耐性値0扱いで無効。両方100より高い場合はその耐性値の合計値（例：火150・風200の場合耐性値350）扱い。片方100の場合もう片方で計算する（例：時150・幻100の場合時属性の耐性値で計算）。になります。作った時点で考えるべきでした。後悔はないが反省はする。

まあ、こんな感じで使いにくいかもしれないけどね。設定は変えていいけど（俺の考えた設定ややこしいから）。

設定ばかりの長文失礼した。それでは、また。『あたし、ヨシユアはLv10。シエラ姉はLv12、んでイクスは……たぶん、L

V15じゃないかしら。魔王の笑み浮かべてたし」

イクス

「『漆黒の牙』さん。計算式、ありがとうございます。んじゃ最後、『美空』さんから『こんにちわですー

いつも楽しんで読んでいます

質問なんですけど、エステルたちの、

今の装備は、何ですか？』え〜と、簡単に言えば全員、アーマージャケットにスパイク。まあ、俺だけは相変わらず着物に草履だな。武器はエステル、スタンロッド。ヨシユアはレイザー。シエラ姉さんはブリッツ。そして俺は特製棒術具だ」

エステル

「イクスって自分を貫きとつすわよね……。赤に混じっても赤になるどころか黒になりそう」

イクス

「ふ、俺は東方の言葉で言つと唯我独尊だ！」

エステル

「……たぶん、それ間違ってるわよイクス」

イクス

「さて、今回はここまでだ。次回も楽しみにしていてくれよ」

エステル

「それじゃあ、ばいばい」

第一章 く消えた飛行船く memory…? (前書き)

すみません、本当に遅れました

しかも手抜きです

もうちょっと執筆のペース配分をこれから考えていきたいです

それではどうぞ

第一章 く消えた飛行船 memory:?

イクス達はエステルを叱りながら教えられた場所に建てられた家に入った

ここで疑問に思うのだが、何故ノックもチャイムも鳴らさずに他人の家に入れるのか？ セキュリティ低いんじゃないやありませんか
っていうかいかに遊撃士といえど不法侵入確定だ

閑話休題

ボース市長邸は思いの外、豪華な造りだった

ロレントのクラウドス市長邸が質素ならここは豪華絢爛だろう

「うわー、豪華な屋敷……見て見て、あのシャンデリア！」

「はしゃがないの、エステル」

「ちよーつと黙ろつか、エステル？」

二人から注意を受ける、バカエステル

と、その時一階のドアが開き初老の執事服を纏った男性が現れた

「おや、お客様ですか？ いらっしやいませ。ボース市長

邸へようこそ。どちら様でいらっしやいますか？」

「遊撃士協会の者です。ここの市長が依頼をされたって聞いて詳しい話を聞かせてもらうために来ました」

イクスが丁寧にしゃべる

「おお、話は伺っております。しかし申し訳ありません。市長は留守にしております……教会に礼拝に行っているのです」

「いつごろお戻りになりますか？」

ヨシユアは尋ねる

「左様でございますね……実はもう、お戻りになってもおかしくない頃合いなのですが」

「あ、それじゃあさ。あたしたちが教会に行つて市長さんをお呼びに来るつてのはどう？」

エステルの提案に執事は少しあわてふためく

「し、しかし……お客様の手を煩わせるわけには」

「気にしないでくれ。手間が両方省けるしな。ところで市長さんってどんな奴なんだ？」

「うつむ……ご立派と申しますか、美しく成長されたと申しますか。これで良いご縁があればわたくしも安心して隠居が……」

難しい顔をしながらため息を吐きブツブツ言う執事
エステル達は少し呆けてしまった

「あ、ああ、うん。分かったよ。だからこっちに戻ってこいよ」

「はっ……失礼しました　　ああ、それよりも市長にはメイドが
1人同行しております。それを目印にされた方が宜しいかと」

「メイドさんを連れの人……それは判りやすそうですね」

「それじゃあ、早速、教会に行きましょう」

エステル声に頷き、先ほど手紙を届けたイクスが先導して教会に向
かった

「そついや、エステル知ってたか？　デバイン教区長って結構有名
なんだぜ」

教会に入るとイクスが思い出したように言う

「へ？　有名って？」

「何でもこのレベルでは名を知らぬ者はいないと言われる薬学の
大家ってこのホルス教区長が言っていたぜ。しかも大聖堂に居た
ときから」

「げげっ」

エステルは驚く

「ロレントに赴任した後も欠かさずに研究を続けて良い薬ができた
ら俺たちに頼んで知らせるんだとよ」

「そうそう。ほら、あたしたちが今使ってる《ティアの薬》も教区長さんが編み出したのよ　ま、気が付かないところでも守られてるってことね」

「ちつとも知らなかった。もう……ちょっとは教えてくれてもいいのに」

「でも、教区長さんらしいよね。ご自分のことなんて普段は口にしてない人だから」

ヨシユアの発言に同意するようにエステルは頷く

「俺もそう思った。ホルス教区長によるとデバイン教区長は他人より自分に厳しい人だよ」

「ふーん……ところで話を戻すけど市長さんらしき人は見当たらないわよ。メイドさんは見つけたけど」

エステルはそう言って近くでお祈りしていた青髪のメイドを指差した

「貴方がたは……？」

「エステル、失礼だよ　すみません、遊撃士協会の者です。依頼内容の確認のために市長さんを探しているんですが」

「ああ、なるほど……」

そこでメイドは薄く目を開く
濃い緑の綺麗な目だな

イクスはなんとなくそう思った

「申し遅れました。私、メイドのリラと申します。市長の身の回りの世話を仰せつかっております」

「身の回り世話……なんか住む世界が違うわね。それで、当の市長さんは？ お祈りに来てるんじゃないの？」

「……サボリです」

リラはため息を吐きながら答えた
これ以上ないというくらい深く

「へ？」

「おそらく、マーケットの視察をなさっている最中だと思います。私に、ご自分の分までお祈りするように申し付けてから先ほど出て行かれたばかりですので……」

「ああ、さっきのリラさんと一緒にいてしつこくお願いって言っていたあの人が」

イクスは誰なのか理解したようだ
リラは、

「お恥ずかしい限りです」

と表情を変えずに言った

「何て言うか……結構、ユニークな人ですね」

「ふふ、面白そうじゃない。市長が務まるかは別として」

「有能な方には違いありません。少々、破天荒な所はございますが……。そろそろ私、市長を迎えに行こうと思います。大変申しわけないのですが市長邸の方でお待ちいただけませんか？　すぐにバカ……いえ、市長をお連れいたしますので」

「アンタ、今、ご主人をバカって言わなかったか？」

イクスがツツコム

確かに言ったがリラはさあ、とばかりに首を傾げる

「うーん……もしよかったら付いて行ってもいい？」

「バ……市長を迎えにですか？　私の方は構いませんが……」

「アンタ、また言いそうになっただろ！？」

「ではさっそく、町の中央にあるボースマーケットに参りましょう」

軽くスルーしたりラはエステルとシエラザードを連れて教会を出ていった

残ったイクスはマジで凹みヨシユアが苦笑いしながら諫めた

ボースマーケット

中はほとんどの場所を辺り狭しと店が並んでいた

「市長さんはどこかなくつと」

「市長はとても目立ちますから……ああ、あそこにいた」

そんなリラの声と視線の先を見ると中央の噴水の側で商人らしい若者二人に説教していた女性がいた
彼女がそうだろう

「貴方たち、恥を知りなさい。この大変な時に食料を買い占めて値をつり上げようとするとは……ボース商人の風上にも置けなくてよ」

「し、しかしお嬢さん……」

「僕たちはボースマーケットの売り上げアップを考えてですね……」
言い訳しようとする二人を女性は、

「お黙りなさい!」

有無を言わせない一喝で黙らせた

「他の品ならいざ知らず、必需品で暴利を貪ったとあっては我がマーケットの悪評に繋がります! 即刻、元の値段に戻しなさい!」

「は、はい……」

「わかりました……」

しょんぼりして頷く二人に女性は追い打ちをかけないように声のト

ーンを戻し言った

「……わたくし、貴方たちのボースマーケットにかける情熱を疑っているわけではありませんわ。ただ、判って欲しいのです。商売というものが、突き詰めれば人と人の信頼関係で成立している事を大丈夫、貴方たちだつたら立派なボース商人になれますから」

「お、お嬢さん……」

「はい、頑張ります！」

歡喜極まった二人は深々とお辞儀をすると自分の持ち場に戻っていた

女性が息を吐いた時、リラが声を掛けながら近づいてきた

「リラ……来ていたの。恥ずかしい所を見せてしまったわね」

「いえ……相変わらず見事なお手並みです　それよりお嬢様。こちらの方々が用がおありだそうです。すぐにお屋敷にお戻りくださいませ」

「あら、その紋章は……もしかして依頼したブレイサーの方々かしら？」

女性がエステル達の胸元に付けていた紋章を見て聞く

「うん、そうだけど……」

「もしかしてあなたが……」

「ボース市長だぜ」

「ふふ、申し遅れました。わたくしの名はメイベル。このマーケットのオーナーにしてボース地方の市長を努めています」

ところ変わってレストラン《アンテローゼ》

ボース市長、メイベルはエステル達を市長邸ではなくここに連れてきた

もちろんエステル達は驚いている

「それにしても、ボース市長が女性なのは聞いていたけど……ここまで若いとは思わなかったわね」

シエラザードがそう切り出す

「見たところ、エステルや俺たちとそこまで離れてなさそうだし」

「実質、若輩者に過ぎません。亡くなった父が前市長でボースマーケットの事業権と共に政治地盤を引き継いだだけですわ」

「何というか……ずいぶん率直な自己評価ですね」

ヨシユアが思った事を口にする

「所詮は商人の娘ですし、気取っても仕方ありませんから　それでは改めて、依頼内容を確認してもよろしいでしょうか？」

その言葉に全員が頷く

メイベルは一つ区切って言葉を口にする

「お願いしたいのは」

蒼空語り 終

イクス

「遅せーんだよ、風花アアアアアアアア！！」

風花

「あぶらあああああ！」

吹き飛ぶ風花

イクス

「何、俺や読者を待たせて嫌がんだ。『零の軌跡』なんてこれが区切りしてからやれや」

風花

「……返す言葉もありません」

イクス

「ったく……おら、さっさと質問に答えるぞ」

風花

「りょうかーい　　H N『ガイア』さんから『今回も楽しく読みました。』

モルガン將軍のいかつさをどう書くか楽しみです。
イクスに質問です。

シャイニングボムを見かけたらどうしますか？』……だって。どうするの？」

イクス

「んなもん全力全開で追いかけて倒すに決まってるだろ」

風花

「……なるほど。それじゃあ、次。H N『美空』さんから『イクス、ゴイングマイウェイですね』

実をゆーと私もゴイングマイウェイなのだな。

はい先生！（誰が）質問です！

まことに失礼なんですけど、

どーしてエステルはそんなに

鈍感で元気有り余ってるんですか？

で、その野次馬根性はどっから来てるんですか？

新アーツはですね、

フェアリー・ブレイブ：空：全体：EP150

敵全体に大ダメージ・見方全体に精霊の加護

（HP200回復）：空20幻15時10火、水、風、地5

ラスボスで使えそう。

まだ、使うには難しいかも。

とゆーわけで、次も楽しみにしてます！

頑張ってくださいね、応援してます。』……良かったじゃんイク

ス。褒められたよ」

イクス

「あつはつはつは。サンキューな『美空』。んで質問に答えるがたぶんエステルが極度のお人好しだからじゃないか？ 鈍感なのは…
…馬鹿だから？」

風花

「なるほど。さて、今回はここまでですが次回はもう少し早くしたいと思います」

イクス

「まあ、の前にカーネリアだけだな。んじゃ、ばい」

イクス・風花

「蒼空語り、完」

第一章 く消えた飛行船 memory:?

あれから数十分後

エステル達、四人は東ボース街道を歩いていて

ただ初めこの道を歩いた時と違うのは行き先がロレントではなく少ししたところの脇道から行けるハーケン門を目指していたのだ

一体、どうしてそこに目指しているのかはすこし前　　ボース市長、メイベルの話まで遡る

「　　お願いしたいのは言うまでもなく定期船消失事件の調査と解決です。わたくし、今回のような事件では軍よりもブレイスアーの皆さんの方が結果を出してくれると思うのです。戦争をするわけではなく謎を解き、解決するわけですから」

「あら、光栄ね。買いかぶってくれるじゃない？」

「商人としての目利きですわ。実際問題、消えた定期船にはボースの有力商人が乗っています。それにこのまま、王国軍によるボース上空の飛行制限が続いたらこちらの商売が成り立ちません　　せつかく、女王生誕際を前に景気もかなり好調でしたのに……」

ため息をつきながら言うメイベル

そこからは市長としての責任が多少窺える

「なるほど。経済的な要請という事ですね」

「ええ、とても軍だけに任せておくわけにはいきません。どうかお願いできないでしょうか？」

そんな懇願にシエラザードは何故か申し訳なさそうに目を伏せる

「こちらにも理由があるし引き受けたい所ではあるけど……今回の事件に関しては軍が、あたしたちブレイサーを締め出そうとしてるみたいなのよね。そのあたり、市長さんの立場から何とか働きかけられないものかしら」

「モルガン將軍ですわね……あの方、昔からブレイサーがお嫌いであらうから」

「おろ、市長さん。あの厳ついジジイの事を知ってるんすか？」

イクスがちょうど掲示板にあった《アンテローゼ》からの依頼の敬礼として作ってもらった王国風オムレツを食べながら聞いた

「亡くなった父の友人ですの。一応、顔見知りではありますわ。ですから……何とかできるかもしれません」

そこで後ろで待機していたリラに声を掛けた

リラは一体、どこから出したのかは不明だが万年筆と便箋を取り出しメイベルに渡した

メイベルはさらさらっと何かを書くとき封筒にしまいその手紙をエステルに渡した

「なに、これ？」

「モルガン將軍への依頼状です。ボース地方の責任者として今回の

事件についての情報を請求する旨をしたためました。ある程度なら、軍が掴んだ情報を教えてくださると思いますわ。まあ、皆さんの身分は伏せた方が得策だと思います。ただ、市長からの使いだと名乗るだけでいいかと存じます」

「う、ちよつとイヤかも。なんか騙しているみたいで……」

「騙してねえよ。本当の事を言わないだけだ。ここは割り切れ、エステル」

「そうだね。事は急を要することだし」

イクスとヨシユアが説得する

渋々、エステルは頷く

そこで話は終わり、エステル達はモルガン將軍がいるハーケン門へ向かうことにした

ここで話の冒頭に戻る

そんな回想が終わる頃にエステル達は東ボース街道とアイゼンロードの境に着いていた

そこには予想通りに王国軍兵士が見張りをしていた

「ちよつと待て」

やはり予想通り止められる

「この先、ハーケン門方面は現在通行禁止となっている。関係者以

外は通行禁止だ」

「残念でした、関係者だもんね」

エステルは得意そうに笑うとメイベル市長からの手紙を見せた

「これは、メイベル市長の……」

「市長の依頼で、モルガン將軍に搜索状況をうかがいに来ました」

「ちなみに正式な依頼書だから。通してくれなかったら、後々、面倒なことになるわよ？」

王国軍兵士は唸っていたが仕方無しに通行を許可した

「サンキュー。あつと、そうだ。あんたらにこれ」

イクスは通り過ぎるとき、手に持っていた箱を兵士に手渡した

「ん？ なんだこれは？」

「メイベル市長から見張りの方に差し入れだよ。ちなみにアンテローゼの料理だ」

「それは……市長にお礼を言っておいてくれ、ありがとう、と」

「了解」

そんな風に通り返した

ちなみに差し入れの王国風オムレツはイクス作である

まあ、兵士には好評だったので黙っておこう

アイゼンロードは兵士たちが見張りをしており、さらに巡回もしていたので魔獣に襲われる心配もなく進むことが出来、ハーケン門に無事到着した
ハーケン門に着くや否、その大きさにエステルは呆気にとられてしまった

「こ、これがハーケン門……メチャメチャ大きいわね〜！」

「帝国への唯一の玄関口にしてその驚異から王国を守る防壁……」

「たしか……10年前の戦争で破壊されませんでしたっけ？」

「ええ。だけどそのおかげでさらに堅牢なものが築かれたのよ」

シエラザードが疑問に答える

イクスはへえ、と呟きながら器用に棒術具スタッフにもたれ掛かる

「つてえ事は、この門から向こうはリベールじゃないってことか……」

「そうだね……《黄金の軍馬》を紋章に掲げるエレボニア帝国の領土だ」

「エレボニア帝国……」

自然とエステルの目付きが鋭くなる
だが、三人は黙っておくことにした
エステルの事情を分かっているからだ

「さてと。早速、モルガン將軍と面会しようか。門の脇に兵舎がある……あそこにいるんじゃないかな？」

「ん、オツケー！」

「ま、行くとしますか」

歩き出す前にメイベルに言われた通り、遊撃士である証の『掲げる籠手』の紋章を隠し兵舎に向かった

兵舎前

エステル達が近づいてくると見張りをしていた兵士が怪訝そうに尋ねてきた

「あんたら……いったいどこから入ってきた？ アイゼンロードの検問はまだ解除されてないはずだろう」

「自分達は、ボースのメイベル市長の使いで来ました。モルガン將軍への取り次ぎをお願いできないでしょうか？」

「あ、これ差し入れな」

と、食事を渡しながら遊撃士の身分は明かさずに市長から依頼され

た事を説明した
兵士は納得したが申し訳なさそうに言う

「そういう事なら取り次げるけどあいにく、將軍閣下は不在でね。
搜索活動の陣頭指揮を取ってるのさ」

「タイミングが悪かったわね……いつごろ戻ってくるのかしら？」

「うーん、今日中に戻るとは思うけど。向こうにある休憩所に酒場があるから、そこで待っていてくれ。閣下が戻ってきたら教えてあげるよ」

「休憩所に酒場……どうしてそんなものがあるの？」

エステル、場所を良く見て良く考えようぜ

本気でそう思ったイクス

しかしながら兵士は律儀に親切に教えてくれた

「なにせ帝国との国境だからな。入国・出国共に審査が厳しくて足止めを喰らう旅行者が多いんだ」

エステルは納得するとお礼を言い酒場で待たせてもらうことにした

酒場に入ると一番近くの席でリベールには珍しい服を着た金髪の青年が食事に舌鼓をうっていた

「ふっ、驚いたな……本場のリベール料理を食べるのは初めてだが、

なかなかの美味だ」

「ほう、嬉しいことを言ってくれるじゃねえか。街に行きや、美味いリベール料理を食わせてくれる店は色々とあるぜ。旅行中、楽しみにしてるこつたな」

店主がそう言う

「もちろん、そのつもりだよ。場末の酒場の料理でこれだ。今から期待できるというものさ」

「へっ、場末の酒場で悪かったな。ついでにワインでもどうだ？安物だけど、けっこうイケルぜ」

「ふむ、いただきますか……」

と、ちょうどその時、後ろにいたエステル達に気づき声をかけた

「やあ、ごきげんよう。リベール人のようだが帝国には旅行に行くのかな？」

「ううん、あたしたちはヤボ用でここに来ただけなの。帝国に行くわけじゃないわよ」

「そういうあなたはエレボニアの人みたいですね。王国には旅行に来たんですか？」

ヨシユアが尋ねると青年は笑いながら答える

「ふっ、仕事半分、道楽半分さ。しかしヤボ用ときたか……君たち

の正体が見えてきたよ」

「……なに？」

「ずばり、遊撃士だろう？」

これには四人とも驚いた

当たり前だ。たとえ棒術具や双剣などを持っていたとしてもそれは自己防衛と判断される方が多いからだ

「ど、どうして……遊撃士の紋章は外してるのに！　もしかして、あんたも同業者？」

「確かに帝国にもギルドはあるが生憎、ぼくは遊撃士ではない。ただギルドに何人か知人がいてね。彼らと似たような匂いがしたからひよっとしたらと思ったただけさ」

「大した観察力ですね……とても素人には見えない」

「あんた……ただの旅行者か？　それとも犬か？」

ヨシユアとイクスの睨むような視線に青年はまったく動じずまた笑いながら答えた

「ふふ、そんな風に睨まないでくれたまえ。冷たく煌めく琥珀の瞳……まるで極上のブランデーのようだ。そっちの君は銀の夜空のような髪に一際美しく輝く赤星のような瞳……うーん、どちらも思わず抱き締めてキスしたくなってしまっよう」

「なっ……！？」

「げっ……!？」

これこそ思わず後退りしてしまうヨシユアとイクス
女性陣も少なからず驚いている

「ま、大胆」

「ちょ、ちよつとお！ あんたそーいう趣味の人!？」

「ふっ……美しいものに目がないだけさ。玲瓏^{れいろう}たる美女。水もした
たる美少年達。天上の調べ、心洗われる風景。匠の傑作、魂震わせ
る物語。そして極上の酒と料理……そうしたもの全てがぼくの興味
の対象たりえるのさ」

金髪の青年が言葉を並べ立てた

「単なる節操ナシじゃない！」

「呆れ果てた快樂主義者ね」

エステルたちは言葉を失った

「はあ、いつの時代も天才は理解されないものだね。ガラスのよう
に繊細なぼくのピュアハートはブロークンだよ。黒髪と銀髪のキミ
……どうかぼくを慰めてくれたまえ」

「謹んでお断りします」

「っーか、死ね」

ヨシユアとイクスはきっぱりと言った

「（妙に話が弾んでやがるな……）」

店主は静観している

と、その時、外から兵士の声が聞こえた

「おーい、あんたたち」

兵士が酒場に入ってきた

「あら、さっきの兵士さん」

エステルたちが振り向いた

「つい今しがた、将軍がお戻りになったぞ。あんた達のことを話したら、すぐに会ってくださるそうだし」
兵士が言った

「え、ホント!?!」

エステルが驚くように言った

「至急、兵舎まで来てくれ」

そう言っつて、兵士は先に行ってしまった

「思ったよりも早かったですね」

「ええ、ようやく情報が手に入るわね」

エステルたちが兵舎に向かおうと外に出たら……

「ふっ……それでは行ってみるとしようか」

青年まで付いてきた

「って、なに自然に付いてこようとして（んだよっ）（んのよっ）
「？」

「また絶妙のタイミングで会話に割り込んできたわね……」

「ふっ、バレたか。何だか面白そうだから見物させてもらおうと思
つてね。さ、ぼくの話は気にしないで將軍とやらと話してくれた
まえ」

青年はさも事も無げに言った

「気にするに決まっとるわー！」

エステルが頭にきて叫んだ

「はあっ……仕方ねえ。エステル、お前達は將軍に会ってきてくれ。
俺は……」

イクスがため息を吐きながら青年に近づく

「この変態と『お話』してるから」

と、言つて青年の襟を掴みながら酒場に戻つていった
エステル達は冷や汗を流しながら無言でコクコク頷き、兵舎へ向か
つた

その途中でカエルが出す断末魔のような声が聞こえたが無視した
その方が断然良いからだ

蒼空語り 終

イクス

「はい、始まりました蒼空語り。司会は俺、イクスが担当するぜ」

エステル

「アシストは相変わらずあたしがやるわ」

イクス

「おーし、んじゃ、時間が惜しいからさっさと質問に答えるぞ」

エステル

「あれ、今回はどうしたの？ やけに早いじゃん」

イクス

「この後にあの変態と『お話』しなくちゃいけないからな。気絶か
ら覚める前に帰らねえと」

エステル

「『お話』って……あんた白い悪魔、もとい管理局の魔王じゃないんだから」

イクス

「いやー風花が俺のキャラ設定をどんどん高町なのはにしてやがんだよ。迷惑したらありゃしない」

エステル

「こいつ、本名言っちゃったわ！ 異名とかでぼかしてた意味ないじゃない！」

イクス

「うるせーな。っと、閑話休題だ。質問、いくぜ。HN『漆黒の牙』さんから『メイベル市長と会ったな。』

リュウガ「ああ、ってか確かにエステル達不法侵入かましてるな。いいのか、あれ。俺も人のこと言えないけど。」

まあな。

新アーツ

エレメンタルストライク：地・水・火・風：EP250：敵全体：

-の属性値無視の特ダメージ+ランダムに状態異常一つ（耐性無

視）：地12・水12・火12・風12・空10

チートクラスアーツのような気がするな、これ。状態異常の耐性無視は無限のフロンティアEXCEEDのとある技が元。

リュウガ「そのアーツやり過ぎだろ。あ、今回の質問は最近状態異常になったのか教えてくれ。」

もう一つは、イクスとエステルとヨシユアが模擬戦したら誰が勝つんだ。ちよつと気になった。ルールはなんでもありだが。つーかイクスとリュウガ戦わせたら、どっちが勝つんだ。

リュウガ「俺が負けるって。ほぼ初期能力だし武器ロングソードだし。」

それもそうか。力上昇1回だしな。

それでは、また。『……………ああ、たぶん、やった回数だけ勝者は違
うだろうな。そのくらい今の俺たちは力が伯仲している。だからま
あ……………俺だろうな』

エステル

「ジャイアニズム100%のセリフをどうもありがとう！」

イクス

「何、キレてんだよ。ほら、次はお前だ」

エステル

「もう……………HN『美空』さんから『エステル、馬鹿ですか!?!?」

天然馬鹿じゃなくて、ですか!?!?

まあ、天然じゃないか、エステルは。

質問

今のエステルたちの、お ブメントハは、

何がセットされてますか?『……………つてなによこれ!?!?」

イクス

「前回の質問を俺が的確に答えてやったんだよ。オーブメント?
変わっていないがまあ、いいか」

イクス

【ライン0】

攻撃 1

防御 1

行動力 1

妨害 2

精神 1
回避 1

エステル

【ライン1】

攻撃 1

防御 1

回避 1

妨害 1

【ライン2】

行動力 1

HP 1

ヨシユア

【ライン1】

行動力 1

防御 1

HP 1

駆動 1

攻撃 1

回避 1

イクス

「それから『おブメントハは』ではなく、『オーブメントは』が正しいです」

エステル

「今回はこれでおしまいね。どうだったイクス？」

イクス

「うーん……もっと砕けた質問もOKって感じだな。銀魂みたいな？」

エステル

「それは……色々和不味いんじゃないの？」

イクス

「んじゃ、またな」

エステル

「軽く無視された!？」

第一章 く消えた飛行船く memory…? (後書き)

やっと零の軌跡を終えることが出来ました

まさか、最後はあんな事になるなんて……

さすがにネタバレはしませんがとても充実していました
いったい、何時、零の軌跡を出せるんでしょう(汗)

久しぶりの後書きでした

それではごきげんよう

第一章 く消えた飛行船く memory…?

ハーケン門 兵舎前

「なんかカエルが潰されたような叫び声が聞こえたが、他の旅行者とケンカしたのかい？」

兵士が尋ねる

「そ、そんな大ごとじゃないわよ。ただ、さっきいた銀髪の子が旅行者と『お話』しているだけだから……それよりも……將軍さんにあわせてもらえる？」

エステルがため息を吐きながら言った

「そうか？ まあ、いいか。 ああ、入ってくれ。 閣下の執務室は、廊下の左奥だ。関係のない場所には、なるべく入らないでくれよ」

兵士はそう言ってエステルたちを兵舎の中に通した

ハーケン門 兵舎内

「廊下の左奥……どうやらここが將軍の部屋みたいだね」

ヨシユアが言う

「一応ノックしてと……」

エステルは緊張してボロを出さないような深呼吸してからドアをノックした

「……メイベル嬢の使いか？」

すると中から低く威厳のある男性の音が聞こえてきた

「あ、はい、そうです」

エステルが答える

「うむ、入ってくるがいい」

男性は言った。自分からは開けないらしい

「では、失礼します」

三人はシェラザード、ヨシユア、エステルの順に中に入った

「よく来たな。わしの名はモルガンという。アリシア女王陛下からハーケン門を任されておる者だ」

男性が入ってきたエステル達にそう声をかけた

威厳がある風格に兵士たちとは異なる王国軍の服に身を包んだ老男

性。この男性こそがモルガン將軍だった

「初めまして。メイベル市長の代理の者です」

「ご多忙な所を失礼します」

エステルたちが丁寧に挨拶する

「なに、メイベル嬢のことは彼女が幼いころから知っておる。まして市長としての話ならば尚更、聞かぬわけにはいかんだろう」

モルガン將軍は渋い顔で言った

この表情はデフォルトなのだろう
笑った顔は想像したくない……

「えっと、それじゃあ、まずはこれを読んでください」

エステルはメイベル市長からの手紙を渡した

「………………。ふむ…………。やはり例の事件についてか。本来ならば部外秘なのだが、あの子の頼みとあっては仕方ない。判っていることは全て教えよう」

モルガン將軍が言った

「やった、ラッキー」

エステルはつい喜んでしまった

「…………？ どうしてお主が喜ぶのだ？」

モルガン将軍がエステルを見て怪訝そうに尋ねた

「(まずっ……………)」

エステルは焦りヨシユアが冷静に急いでフォローした

「市長も今回の事件については、ずいぶん心配されているようです。それで、僕たちもできるだけ力になりたくて……………」

「そうか、メイベル嬢も良き協力者に恵まれて何よりだ。早速、捜索状況について説明しよう」

モルガン将軍は言う

「謹んで拝聴させていただくわ」

シエラザードさん、もう少し丁寧に言うべきだ

「……………定期船の《リンデ号》はボース国際空港を離陸してからロレントに向かう途中で失踪した。現在、各方面の部隊が捜索中だが、いまだに発見されてはおらん」

モルガン将軍は一息に言う

「ということは、魔獣の被害や事故の可能性は少なそうですね。わりと大きな船ですから、墜落したら初期の捜索活動で発見されているはずですし……………」

ヨシユアが予想を口にする

「その通りだ。実際、ボース　ロレント間の空路は比較の見晴らしのいい平原の上にある。ヴァレリア湖はもちろん、海に落ちた可能性も少ないはずだ」

モルガン將軍は言う

「は、っ、よかったあ。最悪の事態になってなくて……」

エステルは安堵に胸を撫で下ろした

「そうすると、人為的な理由で飛行船が奪われた可能性が高そうね。考えられる目的は、積荷の強奪と乗員乗客を人質にした身代金要求……」

シエラザードはさらに予想を言った

「いわゆる、ハイジャックですね。あと、地理的条件を考えると帝国軍による秘密工作の可能性もあるかもしれません」

ヨシユアも口にする

「は、話が大きくなってきたわね」

エステルは頭を痛そうに押さえる

「……………」

モルガン將軍は黙ってポカンとしていた

「どうしたの、將軍さん？」

エステルがモルガン將軍に気づき首を傾げながら聞く

「いや、民間人にしてはなかなか見所があると思つてな。我々も、帝國軍が関与している可能性もあると判断したため、徹底した情報規制を行っていた。国際問題、いや下手をすれば戦争まで発展しかねんからな」

モルガン將軍が言った

「戦争……」

エステルがその言葉に顔を俯むさせる

「だが、不幸中の幸いと言うべきか。今朝になってその可能性は消えた。ある組織が、王家と飛行船会社に犯行声明を送りつけた上で乗客の身代金を要求してきたのだ。その組織の名は《カプア一家》」

モルガン將軍が言った

「《カプア一家》？ そ、それつてまさか……」

エステルが気付いた

「……間違いなさそうだね」

ヨシユアも同様だ

「首領の3兄妹に率いられたボース地方で暗躍する空賊団だ。どう

やら、名前くらいは聞いたことがあるようだな？」

モルガン将軍が聞く

「聞いたことがあるどころかロレントでやり合ったばかりよ。あい
つらく、まさかここまで大きな事件を起こすなんて……」

エステルがいつもの軽い調子で口を滑らせた
これには場が一瞬固まった

「エステル……！」

ヨシユア、シエラザードが慌てて制したが、手遅れだった

「……あ」

エステルがしまったという顔だ

「ロレントでやり合った？ 奴らの一味が、ロレント地方に出没し
たという話は聞いたが………」

モルガン将軍は呆気に取られながら三人をマジマジと見つめた
そこでエステルは深くため息を吐いた。自分の行為に深く、深く
よく見ればシエラザードもため息を吐いていた

「……なるほどな。素人とは思えぬ口を利くからおかしいとは思っ
ていたが……まさか、こんな女子供が遊撃士だとは思わなかったぞ」

「な、なによ、女子供って！」

「ちなみに外にあと一人居ますし、一応、メイベル市長から依頼されたのは本当ですけど……」

反論やらい訳を言ってみた
途端、

「黙れ、姑息なマネをしおって！ 者ども、出合えいッ！」

怒られちゃった

しかもドタドタと兵士がオマケだ

「閣下、どうしました!？」

「この連中が何か!？」

「遊撃士諸君がお帰りだ！ 即刻、外につまみ出せ!!」

とまあ、こんな感じに情報収集は終わりを告げた

外でイクスはのんきに見張りの兵士と雑談していた
と、急に扉が開いた

終わったかな？ と思いきや扉に近づいたイクスだったが出てきたのは

「きゃっ!？」

「んなっ!？」

エステルだった
ぶつかった二人はそのまま、もつれあうように倒れ、後からヨシユアとシエラザードが出てきた

「いたた……大丈夫、イクス？」

「……後頭部と貧乳に当たった顔面がいてえ」

「こんの、変態があっ！」

「ぶべらっ！」

と、そんな夫婦（！？）漫才をしている時、シエラザードが文句を言った

「ちょっと！ 犬みたいに追い払うなんて、何考えてんのよ！」

それに返答したのはモルガン將軍だった

「ふん、同じことだろう。わざわざ身分を隠して情報を盗み出そうとするとは……そういう姑息な真似をするから遊撃士など信用できないのだ！」

これにはエステルと言い争っていたイクスも反応する

「おいコラ、くそじじい。何、勝手に決めてんだコノヤロー。大体、情報を教えてくんねーてめえらが悪いだろ？」

「たわけ、これだけの事件をたかが民間団体に任せられるか！ まったく……メイベル嬢にも困ったものだ。このような女子供を雇っ

て捜索活動の邪魔をさせるとは……」

ため息と共に出される発言にシエラザードはとうとう、イラツときた

「……いい加減にしなさいよ」

飛び出そうとするシエラザード。だがそれをイクスが止めた

「イクス……?」

「今回、俺出番少ないんですから俺に言わせてくださいよシエラ姉さん」

イクスはそう言うつとさらに一步前に出てモルガン將軍を睨んだ
もちろん、笑顔で

「あのさあ。俺たちはロレントの遊撃士なんだわ。それなのにどうして俺たちが管轄外のボースまで来たと思ってるんだ? あんたら軍人が、肝心な時にまったく! ぜんぜん! これっつぽっちも役に立ってねえからだろうがっ!」

「な、なにいいいい!」

これにはモルガン將軍も面食らった

笑顔で叫ばれたのだ。と、言ってもその笑顔、モルガン將軍にとっ
てはただの笑顔だが、横に待機していた兵士たちには魔王のような
笑みだった

「(うわ……)」

「（イクス、全力全開のマジギレだね……）」

「（あんだ……お願いだから言葉は選んでよ？）」

三人は慣れているから（慣れていても自分に向けられるのは嫌い）眉を潜めて心の中でため息を吐くだけだった

「ここ数カ月、《リベル通信》で見ってきたが、ボース地方で空賊の仕業と思わしき強盗事件が相次いでいたらしいな？　んで、何となく受付に聞いたが、ろくに捜査もせずにギルド任せにしていたらしいなあ？　で、今回みたいな事件が起こったとたん、偉そうな態度で場を仕切ったり……なのにい・ま・だ・に人質はおるか船の行方さえ掴んでいないお粗末さ。ははは、恥ずかしいとは思わんかね？　うん？」

確実に最後のは挑発的発言だ

当たり前にモルガン將軍はぶちギレた

「黙るがいい、小僧！　組織の規律に支えられた軍隊は気軽に動かせるものではないのだ！　後先考えず動いたあげく連中の一味を取り逃がしたくせに小生意気な口を叩くでない！」

「言っじゃねえかクソが……！」

一触即発

あと、一つでも起爆剤があれば確実に暴動が起きようとしたその時、

〃〃

軽快な音楽と共に声が聞こえてきた

「ふっ、悲しいことだね」

誰もが不思議がり声のした方を向いた
そこには……

「なっ、アイツまだ立てたのか!? つーか、ダメージがないだど
!?!」

まったくその場を空気を読んでいない金髪の青年がリュートを持って立っていた

しかし、実はこの青年。先ほど、イクスに『お話』されたはずだ。そうそう起きられるわけがないのに、平気で立っていたしかも、

「争いは何も生み出さない……ただ不毛な荒野を広げるのみさ。だからそんな君たちに、歌を贈ろう。心の荒野を潤して美しい花を咲かせられるような、そんな優しくも切ない歌を……」

そう言って、金髪の青年は誰も頼んでいないのにリュートを奏で始めた

「流れ行く 星の軌跡は……道しるべ 君へ続く……焦がれれば 思い寂しさと苦しさを 月が笑う……叶うことなどない
かない望みなら。せめてひとつ 傷を残そう……はじめての接吻くちづけは
さよならの接吻くちづけ……君の涙を 琥珀にして……永遠の愛 閉
じ込めよう……」

エステル

「アシストのエステルよ。そして……」

イクス

「今回が初めてとなるゲスト、蒼空語りの常連でもある漆黒の牙さんの作品、『サガ2 秘宝伝説GODDESSES OF DESTINY』からリュウガが来てくれました！」

リュウガ

「よう、呼ばれて来たぜ」

エステル

「いらっしやい。よく来たわね。どうやって、弄ろうかしら」

リュウガ

「待て！ 今、さりげなく酷いこと言ったな!？」

イクス

「さあ、そんじゃま、ゲストも混ぜつつ質問に答えようぜ！」

リュウガ

「俺の発言は無視かい！」

イクス

「最初はHN『ガイア』さんから『前話の時感想書けなくてすみません。』

質問は、エステル達のBPやランクはどうなっているのですか？
前話と今回も楽しく読みました。

がんばってください。『……BPは66、ランクは準遊撃士・7級だ。これからも精進しねえとな』

エステル

「そうね。それじゃあ、次。HN『ガンバルするがちゃん』さんから『初めましてガンバルするがちゃんだ

なに？ 神原駿河とは違うからな。覚えておけ

まったく、あの金髪の青年はどんな性格をしているんだ。

マゾ属性である私も凌駕しているぞ

まあ、それはさておいて質問、させてもらおう

……一、エステルがもしお嬢さま系の性格になってしまったらどうする？

二、ヨシユアがホモになったらどうする。またはエステルがレズ……いや、これは駄目だな。うん、百合にしよう。百合になったらどうする？

それだけだ

それではこれからも頑張ってほしい』……って、？は答えられるかー！！」

勢いで葉書を破るエステル

若干、リュウガが震えていたのは秘密だ

イクス

「えー、一はたぶん今まで通り、元気娘であり続けるだろう。んで二はエステルが怖いんで解答できません」

リュウガ

「あれ、今回は多いな……HN『純情可憐』さんから『すごく良かった。』というか面白かった

これからも期待したいです

質問は

一 今、エステルたちがイクスの闇鍋を食べたらどうなるか試してみてください

二 もしオリキャラを出すとしたらどんなにしますか？ やっぱ
りオリビエみたいに変態ですか？ それともイケメン又は美少女で
すか！？

それでは本日はこれにて御機嫌よう、です』……急用を思い出
した。かえ……」

ガシッ！

だが、横からイクスとエステルに掴まれた

イクス

「そうか。なら、お前に初めに喰ってもらおうかな」

エステル

「それじゃあ、あーん」

リュウガ

「……………パクっ（泣）」

……………

……………

……………

リュウガ

「……うまい」

イクス

「お、良かったじゃん。んじゃ俺も（パクっ）」

エステル

「あ、あたしも……（パクっ）」

すると、

エステル

「うばひゃああああああ！！！」

奇妙な奇声を上げながらエステルは倒れた

リュウガ

「ホント、危ないんですけどおおおおお！！」

イクス

「まあ、良いじゃねえか。当たらなかつたんだし。そんじゃ最後の質問、頼むぜ」

リュウガ

「そういう問題じゃねえだろ……HN『美空』さんから『ありやま。間違えてたね、うん。』

すみませんでしたあああああ！！！！！！

ご指摘ありがとうございます！

モルガン将軍とご対面ですねー（笑）

オリビエも出てきたし。

楽しくなりそう

新アーツ

ワイルドファミリア：火・地・幻EP30：敵中円

ダメージ、見方、術者

を中心に中円、STRアップ

：火15地10幻5

質問です！

エステルとヨシユアは、イクスの手料理で、

一番嫌いなものは、何ですか？（苦手なもの）

大体予想はつくけど、念のため…あはは…

いつも楽しく読んでます！

がんばってくださいね！』……俺は闇鍋だ。大嫌いだ！」

イクス

「とうわけでエステルの代わりに答えてもらいました。……どうだった？ 今回、ここに来て」

リュウガ

「二度と闇鍋なんか食いたくねえ……それ以外は楽しかったぞ」

イクス

「そうか。んじゃ、最後は思いでとして二人で飾ろうぜ。せーの」

イクス・リュウガ

「蒼空語り、完」

第一章 く消えた飛行船く memory…? (後書き)

漆黒の牙さん、どうでしたか？

なにか、あれば感想欄にお書きください

それでは

第一章 く消えた飛行船く memory:??

「改めて自己紹介をしよう。僕は、オリビエ・レンハイム。漂泊の詩人にして演奏家でね。知ってる通り、エレボニア人でリベールには巡業旅行に来たのさ」

結局、青年　オリビエに引き留められたエステル達は酒場に来て自己紹介されていた

「あたしはエステル……って、なんで自己紹介なんかしなくちゃいけないのよっ!?!」

「まあ、やり方はともかく、あの場を仲裁してくれたんだし。あ、僕はヨシユアといいます」

ヨシユアはエステルを諫めながら自己紹介をした

「俺はイクスヴェリア……ま、一応礼は言っておくよ」

「あたしはシエラザードよ。さっきは、あたしも頭に来て熱くなりすぎてたから助かったわ。イクスと同じで一応、礼をいっておくわね」

イクス、シエラザードも自己紹介をする

「ふっ、礼には及ばないよ。美と平和を愛するものとして、当然のことをただけさ……しかし是非にと言つのであれば、ぼくと一日デートに付き合っ、」

「そういつのはお断り。第一、そんなヒマは無いしね」

シエラザードはオリビエの言葉を遮りながら誘いを一蹴した

「それは残念だ。では代わりに、ヨシユア君に付き合ってもらおうとしようか」

オリビエはさして残念では無いようで代わりにヨシユアの方を向いて言った

「なんでそうなるんですか……タチの悪い冗談はやめて下さい」

ヨシユアは呆れながら断った

「心外だな。冗談のつもりじゃないんだが。ふむ……なら、君はどうだい？ 冥王君」

「……？ 俺の事か？」

不思議なあだ名に首を傾げるイクス
オリビエは頷きながら答える

「そつだよ。だからイクスエシア冥王なのさ」

「へー……誘いは乗らねえがな」

あっさりと蹴り飛ばすイクス
そこでエステルが口を挟んだ

「ちょっと待ちなさいよ。なんで、あたしは誘わないの？」

エステルがむくねながら尋ねる。誘ってほしいわけではないが何故、男のヨシユアとイクスが誘われて自分は誘われないのは疑問だからだ

「キミ？ 素材は申し分ないが、色気に欠けているのが問題だな。少しは、この3人を見習うといい」

「むっかー！ 色気がなくて悪かったわね！ しかも、男の子のヨシユアとイクスを見習えってどういうことよっ！？」

もちろんエステルはキレた。それはもう口から火を吐く勢いで

「お、落ち着いて。エステルは充分可愛いと思うよ。まあ、確かに……色気は少ないかもしれないけど」

「まあ、身体は割りと良いがな……着ている服が……ね」

ヨシユアとイクスがフォローに入るがまったくフォローになってないと思う

「あ、あんですってー！？」

エステルはその勢いそのままヨシユアとイクスを睨んだ
どちらも悪くない

「やれやれ……まあ、さっきも言った通り、あたしたちは忙しい身なのよ。ろくにお礼も出来なくて悪いけど、そろそろ失礼させてもらっわ」

シエラザードはそう言つと席を立ち上がった

しかしオリビエはそこで立ち上がらず一つ、頼んだ

「ふむ、だったら……ぼくも、ボースという街まで同行させてもらえないだろうか？ 何しろリベールは初めてだね。道案内を頼みたいのだよ」

「ま、そのくらいだったら別に構わないけど……」

「ちょっと、シエラ姉！」

「そのくらい良いじゃない。どうせ目的地は一緒なんだし。それに道案内というのも遊撃士の仕事のひとつよ」

エステルが反論の異を唱えようとするが簡単にシエラザードにあしらわれししぶしぶ頷いた
しかし……

「うー、しょうがないなあ。でもでも、コイツの毒牙にヨシユアが狙われたりしたら……」

「あの、エステル？」

「ヨシユア、心配しないで！ 間違いが起こらないよう、あたしが守ってあげるからね！」

エステルの決心は物凄く曲がってた
さすがのヨシユアもため息を吐く

「おーい、エステル？ 俺はいいのか？ 俺は？」

「あんたはいいのよ。『お話』があるから」

「あれ、万能じゃねーから……」

イクスもため息を吐く

様々な所で曲がっていたエステルだった

「人をケダモノみたいに言わないでくれたまえ。どちらかというとなりの愛の狩人と呼んで欲しいね。恋泥棒も悪くないが、ふふ……」

オリビエがまたも自己陶醉をし、頬を赤く染める

男が恥じらう以外で頬を赤く染めるといふものは気持ち悪い以外のなにものでもないな

「のーみそ膿んでる？」

エステルたちはやはり呆れる他なかった

「さてと、それでは早速ボースに出発するのでしょうか。キミたち、よろしく案内を頼むよ」

「さりげなく仕切ってるし……」

「っていつか、あんた！ 少しは人の話を聞きなさいよっ！」

エステルが怒った後、5人はボースに向かった

無駄な行程はパパッと省こう
ボースにとうちやく

「ほう、ここがボースか。思ったよりも都会じゃないか。あそこにある大きな建物がボースマーケットというわけだね？」

オリビエは辺りを見渡しながら聞く

「ふーん、詳しいわね。リベールは初めてなんじゃないの？」

「ふつ、旅に出る前に観光ガイドブックを買ったのさ。《リベール通信社》とかいう、こちらの出版社が出しているヤツ」

「ガ、ガイドブック？ そんなものまで売ってるの？」

エステルは驚くが本を出版している会社はこれぐらいしないと儲からないのだ

「ああ、一通り冷やかしてからディナーと洒落込もうと思ってね。ガイドによると、この街には三ツ星のレストランがあるそうだが？」

「あー、あたしたちが市長と打ち合わせしたところね。てゆうか、この建物がそうだけど」

エステルは右隣の建物を指差しながら教えた

「《アンテローゼ》ですね。本格リベール料理を出すっていう」

「確かに、美味かったな……」

「うん、ここで間違いなさそうだ。ふふふ……今から楽しみだよ」

「でも、まともに食事をしたら、かなりのミラを取られるはずよ？普通の酒場をお勧めするけどね」

シエラザードは一応、忠告しておいた

なにせこの《アンテローゼ》、遊撃士が普通に食事しようとしたら手配魔獣十匹の報酬でも足りないからだ

「心配ご無用。路銀はそれなりに持つてきたさ。それに余裕が無くなったら、ぼくの特技で稼げばいいからね」

「特技って……あの歌と演奏のことですか？」

「あ、あれでミラを稼ぐつもり？」

エステルたちは怪訝そうな顔をする

演奏は良かったが歌はどちらかというと音痴な部類に入りそうなのに

「ふっ、帝都の大劇場ではオペラの主演を務めた事もある。あの時はたしか、一晩だけで百万ミラを稼いだものだった……」

「嘘だー！ー!？」

さすがのイクスも叫ばずにはいられない

「（ウンくさ〜……）」

エステルも全く信じてない様子だ

「では諸君、ご苦労だったね。運命が再びボクたちを巡り合わせるまでしばしの別れだ。アディオス・アミ〜ゴ！」

そう言つて、オリビエは楽しそうにボースマーケットに走って行ってしまった

「は〜……とんでもないヤツだったわね。エレボニアの人間って、みんなあんな変人なのかなあ？」

エステルは疲れたような呆れたような顔をしながら呟いた

「あ、あれを一般的な帝国人と思われても困るけど……」

ヨシユアは苦笑しながらそれに答える

「……………え？」

「いや、もうちょっと真面目な人間が多いと思うよ。質実剛健を尊ぶ気風って何かの本で読んだことがあるし」

ヨシユアはそんな風に言う

「ふーん……それじゃあ単に、芸術家だから変わり者っていうだけなのかな？」

「謝れ。全世界の芸術家に謝れ」

「まあまあ。さてと……將軍から聞き出した情報をルグラン爺さんに報告しなくちゃね」

シエラザードにそう言われエステル達はギルドに向かった

「おお、お前さんたちか。何か事件のことは判ったかね？」

エステル達がボース支部に入るとルグランが待ってましたとばかりに聞いてきた

「えへへ……重大な情報を手に入れたよ！」

「んじゃ、説明しますね」

エステルたちは將軍から入手した情報をルグランに詳しく説明した

「空賊団の《カプア一家》……それは確かに重大な情報じゃな！
これで遊撃士協会としても方針が決められるというものじゃ。しかし、モルガン將軍というのも噂以上に遊撃士嫌いらしいのう」

「うん、ビックリしちゃった。遊撃士つて、ロレントじゃみんなに親しまれてる職業だから、あそこまで嫌われてるなんて……」

「にしちゃあ、異常だろ、あれは？」

「まあ、モルガン將軍は例外じゃ。普段は王国軍とギルドも、それなりに協力関係を保っておる。ただ、今回ばかりはお前さんたちに余計な苦勞をかけることになりそうじゃのう」

ルグランは肩を落としながら言う

「ま、こちらが出来ることを地道にやっついていくしかないわね。しかし、近ごろの強盗事件も例の空賊団の仕業だったみたいね？」

「うむ、ロレントの事件と合わせて考えると決定的じゃろう。しかし、強盗とはいってもセコイ事件が多かったんじゃないが……。まさか、これほど大胆不敵な犯罪を犯すとは思わなんだぞ」

「言われてみればそうかもな。ロレントで起きた事件はここと比べればしょーもない小さな強盗だったし」

「それが、定期船を乗っ取って王家を相手に身代金要求か……。たしかにリスクが高すぎますね」

イクス、ヨシユアが言う

「ふむ、そのあたりを踏まえた上で捜査すべきかもしれないわね」

シエラザードはいったん、結論付け今度は市長邸に足を向けた

蒼空語り 終

イクス

「はい、いい加減なところで終わり、始めました蒼空語り。司会は俺だぜ！」

エステル

「アシスタントも相変わらずあたし、エステルがやります」

イクス

「それにしてもオリビエのあれはスゲーな。どんなに『お話』してもすぐにケロッとしてるし」

エステル

「まあ、あいてはあのオリビエだからね……って、その口ぶりから何回かしたの？」

イクス

「いや、一回だけ。まあ、ボースの道のりに地味に数回偶然を装って足を蹴ったけど」

エステル

「なに、子供染みた真似してんのよ!」

イクス

「さあ、質問コーナーに移るか」

エステル

「やっぱり軽くスルーするのね!？」

イクス

「それじゃあ、HN『漆黒の牙』さんから『蒼空の軌跡にゲスト出演してどうだった？』

リュウガ「まさか闇鍋食わされるとは思わなかった。」

ジン「当たらなかつたからいいじゃん。」

リュウガ「それもそうだが、楽しかつたからよかつた。イクスも

面白い奴だったし、また今度行きたいな。」

そうか。よかったな。そしてエステルドンマイ。エリクサー送っとくよ（HPと技の回数全回復）。

リュウガ「しっかしオリビエはタフだな。連携技かましてストレス解消出来るか試してえ。」

あはははは……。

リュウガ「質問。イクス達の現在所得しているクラフトは何なんだ。教えてくれ。」……えー、俺は後でまとめるとしてエステルは全て。ヨシユアは『魔』以外だな」

エステル

「クラフトは少しずつ出していくけど何？ 『魔』って？」

イクス

「今は伏せておいた良いクラフトだよ。ちなみに俺は全てではないがこんな感じだ」

白虎撃

白虎蓮撃破

連爪白虎

魔王の笑み

エステル

「……魔王の笑みってデフォであるのね」

イクス

「さあな……んじゃあ、次、HN『美空』さんから『質問

1 蒼空の軌跡に、アネラスは出てきますか？

2 イクスは自分の闇鍋を、どう思いますか？

以上です

この小説も、エステルたちのブレイサ 活動も、

応援してます 頑張ってくださいね！』……もちろんアネラスは出るな。基本、原作に忠実だし。2は、別に？ 俺の最高の料理だけど？」

エステル

「あれを誇らないでよ！ 一体どれだけの人があれの餌食になったのか……（泣）」

イクス

「あれは当たりを引いたからだろ？ ちなみに俺は当たりを引いたことがない」

エステル

「……えー、じゃあ最後。HN『ガンバルするがちゃん』さんから『どうも、だ

今回も質問がある

一、ぶつちやけヨシユアは自分に恋敵ライバルでもいると思う？

二、イクスって趣味はなんなの？

それだけだ

またな』……？ どゆこと？」

イクス

「ああ、多分いないな。んで、俺の趣味は裁縫に調理、掃除とかだな。エステルたちの服だつて俺が作ったし」

エステル

「時々あたし、あんたにお礼を言いたいのよね。女としての特技を奪ってくれてありがとつて」

イクス

「ははは、いやそんなに誉められても……」

そう言いイクスは懐から何かを取り出す

イクス

「エステルの写真集（風花作）しか出せねえよ」

エステル

「つてえ、何出してんのよ！ それを渡しなさい！！」

イクス

「おつと それじゃあ、今回はこれで。またな」

エステル

「それを返せええええええええつ！！」

第一章 く消えた飛行船 memory:?

ボース市長邸にエステル達が到着すると扉の前にナイアルとドロシー、そしてリラがいた

「なあ、お譲ちゃん。頼むからそこを通してくれよ。市長から一言、コメントをもらうだけでいいんだからさ」

ナイアルがリラに頼み込む。どうやら取材をしたいらしい

「そうそう、ついでに写真も撮っちゃいますけど」

ドロシーが笑顔でカメラを持ち上げながら言う

「そう仰られましても……市長は多忙を極めておりました。アポイントメントのない方はお引き取り願っているところです。どうかご了承ください」

リラは困った顔で告げる。きっとそんな押し問答が続いているのだろう

「そこを何とか！ これほどの大事件なのに判ってることがロクにねえ……。読者に何か伝えてやりたいんだ！」

ナイアルは自分達の熱意を伝えようとする

「ですが……」

リラは少し言葉を濁す

見ている側からすればあと少しだろう
しかし……

「そうそう、そうですよー。噂の美人市長が表紙を飾れば部数倍増も間違いナシですし」

やはりというかなんというか、オチがあるというものだ

「……………」

リラはびみよくに固まった

「こ、こらドロシー！ なに失礼なことやってやがる！」

ナイアルが慌てて失言を取り消そうとする
が、

「え、ナイアル先輩が言ったんじゃないですかあ？ ネタがないんだったら美人市長を客寄せのアイドルに仕立てて紙面を稼いじまえてって」

ドロシーが気にせず喋り続ける

天然ばんざうい

「わ、バカッ！」

ナイアルがドロシーの口を塞ぐが時既に遅し

「

……………

……………

……」

リラは相変わらず黙って聞いていた

まあ、目は薄く開かれその目はとんでもなくシラーとしていた
っていうか三点リーダーだけでこんだけ字数を稼ぐのはたぶん、今
回だけだろう

閑話休題

「あ、あの、メイドさん？」

ナイアルがリラの長き無言に耐えきれず呼んでみた

「ふっ……ずいぶん面白いお客様ですね……お2人の話は、出来る
だけ詳細にメイベル市長に伝えておきますので。今日のところはお
帰りください」

リラが言った。ええ、そりゃとんでもなく良い笑顔で

「ま、待ってくれ！ これはちよつとした誤解なん、」

ナイアルは必死に取り繕うとしたが、

「お・帰・り・下・さ・い」

リラが有無を言わせない発言と笑みで返した

「はい……」

ナイアルはとぼとぼ踵をかえす

「あれ、美人市長の写真、撮らなくていいんですかあ？」

「頼む……頼むから……これ以上喋らないでくれ……」

ナイアルはものすごく泣きそうな顔をして去っていった
哀れ、ナイアル・バーンス……

「せ、センパイ！ 待ってくださいよー！」

ドロシーは状況を飲み込めぬまま追いかけていきました

「ふう……」

リラは二人が去ったのを見てため息をついた

「……………あらっ？」

「こんにちは、リラさん」

エステル達がリラに近づき挨拶する

「まあ、ブレイサーの皆さん。ハーケン門からお戻りになったので
すか？」

リラが先ほどの疲れなど一切見せずに聞く

「うん、まーね。ところで今の人たちって……」

エステルがリラに聞こうとしたが、

「不届き者です」

その一言で一蹴された

「はい……?」

エステルが素っ頓狂な声を出す
イクスなんかはただ笑っていた

「お嬢様を利用しようとする不逞ふていの輩だと申し上げたのです。私の
目の黒いうちは指一本たりとも触れさせません」

リラがきっぱりと言うとイクスはさらに腹を抱えて笑い出した

「ちょっとイクス、失礼でしょ」

「だ、だってよ……ははは、あんな風に自分で墓穴を掘るか!?
……ははははは……!」

「笑うところはそこっ!??」

「そこ以外になにかあるの!??」

「逆にツッコまれた!??」

エステルとイクスの漫才にリラはくすりと笑いながらドアを開けた

「さ、皆さんはどうぞ中へ。市長がお待ちになっています」

ボース市長邸 執務室

「市民からの苦情の処理……ボース上空の飛行制限によるマーケット商品の納入遅れ……下水道設備の修理について……女王陛下への贈答品の選定……アンセル新道での魔獣被害……もう、いつになつたら書類の処理が終わるんですのー！」

メイベル市長がお手上げの様子で叫んだ

「どうやら頭の情報処理能力が限界突破したらしい」

「あー……」

「あ、あら……？おほほ、皆さん。戻っていらしたんですか？」

メイベル市長は気まずそうに言う

「お忙しそうですけど……お邪魔してもよろしいですか？」

「こほん、もちろんですね。モルガン將軍からの情報ですね？早速、伺わせていただきます」

エステルたちはメイベル市長に、モルガン將軍から得た情報を詳しく説明した

イクスもそれを聞き墜落事故ではないことにほっとしていた

「……ご苦労様です。大体の状況は飲み込みました。空賊団によるハイジャック。そして身代金の要求ですか……。思った以上に深刻な事態ですわね」

メイベル市長が話を聞いた後、息を吐きながら安心したように言った

「遊撃士だってバレなければ、他にも掴めたと思うんだけど……」

「やっぱ、オチはエステルか……。もはや天然技だな」

「う……。今回は反論できないわ」

「まあ、墜落事故でないことが判明しただけでも助かりましたわ。これでボース市としても対策が立てられるというものです。早速、市民へのアナウンスと乗客の家族への対応を考えないと……」

メイベル市長が満足げに微笑みながら言う

「大変ですね……。ただでさえお忙しそうなのに」

「ふふ、それが市長の責務ですわ。ところで、犯人の正体は明らかになったわけですが……。引き続き、事件の調査と解決をお願いしてもよろしいでしょうか？」

メイベル市長がシエラザードに聞く

「もちろん、そのつもりよ。あたしたちも例の空賊団とは一度やり合った因縁があるからね。遊撃士協会の面子に賭けて、王国軍だけに任せてはおけないわ」

「うん、そつだよね！ 父さんのこともあるし、今度こそ決着をつけなくちゃ！」

エステルが意気込みながら宣言する

「……………」

しかしヨシユアとイクスだけは黙って色々と考えていた

「ん、どうしたの2人とも？ 難しいカオしちゃって……………」

エステルがそれに気づき二人の方を向いて尋ねた

「うん………… 色々と考えてみたんだけど。どう考えても信じられなくてさ」

「信じられない？」

「あの親父が空賊に遅れを取ったつーことだ。ロレントに現れた連中だけで実力を判断するのはどうかと思うが………… あれぐらい全力全開の俺一人でもあしらえるからな」

二人とも腑に落ちない様子だ

「確かにそれは言えるわね。あの程度の集団だったら、先生なら軽くあしらえるはずよ」

「もー、ヨシユアもイクスもシエラ姉も父さんを買いかぶりすぎだつて。確かに、けっこう腕は立つけど、集団相手じゃきついと思うし……………」

エステルは手をひらひらさせながら言う

まあ、それはあの男の本気を見たことがない故の判断だ

「……………あの、ちょっと宜しいかしら？」

メイベル市長は少し気になりながら一つ質問してみた

「エステルさんたちのお父様も例の船に乗っていらっしやっただの？」

「あ、話してなかったっけ……………恥ずかしながらそうなの。しかも遊撃士だったりして。カシウス・ブライトっていうんだけど……………」

エステルがため息を吐きながらその名を口にする

「カシウス・ブライト……………今、そうおっしゃいました!？」

メイベル市長は驚き席を立ちそうになった

「え……………うん？ ひょっとして知り合いとか？」

「直接の面識はありません。ですが、お話は伺っていますわ。そう……………そうだったのでか……………これはひょっとして軍との交渉に使えるかも……………」

メイベル市長は独りぶつぶつと呟く

「市長さん？」

「……………失礼しました。皆さんの胸中、お察ししますわ。事件の解決

に役立つのなら、どのような協力でも惜しみません。何かご入用になった時には遠慮なく申しつけてくださいませ」

メイベル市長は軽い会釈をしながら言った

ボース市

「うーん……市長さん、どうしたのかな？ 父さんの名前が出たとたん、やたらと驚いてたみたいけど」

外に出たエステルはメイベルの驚きように疑問を抱く

「そうだね……何となく想像はできるけど。市長さん、モルガン將軍と昔からの知り合いらしいからね」

「なら知っててもおかしくはないなあ」

ヨシユアとイクスには分かっているようだ

「……………?」

対して、エステルは全く分かっていない

「ま、それは置いておきましょう。それよりも問題なのは、これからどう動くかってことよ」

「うん……ただ飛行船や空賊団の行方を闇雲に捜してもしょうがないよね。そんな事で見つかるくらいなら軍がとっくに発見してるはずだし」

「「「……………」」」

ヨシユアとイクス、シェラザードが驚いた様子でエステルを見た

「ん、どうしたの2人とも？」

「エステル、成長したね……これまでの君だったら『しらみ潰しに探せばいい』のよ』とか言ってる所どころだけ……」

「まさかエステルの口からそんな言葉が聞けるだなんて……おねーさん、感無量だわ……」

「あれ……？ 俺、なんか涙出てきた」

ヨシユアとシェラザードが感動している。イクスに至っては泣きそっうになっている

「どーいうイミよっ！ まったく失礼しちゃうわね！」

「はは、誉めてるんだってば」

「そうそう、素直に受け止めとけエステル」

「そうよーさて、確かに、ロレントとは違ってボース地方はかなりの広さよ。何か手掛かりが欲しいところね」

シエラザードが言う

「手掛かりかあ……そうだ、さっき市長邸の前でナイアルたちを見かけたよね？ 記事のネタには困ってたみたいだけど……何か知ってる可能性ないかな？」

「確かに、僕たちより一足先にボース入りしているはずだからね。聞いてみる価値はあると思うよ」

「あの2人、どこ行っただ？」

エステルたちは事件の手掛かりを探すため、ナイアルたちを探すことにした

蒼空語り 終

イクス

「はい、蒼空語り始まったぜ。司会は俺が担当だ」

エステル

「アシストはあたし、エステルがするわ」

イクス

「今回は別段、何かが起こったわけじゃ、ねーな」

エステル

「そうね。しいて言えば……………ないわね」

イクス

「ないのかよ！　ったく……………質問にいくか」

エステル

「オツケー　それじゃあ、最初。HN『ガイア』さんから『今回も楽しく読みました。』

オリビエとエステルに質問です。

イクスのお話とアイナのお酒の相手どちらが楽ですか？

次も楽しみにしています。』　はははははははは！！！！」

イクス

「即答で壊れた！？　……………エステルはきつと両方だろう。んで、オリビエはアイナさんを知らねえから俺の『お話』だろう。をじゃ、次、HN『漆黒の牙』さんから『イクスの技って名前に白虎がついてるのが多いな。ってか魔王の笑みって（笑）。』

リュウガ「つかヨシユアの技あれが無いだけか。中元にダメージと遅延効果のあれ。」

らしいな。そしてイクスの幸運にびっくりだな。

リュウガ「闇鍋の当たりを引いてないって、何回食ったんだ。俺も当たらなかつたが。一回だけど。」

確かにな。とりあえず質問。クラフトは聞いたけど、スクラフトは何を覚えてるんだ？

リュウガ「俺からも。今のセピスの数はどのくらいなんだ？　教えてくれ。」『スクラフトなら書くとするか』

イクスはそう言って、突然現れた黒板に書いていく

エステル
烈波無双撃

ヨシユア
断骨剣

イクス
棒術

四神獣神撃

???

??????

シエラザード

クインビート

オリビエ

ハウリングバレット

イクス

「……と、こんなものかな？」

エステル

「明らかにネタバレな文がひとつあるわね……まあ、いいや。セピスは全属性、五百もないわね。クオーツを作るのにいつも使っちゃうし」

イクス

「だなー……さて、質問は終わったことだし、ナイアルを探しに逝

「こうぜ？」

エステル

「字が間違ってるわよ！……それじゃあ、」

イクス・エステル

「蒼空語り、完」

第一章 く消えた飛行船 memory:?

居酒屋 《キルシエ》

「ういー……チクショウ…… ったく冗談じゃねーぞう……うーん……ヒック……」

エステル達が居酒屋キルシエを覗いてみると案の定、ナイアルが酔い潰れていた

完全に泥酔状態だ

「見つけはしたけど、ベロンベロンに酔ってるわね。取材拒否されたことがそんなにシヨックだったのかな？」

「男のクセにだらしないわね。酒は呑むものであって、呑まれるものじゃないのに」

「底なしのシエラ姉さんと一緒にされてもな……」

イクスがため息をを吐きながら呟いた

「失礼ね、底なしっていうのはアイナみたいな女を言うのよ。あの女、いくら飲んでも顔色変わらずに平然としてるしね。あたしみたいに気持ちよく酔っ払う酒飲みと一緒にしないでちょうだい」

「よくゆーわよ。いくら酔っても潰れずに、ひたすら周囲を巻き込むくせに」

「そーだそーだ。巻き込まれる側の事もかんがえろー」

「シエラさんがザルとしたら、アイナさんはタガって感じかな。どちらも底なしには違いないと思いますけど……」

エステル、イクス、ヨシユアが口々に文句やらなんやら言った

「むづ……」

さすがのシエラザードも頬を膨らます
なんか可愛いぞ？

「……うーん　　うー、ここは……？」

「目、醒めたみたいですね。飲み過ぎは体に良くないですよ？」

「く……頭がズキズキしやがる……ってなんだあ？　新米遊撃士どもじゃねえか。おいおい、なんで俺がロレントなんかにいるんだ！　　？　　たしかボースまで歩いて……」

「なに寝惚けてんのよ。あたしたちもボースに来たの」

エステルが呆れながらも水を渡しながら答えた

ナイアルは渡された水を一息に飲み干すと安堵のようなため息を漏らした

「ふいーっ……まったく驚かせやがるぜ……おっと、こらまた色っぽい姉ちゃんと一緒にだな」

「初めまして、記者さん。シエラザード・ハーヴェイよ。この子たちの先輩にあたるわ」

シエラザードが自己紹介する

「シエラザード……おい、もしかして『銀閃のシエラザード』か？」

「あら、光栄ね。あたしの名前を知っているの？」

「ああ、噂くらいだがな。若手遊撃士の中じゃあ、1、2を争うらしいじゃねえか。となると、お前さんたちも例の事件を調べに来たわけだな？」

ナイアルはさつきまでの酔いが嘘みたいに消えそう質問した

「まあ、ね。そっちは何か情報集まった？ 市長さんちの前で見かけたけど、なんだか困ってたみたいじゃない」

「くくく……あれは全力全開で良い見物だったぜ くははは……」

「くそ、あれを見られてたのか……ああ、そうだよ！ ネタが無くて困ってたところさ！」

ナイアルは半ば開き直りながら言った

「あ、やっぱりそうなわけ？」

「なにせ、軍による情報規制のせいで事故かどうかも判らない状況なんだ。直接、モルガン將軍に会いにハーケン門に行こうとしたら検問に引っかかるし……ならせめて、噂の美人市長にインタビューしようと思ったら、メイドから門前払いを喰らうし……おまけに、あのトンチキ娘は事あるごとくへマをしでかすし……。おお、女神エイドス

よ！ 俺が何をしたっていいんですか！」

もう自棄の域に入っていた

ここでエステルは助け船

釣り餌だが

を出した

「追い詰められているわね、そんなに情報が知りたければ、教えてあげないでもないけど……」

「へ……？」

「俺たち、市長さんに協力する形で事件を調べてるんだ。市長さんの紹介があったから一応、モルガン將軍にも会ったぜ。まあ、俺は除いてだな」

イクスが理由を説明しておいた

「……………マジで？」

「おう、ガチで」

イクスが得意げな顔をしながら胸を張る

「おおおおお！ これぞ女神の助けだぜっ！ どうか頼む！ その話、俺にも教えてくれっ！」

「それは構いませんけど……ナイアルさん、こういう時のルールを忘れていませんか？」

ヨシユアが頭を下げた頼むナイアルに聞く

「……………え？」

「ふふ……………情報はタダじゃないってこと。代価が必要だって言うてるわけ」

シエラザードが代弁してあげた

「ミ、ミラを取るつもりかよ？ 自慢じゃねえが、取材費なんざとつくに使いきっちゃまったんだ！」

「情報屋じゃないんですからミラを取ったりしませんよ。ナイアルさんは事件直後にボース入りしていましたよね？ 色々と、面白そうな話を耳にしているんじゃないですか？」

ヨシユアが悪そうに、しかし表面上では笑顔で尋ねた

「チツ、大人しそうな顔をして、なかなか喰えない小僧だぜ。言うておくれ、こつちのネタはそれほど大したものじゃねえぞ？」

「事件に関係あることだったら、どんな些細な情報でも構いません。ただし……………出し惜しみは止めてくださいね？」

ヨシユアが冷ややかに言った。顔は笑顔のままだ

「わかった、わかりましたよ！ こちらが出せるネタは2つある。そいつで手を打ってくれ！」

ナイアルは必死に懇願する

「決まりですね」

「(ヨシユア、ノリノリだわ)」

「(フフ、こういう駆け引きはなかなか向いているみたいね)」

「(これからの政治的交渉はヨシユアに任せるべきだな、うん)」

エステルとシエラザードとイクスはこのやり取りを眺めてそう思っていた

改めて大きい机に座り直したエステルたち

「最初のネタは、西の方にあるラヴェンヌ村での目撃情報でな。ちよとドボースを訪れていた村人から聞いた話なんだが……事件があった夜、空飛ぶ大きな影がある村人によって目撃されたらしいんだ」

「空飛ぶ大きな影？ そ、それって……」

エステルが身を乗り出した。当然、定期船のことだろう

「ああ、例の定期船だって誰が聞いたって思うだろ？ だが実際、軍の部隊が行っても何も見つけられなかったらしい……」

「なーんだ。期待して損しちゃった」

「つまり、単なる見間違い？」

シエラザードが聞いた
一応確認のためだ

「だから言っただろうが！ 大したネタじゃないって！ こんなネタでも、情報規制下じゃ集めるのに苦労したんだからな！」

「ご苦労さまです。それで、もう一つのネタは？」

ヨシユアが有無を言わせず尋ねる

やはりヨシユアはこの手の才があると見える

「くっ……もう一つは、軍の情報部が動き始めているらしいってことだ」

「情報部？」

初めて聞く単語にエステルが聞き返した
シエラザードは聞いたことがあるのか知っている事を話した

「噂は聞いたことがあるわね。最近、王国軍に新設されたばかりの情報収集・分析を行う集団だって」

「ああ、王室親衛隊と並ぶほどのエリート組織だって触れ込みだけ。司令を任されているリシャル大佐という人物がこれまたキレ者っていう噂でな。今回の事件も、彼にかかったら解決確実と囁かれているらしい」

「ふーん……でも、あたしたちの捜査には役に立たない情報のよーな」

エステルが言う

確かに事件には関係のないことだ

「悪かったな、役に立たなくて！　だが、約束は約束だ！　お前たちも喋ってもらうからな！」

「ええ、それはご心配なく」

ヨシユアそう言いロレントで起きた事件やモルガン將軍から聞いた情報を一通りナイアルに伝えた

「空賊団の《カプア一家》……王家と飛行船会社に身代金要求……それだ！　そーいう決定的なネタが死ぬほど欲しかったんだよっ！」

ナイアルが満面の笑みを浮かべながら嬉しがる

「気に入ってもらえましたか？」

「おうよ！　これで記事が書けるってもんだ！　こっしちやいらねえ……ドロシーのヤツを見つけないと！　それじゃあ、またなッ！」

ナイアルは慌てて居酒屋を飛び出していった

その足運びには酔いなぞ一欠片もなかった

「す、すっごい勢い……」

エステルは驚いている

「よっぽどネタに困って追い詰められてたんだろっね。協力できて

良かったよ」

「よく言うな。物凄えのりのりで交渉してたクセに。ったく、人が悪いんだか性格が悪いんだか」

イクスはため息を吐きながら言う

「心外だな。ギブ&テイクを前提にしたネゴシエーション（交渉という意味）ってやつさ」

「ふふ、一理あるわね。遊撃士が相手にするのはまっとうな善人ばかりじゃない。クセのある相手との交渉ではしたたかさも必要になってくるわ」

シエラザードも笑いながら言う

「うー、あたしには向いてないような気がする……あ、それよりもさ！ 空飛ぶ大きな影の話、なんだか気にならなかった？」

「ラヴェンヌ村の目撃情報だね。軍の調査が入ったってことは何もない可能性が高いと思うけど」

「でも、その調査が完璧とは限らねえな……將軍のジジイじゃあ、ねーが軍人ってアタマ堅そうたる？ 見落としてることもありそうじゃね？」

イクスが率直に言う

「確かに完璧かどうかは判らない……ダメもとで調べてみる価値はありそうだね」

「ふふ、あんたたちも色々身に付いてきたじゃない。ラヴェンヌ村は、西にある果樹栽培が盛んな小さな村よ。西ボース街道の途中から北に向かう山道の先にあるわ。さっそく行ってみるとしますか」

シエラザードが道順を説明した

「うん！」

エステルは頷き、空飛ぶ大きな影というのを確かめるため、ラヴェンヌ村へと足を向けた

蒼空語り 終

イクス

「はい、始まりました。司会は俺がやるぜ」

シエラ

「今回はあかし、シエラザード・ハーヴェイがアシスタントを務めるわよ」

イクス

「……マジすか？」

シエラ

「大マジよ」

イクス

「……質問にいきましょう。HN『漆黒の牙』さんから『仕事終わって考えた質問、新アーツ。リュウガ、レン今回は頼む。』

リュウガ「おいおい。質問だが、現在のレベル及び装備は何だ？」

レン「新アーツは、」

レクスカリバー：EP150：風と水の複合：全体：特大ダメージ＋氷結50%：風15・水15・空12：巨大な氷塊を風と共にぶつけるアーツ。：補足・元ネタはFE暁の最上級風魔法。つかパクリ。

ライトニングバースト：EP200：風：全体：特大ダメージ＋封技50%＋封魔50%：風20・時10・空10・幻10：全ての相手に裁きの雷を降らせる。

ダークブレス：EP60：時：直線・地点指定：ADF無視のダメージ＋暗闇40%：時5・風3・空2・幻2：相手に闇の吐息を吹き付ける。：元ネタはFEの闇のブレス。

レン「かな。」

リュウガ「つかパクリって。」

レン「まあいいじゃん。」

リュウガ「……………」

レン「それじゃ、またねー。」

リュウガ「アレンジした！」

シエラ

「ああ、毎回質問やら新アーツを考えてくれる常連さんね。でも本編でほとんど出されてない」

イクス

「基本、戦闘はストーリー上のだけですから……でも見えない所で

「ちやっかり使ってるから安心してな」

シエラ

「で、質問の答えだったわね。全員LV14よ。服は……まあ、簡易な武装ね」

イクス

「簡単にすませちゃった……」

シエラ

「いいじゃない。それよりほら、次」

イクス

「えっと……今回はこれだけです」

シエラ

「……………」

イクス

「に、睨まないで！」

シエラ

「どーして、あたしの時だけこんな少ないのよおおおおおおお……！」

怒って鞭を振り回すシエラザード

イクス

「ぎゃあああああああああ……！」

……蒼空語り
完

第一章 く消えた飛行船く memory:?

ラヴェン又山道

「あれ……?」

先頭で山道を歩いていたエステルが声を上げた

「おっと……」

前から赤毛の青年が歩いてきたのだ
青年は無駄の無い筋肉をつけて背中にはいかにも重量のありそうな
大剣を背負っていた

「シエラザードか。珍しいところで会うもんだな」

「それはこっちの台詞だね。王都方面にいたと思ったけど、あんた
も事件を調べに来たクチ?」

「いや、ヤボ用でな……。そういや、例の事件は空賊の仕業だった
らしいな? しかし、お前が来たんだったら安心して任せられるっ
てもんだ。せいぜい頑張ってくれよ」

赤毛の青年がさらりと言った

それにはエステル達は眼を丸くした

「なによ、冷たいじゃないの。先生が捕まったかもしれないって、
あんたも聞いているはずでしょう?」

「捕まった？ あのカシウス・ブライトが？ はははッ、冗談キツイぜ！ あの喰えないオッサンが空賊ごときに遅れをとるもんか！ なんか間違いに決まってるさ」

赤毛の青年は本気でそう思っているらしく笑いながら言う

「あたしもそう信じたいけど……」

シエラザードが溜息まじりに言った

シエラザード自身も信じたくないが何しろ情報が少ないのだ。無理もない

「（何なのかしら、この人……）」

「（分からないけど……遊撃士であるのは確かみたいだね）」

「（だな。あんま言いたくないが……強エぞ、こいつ）」

エステルとヨシユア、イクスが囁きあう

「ところで……そのガキどもはなんだよ？ 見たところ、新入りみたいだが」

赤毛の青年は眼だけを一瞬動かしてエステル達を見たがすぐにシエラザードに視線を戻した

「ふふん、聞いて驚きなさい。カシウス先生のお子さんよ」

「こりゃ驚いた……あのオッサンの子供かよ。ふーん、こいつらがねえ……」

赤毛の青年がエステルとヨシユア、イクスを見回しながら呟く
どこか値踏みをしているようだ、とヨシユアとイクスは思った

「な、なによ？　じろじろ眺め回しちゃって……」

「黒髪の小僧はともかく……そっちの娘はド素人だな。本当に、オ
ツサンの娘なのか？　銀髪はその中間地点で把握しにくいが」

赤毛の青年がため息を吐きながら言った
それが値踏みした答えだった

「あ、あんですってー！？」

「彼女は正真正銘、カシウス・ブライトの娘です。僕と銀髪の方は、
養子ですけど」

「つーか、人を勝手に値踏みするんじゃないやねーよ赤毛が」

イクスはどうやらご機嫌斜めのようにだ
だが赤毛の青年はそれを軽くスルーしてヨシユアの言葉だけを聞いて
いた

「ふーん、そうなのか？　ま、そんな事はどうでもいいか」

「ど、どうでもよくないッ！」

「……じゃあな、シエラザード。ガキどもに足を引っ張られないよ
う、せいぜい気を付けるんだな」

赤毛の青年はエステルの言葉をやはりスルーしてシエラザードに声をかけた

「はいはい。あんたこそ突っ張りすぎて痛い目に遭わないよう注意なさい」

シエラザードは手慣れた様子で言った

「はは、肝に銘じとくぜ」

そう言つて、赤毛の青年は去つて行つた

エステル達を馬鹿にしたまま

「な、なんなのアイツ!? めちやめちやムカつくんですけどー!」

さすがのエステルも頭にきているようだ

「なるほど……今の人が《重剣のアガツト》か」

「あ? 《重剣のアガツト》?」

エステルとイクスが思わず聞き返した

それにシエラザードが答えてくれた

「アガツト・クロスナー。遊撃士協会の正遊撃士よ。特定の所属支部を決めずに各地を回りながら活動してるわ。得物は、魔獣を一刀両断できるほどの質量のある大剣……。言っておくけど、かなりの凄腕よ」

「ふん、凄腕だろうが失礼なヤツには違いないわよ」

「そーだそーだ！ ……そういえばよ、あの赤毛も親父の知り合いみたいだったな……」

「父さんの実力は認めているけど、好意的とはいえない態度だったね」

「色々と事情があつてね……。先生に対して突っ張ってるのよ」

シエラザード事情を知つてそうだったが教えてくれはしなかった

「ふーん……。まあ、どうでもいいか。あんな失礼なヤツのことなんか。ラヴェン又村へ急ぎましょっ！」

エステルたちは再びラヴェン又村へ向かった

ラヴェン又村

のどかな自然と良い香りを放つ果樹園が目印の小さな村だった

「ここがラヴェン又村……。ずいぶんのどかなところよね。あ、果樹園があるんだ」

エステルが辺りを見渡しながら言った

「果物の生産で知られてるけど、その昔は採掘で賑わつたそうよ。北の方に、廃坑になつた七耀石の鉱山があるって聞いたわ」

「ずいぶん詳しいですね。前にも来たことがあるんですか？」

「正遊撃士になるために、修行の旅をしていた頃にね。あの時は、飛行船に乗らずに王国全土を歩き回ったもんだわ」

シエラザードが過去を懐かしむように振り返っていた

「……？ 飛行船を使った方が便利なのに何故歩いたんすかシエラ姉さん？」

イクスが不思議そうに尋ねた

「『飛行船は確かに便利だが、五大都市しか行き来していない。その便利さに慣れてしまうと他の場所に目が行き届かなくなる。まずは、自分が守るべき場所を実際に歩きながら確かめてみる……』」

そんな風にカシウス先生に勧められたのよ」

シエラザードが隠すことなく教えてくれた

「へえ、父さんが……」

「確かに、事件が起こった時、そこが行ったことのない場所だと手遅れになる可能性もありますね。あと、犯罪者を追いかける時にも地理を知っていた方が有利ですし……」

「親父もなかなか言うね」

イクスも感心していた

あの、不良親父が真面目な事言っつてら、と

「ふふ、そういうこと。さてと、それはともかく……。例の目撃情

報について調べてみるとしましょうか」

「とりあえず、村の人全員に声をかけてみればいいのかな？」

「いきなりだと不審に思われるよ。まずは、この村長さんに話を聞いてみた方がいいと思う」

「ん、わかった」

エステルたちはラヴェンヌ村の村長に話を聞いてみることにし村長の自宅に向かった

ラヴェンヌ村・村長宅

「ほう、見かけない顔じゃな。果物の買付にでも来たのかね？」

ラヴェンヌ村の村長であるライゼン村長がおじやましたエステル達を快く迎えてくれた

「いいえ、商人じゃないわ。遊撃士協会から来た者よ。あなた、この村の村長さんね？」

シエラザードが言う

判ってて入ったわけではなかったらしい

「うむ、まあ一応、そういう事にはなつとるが……。遊撃士協会と言ったな。もしかしてアガットの仲間かね？」

「ま、たしかに同僚ではあるけど、一緒に行動してるわけじゃないわ。顔見知りといったところかしら」

「そうか……。相変わらず1人でいるのか」

ライゼン村長は少し寂しげに言いながら眼を伏せた

「……………？ どうしたの、村長さん？」

「や、こりゃあ失礼した。それで、ブレイサー諸君がこの辺鄙な村へんびに何の用事かね？ まさか、このあたりで手配魔獣でも出あったか？」

ライゼン村長が気を取り直して聞いた

「いえ、実は……定期船消失事件について調べている最中なんです。こちらで目撃情報があったという話を聞いたのでお邪魔しました」

「なんじゃ、その話かね。先日、王国軍の兵士たちも調べにきておったが……。結局、このあたりを調査してそのまま帰っていきおったぞ？」

ライゼン村長が言う

やはり情報通りだ

「やっぱりそうか……。ところで、空飛ぶ影つてのを目撃した人は誰ですか？」

イクスが呟きながら尋ねる

「村の子供でな。ルウイという男の子じゃ。事件があった夜に怪しげな影を見たらしいが……。なにぶん、子供のことじゃ。寝ぼけて夢を見たのかもしれない」

「うーん、夢か……」

「とりあえず、その子からも話を聞いた方がよさそうだね」

ヨシユアが言う

「ああ、そうだな。サンキュ、村長」

「村長さん、お邪魔しました」

イクスとエステルが最後にそう言って外に出た
ルウイという子供を探すために

池の棧橋の端っこに男の子がいた

「あれ、お姉ちゃんたち、見かけないカオだね……。フルーツ買いに来た商人さん？」

声をかけると男の子が逆に尋ねた

「ふっ、それが違うのよね。何を隠そう、プレイヤー遊撃士よ！」

エステルが気取って言った

エステル、少しは恥を知ろうな
イクスはそう思った

「ブレイサー？ アガットお兄ちゃんと同じ？ でもお姉ちゃん、
そんなに強そうには見えないけど……」

男の子が言った

さすがに純粹無垢な男の子の言葉にはエステルも凹む

「うぐつ。はつきり言ってくれちゃって……。でも、この華麗な棒
術を見て果たして同じことが言えるかしら！ やるわよイクス！」

「はいはい。……んじゃよつく見とけよ」

そう言つて、エステルとイクスは棒術具を構え、同時に回転させた

「わ、わわ！ クルクル回ってすごいや！」

「意外と好評だな……」

「イクス、大技で締めましょ！」

「委細承知。全力全開つと」

二人は回していた棒術具を上投げた
棒術具はくるくる回りながら降りてきて相手の棒術具を片手で受け
止めた

「すっごい」

「そう。ならもつと凄い技を……」

エステルが得意そうにそう言った時、

「エステル、はしゃぎすぎ。イクスはエステルを止めて。それよりも……もしかして君がルウイ君？」

ヨシユアがエステルを諷め男の子に尋ねた

「あ、うん……。どうして名前を知ってるの？」

男の子　　ルウイが怪訝そうな顔をする

「村長さんに聞いたんだ。君が、空飛ぶ影を見たってね。その時のことを聞きにきたんだ」

「え、でも……。兵隊さんが調べて何も見つからなかったって……」

ルウイは戸惑ったように言った

「うん、それでもいいんだ。僕たちにも教えてくれないかな？　できる限り詳しくね」

ヨシユアはルウイの目線まで自分の目線を下げて頼んだ

「う、うん………」

ルウイは黙って俯いていたがそのままの姿勢でぼつりぼつり話し出した

「あのね……ボク、星を見るのが好きなんだ。それで、夜中に家を抜け出して、ここで星を見たりするんだけど……。このあいだの夜、夜空に2つの影が動くのを見かけたの」

「え、ちょっと待って……。空飛ぶ影って2つもあったの？」

エステルが話の腰を折って尋ねた

「うん……。あっ、大きさは違ったよ。まるで親子連れみたいだった」

「大きさの違う2つの影……」

イクスはやはり、と思う

「定期船と空賊艇……。そう考えると辻褃が合うわね」

「確かに、森に現れた船は定期船よりも小型でしたね」

「それで、その2つの影は北の方に飛んで行っちゃって……。そのまま見えなくなっちゃった」

ルウイは指を指しながら話した

「北っていつと……」

「村の裏口からさらに山道が続いているわ。ずいぶん昔に廃坑になった七耀石の鉱山があるみたいね」

「ああ、シエラ姉さんが言っていた廃坑か」

イクスは指差した方を見ながら言った

「兵隊さんたち、北の山道をテツテイ的に調べただけど、なにも見つからなかったって……。だから、ボクが寝ぼけて夢を見たんだろって言うって……。それで……。バカにしたように笑って……」

ルウイの目がジワツと潤んだ

「ああ、もう……。男の子が泣いたりしないの！ あたしたちは兵隊とは違うよ。君の話が夢なんかじゃないって、ちゃんと証明してあげるんだから！」

エステルがルウイを元氣付けるように笑顔で言うてあげた

確証はない。だがエステルはやると決めたことはなにがなんでもやる少女だからやるであろう

「ほ、ホント……？」

「ああ、任せろ。この姉ちゃんは嘘を言ったことがない。それに俺は絶対に正直に話してくれた君を馬鹿にした野郎を許さねえ。君に謝らせるよ」

イクスがルウイの肩を優しく掴み断言した

イクスはこう言うことにするさい

「う、うん……。お姉ちゃん、お兄ちゃん、いいヒトだね！」

「（ふふ、相変わらず二人とも子供に好かれやすいみたいね）」

「(ええ……あれも人徳かもしれないね)」

シエラザードとヨシユアが小声で呟いた

「ん、どうしたの？」

「いや、何でもないよ。それよりも、やるべき事は決まったみたいだね」

「おう！ 早速、村の裏口から出て、北の山道を調べてみようぜ！
絶対に見つけてやらア！」

そうして、エステルたちは北の山道へ向かった
この時、イクスだけはルウイを家に送りに別行動をとった

蒼空語り

イクス

「始まりました蒼空語り。司会は俺、イクスだ」

エステル

「アシスタントはあたし、エステルよ。それにしてもさあ……」

イクス

「ん？ どうしたエステル」

エステル
「どーしてあたしの見せ場である棒術具の回転をイクスと二人でやらせたのかしら？」

イクス
「原作よりもパフォーマンズを見せたかったからじゃないか？ ほんら、原作ってただ回すだけだったし」

エステル
「納得がいかないけど仕方ないか……それじゃあ、質問コーナーに移りましょ」

イクス
「OK。HN『漆黒の牙』さんから『リュウガ』ナイアル復活したな。」

レン「うん。情報もらってうれしそうね。」

それだけ困ってたんだろ。しゃーないしゃーない。

リュウガ「確かに。そして作者よ、お前のアーツいつも思うが重くねえか？」

否定しない。

レン「しないじゃなくてできないんじゃない……」。リュウガ「話を食べるぞ。質問だ。ボース地方に入って最初にボコった敵って何だ。」「……へび、だったか？」

エステル
「たぶん……それじゃあ最後。H『ガイア』さんから『今回も楽しく読みました。』」

次はイクスは、モルガン將軍と初めて会いますね。
どう対応するか楽しみです。

質問は、ヨシユアのキャラ崩壊でどんなんですか？

ボースで一番苦戦した魔獣はなんですか？

次もがんばってください』……ヨシユア、キャラ崩壊するの？」

イクス

「や、わからん。まだ先の事は判んないし。苦戦した奴はオリビエです」

エステル

「待って！？ オリビエは確かに苦戦するけど魔獣じゃないわよ！」

イクス

「いいんだよ。あいつは……あいつだけは」

エステル

「言い直した意味無いわね！」

イクス

「それじゃあ、今回はここまで。まったな」

エステル

「あ、こら、逃げるな」

蒼空語り 完

第一章 く消えた飛行船く memory:?

廃坑

エステルたちはラヴェンヌ山道を抜けて廃坑に辿り着いた

そこには、廃坑の入り口は頑丈な鎖が巻きつけてあり、南京錠によつて封鎖されていた

「ここが廃坑の入口みたいだね」

「確かに、マルガ鉱山と同じような雰囲気は残っているけど……。ずいぶん寂れちゃってるわね」

「ずいぶん昔に閉鎖されたそうよ。鍵と鎖も錆び付いているわ。最近、開かれたことは無さそうね」

シエラザードが入り口で封をしてある錆びた南京錠を見て言った

「という事は、空賊たちが出入りした可能性もない……。だから軍も調べなかったのかな？」

「確かに、岩山の中を調べても、何かの手掛かりが見つかるわけ、……………」

エステルが話の途中で急に黙った
まるで何かを感じたようだった

「どうしたの、エステル？」

シエラザードが突然黙ったエステルを見て尋ねた

「あ、うん……。気のせいかもしれないけど……。中から、風が吹いてきてない？」

エステルが扉を指差しながら聞いた

「中からって、廃坑の奥から？」

「うん、そう」

エステルは頷く

「ちょっと待って……」

ヨシユアは人指し指を口に含んでから、そつと立てた

「……………本当だ。……………微かだけど風が吹いて来ている」

「あ、やっぱり？」

「あんたって、時々驚くほどカンが冴えることがあるわねえ。さすが先生の娘ってところかしら」

シエラザードは笑いながら驚いていた
その言葉にエステルは少し肩を落とす

「父さんは関係ないってばあ。それよりこの中……………メチャメチャ気にならない？」

「確かに、どこかに通じてる可能性があるかもしれないね。調べて

みる価値はありそうだ」

「よし、そうと決まったら、さっそく鍵をブチ破って……」

エステルは笑顔でそう言うと棒術具を構えた

「こらこら、止めなさい。とりあえず村に戻って、村長さんに相談してみるわよ。鍵を持ってるかもしれないわ」

「ちえーっ、残念」

エステルが悔しそうに言った

エステルたちはいったんラヴェン又村に戻ろうとしたその時、

「その心配は無用だぜ」

イクスが歩いてきた

「あら、イクス。遅かったじゃない」

「いや、ルウイを家に送ってから行こうとしたら村長に呼び止められましたね。わけを話したらこんなモノを貸してくれたんですよ」

イクスがそう言って取り出したのは無骨な大きい鍵だった

「うわ、ゴツそうな鍵……」

「やるじゃない、イクス。これで廃坑の中も調べられるわ」

シエラザードは廃坑の鍵を受けとり南京錠を開けた
それから巻き付けられていた鎖も外した

「さてと……早速、中を調べてみようか」

「空賊はともかく、魔獣がいそうな気配はするわね。気を引き締め
て行くわよ」

そう言つてエステルたちは廃坑の中へと入っていった

中は薄暗かったがそれでも困る、という程でもなかった
程無くしてエステルは廃坑の外に出た。どうやら谷間のようだ

「まぶし……ん、あれって……」

エステルは日の光に眼を細目ながらも何かがあるのに気がついた

「（静かに、エステル……）」

同じように気づいたヨシユアが小声で話した

「（これは、大ビンゴね……）」

「（大ビンゴ以上っスよ。やっぱりルウイの言ったことは間違いない
やなかつたんだ）」

エステル達の先には定期船の《リンデ号》とロレントに現れた空賊
艇があった

「重い資材は放っておいて、食料品と貴重品を優先するんだ。できるだけ急げよ。グズグズしてると連中が来る」

《リンデ号》の近くで以前、ジョゼットを助け出した青年　ジヨゼットにキールと呼ばれた青年がてきぱきと部下に指示を与えていた

「がってんだ、キール兄貴」

空賊である彼らは仕事の手を休めず返事をした

「（こ、こんな所に定期船が……あの子の話はやっぱり夢じゃなかったんだ……）」

岩陰に隠れて見ているエステル達が驚いて言い出した

「（ここは……露天掘りをしていた谷間ね……うまい隠し場所もあったもんだわ）」

シエラザードは辺りを見渡して言う

「（簡単に見つからないわけですね）」

「（あれは、定期船の積荷を空賊艇に運び込んでいるのか？）」

「（考えるのはあとあと！　また逃げられる前に、なんとか捕まえ

なくちゃ！」

エステルは棒術具を構えながらいつでも出られるように準備をする

「はあ、これで三往復目かよ……。まったく兄貴ときたら弟使いが荒くてたまらないぜ。まあいいや、これが終わったらゆっくりと身代金の交渉を……」

キールが嘆きながらぼやいていたその時、

「そこまでよっ！」

凜とした声が谷間に響いた

さすがに気を緩めていたキールは驚く

「なにっ!?!」

慌てて振り向くとそこには棒術具を持った少女と少年。双剣を持った少年。鞭を持った女性が立っていた

「この世に悪が栄える限り、真つ赤に燃える正義は消えず……」

少女は滔々と詩のような言葉を紡ぐ

「ブレイサーズ、ただいま参上！」

少女 エステルが高らかに叫んだ

わけの判らない事を

・
・
・
・

「……………あり？」

エステルが静かになった場をきよろきよろと見渡す

「なんなの、ブレイサーズって……………」

「まったくもう。すぐ調子に乗るんだから」

ヨシユアとシエラザードが完膚なきまでに呆れている

「な、なによう……………ちょっと外しちゃっただけじゃない」

エステルは顔が真っ赤になりながらも言い訳をする

「お前たちは……………ジヨゼットがやり合った連中！？ は、話が違
じゃないか！ どうしてこんな早く来るんだよ？」

「話が違う？ 早く来る？ なにワケ判らないことを……………」

エステルは不思議そうな顔をしながら首を傾げる

そんなエステルにお構いなしにシエラザードが早口で告げる

「遊撃士協会の規定に基づき、定期船強奪、乗客拉致の疑いであなた
たちを緊急逮捕するわ。覚悟はいいかしら？」

「ちよ、ちよつと待て。ひよつとしてお前ら……3人だけで捕まえに来たのか？」

焦るキールはエステルたちに尋ねた

「何よ、見ればわかるでしょ？」

「ふーん、なるほどね。あの連中とは関係ないわけか。だったら話は早い……しばらく眠っていてもらおうか！ やるぞ！」

キールは部下にそう叫んだ
だが返事はない

「お、おい……！？」

返事がないことにキールは横を向いた
そこでは

「やっぱりここはこう、ビシッ！ と構えた方が良くない？」

「いやいやそれだと一番前の人が目立たなくなっちまいやすぜ。ここは後ろの2人でこう、バシッ！」と

「あ、だったらこうしてあーしてここでキメッてのはどうだ？」

「お、良いねえ。ならそれで行こうぜ」

「……がつてんだ!」「……」

イクスと空賊メンバーがポーズを取って遊んでいた
そして、五人であるのギ ユー特選隊の構えをとった

「何やっているんだアアアアアア!!?」

思わずヨシユアが叫び刀身の腹でイクスを殴った

「ぐへやアアアアアア!」

「……ああ! 隊長!」「……」

吹き飛ばされたイクスに空賊メンバーが集まる

「テメエ、よくも隊長を!」

「うるさいですよ! 何、隊長つて!?! ギ ユー特選隊のポーズ
を取っていたからギ ユー隊長ですか!?!」

「ギ ユーじゃねえ、この方はギントキー又隊長だ!」

「ギントキー又隊長!? 何で!? なんでそんな変な名前!?
あれですか? 作者がイクスの声優をその人にしようとしているか
らか!?!?」

怒りのあまり、ツツコム速度が早いヨシユア

それに呆気にとられ見ているだけのエステルとシェラザードとキール
そして一番に解凍したのはキールだった

「おいおまえら！ そんなことしている暇があったらずらかるぞ！」

真面目に叫び何かを投げつけた
そこから煙が視界を覆う

「な、なにこれ……」

「しまった、煙幕！？」

エステルたちは何も見えない
ボカス力聞こえているが幻聴だろう

「積荷を残したのは残念だが、そのくらいは我慢してやる！ あばよ、ブレイサーの諸君！ ……あとお互いにあれは黙っていてくれ！」

キールは高らかに言った

最後のセリフは高らかじゃなかったけど
視界が開けたとき、空賊艇は空を飛んでいた

「ごほつ、ゲホゲホ……。ちよつと目にしみた〜……」

「大丈夫、毒性はない……普通の発煙筒だったみたいだね」

元に戻ったヨシユアは言う

「……見えなくなったわね。やれやれ、一度ならず二度までも取り逃がしたか。こりゃあ、あたしの方は降格されても文句言えないわね」

「もう、シエラ姉ってば……。そんな風に、自分一人が悪いような言い方やめてよね」

「僕たちにだって逃げられた責任はあります。悔やんでいる暇があったら、今できる事をしておかないと……」

「つーか逃げられたのはヨシユアが「頭、冷やすかい、イクス？」……ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

イクスは土下座して睨んでいるヨシユアに謝る

「まあ……幸い、定期船は取り戻せたし、よしとしましょう。さっそく調べてみるとしますか。中に乗客がいるかもしれないわ」

シエラザードはため息を吐きながら言った

「……うん！」

そうしてエステルたちは定期船の中を調べ始めた
定期船内部に入り操縦室、客席、展望室など全ての箇所を廻った
だが

「……結局、一通り調べてみたけど、誰もいないみたいね……」
誰もいなかった

それも積み荷もほとんどが運び出され、空に近かった

「どうやら、彼らの船で連れ去られた可能性が高そうだ。……たぶん、連中のアジトに」

「うん……。せつかく手がかりを見つけたと思ったのに……」

エステルが残念そうに眉を潜めながら呟く

「ほらほら。そんな辛気くさい顔しないの。まだ、手がかりが完全に無くなったわけじゃないわ。あの連中、どうしてもこんな場所に定期船を隠したんだと思う？」

「え……？」

エステルが不思議そうな声を出し眉を上げた

「あ……確かに、リスクや何やら考えたら定期船の導力機関オバルエンジンを抜き取って放置するよりもそのままアジトに行く方が断然楽だ」

「ご明察。それじゃあ、エステル。どうして、空賊達はこんな場所に定期船を隠して、効率の悪い運び方をしたと思う？」

シエラザードの問いかけにエステルはしばらく考えた
少し経って、躊躇いがちに考えを述べてみた

「アジトが特殊な場所にあるため、かな？」

「そう、まさにその通りよ。推測するに、彼らのアジトは少し特殊な場所にあるのだと思う。10〜15アージュ……。つまり、空賊艇程度の小型船のみ着陸できるような特殊な場所にね」

シエラザードが褒めながら説明した

「な、なるほど……」

「山岳や峡谷のような高低差の激しい入り組んだ地形……。そういった場所が怪しそうですね」

「山岳地帯……クローネ峠や霧降り峡谷が怪しいか？」

「ええ、あたしもそう思う。ただそうになると……あたしただけは限界だわ。歩いて辿り着けない場所にアジトがある可能性もあるからね」

シエラザードがまたため息を吐きながら言う

「ど、どうするの？」

「そうね……。不意だけど、事情を説明して軍に協力を要請すべきかもしれない。彼らは警備飛行艇を持っているから」

シエラザードは残念そうに最善の策を言う

「え〜っ……いまさら軍の連中に頼るの!？」

エステルはおおいに不満げに言う

確かにあんな一件があつた後ではあまり頼りたくない

「どのみち、この定期船のことを連絡しないわけにはいかないさ。彼らの態度がどうであれ、ここは協力した方がいいと思う。それで人質が戻ってくるんならね」

「うーん、そうね……。こだわってる場合じゃないか」

エステルも渋々それに賛成した

「とりあえず、ギルドへ戻ってルグラン爺さんに報告しましょう。ギルドの導力通信を使えば、ハーケン門に連絡できるはずよ」

そうして、四人はギルドへ戻るため、定期船を出したが、

「え、ええ〜っ!?! こ、これってどういうコト!?!」

「ハハ、これはさすがに予想外だね」

「うーん、連絡する手間が省けたと喜ぶべきかしら……」

「いや、むしろ不味いんじゃない?」

エステルたちの前には王国軍兵士が大勢いて、自分達
を取り囲んでいたのだ
定期船

「武器を所持した不審なグループを発見!」

「お前たち! 大人しく手を上げる!」

王国軍兵士がエステルたちに向かって叫ぶ
勘違いをしているようだが彼らはそれを勘違いではないと思っている

「まったく世も末だぜ。こんな女子供が空賊とは……」
そのうちの一人が言った

「だ、誰が空賊ですってえ！？ この紋章が目に入らないの!？」

エステルは怒鳴りながら襟に付けた遊撃士の紋章
『掲げる籠
手』を見せつけた

すると後ろから威厳溢れる声が聞こえてきた

「ふん、遊撃士の紋章か……。そのようなものが身の潔白の証になるものか」

すると兵士が横に移動して道を開く
歩いてきたのはモルガン將軍だった

「モ、モルガン將軍!？」

「どづしてここに……」

エステルたちはこの登場には少なからず驚いていた

「各部隊の報告に眼を通して調査が不十分と思われる場所を確かめ
に来たのだが……。まさか、おぬしらが空賊団と結託していたとは思わなんだぞ」

「言いがかりをつけるのは止めていただけにかしら？ 我々は、
そちらより一足先にこの場所を捜し当てただけだわ」

「ならば、空賊どもはどこだ？ その中に人質たちはいるのか？」

モルガン將軍は判ってそれを言っているのは確かだった

「空賊には後一步のところで逃げられてしまいました……。人質の

乗客もここにはいません」

「ふ、語るに落ちたな……。大方、我々がやって来ることをおぬしらが空賊に知らせたのだろう」

モルガン将軍が嘲笑しながら言う

「ちょ、ちょっとお！ いいかげんにしてよねっ！」

「それはこちらの台詞だ！ 者ども！ こやつらを引っ捕らえい！」

モルガン将軍が怒鳴りながら命令する

兵士はそれに従いどんどんとエステル達から武器を奪い拘束していく

「……………っ！」

「エステル。ここでもめても仕方ないわ。諦めて捕まりましょう」

「やれやれ……。シエラ姉さんにそう言われちゃ従わないわけにいかないだろうね。だけど……………」

イクスは拘束されながらも何とかモルガン将軍に近づく

「……………なんだ、小僧」

「どーしても今、はつきりさせないといけないことがあったもんですから……。将軍。この中にラヴェン又村に行った兵士はいますか？」

「なぜ貴様のような遊撃士に教えなければならん！」

「遊撃士として聞いてんじゃねーんだよ、こっちは。さっさと吐けやクソジジイ」

それには拘束していた兵士も怒る

「貴様！ 将軍になんという口の聞き方を！」

「構わん。……それを聞いてお前の何になると言っただ？」

イクスはへっ、と、薄く笑いながら言う

「別に。ただそいつにやってもらいたいことがあるだけだ」

「………………。おい。ラヴェン又村に行った者を呼べ」

近くにいた兵士にモルガン将軍が言い慌てて呼びに行く兵士
しばらくすると兵士が三人の兵士を連れて戻ってきた

「連れてきました」

「うむ。……で？ 貴様は何を頼むんだ？」

モルガン将軍に尋ねられイクスは彼らを見ながら一言、告げた

「 謝れ」

「は？」

「正直に話してくれた男の子に謝れ」

三人とも呆氣にとられていたがすぐにはあつ？ といった表情になる

「おいおい。なんで俺たちがガキに謝らなくちゃなんねーんだ？」

「お前ら……よくいけしゃあしゃあとそんな顔でそんな言葉を言えるなオイ。これじゃあ、軍は最悪だと言われても文句は言えねえぞ」

「なんだと!？」

「お前らはリベールを護るためにいるんだろ!? 民間人を護るためにあるんだろ!?!? なのになんで民間人を泣かせるんだ! お前らがロクに調査もしないで嘘だと決めて笑って……あの子は泣いていたんだぞ!？」

「イクス……」

イクスの本気の怒りにその場に静寂が包み込む
喋るのはイクスのみ

「だから謝れ。今からラヴェンヌ村に行って全力全開で謝って来やがれ!!」

「……連れていけ」

モルガン將軍は静かにそれだけ言ってイクス達を連れていかせた
そして、

「お前達は徒歩で村に行き、その少年に謝ってから帰還しろ」

「なっ……!？」

「認めたくないがあの小僧の言っている事は正しい。民間人を守る
我らが正直に話してくれた者を笑うなどと言語道断だ」

「は……はいつ!」

そう敬礼してから三人は廃坑に走っていきモルガン將軍は警備飛行
艇に向かった

蒼空語り

イクス

「はい始めました蒼空語り。司会は俺、イクスが」

エステル

「アシスタントはあたし、エステルがやらせてもらっわ」

イクス

「いや、俺格好良いねー。良いこと、言った!」

エステル

「自分で自分を誉めるな。っていつか出たわねヨシユアのキャラ崩
壊」

イクス

「ああ、出たな。風花の野郎、俺たちに何も教えずに前回の質問に答えさせたんだな。まったくもって許しがたい」

エステル

「そうね。いつかヤキを入れてやりましょう」

イクス

「おう。……そんな質問コーナーに移るか」

エステル

「OK 今回の最初で最後の質問はこちら HN『漆黒の牙』さんから『次はラヴェン又廃坑か。SCであそこの隠しくエスト最初気付かなかつたな。』

リュウガ（以下リ）「攻略サイトで知ったんだっけ？つかほとんどの隠しくエスト攻略サイトだしな。」

レン（以下レ）「それより次あたりかな？空賊団がまたでるの。廃坑で戦うからね。ジョゼットじゃないけど。」

リ「質問だ。イクス達ってあいつ（ラヴェン又村からの依頼の手配魔獣）狩ったのか？会話が狩ってない状態のものなんだが。」

レ「新アーツはありません。すみません。」

思い浮かばないんだよ。つか零の軌跡のアーツは派手だな。ついでに零の軌跡に関しての質問。《黒の競売会》に誰を連れて行ったんだ？ちなみに俺はエリイを選んだ。（別枠にセーブして他の二人の実績も取った。）今回はこれで。それじゃ、また。『……戦ってないわよね？』

イクス

「うん。今回はアガットが狩った設定だからな。んで風花は《黒の競売会》にはエリイを連れていったぜ」

エステル

「それでは『漆黒の牙』さん、もうちょっと砕けた質問を考えながら廊下に立っていないさい」

イクス

「いつの間に蒼空語りは『教えて！ 八先生』のように質問する人を立たせるようになった!？」

エステル

「いや〜……ノリ？」

イクス

「……エステルもサラッとボケるようになったな。 さて、今回はこれでおしまいだ」

エステル

「それじゃあ、まったね〜」

第一章 く消えた飛行船 memory:???

ハーケン門 兵舎内の牢

エステル達は廃坑から警備飛行艇に乗せられ、ここハーケン門に連行された

「明朝、將軍閣下自らの手で、あんたたちの尋問が行われる。そこで無実が証明されれば2、3日で釈放されるはずさ。ま、しばらくそこで頭を冷やしておくことだな」

兵士がそう言つて上に上がっていった

「はあ、冗談じゃないわよ……。こちらの言い分も聞かないで、こんな場所に放り込んでさ……」

「軍が空賊団を逮捕できれば疑いは晴らせるだろうけど……。こうなると無理かもしれないな」

ヨシユアが手元に戻つてきた得物の手入れをしながら言う

「え、どうして？」

エステルが返した

「廃坑で戦つた空賊リーダーの言葉を覚えているかい？ 『話が違つ』、『来るのが早い』って」

「そつといえ、そんなこと言っていたような言っていないかったような……。ん？ ヨシユアそれって……」

「うん。十中八区、軍の部隊だと思う。そしてそれが意味するのは……」

ヨシユアが言おうとした時、シエラザードが答えた

「軍内部に空賊のスパイがいる。もしくは情報を流す協力者のような人物がいる……。つまり、そういうことね？」

「はい」

頷くヨシユア

「そ、それが本当だったら絶対に捕まらないじゃない！ やっぱり、あたしたちが頑張るしかないっていうのに……」

「八方塞がりってやつね。こんな時に、先生だったらどう切り抜けるかしら……」

「やれやれ、ホントに参ったな。ぶち破って脱走したら即、指名手配だし……」

シエラザード、イクスがため息を吐きながら言う
その時、

「ふふふ……。どうやらお困りのようだね？」

どっかで聞いたことがあるようなないような青年の声が聞こえてきた

「あれ……ヨシユア、何か言った？」

「いや、僕は何も……」

「隣から聞こえてきたわ。しかも何だか聞き覚えのあるような……」

エステルたちは首を傾げている
そしてこえはまた響いてきた

「おお、つれない事を言わないでくれたまえ。この艶のある美声を聞いたら誰だかすぐに判るだろうに……」

青年の声に嘆きが入った
ついでにリユートらしき音も響く

「こ、この根拠のない自信……」

「そして自分に酔った口調……」

「さいじこのリユートの響き……」

「ひよっとしなくても、オリビエ?」

エステルたちが嫌そうに、しかし的確に判断して、シエラザードが
答えた

返ってきた答えは、

「ピンポーン」

正解音だった

「ああ、こんなところで再会することができるとは……。やはりボクとキミたちは運命で結ばれているらしいね」

やはりオリビエの根拠のない発言

さすがにこの場での再開には驚くエステル

「あ、あんた……。どうしてここにいるのよ？　ボースに案内したはずでしょ！」

もちろん尋ねるエステル

「しかも、こんな牢屋に閉じ込められてるなんて……。一体、何をしでかしたわけ？」

シエラザードも尋ねた

オリビエはやりわりと返す

「まーまー、そう一度に質問しないでくれたまえよ。これには海よりも深く、山よりも高い事情があるのさ」

「あっそ、だったら聞かない。ていうか聞いちゃったらものすごく疲れそうな気がする」

きっぱりとエステルは宣言する

これにはヨシユア、イクス、シエラザードが深く頷き賛成する

「偶然だね、エステル……。僕もそんな予感がするんだ」

「ナルシの話は聞きたくねえよ。それに眠い」

「そういうわけで、話してくれなくても結構よ。あたしたちの健康と美容のために」

だが、ナルシスト、その場の空気を読まないのがこの場にいたというか、オリビエだった

「はっはっはっ。そんなに遠慮することはない。一部始終聞いてもらうよ……ボクの身に起きた悲劇的事件をね」

「（聞いちゃいない……）」

そして勝手に語り始めた

「キミたちと別れた後……。ボクは、マーケットを冷やかしてから、レストランの《アンテローゼ》に入った。そして、存分に舌鼓を打った後、余興にグランドピアノを弾いたのさ。すると、レストランの支配人が身を震わさんばかりに感激してね……。レストラン専門のピアニストとして雇いたいと頼み込んで来たわけだよ」

「どうでもいいけど……。あんた、リユート弾きじゃないの？」

あまりにもツツコミたくないエステルだったがただ黙って聞くのは無理だったので聞いた

「フツ、天才というのは得物を選ばないものだよ。それはともかく……ボクはある条件を出してそのオフアーを受けたわけだ。ミラの代わりに、料理とワインを毎日タダでご馳走してくれってね」

「何て言うか……オリビエさんらしいですね。でも、それがどうしてこんな牢屋に入れられることに？」

「ああ、ここからが聞くも涙、語るも涙の話なのさ。その夜、さっそくボクはシエフに作らせた鴨肉のソテーに舌鼓を打っていたのだが……、血を使ったソースがまたたまらなく濃厚な味わいでねえ。どうしても普通の赤ワインでは物足りなく感じてしまったのだよ」

オリビエは哀愁を漂わせながら語る

「なんか無性に殴りたくなってきた……。それでお前はどうしたんだよ？」

こめかみをひくつかせながらイクスは聞いた

「貯蔵庫の奥に保存されていた良さそうな一本を拝借したんだ。

《グラン＝シャリネ》 1183年物」

「《グラン＝シャリネ》……しかも1183年物だと（ですって）！？」

何故かイクスとシエラザードが声を合わせて叫んだ

「それって王都のオークションに出た幻のワインじゃない！」

「ただ飲むだけでも良し。調味料として使うのも良し。万能のワインじゃねーか！」

シエラザードが驚愕しイクスは絶望しながら説明する

「ほう、シエラ君とイクス君はなかなか詳しいみたいだね。ボクも噂を聞いて、かねてから飲んでみたいと思っていたのさ」

「オ、オークションって……どのくらい値段がついたの？」

エステルは恐る恐るイクスとシエラザードに尋ねた

「聞いた話じゃ……50万ミラで落札されたそうよ」

「ご、50万ミラ！？ たかがワイン一本に！？」

「たかが？ そんだけ万能酒は貴重なんだよ！」

エステルは驚きイクスが食って掛かった

「とんでもない世界だね……。オリビエさん。まさかそのワインを……」

「ふっ、言うまでもない。美味しく頂かせてもらったよ。鼻腔をくすぐる馥郁^{ふいく}たる香り。喉元を愛撫^{あいぶ}する芳醇^{ほうじゆん}な味わい。ねえキミたち、信じられるかい？ 薔薇色に輝く時間と空間が確かにそこには存在したんだ……」

オリビエはさも嬉しそうに語る

壁で顔は見えないが絶対に瞳の奥では花畑が出来ているだろう

「……ダメだこりゃ……」

「……やっぱり疲れたね……」

「……マジで殺してえ。あの万能酒を……」

「……呆れてモノも言えない……」

エステル達はやっぱりという感じだ

「しかし、そうなると今度は料理の方が物足りなく感じてねえ。ワインに合うくらい逸品をシェフに作らせようとした時にちょうど支配人が帰ってきたんだ。ボクもケチじゃないからね。彼にも相伴ついでしてもらおうと気前よくグラスを勧めたんだか……、なぜか激しく立腹し始めてねえ。あれよあれよと言う間に、兵士たちがやって来たのだよ……それで……なんと……これがまた……」

オリビエは相づちを打たれなくてもかまわず一人喋り続けた

「以上が、ボクをここに送った涙なしでは語れぬ悲劇的事情さ
さあ！ 思う存分同情してくれたまえっ」

オリビエが話終わると高らかに言った
エステル達の感想は、

「……くーくー……」

「……すーすー……」

「……もう、死ねよ……」

「……うん……バカ……」

寝ていたので寝言だった

「……おや？ ちょっとキミたち……。その『くー』とか『すー』」

とか『もう、死ねよ』とか『うん、バカ』というのはなんだね？
いいかい？ 話はここから面白くなるのだよ？ここに連れてこられ
てからも更なる試練がボクを待ち受けて……………もしもーし？ ちょ
っと聞いてますかー？」

聞いていません

早朝

「おーい！ あんたたち、起きてくれ」

まだ日が昇り始めた頃、兵士疲れがたまつてよく寝ていたエステル
達を起こした

「うーん…………ふわわ…………。んー、眠いい……………」

と、まだ寝足りない様子のエステル

「…………どうしたんですか？」

と、ある程度は目覚めてはつきりとしているヨシユア

「くーくー…………ふにゅ、朝か…………？」

と、半分以上寝ているイクス

「あふ…………こんな朝早くから尋問なの？ さすがに勘弁して欲しい

わね」

と、変な寝言を言い起きたシエラザード

「いや、その反対だ。あんたたちを釈放する」

そんな事をさらりと兵士が言ったらすぐに眼を覚ました

「えっ……。ど、どうして急に……」

「何か理由でもあるんですか？」

エステルとヨシユアは同じ気持ちらしい
だが一先ず格子を潜る
すると、

「……こういう訳ですわ」

声が聞こえた

よく見るとメイベルとモルガン將軍こちらに歩いてきた

「し、市長さん!？」

「あらら。珍しい場所で会っじゃない」

「にゅ〜……しちよさん、おは〜」

エステルとシエラザードは二度目の驚き、イクスは寝ぼけながら挨拶する

案外、肝が据わっているのかもしれない

「皆さん、大変でしたわね。ですが、もう安心して下さい。皆さんの疑いは晴れましたから」

メイベルは微笑みながら言う
だが隣にいるモルガン將軍は渋い顔のままだ

「フン、まだ完全に納得した訳ではないがな……。まあ、メイベル嬢たつての頼みだ。せいぜい彼女に感謝するといい」

「えっと、それって……。市長さんが、あたしたちをかばってくれたっていうコト？」

エステルちよつと混乱しながら尋ねる

「かばつたわけではありませんわ。ただ、皆さんの事情について閣下に説明しただけですから」

「あたしたちの事情……。？」

首を傾げるエステル

それに返したのはモルガン將軍だった

「……。その3人。おぬしらに1つ質問がある。カシウス・ブライトの子供というのは本当なのか？」

「へっ……」

「はい、仰るとおりです。彼女はエステル・ブライト……。僕は養子の子ヨシユアといます」

「同じく養子のイクスヴェリア……。ま、長いからイクスにしてくれ」

呆けていたエステルに代わり、ヨシユアとイクスが答えた

「そうか……。確かに、そちらの娘にはレナ殿の面影が残っておるな」

モルガン将軍がエステルを見ながら言う

これにはまた驚くエステル

「……！ お母さんを知ってるの！？」

「ロレントの家を訪れた時に何度か手料理をご馳走になった。フフ、赤ん坊だったおぬしにも会ったことがあるぞ」

初めてモルガン将軍が微笑みながら言った

「ちょ、ちょっと待って……。モルガン将軍って父さんの個人的な知り合い？ 父さんが昔、軍にいたのはあたしも知っているけど……」

「フン……。遊撃士としてのヤツは知らん。わしが知っているのは軍人としてのカシウスだけだ。稀代の戦略家と呼ばれた、な」

「戦略家？」

エステルが首を傾げた

戦略家とは文字通り、戦略に長けた人のことだ

「まったく、何を好んで遊撃士協会などに……。……ええい！ 思
い出すだけで腹の立つ！ わしはこれで失礼する」

モルガン将軍はまた何かぶつぶつ言いながら去って行った

「ど、どうなってるの？」

「フフ……。エステルさんのお父様は優秀な軍人だったそうですわ
ね。退役する時、何度も引き留めたと将軍閣下から伺ったことがあ
りますわ」

「そ、そうだったんだ……。なんだか信じられないけど」

エステルは肩を落としながら言う

「しかし、そうになると……。将軍の遊撃士嫌いは先生が原因かもし
れないわね。目を掛けていた部下に去られた悔しさから来ているの
かも……」

「なんかそれっぽいですね」

「っーかそうだろう……」

「じゃあ何、父さんのせいであたしたち苦勞しているわけ？ あ、
あんの極道オヤジいっ！」

エステルは怒りながら一つ決めた

あの不良中年、いつか絶対にぶっ飛ばしてやると、と
メイベルはそれを見て笑っていた

「フフ……。さて、それでは皆さん。ボースに戻ると致しましょう。定期船が見つかった事で、事件は新たな局面を迎えました。色々と相談したい事があるのです」

「あ、うん……………」

エステル頷いたが何故か首を傾げていた

「あら、どうなさったの？」

「帰るのは賛成なんだけど、何かを忘れてるような……………」

「そういえば……………」

「あれ……………」

「何だったかしらね……………」

全員で首を傾げた時、

「ああ………… 人は何と無情なのだろう。一夜を共にした仲間のことを
いとも簡単に忘れ去るとは…………。なんとという悲劇………… 何というやる
せなさ…………。いいさ、ボクはこの暗き煉獄で一人朽ち果てて行くと
しよう……………」

隣にいたオリビエを思い出した

たしか夜中まで延々と語っていた

「アレがいたか……………」

「うーん……完全に忘れ去っていたわね」

「忘れていたかった……」

「気の毒とは思いつけど、さすがにどうすることも……」

さすがにエステル達がオリビエを牢から出すのは困難だとするとメイベルがオリビエに気付いた

「そちらの方は……噂の演奏家の方ですわね？ 《グラン＝シャリネ》を勝手に飲んでしまったという」

「フツ、いかにも……。しかしレディ。勘違いされては困るな。あれは前払いだよ。華麗なるボクの演奏に対するね」

市長と知っているか怪しいがいつも通りに返すオリビエ

「フフ、面白い方ですわね。まあ、ついからですから貴方も釈放していただけるよう將軍に掛け合っただけ差し上げますわ」

「ほう……？」

さすがのそれにはその場の全員が驚く

「さ、さすがにそれは無理があるような……」

「レストラン側が訴えれば、少なくとも訴訟にはなるはずよ」

だが、

「ふふ……その心配はありませんわ。あのレストランのオーナーはわたくしですから」

さらっととんでもないことを口にした

「え……」

「あの《グラン》シヤリネもわたくしが競り落としたもの。これならば問題ないでしょう？」

結局……

ボース市長邸

「まさか本当に釈放されちゃうなんて……」

エステルは呆れて咳く

そつ。オリビエはいとも簡単に釈放されてしまった

「まったく、大した悪運なこと」

シエラザードも同じ気持ちらしい

「はっはっはっ。そんなに誉めないでくれたまえ」

「誉めてない誉めてない」

イクスは疲れながらツツコミ

「しかし、タダであのワインを飲んだとあっては心が咎めるな。契約通り、レストランでピアノを弾かせていただけだろうか？」

「それは遠慮しておきますわ。さすがに、あの騒ぎの後だと色々と気まずいでしょうから」

やんわりと出された提案にメイベルはやんわりと断った

「（うーん、コイツだったら全然気にしないと思うけど……）」

「（確かに凶太そうだしね……）」

「（むしろ暴走しそうだな……）」

エステルとヨシユア、イクスは冷ややかにオリビエを見ながら小声で呟く

「まあ、今回のことはお互い不幸な事件と割り切りましょう」

「しかし……それではボクの気が済まない」

「ふむ、そうだな……。ちょうど、エステル君たちが何かの調査をしているようだね。ワインの礼に、彼らの手伝いをするというのはどうだろうか？」

また唐突にオリビエは提案した

「ハア？」

「あら、それは面白いですわね。お願いしてもいいでしょうか？」

「フツ、お任せあれ。そう言うわけだ。キミたち、よろしく頼むよ」

許可の出たことにオリビエは爽やかに言った
さすがに反論するエステル

「ちょっと待って……どーしてそうなるのよっ!？」

「素人に付いてこられても正直言って迷惑なんだけど……。足手まといにならない自信は？」

シエラザードは一応彼の實力を以前案内したときに知ってはいたが
もう一度、確認のために聞いた

「銃と魔法にはいささか自信がある。無論、ボクの天才的な演奏と
一緒にされても困ってしまうが」

「そーいうセリフが激しく不安を誘うんですけど」

「でも、悪くないかもしれないね。軍が当てにならない以上、僕た
ちも人手不足な気がするし」

「ま、これも成り行きか……。俺は構わんよ」

エステルはそれでも反対だがヨシユアとイクスは賛成のようだ

「……まあ、いいわ。協力してもらおうとしますか。ただし、足
手まといになると判断したら外れてもらうけど……。それでもいい

かしら?」

「フツ、構わないよ。決して失望させたりしないから、どうか安心してくれたまえ」

あっさり条件を飲むオリビエ

「うーん、失望するもなにも最初からそんなに期待してないし」

「フフ……話がまとまって何よりですね。それはそうと、皆さんに報告する事があるので」

メイベルがまとめる

「報告すること?」

エステルが聞き返す

シエラザードも反応した

「そういえば、ここに来るまでに街が騒がしかった気がするわね。何かあったの?」

「はい……。実は昨晚、ボースの南街区で大規模な強盗事件があったのです。武器屋、オーブメント工房をはじめ、何軒かの民家が被害に遭いました」

その報告に驚くエステル達

まさか自分達がない間にそんなことが起こっていたとは

「ええっ!?!」

「やっぱり……例の空賊たちの仕業ですか？」

「今のところは不明ですが、その可能性は高そうですね。現在、王国軍の部隊が調査を行っている最中ですわ」

メイベルが報告する

「なるほど、あたしたちもすぐに調査した方が良さそうですね」

「ええ、お願い致します。ここまでの調査のお礼はギルドにお支払いしておきますわ。当座の調査費用として、どうぞお役に立ててくださいいな」

「また軍の連中に邪魔されそうな気がするけど……。ま、そうならその時だよな」

前向きに明るくエステルが言った

「邪魔されるのはともかく……。こちらが情報を掴んだとしても、軍には伝えない方がいいと思う。本当にスパイがいるとしたら空賊たちに筒抜けになるからね」

「不本意だけど仕方ないわね。とにかく、慎重に行動しましょう」

「フツ、それでは諸君。さっそく南街区に行くのでしょうか」

「だ〜から！ どうしてあんたが仕切んのよっ！」

とにかくにも、エステルたちは被害状況を調べるため、オリビエ

を仲間に入れボー南街区に向かった

蒼空語り

イクス

「はい始まりました蒼空語り。司会はお馴染み俺、イクスと」

エステル

「アシスタントのあたし、エステルが進行させてもらうわ」

イクス

「さっそく質問に移りますか。最初はHN『4ch+』さんから
初めまして、こんばんは（^ ^*）ノ

毎度、楽しく読んでます。

次はエステル達がオリビエに再会しますね…牢屋で（笑）。

ここで、変な質問です。

魔王化イクスvsシエラ姉（泥酔）だと、どっちが恐いですか？
ついでに、空の軌跡に関係ないけど、《黒の競売会》って「ブラ
ッティオークション」じゃなくて、シュバルツオークションじゃな
いですか。』……先に済ませとくと確かにシュバルツだ。的確な答
え、りがとう！」

エステル

「そして質問の答えは断然イクスよ！さすがに怖すぎよ……。そ
れじゃあ、次。HN『漆黒の牙』さんから『うわーヨシユアがキャ

ラ崩壊したよ。

リ「っーかイクス何やってんだ。ギ〇ユー特選隊の真似って（笑）」

レ「あとヨシユアがな〇はさんの名セリフを微妙に違うけど言ったね。」

そこは気にしない方向で。ここでさらに魔眼使えばいいかもな。

リ「はいここで質問。魔眼って今覚えてるのか？」『……ヨシユアどうなの？』

ヨシユア

「正確には使えますけど現在は使わないようにしているんです」

イクス

「ま、ヨシユアなりの考えがあるって事だな。そんじゃ、最後。HN『ガイア』さんから『今回も楽しかったです。』

前回の質問のヨシユアのキャラ崩壊を本編でしてくれると思っていませんでした。

本編で答えてくれてありがとうございます。

風花さんに質問です。

零の軌跡の実績はどうなっていますか。

自分は、100プレイを目指しています。

次回も頑張ってください！』はい、風花、返答しろ」

風花

「あはは……元からヨシユアの崩壊は考えていたんですけど出していいやら迷っていたんですがガイアさんの質問で出すことができました。こちらからもありがとうございます。質問は、とにかく達成していないところを埋めていきます」

イクス

「サンキューー。んじゃ今回はここまでだな」

エステル

「そうね。それじゃあみんな」

イクス・エステル

「ばいばい」

第一章 く消えた飛行船く memory…??

ポース南街区・ルシール工房

「ふう、可愛く撮れたつと。ナイアル先輩く。こんな感じでいいですかあ？」

眼鏡の女性　ドロシーがナイアルに聞いた

「ああ、そんなもんだろ。しかしこりゃあ、根こそぎやられちまったようだな」

ナイアルはそう返す

「……………ん？」

その時、ナイアルが階段を昇ってやってきたエステルたちに気付いた

「こんにちは。さっそく取材ですか？」

「ご苦労さんね、あんたたちも」

出会った早々、エステルたちがナイアルたちに言った

「おっと、お前さんたちか」

「あー！ エステルちゃんとヨシユア君とイクス君！ よかったねえ、釈放されたんだ」

ドロシーはいつも通りにマイペースに言った

「聞いたぞ。軍の連中にとっ捕まったんだってな。いっや、ホント心配したぜ」

「なに他人事みたいに言ってくれちゃってるかな。ナイアルの情報を元に村に行った結果なんですか?」

「おいおい、そりゃ逆恨みだろ」

「ナイアルさんたちも廃坑には行ったんですか?」

ヨシユアはそう尋ねる

答えたのはドロシーだった

「そうだよ、昨日のうちにね。ヨシユア君たちは連行されちゃった後だったけど」

「しかし、逮捕の現場にいたら面白い写真が撮れたんだが……。ホント、惜しいことをしたぜ」

「こ、これだからマスコミの人間ってのは……」

「なんかちよつとイラッてきたな、うん、マジで」

そんな冗談混じりの言い方にナイアルは苦笑してシエラザードが言葉を發した

「それよりも、この有様はやはり空賊の仕業なのかしら?」

「ああ、そうみたいだな。軍の連中も手がかりを調べているらしい

が……。正直、何もないみたいだぜ」

「そう、やっかいね……」

シエラザードはため息を吐きながら考え込む

その時、オリビエが話しかけた

「記者君、ちょっといいかい？ 空賊たちは、街のどこから侵入したのか分かるだろうか？」

「ああ、目撃情報によると西口方面に去ったらしいが……」

「フム、それはおかしいな。西口に入ってすぐの所には、市長邸やマーケットもある……。それらを襲った方が遥かに実入りが良さそうだが……」

「言われてみれば確かに……ところで、あんたダレ？」

今頃になってナイアルが尋ねた

「フツ、よくぞ聞いてくれたね。オリビエ・レンハイム。漂泊の詩人にして天才演奏家さ。噂くらいは聞いているだろうか？」

オリビエが自己紹介をした

名前を言うときに付け足すのはもう癖なんだろうか
あえてツツコミ奴はいないが

「あゝ、高級レストランでワインを飲み逃げしたっていう。お目にかかれて光栄ですう」

「ははっ、照れるじゃないか。インタビューならいつでも受け付けてあげよう」

「うわー、いいんですかあ？」

喜ぶドロシー

これはとんでもない同類と鉢合わせてしたみたいだ

「アタマ痛くなってきた……」

「何て言うか……ある意味同じタイプかもね」

「これは……混ぜるな危険に該当しそうだ。むしろそれそのものだな」

「なんで一緒に行動してるのかは聞かないでおくことにするぜ……」

「ま、それが無難でしょうね」

この二人にツツコミをするのは時間の無駄だと判断し、しばらく放っておいた

その三十分後にエステル達はナイアル達と別れた
いくらなんでも相性良すぎだ

色々、家を回って聞き込みをしようとしていると、

「おい、お前たち！」

王国軍の士官がエステルたちを呼び止めた

「ん、どうしたの？」

「一言、忠告しようと思ってな。いくら市長の代理とはいえ、お前たちはあくまで民間人だ。我々が調査している最中にウロウロしないでもらおうか」

「あ、あんですって〜!？」

さすがにこの発言には思わず叫んでしまうエステルだが、気持ちは判らなくもない

「忠告というよりも、警告ですね」

「やれやれ、物騒なこつた。めんどくさい」

「分をわきまえろと言っている。そんなに調べたいのだったら、我々が引き上げた後にするんだな。あまりワガママが過ぎると、また牢屋に招待させてもらうぞ?」

王国軍士官は脅しに近いセリフを口にする

後ろでは兵士達が軽く笑っていた

「むっ……」

エステルとイクス、どうやら頭にきたようだ

それに素早く気付いたシェラザードは二人を諷める

「気にしないの、エステル、イクス。どうせ何もできやしないわ」

「フツ、虎の威を借る狐とはよくぞ言ったものだね」

「オリビエ。どうせなら白虎の威を借る狐にしない？」

「フム、イクス君がそうしたいならそれで構わんよ」

オリビエが挑発しイクスが軽く返した

新諺『しんご白虎の威を借る狐』の誕生だ

「な、なにい!?!」

王国軍士官は顔を真っ赤にして怒鳴る

また怒鳴ろうとしたその時、

「……何をやっているのかね」

兵士達の後ろ エステル達の前から黒服の兵士がやってきた

どうみても格が違う

「こ、これは大佐どの!?!」

突如登場した“大佐”に王国軍の誰もが焦る

「栄えある王国軍の軍人が善良な一般市民を脅すとは……。まったく、恥を知りたまえ」

モルガン將軍とはまた違った威厳ある言葉で黒服の大佐はたしなめる

「で、ですがこいつらはただの民間人ではありません。ギルドの遊撃士どもです！」

「ほう、そうだったのか……。だったら尚更だろう。軍とギルドは協力関係にある。対立を煽ってどうするのだ？」

「し、しかし自分は將軍閣下の意を汲みまして……」

「やれやれ……。モルガン將軍にも困ったものだ。ここは私が引き受けよう。君は部下を連れて撤収したまえ」

「し、しかし……」

「早朝から始めているのだ。もう十分に調査しただろう。將軍閣下には後で私が執り成しておく。それでも文句があるのかな？」

「りよ、了解しました……」

王国軍士官はうなだれるとなんとか威厳を保つように大声で命令し部下を連れて去って行った

大佐はそれを見届けるとエステル達に向き直った

「さて、と……遊撃士の諸君。軍の人間が失礼をしたね。謝罪をさせてもらおうよ」

「これは、どうもご丁寧に。ま、こちらも挑発的だったし、お互い様とおきましよう」

大佐の謝辞にシェラザードもすっかり大人の対応をとる

「そう言ってくれると助かるよ。……先程も言ったように軍とギルドは協力関係にある。互いに欠けている部分を補い合うべき存在だと思っただ。今回の、一連の事件に関しても君たちの働きには期待している」

「フフ、失望させないようせいぜい頑張らさせてもらっわ」

大佐の言葉にシェラザードは微笑する

「（な、なんか……すごくマトモそうな人ね）」

「（うん……誰なんだろう?）」

「（……モルガン將軍とはまったく真逆だな）」

エステルとヨシユア、イクスは囁き見た目を判断する

「大佐……そろそろ定刻ですが」

と、そこで後ろに控えていた女性が言う

同じ色の服からどうやら直属の部下だと判る

「おお、そうか。それでは諸君……これで失礼させてもらっよ」

大佐は立ち去ろうとしたがすぐに立ち止まり振り向いた

「……そういえばまだ名乗っていなかったな。王国軍大佐、リシャルという。何かあったら連絡してくれたまえ」

そう言い残して去って行くリシャルと女性

「リシャール大佐って……どこかで聞いたことあるような」

「ナイアルさんが言ってた人だね」

「あー、王国軍情報部って部隊を率いるキレ者の若手将校だっていうあの、ね」

「あ、そうだった うーん、軍人にしてはけっこう話が判るヒトだったね」

二人の話からエステルは話が判る人だと感心しながら思った

「ふむ、歳は30半ばくらい、ルックスも悪くないと来たか……。軍人より政治家に向いていそうね」

シエラザードは勝手に分析している

彼氏の候補にでもするのだろうか

現在23歳のシエラ姉さんに春は来るのだろうか？

と、勝手に思うイクスだった

「失礼ね。いつか来るわよ」

読まれてました

「おーい、お前さんたち」

と、その時、ナイアルとドロシーが工房から出てきた

「今の黒服の軍人、誰なんだ？ なんか見覚えがあるんだが……」

「なんだ、顔は知らないんだ。ナイアルが言ってた、情報部のリシヤール大佐だつてさ」

エステルは親切に教えてあげた
驚きだすナイアル

「な、なにーっ？ おいおい、そりゃホントか？」

「ああ、本人がそう名乗っていたから間違いないと思つぜ」

「まさかこんなところで噂の人物に出くわすとは……。こつしちやいられん！ ドロシー、追いかけるぞっ！」

ナイアルはドロシーに素早く言うと遊撃士顔負けの走りで消えていった

「アイアイサー！ よくわかりませんけど」

のんきに返事をして追いかけていくドロシー
追い付くのだろうか

「は、張り切ってるわね。インタビューでもするのかな？」

「ふふ、確かに記事にしたら受けそうな人物ではあるわね」

「……ふむ……」

シセラザードはそう言い、オリビエはなにやら考えている

「ん、どうしたの？ 珍しく真剣な顔しちゃって」

「いや、今の大佐なんだが……。なかなかの男ぶりであるのはボクも認めるに吝かはたかではない……。しかし……」

オリビエは閉口する

どこか調子が狂う

「しかし……なんですか？」

「ボクのライバルとなるにはまだまだ役者不足だと言えよう。より一層の精進を期待したいね」

「ってどうでもいいわー！ー！」

「聞くんじゃないかった……」

「その自信がどこから湧いてくるのか不思議ですね」
イクスが叫び、エステルたちが疲れた顔をしながら呟いた

「ふふ、さてと……。兵士たちが居なくなった所で、調査を再開するとしますか。さっき、話を聞けなかった住民たちから話を聞くわ
「よ」

「ん、りょーかい」

そうして、エステルたちは再び聞き込みを再開した

「おや、アンタたちは……。さつき話を聞きに来ていた遊撃士さんたちじゃないか」

とある民家に住むセシルと言う老婆がおじやましたエステル達を迎えてくれた

「あ、はい」

「すまなかつたねえ。さつきは相手ができなくて。それで、あなたたちも昨晚の話を聞きに来たのかい？」

「はい。伺ってもよろしいですか？」

ヨシユアは懇切丁寧に尋ねた

「ああ、いいとも」

セシルが「まあ、立ち話もなんだしおかけ」の言葉に甘え、エステル達は椅子に座った
そしてお茶まで出してから話はじめた

「昨日の夜中のことさ。扉の外で何やら物音がしてね。あたしゃ、こんな時間に亭主が帰ってきたのかと思って扉を開けて怒鳴りつけてやったんだ。だが、そこにいたのは向かいの工房から出てきた覆面の男たちだったのさ！ あの時はっかりは心臓が止まるかとおもったねえ。もつとも、向こうも驚いて北の方に逃げていったけどさ」

「なるほど……それが空賊たちだったのね」

「じゃあ、ここのお宅は特に被害はなかったんですね？」

「ああ、不幸中の幸いだっただよ」

セシルが頷く

そこでシエラザードは一つ気になり、質問した

「ひとついいかしら？ ご主人が遅かったというのは酒場でも行ってたということ？」

「それだつたらまだ許せるんだけどね……。ウチのは飲んだくれに加えて大のコレ好きと来たもんだ」

セシルは右手を差し上げるような動作をした。

「……………？」

「あ、判った　ずばり、釣りね？」

答えの判ったエステルが代わりに答える。確かに釣り好きにしか判らない構えだ

「ああ、なるほど……」

シエラザードも納得したようだ

「そう！　これがまたキがつきほどの釣り好きでね。昨日もカサギを釣るとかで南の湖畔に行っちゃったんだよ。しかも、まだ帰ってきやしない」

セシルはため息を吐きながら悪態をついた

「え、それじゃあ……まだ事件のことは知らないの？」

「うわー、よほどの釣りバカだな。こりゃまいるわけだ」

「その通りさ。まったくあの宿六……帰ったらタダじゃおかないよ！」

セシルは相当頭に来ているようすでぶつぶつ呟きながらお茶を啜ったと、ちょうどその時、

「おーい、帰ったぞーっ」

玄関から老人の声がした

老人は竿とバケツ片手に居間に帰ってきた

「はー、やれやれ……。朝から粘ったのにボウズに終わっちゃまったよ。お、なんだ、お客さんかい？」

「このスットコドッコイ！」

セシルは帰りの挨拶の代わりに思いつきり怒鳴った

近くにいたエステル達の耳がキーンとなるほどの大音量だ

老人も驚いたようで、

「な、なんだってんだ。いきなり大声出しやがって。お客さんに失礼じゃねえかよ」

「失礼なのはアンタの方だよ。まったく、この大変な時に呑気に遊び呆けてるなんてさ」

セシルは大きなため息をついた

「あん、大変な時？」

もちろん今、帰宅した老人

クワノには状況が分からない

「実はですね……」

イクスが代表して昨晩起こった強盗事件についてクワノに一通り説明した

「は、空賊による強盗ねえ。そりゃ大変な事があったなあ。しかし、コイツの怒鳴り声で逃げてったってのは傑作だぜ。わはは、空賊も災難だったよな」

説明を聞いたクワノの感想は他人事みただった
事実、他人事だが

「なんだってえ!？」

セシルがまた怒鳴ろうとする

「お、落ち着いて、お婆ちゃん」

「身体に悪いよ。ほら、お茶でも飲んで落ち着いて」

エステルとイクスがセシルを止め、お茶を進める

「しかし、夜闇に紛れて現れてどこかに消える空賊どもか……。ア
イツの言ってたことが、もしかして関係あるのかねえ？」

クワノはお茶を啜りながらポツリと呟いた

「アイツ……どなたのことなんですか？」

「ああ、オレの釣り仲間でな。南の湖畔にある宿屋に滞在してるヤツがいるんだよ。そいつが、宿屋の近くで妙な連中を見かけたらしいんだ」

「妙な連中……」

「興味深いわね。詳しく話してもらえない？」

気になったシエラザードはクワノにその内容を教えてもらう

「構わんが……言っておくが又聞きだぞ？ なんでも夜釣りをした時に、偶然見かけたらしいんだが……。真夜中に、宿屋の出口から街道に出た連中がいたらしい。しかも、宿の人間に聞いてみると、そんな連中は泊まってないそうだ」

「それは……たしかに妙な人たちですね。その宿、強盗事件とか起こったりはしていませんか？」

「そういう物騒な事件はまったく起きちゃいねえよ。静かでメシの美味しい、なかなかオススメの宿だぜ。何といっても良い釣り場だし」

釣り好きなクワノが太鼓判を押す
信憑性は高いだろう

セシルとクワノに礼を言っつてエステル達は外に出た
出た後、すぐにシエラザードが話しかけた

「肝心の強盗事件については手がかりはなかったけど……。なかなか興味深い話が聞けたわね」

「ふむ、同感だ。特に宿屋の食事が美味だというのが気に入った」

「そっちかよ！」

「そういう話じゃないってば。ま、あたしも釣りにはちょっと心惹かれるけど……。何も事件が起きてないんじゃないじゃ調べてみる価値はなさそうね」

「お前もかよ！」

「いや、それは逆だと思うよ。へたに事件を起こしたら、軍に徹底的に調査されてしまう。逆に、何も起きていない場所こそ空賊たちが現れる可能性は高い」

「人のツツコミは無視かよ！」

ヨシユアが分析して言った

イクスのツツコミは誰からも相手されず、イクスは凹んだ
そしてそれさえも無視するエステル達

「そっか……。そういう考え方もあるか」

「確かに、この一連の事件……。軍にスパイがいるかはともかく、空賊たちは相当に抜け目がないわ。起きた事件を調べるだけでは連中を追い詰めることは難しい。連中の動きを読んだ上で一步先を行く必要があるそうね」

「なるほど……。守りより攻めの姿勢ね？」

「フツ、それでは行こうか……。リベールの真珠と唄われし麗しのヴァレリア湖のほとりへ」

「……………うん、そうだね。それじゃあ行こうか」

イクスはそれだけ言う

エステル達は元気なのにイクスは一瞬で元気をなくしたようだと
ともかくエステル達は南の湖畔の宿屋へと向かった

蒼空語り

イクス

「はい始めりました蒼空語り。司会はいつもの俺、だよ……………」

エステル

「アシスタントのエステルよ。今回もはりきっていきましょう」

イクス

「うん、そつだね……」

エステル

「イクス、元気だしなさいよ。たかが無視されただけでしょ。ほら、質問に答えなさい」

イクス

「は〜い……。最初で最後はHN『漆黒の牙』さんから『リ』オリビエ何やってんだー！」

レ「どうしたのリユウガ？あといきなりうるさい。」「リ」《グラシヤリネ》ただ飲みするとはけしからん！つーことでシバく！無理だな。

レ「無理ね。」

リ「何故に無理なんだ？教える。」

あいつの設定上危険かと。

レ「だよね。なぜかは言わないけど。」

まあ、リユウガは放置して質問。ラヴェンヌ村に行った兵士は一体どうしたんだ？まあ、魔獣にやられてたら笑うが。

レ「あと、零の軌跡でコンビクラフトを強化するイベントで1周目は誰をしたんですか？ちなみに作者はこれまたエリィでした」……そついやどうなったんだ？」

エステル

「ああ、彼らならちゃんとルウイに謝罪したわよ。魔獣には襲われなかったわね」

イクス

「ちっ、残念だ。二つ目は同じくエリィとの事だ」

エステル

「……さて終わったわね。今回も質問があつて良かったわね」

イクス

「少ないけどな。ま、贅沢は言つてらんねえがもう少しこねえか？
せつかく風花から無理矢理場所を借りてやってんだから」

エステル

「気長に待つしかないわね。……それじゃあ」

イクス・エステル

「ばっはーい」

リベール通信 第3号

【速報】《リンデ号》^{しっそう}失踪事件続報！

身代金要求届く！

王国軍関係者が明かしたところによると、昨日グランセルの飛行船公社とリベール王家に、犯人グループからの犯行声明が届いた模様。声明の中で犯人は自ら《カプア一家》と名乗り、乗客の生命と引き換えに巨額の身代金（一部情報によれば数千万ミラ）を要求しているという。

空賊団《カプア一家》とは？

主に帝国領内からボース地方にかけての空域で活動していた空賊団。正確な規模は不明だが構成員20名程度の小規模な犯罪集団だといわれている。

どうなる今後の調査 協力関係が鍵

事件の詳細が明らかになったことで、今後は人質救出を第一とした捜査活動に重点が移る。対応の難しい局面が増加することが予想され、ますます王国軍と遊撃士協会との連携が問われることになる。ギルド関係者の言葉を借りれば、両者の関係は「最悪ではないが決して良くもない」という状態。これでは連携など望むべくもない。ギルドに独自の調査を依頼しているボース市長メイベル女史も、この状況を憂慮する者の1人だ。「縄張り争いをしている場合ではな

いのです。両者とも大人になって頂かないと……」弱冠21歳にして重責を担う女史の嘆き。関係者は真摯しんしに受け止めるべくだろう。

【技術】新鋭艦《アルセイユ》いよいよ大空へ！

ツアイス中央工房で建造中だった高速巡洋艦《アルセイユ》（全長42アージュ）が、艦装きてうを終え王国軍親衛隊に引き渡された。近日中に試験飛行に向かう。主導力機関の開発が遅れているため、基礎的な性能評価だけが行われる見通しだ。

【文化】書評『実録・百日戦役』

戦役の終結からちょうど10年となる本年。多くの市民にとって惨事の記憶はまだ生々しく、過去を冷静に振り替えることは難しい。本書は客観的な史料を丹念に積み重ねることで、戦役の裏側にある真実を浮き彫りにしていく。時宜ときを得た好著といえよう。

【リゾート】たまに行くならこんな宿ツアイス地方南部、共和国国境からも程近いエルモ村の奥にその温泉宿《紅葉亭》はある。ひっそりとした東方風のたたずまいと、湯量の豊富な天然温泉に魅せられ、遠方からのリピーターも多いという。

美容に良いと評判の東方風料理も楽しみだが、本誌イチオシはなんと言っても露天風呂。はじめは抵抗があるかもしれないが、1度な

れてしまえばその解放感が病みつきに。満点の星空を眺めながらの
入浴は格別の趣きだ。まずはしっかりとタオルを巻いてトライして。

第一章 く消えた飛行船く memory:???

ヴァレリア湖畔

目的地である宿に到着したエステル達

「ここがヴァレリア湖の北岸か……。なかなか雰囲気がいい場所ね」
エステルが辺りを見渡しながら感想を述べる

「そうだね。宿も立派そうだし」

「前に仕事で泊まった事あるわ。酒は美味しいし、部屋も良い、文句のつけられない宿だったわね」

「あ、シエラ姉さん来たことあるんだ。（宿の人に迷惑かけて覚えられてなきやいいけど……）」

「うーん、遊びに来たんだつたら言うことなしだったんだけど……」

と、エステルが落胆しながら言う

確かに遊びで来たならとても楽しめただろう
すると、

「あれ、違うのかい？ ボクはそのつもりだったけど。昼はボートに揺られうたた寝し、夜は酒と料理に舌鼓を打つ……。これぞバカンスというやつだね」

オリビエが意外そうにエステルに尋ね、色々想像しながら例を挙げた

「……………」

エステルは怒ったかのように睨み、

「……………」

ヨシユアは呆れたような表情を見せ、

「……………」

シセラザードは妖艶な微笑ををぶつけ、

「……………」

イクスは『お話』時の笑顔を出していた
もちろんオリビエは、

「ハツハツハツ。ちょっとしたジョークさ。バカンスはいつでも楽しめるが、空賊退治は今しか楽しみない……。このオリビエ、優先順位はちゃんと弁^{わきま}えているつもりだよ」

笑って誤魔化した

こいつにはこういう時の恐怖が欠けているらしい

「楽しむ、楽しまないの問題じゃないと思うんだけど……………」

睨むのを止め、エステルはため息を吐いた

「ふふ、まあいいわ。本気でやってくれさえすれば。早速、ご老人が言ってた釣り好きの滞在客を探すわよ」

「おとといの夜、怪しい人たちを目撃したっていうお客さんですね」

「一先ず外を回って見るか」

と、言う事で五人は宿には入らずまずは外にいる人物に聞いてみることにした

棧橋

一番右端の棧橋に釣竿を持つ男性がいたので声をかけてみることにした

だが、

「……………」

「あの一、ちよつといいかな？」

「……………」

「あの一、ちよつといいかな？」

「……………」

「……………シクシク（泣）」

泣くハメになった

きつと今ので先ほど無視されたイクスの気持ちも分かっただろう

「(まったく反応が無いわね……)」

「(よっぽど集中してるんでしょうね……)」

シエラザードとエステルをあやしているヨシユアが小声で呟く

「(……なるほど、これが釣りバカというものか。フツ、なかなか興味深い人種のようにだ)」

「(テメエほどじゃないことは確かだな……)」

仕方なくその人は後に回し、別をあたってみた

川蝉亭

外には彼しかいなかったのでエステルたちは宿に入った
正面玄関ではなく裏口から入ったので調理場にいた男性に声をかけた
男性は快く迎えてくれた

「川蝉亭^{カサセミン}へようこそ。皆さん、泊まりに来たのかい？」

「えっと、一応そうだけどそれだけじゃないって言うか……」

エステルが歯切れ悪く言い濁している
エステルの代わりにヨシユアが尋ねた

「ある人を探しているんです。こちらに滞在しているお客さんで釣

り好きの方はいらっしやいますか？」

「うーん、釣りだったら大抵のお客さんは楽しんでるけど」

「昨日、ここに泊まったご老人の釣り仲間って聞いたわ。心当たりはないかしら？」

考え込む男にシエラザードがクワノ老人の事を話した
それで伝わったのが男はポン、と手を打った

「ああ、クワノ爺さんのことが。その釣り仲間といたらロイドさんの事じゃないか？」

「ロイドさん？」

「王都から来ているお客さんで、プロのアングラ^{angler}だって話だよ。
《釣公師^{つりこうし}団》とかいう、王都にある団体のメンバーらしいんだ」

「な、なんか凄そうなヒトねえ。ところで、それって裏手で釣りをしてるオジサン？」

「ああ、たぶんそうだと思うよ。大声で名前を呼んだら気付いても
らえるんじゃないかな？」

男に礼を告げるとさっそくエステルたちは棧橋で釣りをしていた男
性 ロイドに会いに戻っていった

棧橋

「……………」

相変わらず男性は釣りに集中している
しかもほとんど身体が先ほどの場所から動いていない

「ええつと……。おじさんが、王都から来てるっていうロイドさん？」

エステルが再度話しかけた
結果は、

「……………」

惨敗だった

まったく聞いてもらえない

「すごい集中力だね……魚以外目に入らないみたいだ」

「つーか、こんな集中力身に付けてえよ。ヨシユア、何か取得方法はないか？」

「僕に聞かれてもね……。分からないよ」

ヨシユアは感心しイクスがヨシユアに尋ねる

ヨシユアにもここまでの集中力の会得方法は分からないらしい

「フッ、仕方ない。ここはボクの出番のようだね」

するとオリビエがエステル達の前に躍り出た

呆けるエステルたち

「へっ……」

そんなエステル達をオリビエはスルーしておいてロイドの横にずれた相変わらず気づかない。オリビエはそのまま顔を近づけると、

「……ふうっ……」

優しく耳に息を吹きかけた

「ひゃああっ!?!」

これには思わずロイドも絶叫し振り返った

「な、なんだね君たちは!?! い、い、いつからそこにっ!?!」

「エ、エゲツな……」

「見ているコツチも思わず鳥肌が立っちゃったわね……」

「~~~~ツ、トラウマになりそうな事だな。うわっ、鳥肌立ちまくりだぞ」

エステル達はオリビエを警戒するように半歩下がった

絶対にオリビエを吐息の範囲内に入れてはいけない

本気でそう思うのだった

当の本人は今やったことさえ忘れそうな普通の笑みでロイドに話しかけた

「やあ、ごきげんよう。先程から声をかけていたんだが、さすがプロ、凄い集中力だねえ」

「あなたがロイドさんですね？」

まあ警戒していても仕方が無いのでヨシユアがロイドに尋ねたつていうか先ほどから地の文でロイドロイド書いているので彼がロイドなのは間違いないかったのだが

「あ、ああ、その通りだが。はて、どうして私の名を？」

「とあるご老人からあなたのことを聞いたのよ。少し時間をいただけないかしら？」

シエラザードがそう言うってからクワノ老人の話を説明した
それでロイドには納得したようだ

「なるほど……クワノさんから聞いたのか。ああ、確かに見たよ。おとこの夜、奇妙な連中をね」

「やっぱり……。その話、あたしたちにも詳しく教えてくれないかな？」

「……その前に。君たちは遊撃士だった？ 何か事件に関係するのとかい？」

「断言は出来ません。ですが、可能性はあります」

ヨシユアが補足して置いた

断言はできないと言ったがおそらく確実だろう

「わかった……そういう事なら協力しよう」

納得するとロイドは話し始めた

「おとといの晩……ボートで夜釣りに出た時のことさ。又シとの格闘に明け暮れた私はクタクタになって宿に戻ってきてね。すっかり夜も更け、宿の者全員が眠りに就いている時間になっていた」

「ちょっと待って。……その又シってというのは？」

「あつ、ダメだシエラ姉さん！」

シエラザードが割り込むとイクスが慌てて口を塞ぐが、少しだけ遅かったようだ

「よくぞ聞いてくれました！」

ロイドが声を張り上げて喜んだ
それも待ってましたとばかりに

「又シというのはこのヴァレリア湖に住む巨大マスのことだねっ！
もう10年以上も前から我々釣り愛好家のあいだで畏怖されている魚なんだよっ！」

ロイドが頬を高潮させ興奮しながら語り始めた
その語りには熱がイヤと言うほど入ってる

「（しまった……）」

「（マニア心に火をつけましたね……）」

「（だからダメって言ったのに……）」

シエラザードとヨシユアとイクスは本気で後悔して見えないようにため息を吐いた

「そ、そんな凄いヤツなんだ!？」

ただし、釣り好きであるエステルは食いついてしまった

「ああ、私は5年近くヤツを追っているのだが……。なにせ、広大なヴァレリア湖をあっちに行ったりこっちに来たりと気まぐれにエサ場を変える魚だね。最近、この辺りに現れた事を知って、私も王都から追っかけてきたわけさ」

「フツ、大した情熱だ。その気持ち、判らなくもないよ。ボクも気に入ったものがあつたら、何としても手に入れたくなる口だね。

たとえば《グラン》《シャリネ》とか」

「あれは手に入れたんじゃなくて飲み逃げしたたげでしょーが」

「テムエ……後で殺す。メラツと殺す。спанって殺す。あの万能酒を飲みやがって……」

エステルがツツコミ、イクスが殺気を後ろで出しながら呟いた

「コホン……話を戻すわよ。それで、ロイドさん。夜釣りから戻ってきてどうしたの？」

シエラザードはこの機に急いで話を戻した

「あ、ああ……。それで、ボートを戻して宿の中に入ろうとしたんだが……。奇妙な二人組が、宿の敷地から街道に出て行くのを見かけたんだよ」

「街道つて……。そんな真夜中にですか？」

「ああ、間違いない。アンセル新道に出て行つたよ。最初は、街から遊びにきた連中が戻るところなのかと思つたけど……。さすがに時間が遅すぎるし、次の日、宿の人間に聞いてみたらそんな連中知らんと言つじゃないか。幽霊でも見たんじゃないかって思わず背中がゾーンとしたものさ」

ロイドが自分の肩を抱くようにして震わせた

「ゆ、幽霊！？ そ、そんなの出るの、ここ！？」

「はは、何せその二人組、若い男女のカップルだったからね。もしかしたら、周囲に認められずに心中したカップルだったのかも……」

「あううう、や、やめてよう！」

エステルが耳を塞いだ

どうやらホラー系の類が苦手らしい

乙女チックな面もあるものだ

「やれやれ……。相変わらず幽霊話には弱いよね」

「そのクセ聞きたがるんですよ。怪談とか、世にも奇妙な物語とか」

「うんうん。んで一人じゃ聞けないから俺とヨシユアがいつも一緒に聞かされる羽目になるんだもんな」

「ふふ、エステル君もそうやって恐がってる分には、なんとも可愛らしいじゃないか。寒さに震える子猫のようだよ」

シエラザードは苦笑し、ヨシユアはため息を吐き、イクスはやれやれ、と首を振った

オリビエの発言にはエステルは、

「ふーっ、嘸み付くわよ!？」

猫になった

「ははは……まあ、幽霊っていうのは冗談さ。だが、訳ありのカツプルというのはもしかしたら本当かもしれないんだ。女の子が変わった服を着てたからね」

笑いながらロイドが言った

「変わった服……というと？」

「後姿しか見ていないから确实とは言えないんだが……。学生服を着てたみたいなんだ」

「学生服って、まさか……」

「ジェニス王立学園？」

イクスが尋ねてみた
色々な学生服は存在するがやはり有名なものと言ったらジェニス王
立学園の制服だろう
全員、ロレントでの事が頭に浮かんだようだ

「ほう、良く知っているね。私の姪も通っているんだが、それとソ
ツクリだったよ」

「なるほど……これで一気に怪しくなったわね」

「怪しいどころかゼツタイ、あの生意気娘だって！ とうとう尻尾
を掴んだわよっ」

エステルはロレントでの怒りを再燃させている
やはりエステルは馬が合わないらしい

「なんだ……君たちの知り合いだったのか？ だったら、あの2人
が思い詰めて早まったことをしないよう注意してやってくれ。たし
か、今夜あたりにまた来るような事を話していたからね」

「それ、本当ですか？」

「ああ、2日後にまた来るぞって若い男の方が話していたんだ。真
剣な口調だったから気になってね」

「なるほど……。貴重な情報、感謝するわ。後は我々に任せてちょ
うだい。絶対に悪いようにしないから」

シエラザードが確信を持って言う

「ホッ、そうか……そう言ってくれると助かる。何だか肩の荷が下りた気分だよ。……安心したら今度はボート釣りがしたくなってきたな。こうしちゃいられん！ 君たち、私はこれで失礼するよ！」

ロイドはシエラザードの言葉を聞いて安心したのかたっただ5秒で今しがたやっていた釣り道具を片付けると宿に戻っていった

「相当な釣りバカね……あたしなんか足元にも及ばないわ」

エステルが半ば呆れていた

「《釣公師団》とか言ってたけど、どういう集まりなんだろうね」

「それで結局、そのカップルがどう事件に絡んでくるんだい？ 事情を知らないボクにも懇切丁寧に教えてくれたまえ」

「まあ、かいつまんで説明するとだな……」

イクスは、オリビエにロレントに現れた空賊団の妹、ジョゼットについて説明した

「なるほど……それは確かにビンゴのようだね。となると、今夜と
いうわけか」

こちらも状況を理解したようだ

「ええ……。念のため、あたしたちも部屋を取った方が良さそうね。
真夜中まで待つ必要があるし」

「うん。宿の受付で部屋を取りましょ」

エステル達はそれで合意しロイドがもう出て行った裏口からではなく正面玄関から宿に向かった

蒼空語り

イクス

「はい、始まりました蒼空語り。司会は俺だ」

エステル

「アシスタントはいつも私よ」

イクス

「そうだなー。もう少しキャラが増えたらアシスタント交代制にするか？」

エステル

「そうね、第三章あたりでいいんじゃない？」

イクス

「そうだな。よし、第二章終盤から交代制でいこう！」

エステル

「了解よ。それじゃあ、質問コーナーに行きましょう。HN『漆黒の牙』さんから『イクス、ドンマイ。また突っ込めばいいさ。』

リ「今回玉ねぎ（友達がつけたリシャルのあだ名。由来は髪型らしい。）が出てきたな。」

レ「うん。あの人いい人だね。」

まあ、否定はしないかな。ついでに単独でラスボス狩れるくらい強いし。零の軌跡でラスボスを一人で沈めようかな。

リ「あんた何考えてんだ。つかあの兵士ども無事だったのか。ちっ、死ねばいいのに。」

質問ある人。

レ「質問、イクス達のBPとランクはどのくらいになったの？」

リ「あと、オーブメントに装備しているクオーツは何だ？教えてくれ。」

新アーツはネタがない。すまない。つか質問も過去のネタを最近使い回しにしてしまう自分に絶望。

リ「知るか。」

レ「あはは……。それじゃ、またねー。」『……………どれくらいだっけ？』

イクス

「んあー？ ああ、無い」

エステル

「……………あんですって？」

イクス

「だから無い、って言ったんだよ。色々考えたんだけどこの話、サブクエやってないじゃん」

エステル

「まあ……………そうね。でもそれが何でBP無しにつながるの？」

イクス

「説明すんのめんどくせえな。よし……この話の結末はFCは一級で正遊撃士に昇格。SCはB+で完結する予定だ!!」

エステル

「簡単に終盤ばくろしたあああああああ!!?」

思い切った発言に叫ぶエステル

イクス

「ぶつちやけ隠すのめんでー! あと、結局活躍してんだからそれぐらいで終わって良いだろ!？」

エステル

「ぶつちやけ過ぎだあああああああ!!」

頭を抱えてイクスの発言に涙を流すエステル

イクス

「それじゃあ、『漆黒の牙』さん、次回からポイント系は聞かん方が良い。エステルのキャラ崩壊が出てしまうから!」

エステル

「アンタの発言が一番崩壊させるんじゃないー!」

イクス

「それじゃあ、最後。HN『ガイア』さんからだ」

エステル

「軽くスルーもされた!」

第一章 く消えた飛行船く memory…?? (前書き)

今回はポリウム満点です

長いかも知れませんがどうぞお楽しみ下さい

PS・カーネリアは一章終了後、出すとイクスが申し出ておりました

第一章 く消えた飛行船く memory:???

川蝉亭・受付

「あら、お泊りになられますか?」

受付の女性が近づいてきたエステル達に声をかける

「うん、そのつもりだけど……」

「エステル、ちょっと待った。やり残している事があつたら、今のうちに済ました方がいいよ。いったん部屋を取ってからポースマで戻るのも何だしね」

ヨシユアが引き止める

確かに相手が来るのを待つならどこかに行っている時間はない

「うーん、確かに……。でも、大丈夫よ。部屋を取りましょ」

「適当だな、おい」

「何よ、イクス、アンタ用事でもあるの?」

「ない!」

「きっぱりと言つわね、アンタ……」

そんな問答をしながらエステルは部屋を取ることを受付の女性に言い一人一人自分の名前を書いていく

「かしこまりました。それでは皆さん。お部屋にご案内します」

女性は書き終わるのを確認するとエステル達を部屋に案内した

「 こちらの部屋になります。では皆さん、夕食までごゆっくりお過ごしください」

そう言い残して、女性 ソフィーナは戻っていった

「なかなか良い部屋だね。街のホテルにはない趣があつて」

ヨシユアが部屋の中を見た感じの感想をそのまま述べた
確かに街のような石造りではなく木材で作られているため温かみがあつた

まるで俺達の家みたいだな、とイクスは思う

「うん、イイ感じよね。値段もそんなに高くなかつたし」

「ふふ、さてと……。夜が更けるまであたしたちもゆっくりしますか」

シエラザードはバッグや鞭をテーブルに置くとそう宣言した
もちろん一番に賛同したのは、

「おお、ナイス提案だ」

オリビエだった

「え、嬉しいけど……ゆっくりしちゃっていいのかな？」

「休める時に休んでおく。それも遊撃士の仕事のうちよ。食事するなり、散歩するなり、しばらく自由行動にしましょう」

シエラザードにそう言われたのでエステル達も自由時間を満喫することにした

絶対にシエラザードに食われないために

エステル、ヨシユア、イクスは外へ出た

「うわ。すごくキレイな眺め……。まるで湖が光ってるみたい」

エステルがヴァレリア湖の様子を見て感想を口にした
確かに水面が陽の光を反射して宝石のような輝きを放っている

「対岸に王都があるはずだけど、霞んでいてよく見えないな……。さすが王国最大の湖だね」

「ってかでか過ぎるだろ。ここから石を投げたら直径の何分の一くらいに届くんだろう。試してみてえな」

「うーん、釣りをしたらめっちゃめっちゃ楽しそうだけど……」

「やってきたら？ いい気分転換になると思うよ」

「うん、そうしよっかな。ヨシユアとイクスはどうするの?」

エステルに尋ねられヨシユアとイクスはしばらく考えてからやりた
い事を口にした

「僕は、そうだな……。読みたい本があるし、その席でゆっくり
するよ」

「俺は釣りは好きじゃねえし……。読書つつつても本も持ってない
しな……。よし、俺は少し『あれ』を作っとくわ」

「ヨシユア、ジジ臭いわね……。あれ? あれって何よイクス」

自分の分からない単語に首を傾げながらイクスに聞き返すエステル

「まあ、決戦のための秘策さ。ヨシユア、ちょっと手伝ってくれ
るか?」

「あはは……。そういうのは君に任せるよ。もちろんエステルもね」

「「ちえっ……。付き合いが悪いんだから」」

立ち去ったヨシユアを見てエステルとイクスがハモリながら同じ事
を言う

イクスも「それじゃあ、俺も自由時間を楽しんでくるわ」と、言っ
てどこかに消えていった

エステルはまあ、いいかと割り切ると釣りに最適な場所を探し始めた

「うーん、そのの棧橋あたりが良さそうだけど……」

エステルが棧橋の周りの様子を確かめた
波も穏やかに漂っている

「うん……ここがベストみたい。ふっふっふ、早速始めようかな……
って、あたし、竿持ってない。宿屋のヒトが貸してくれないかな？」

エステルは宿に戻り受付のソフィーナに話して無料の貸し竿を借り、

「さてと、早速始めましょうか」

釣りを開始した

エステルはしばらくの間、のんびりと釣りを楽しんだ
それがもう入れ食いの少し前だったらしく、レインボウやオロシヨ、
ながぐつなどが数多く釣れた
そして気づくと辺りは赤く夕日に染まっていた

「ふっ、もう夕方か……うん！ なかなかの戦果ね。見て見て、ヨ
シユア。こんな釣っちゃったわよ！」

エステルは後ろのテーブルに座っているヨシユアに声をかけた
しかし、

「……………あり？」

ヨシユアは見渡せる範囲にはいなかった

「ヨシユア？」

エステルはヨシユアが座っていたはずのテーブルに走っていった
そこにはやはり誰もいない

「あれ、これって……」

テーブルの上には『実録・百日戦役』という本があった
おそらくヨシユアが読んでいた本だろう

「ヨシユアの忘れ物かな？ いつも澄ましてるクセに割と抜けてる
トコがあるのよね。仕方ない、あたしが届けてやるか。それにし
ても、ヨシユアってはどこに行っちゃったのかな？」

ヨシユアがいそうなところをエステルは探し始めた
五年間共にいたカンで

外れの棧橋

数時間前にロイドが釣り場所として使っていた場所にヨシユアはいた

「……………」

ヨシユアは無言でジッと、水面を見つめていた
すると、

「よっ、少年。こんなところで何をたそがれておるのかね？」

爺臭いセリフを言いながらエステルがヨシユアの方へ歩いてきたヨシユアはエステルの出現に少し驚いていたがすぐに微笑み返す

「はは……たそがれてなんかいないけどね。もう、釣りはいいの？
今からが入れ食いじゃない？」

「うん、もう充分。久しぶりに堪能しちゃったわ。あ……そうだ」

エステルは思い出したかのようにヨシユアに『実録・百日戦役』を差し出した

「もー、読書するとか言って置きっぱなしにしちゃってさ。勿体ないオバケが出るわよ」

「……ああ……ちょうど読み終わったばかりでさ。目が疲れたから気分転換に散歩してたところなんだ」

「……こーら」

ヨシユアの言葉にエステルはやや怒った調子で近づいたその様子にまた驚きながら聞くヨシユア

「な、なに？」

「まーた1人だけでなにか溜め込もうとしてるな？ 分かるんだってば、そーいうの」

「……………」

「大体ね、フェアじゃないわよ。ヨシユアだって、あたしが落ち込んだ時には慰めるクセに」

平行したヨシユアにエステルが言葉を続けた

「あたしじゃ父さんやイクスみたいに頼りにはならないと思うけど……、それでも、こうやって一緒にいてあげられるんだから」

そう優しい声音で言いながらエステルはヨシユアの隣に立った

「……………ごめん……………」

ヨシユアはしばらくの間、黙っていたが吐き出すように謝罪の言葉を呟いた

しかしエステルはやれやれといった様子で首を振った

「こういう時には、ありがとう、でしょ？　ヨシユアって頭はいいけど肝心なことが分かってないんだから」

「はは、本当にそうだな。ありがとう……………エステル」

今度こそヨシユアは笑った

いつものように優しい笑顔

エステルはそれで満足したようだ

「うむうむ、苦しゅうない。　あ……………そうだ！　ハーモニカを1曲。お礼はそのあたりでいいわよ」

「ふふっ、おおせのままに……………」

ヨシユアは喜んでハーモニカを取り出した

「『星の在り処』でいいかな？」

「うん」

エステルの答えにヨシユアは静かにハーモニカを口に付け、音を奏でた

曲名は『空の在り処』

静かな空間に優しくも悲しい、綺麗な音色が響き渡る

しばらくエステルは聞き惚れていた

演奏が終わるとエステルは感想を口にした

「えへへ、なんでかな。ハーモニカの音って夕焼けの中で聞くとなんだか泣けてくるよね」

「……………相変わらず……………何も聞かないんだね」

どこか憂いを帯びたような口調で言いながら背を向けるヨシユア

「あは……………約束したじゃない。話してくれる気になるまであたしからは聞かないってね。それに5年も経つんだもん。なんか、どーでも良くなつたし」

エステルは笑顔のまま答える

その答えに嘘偽りは一切なかった

「そう……………5年もだよ。どうして何も聞かずに一緒に暮らせたりするんだい？ あの日、父さんに担ぎ込まれたボロボロで傷だらけの子供達を……………昔のことをいっさい喋らない得体の知れない人間達なぼくたち」

んかを……どうして君は　君達は受け入れてくれるんだい……
？」

ヨシユアがエステルに向き直って言った
おそらくそれは真剣なのだろう。ヨシユアは真面目な声と眼でエ
テルに答えを求めている

「よつと」

エステルは座っていた木から腰を上げると普通に答えを渡した

「そんなの当たり前じゃない。だってヨシユアとイクスは家族だし」

「……………」

ヨシユアは呆然とその答えを受けた
その答えには驚いたようだ

「前にも言ったけど、あたし、ヨシユアとイクスのことってかなー
り色々と知ってるのよね。ヨシユアは本が好きで、武器オタクで、
やたらと要領が良い。人当たりはいいけど、他人行儀で人を寄せつ
けないところがある。イクスは料理、掃除、家の作業が大好きで器
用な弟。いつも不真面目そうだけど真面目な時は真面目でいつも料
理で女の子を泣かせてる……………」

「ちょ、ちょっと……………」

ヨシユアが制した

さすがにそこまで言われると止めなくては止まらない

「でも、ヨシユアとイクス、二人とも面倒見は良くて実はかなりの寂しがり屋」

「……………」

「もちろん、過去も含めて全部知ってるわけじゃないけど……、それを言うなら、父さんの過去だってあたし、あんまり良く知らないのよね。だからと言って、あたしと父さんが家族であることに変わりはないじゃない？ 多分それは、父さんの性格とか、クセとか、料理の好みとか……、そういった肌で感じられる部分をあたしがよく知ってるからだと思う。ヨシユアとイクスだって、それと同じよ」

満面の笑み、花が咲くような微笑み

そんな笑顔をエステルはヨシユアに向けた

「…………… 本当に…………… 君には敵わないな。初めて会った時…………… 飛び蹴りをくらった時からね」

「え……………。そ、そんな事したっけ？」

「うん、ケガ人に向かって何度もね」

笑いながらヨシユアが言った

「あ、あはは…………… 幼い頃のアヤマチってことで」

エステルは苦笑しながら言う

「はいはい。…………… ねえ、エステル」

ヨシユアがエステルに向かって言う

「なに、ヨシユア？」

エステルも向き直る

「今回の事件、絶対に解決しよう。父さんが捕まっているかどうか、まだハッキリしてないけど……。それでも、父さんは僕達の手で、絶対に」

「うん……モチのロンよ！」

真剣な言葉にエステルは力強く頷いたと、ちょうど、

「 真実を、嘘もなく 夜が明けて、朝が来る 星空
が朝に溶けても 君の輝きは解かるよ 」

イクスが何かを歌いながらやって来た
そのメロディーはまるで今の『星の在り処』とそっくりだった

「あ、イクス」

「やあ、やっと完成したのかい？」

エステルとヨシユアが声をかける
イクスは首を振りながら返した

「残念ながら『あれ』は出来てないがその代わり『星の在り処』の歌はできたぜ。事件が解決したら教えてやるよ」

「ああ、今歌っていたのがそう？」

「おう。ま、思いつきで歌ってみたがけっこう良かったな」

「ふふ……そうだね。それじゃあ、イクスも来たみたいだしそろそろ宿に戻るつか？ 食事の用意もできてる頃だろうし」

いつものヨシユアの口調で言う

「うん、お腹ペコペコ。しっかりゴハンを食べて真夜中に備えなくちゃね」

そうして、エステルとヨシユアとイクスは宿に戻った

川蝉亭・食卓

そこでは

机に突っ伏したオリビエがいた。対面にはシェラザードが座っていた

「君たち……助けてくれたまえ……。さ、さすがに……もう限界だ……」

オリビエが完全に酩酊状態に陥っていた
危険。真に危険である

「うっわー、すごい。少しだけ見直しちゃったわ」

なのにエステルはのほほんとした様子で言った

「確かに、シエラさんに付き合っただけで意識が残っているのは珍しいかもね」

ヨシユアも同様に、むしろ感想まで言っている

「……俺、こいつの事本気でムカつくけどさすがに今回だけは同情するぞ」

「んふふ……いいところに来たじゃないか　おねさんと一緒に飲みましょいいでしょ、いいでしょ、ねん？」

いつものシエラザードでは考えられない喋り方

これがもう第二の人格とも言わべきシエラザード。可愛いとも言えはそれまでだ

「あ、あたしたちはこれからゴハン食べるからダメだってば」

どもりながらもエステルがきっぱりと拒んだ

「やだやだっつ。一緒に飲むったら飲むのっつ！　飲んでくれないと暴れてやるっつ！」

「だ、駄々っ子モードに入った……」

「ああもう……コワイなあ。気絶させつか？　このまま暴れられて俺に抱きついて寝たら明日、俺半殺し決定だし」

「シエラさん、オリビエさんがまだ大丈夫みたいな感じですよ。付

き合ってもらったらどうですか」

イクスが本気で提案しながらスタッフを構えるのをヨシユアが手で制しながら一つ提案した

「……………（ジー）。な〜んだ、まだイケルわね」

シエラザードがオリビエの様子を見て微笑んだ
その笑顔、まさに魔王級

「ひつ……………ヨ、ヨシユア君……………あんまりな仕打ちじゃないか？」

「さ、さすがに可哀想じゃない？」

「そうかな？」

「でも意地悪なキミも……………小悪魔的で……………ステキだ……………。……………うふふ……………」

「確かに心配なさそうね」

「それじゃあ僕たちは、カウンターの方に行こうか。邪魔するのもなんだしね」

「うん、そうね」

「あ、エステル、釣った魚くれよ。厨房借りて久しぶりに刺身でもつくるぜ」

「あ、そう？ ならお願いするわ」

エステルとヨシユアとイクスはオリビエを放っておき自分達はカウ
ンターの方に向かった
シエラザードは超ご機嫌の様子でオリビエのグラスに並々と注いで
いく

「シエラ君……お願いだから、それ以上は注がないで……」

しかし、その要求せうきゅうの声は酔ったシエラザードに届く事はなかった

川蝉亭・二階寢室

「あー……うー……。うーん……げふへふ……」

オリビエがベッドの上に突っ伏して眼を回している
限界摂取量を大幅に超えたのだろう

「あーあ、完全にグロッキーね。さすがの超マイペース男も酔った
シエラ姉には勝てなかったか」

エステルはオリビエの様子を見て言う
しかし同情よりも苦笑が混ざっていた

「いやあ、飲んだ飲んだ。最近色々あつて飲めなかったから、久し
ぶりに堪能しちゃったわ」

「もう完全に素面すまへだし……。シエラさん、何か特殊な訓練でも受け

「ているんじゃないんですか？」

「うーん、ゲテモノ酒のたぐいは一座にいた頃から飲んでたけど。サソリ入りとか、マムシ入りとか。それで酒に強くなったのかしら？」

「げっ……！ 初めて聞きましたよそんなこと」

シエラザードが笑いながら言い、イクスがさすがに引く

「いや……それは違うんじゃないかなあ」

「やっぱりヨシユアは否定した
確かにそれは違うと思う」

「それよりもコイツ、どうするの？ しばらく使い物にならないわ
よ」

「このまま寝かせておきましょう……。ここから先は、空賊たちと
直接対決になる可能性が高いわ。やっぱり、ただの民間人を巻き込
むわけにはいかないからね」

「え、もしかして……。付いて来させなくするために、わざとオリ
ビエを酔わせたとか？」

「えっ……。……。あ、当たたり前じゃない。深慮遠謀の夕
マモノってヤツよ」

「その間はなんなんすか……」

「絶対ナチュラルに楽しんでたね」

イクスとヨシユアは呆れながらも言う

「……さてと、夜も更けてきたわ。早速、宿の周辺を回りながら張り込みを始めるとしますか」

「あ、ごまかした」

「ええい、おだまり」

「理不尽だ」

「とりあえず、昼間に話を聞いた外れの棧橋まで見回りをするわよ」

「はい、わかりました」

「それじゃ、レッツ・ゴー！」

エステルは元気よく掛け声を上げ、宿の者にバレないように二階のテラスから外に出て見回りを始めた

外れの棧橋

「うーん、誰もいないわね。何の用事か知らないけどあの兄妹、本当に現れるのかな」

外れの棧橋に着いたエステル達は辺りを窺ったが人の気配をしなかつた

「確かに確証はないけど……ロイドさんの情報が正しければ、きっと現れるんじゃないかな」

「でも、あまり動き回ったら見つかって逃げられる可能性があるわ。空賊たちは、街道から来るみたいだし、そちらを見張っておいた方がよさそうね」

「確かに……それじゃ、どのあたりで見張ろうか？」

「街道方面がチェックできて、向こうには気付かれない場所……。そんな場所が良さそうだね」

「なら……さっきのテラスは？ あそこならバレないと思うぜ」

イクスの提案に全員が賛成し、川蝉亭のテラスで見張ることにした。しばらくして、エステルが何かを見つけたようだ

「あ、あれは……」

小さく指さす先。そこには、空賊団兄妹のキールとジョゼットが街道から現れた

ジョゼットはロレントの時に着ていた制服ではなくキールと同じタイプの飛行服だった

何か一言二言呟くと、二人は外れの棧橋へ向かった

エステル達には聞こえていなかったがジョゼット達はこう会話していた

「さてと……少し早い時間に着いたか」

「そうだね。あーあ、昼間だったらここで食事とか出来るのにサ」

「無茶言つなよ。俺たちやお尋ね者なんだぞ？ ほね、さっさと行くぞ」

「あ、待ってよ、キール兄！」

それを見ていたイクスはチツと予想通りの結果に舌打ちしながら呟く

「……やっぱ、あいつらか」

「外れにある棧橋の方に向かったみたいだね。何をするつもりなんだろう？」

「それは見てのお楽しみみてね。気付かれないように近づくわよ」

「うん！」

エステル達は気づかれぬよう出来る限り気配を消して跡をつけて行った

外れの棧橋

「さすがにまだ来てないか。しかし、あの連中、いつも時間通りに来るよな」

「ボク、あいつらキラーイ。なんか偉そうだし……それにちょっと
恐いんだもん」

キールとジョゼットが尾行に気づかぬまま小声で喋る

「確かに……得体のしれん連中ではあるな。だが仕方ないさ。ドル
ン兄貴の命令だからな」

キールは警戒はしているつもりだがまだ少し甘かった
何故ならエステル達が聞いているのだから

「（ここなら大丈夫そうね……）」

「（おう、会話もバッチリ聞こえるぜ……）」

エステル達は階段の近くにある柵の後ろから見ている

「……………ねえ、キール兄……ドルン兄、最近おかしくない？」

ジョゼットがキールに尋ねた

その口調には疑問が浮いていた

「……………」

「だいたい変だよ。定期船を乗っ取ったのだって、確かに実入りは
良かったけど、軍が本腰入れて介入してきたし……遊撃士なんてい
う生意気な連中まで絡んでくるし……それに人質を取って身代金ま
で要求するなんて……さすがに、やりすぎだと思っ」

ジヨゼットがキールに言った

その言葉は空賊としてはおかしいかもしれないがジヨゼットは

いや、ジヨゼットだけではない。キールも部下達も本当は心優しい者達なのだ

そんな妹を見てキールは苦笑交じりに話しかける

「何だかんだ言つて、お前も女の子なんだなあ……。心底、悪党には成りきれねえか」

「なっ!?!」

「怒るな、誉めてるんだよ、これでも。辛いんだったらお前だけでも故郷に戻つていいんだぜ? 高望みさえしなけりゃ、あそこは暮らしやすい場所だ。この国よりは、ちと寒い……」

そんなキールの言葉をジヨゼットは途中で遮り怒鳴る

「い、いくら兄いでも怒るぞ!?! だいたいボクがいなかったら食事も洗濯もままならないクセに。ボクがロレントに行つてた時の惨状を繰り返すつもりかよっ!?!」

余談ではあるが《カプア一家》の構成はジヨゼット以外男で家事が出来ない

ジヨゼットが《カプア一家》のそういつた担当をしていたためロレントに行つた後の台所は物凄かつたという

その想像は読者にお任せしよう

閑話休題

「ぶるるっ……そいつはゴメンこうむりたいが……でも、ちったあ考えておけ。これ以上引き返せなくなる前にな」

キールが身震いしながら言い聞かせておく

「……………」

ジヨゼットは黙る

「ま、それはそれとして。確かにドルン兄貴の様子がちよいと変と
いうのは同感だ。身代金の額を釣り上げるために時間を稼ぐつての
も限度がある。その見極めがつかないほど兄貴はバカじゃないと思
うが……………」

「やっぱりさ……………アイツが来てからじゃないの？ そうとしか考え
られないよ……………」

「確かに……………連中を紹介したのもヤツだしな。何か吹き込まれたの
かもしれねえ」

「（アイツ？ ヤツ？）」

「（ふむ、誰のことかしらね）」

エステルとシエラザードは考えている
と、

「（あ、あれは……………）」

ヨシユアが何かに気づく

「(どうしたの?)」

エステルがヨシユアの方を向いた
そこには、

「(……来たみたいだな)」

ボートがやってくるのが見えた
暗くではつきりとは見えないが乗っているのは黒装飾の男とその黒
装飾にさらに装飾が加えられた男だった

「よう、おいでなすったな。相変わらず時間通りじゃねえか?」

「フン、少しは遅れてくるなり早く来たりすればいいのにさ。まっ
たく可愛げがない連中だよな」

どうやらキールとジョゼットの待ち人は彼らだったらしい

「フ……時間厳守が我々の習いでね。気に障ったのなら謝罪しよう」

黒装束に赤のラインが入った男　あまりにも長いのでリーダー
格と表記する　がかすかに笑いながら返す

「た、単なるイヤミだよっ！　ホント可愛げがないんだから……」

「こら、話が進まねえだろ」

キールが話がそれそうなジョゼットをとがめ、再びリーダー格の男

に向き直った

「とりあえず……さっそくビジネスの話と行こう。その後の進展はあったのかい？」

「ああ、ついに陛下が動かされた。ご自分の資産から身代金を拠出するおつもりだ」

「そ、そうか……女王さんの財布からかよ……。いよいよ大詰めってわけだな」

キールがちよつとどもりながら呟く

基本女王の資産という言葉は聞くこともないものだからだろう

「王国軍の方はどうなの？ ボクたちのアジトの場所に気づいたよ
うな気配はある？」

「まだのようだな。しかし、時間の問題だろう。遊撃士協会のメンバーが動いているという情報もある。いずれにせよ、成功の暁にはアジトを捨てることになるぞ？」

シヨゼットの質問にリーダー格の男が答えた

「ああ……どうせ偶然見つけた仮宿だ。兄貴だって未練はないはず
さ」

「（また怪しげなのが現れたわねシエラ姉、どうする？ 突入して

「一気にケリ付けようか？」

エステルがシエラザードに尋ねる

「（ふむ……それより良い考えがあるわよ）」

「（良い考え？）」

エステルが再度尋ねシエラザードがコクツと頷く

「（あの兄妹が現れたってことは近くに空賊艇が停泊してるハズ。また逃げられたらかなわなしいし、先にそちらを押さえるのはどう？）」

「（なるほど……まずは足を奪うってことね。あたしは賛成だけど、ヨシユアとイクスは？）」

エステルが隣で観察していたヨシユアとイクスに聞く
しかし、

「（……………）」

「（……………）」

ヨシユアとイクスは険しさと驚きの混じった眼つきのまま黙っていた

「（ヨシユア？ イクス……？）」

「（あ、ああ……空賊艇を先に押さえる案か。うん、僕もその方がいいと思う。イクスは？）」

「（……………あ、おう。俺は構わない。それで行く）」

「……………どうしたの二人とも？　なんか、顔が強張ってない？」

エステルは心配そうにヨシユアとイクスの顔を覗き込む

「（いや……………うん、きっと気のせいさ）」

「（……………何でもない。さ、いっつぜ）」

ヨシユアは自分自身に言い聞かせるように言いイクスはどこか無理した様子で促した

「（……………？）」

エステルは首をかしげている

「（あまり時間はないわ……………彼らの話が終わるまでに街道に出て空賊艇を探すわよ）」

シエラザードの一声で頷き素早くその場を離れ空賊艇を探し始めた空賊艇が停泊できそうな場所を調べていき
そして、

「なるほど《琥珀の塔》の前か。確かに街道から外れてるから停泊場所としてはうってつけね」

見つけた

岩陰に隠れながらシエラザードは納得した風に頷く

「《琥珀の塔》ってロレントの《翡翠の塔》と同じような塔だったっけ？」

「《四輪の塔》と呼ばれている古代遺跡の1つだよ。それでシエラさん……すぐに彼らを制圧しますか？」

ヨシユアがシエラザードに尋ねる
だがシエラザードは渋っていた

「そうね……。前に遭遇した時と較べて手下の人数が倍以上いるけど……」

「大丈夫だって。制圧できない数じゃないよ。このまま一気にケリを……」

エステルが言おうとした時、

「フツ……それはどうかと思うけどね」

あの酒を浴びるように飲み（飲ませれ）グロッキーになっていたオリビエが草陰から飛び出してきた

「やあ、待たせてしまったね」

「オ、オリビ……」

「静かにしろエステル……あいつらに気付かれる」

まさかのオリビエ登場に思わず叫びそうになるエステルをイクスが
間一髪で止めた

エステルはすぐさま口に手をあてコクコク頷いた

「驚いたわね……。あの酔いつぶれた状態から、よくそこまで回復
したもんだわ」

シエラザードも感心した様子でオリビエを見ていた

「フツ、任せてくれたまえ。胃の中のものをすべて戻して、冷たい
水を頭からかぶってきた」

「あ、ありえない……」

「なんと言うか、執念ですね……」

「よく、んなことできるな」

その行動に全員呆れている

「こんな面白そうな事を見逃すわけにはいかないからね。ちよつど
宿から出たところで街道に出るキミたちを見かけて、ようやく追
ついたという次第さ」

オリビエが笑いながら説明してくれた

こいつの面白い事に対する執念は生半可ではないらしい

「ツメが甘かったわね……。火酒に一気に飲みでもさせておけば良か

「たかしら？」

シエラザードは悔しがるように言った
さすがにそれはマズイが

「それは確実に死ねるんで勘弁してくれたまえ……」

オリビエもさすがにそれはマズイと思い釘だけは刺しておいた

「それよりもキミたち。ここで空賊たちと戦うのは少々面白くない
と思わないか？」

「別に面白くなくてもいいの！」

エステルが怒るがオリビエの口調と顔は真剣そのものだった

「いや、これは真面目な話。ここで戦って、ついでにあの兄妹を捕
らえたところでだ。彼らがアジトの場所について口を割らない可能
性だつてある。それどころが、人質をタテに釈放を要求してくるか
もしれない」

「何事にもリスクは付きものだわ。それとも、リスクを回避できる
いいアイデアでもあるのかしら？」

「フッフッフ……諸君、耳を貸したまえ」

不敵な笑みを浮かべたオリビエ

「いいけど……。息を吹きかけたりしたら、マジでぶん殴るからね
？」

エステルが念を押した後、オリビエが説明した
その提案は

「兄貴、お嬢！」

「お帰りなさい！ 結構かかりましたね」

「話が長引いたんスか？」

空賊艇がある《琥珀の塔》にジヨゼットとキールが戻ってきた
空賊たちが口々に労わりの声をかける

「ああ……いよいよ大詰めだからな。王国軍の動向を含めて、かな
りの情報を仕入れてきた」

「それじゃ、いよいよ……」

空賊たちが期待を膨らませた
その期待を裏切らないようにジヨゼットが頷いた

「うん、数日のうちに身代金をいただけそうだよ。ボクたちの夢に
向かって一歩前進といったところだね」

ジヨゼットの言葉にその場の全員が諸手をあげて喜ぶ

「ひゃっほーっ！」

「やったぜっ！」

「こらこら。まだ喜ぶのは早いっての。とりあえずアジトに戻って
ドロン兄貴に報告するでしょう」

「みんな、急いで撤収だよ！」

「がってんだ！」

空賊たちが異口同音じて叫ぶ
そして焚き火を消し撤収準備に入った

空賊艇・山猫号

「気温21度、湿度15%。南南西、風速12アージュ」

「周囲の導力反応は無しだよ」

「軍の巡回は無さそうだな……。オーバーエンジン始動。船体各部
への導力伝達を開始」

「アイサー。オーバーエンジン始動。各部への導力伝達を開始。オ
ーバルフローター作動開始。オーバルドライバー作動開始。ス
タビライザーもOKです！」

空賊たちが着々と発進の準備をしていく
全ての準備が整うと、

「よし……。カプア空賊団所属、《山猫号》

デイクオフ
離陸！」

キールが叫び《山猫号》は空に舞い上がった
そうして、真夜中に《山猫号》は空に飛びだった。目的地は借り宿
である現在のアジト

「駆動率を40%に固定。そのまま巡航速度を維持せよ。ただし、
いつでも戦闘速度に切り換えられるようにしとけよ」

しばらく飛んでからキールが忠告しておいた

「アイサー」

空賊も素直に了解し返事をした

「やーれやれ。夜明け前には戻れそうだね」

「ああ。とつとと眠りたいところだがドルン兄貴に報告しないとな」

キールとジョゼットはそれだけ交わして後は自分の役割に勤しんだ

エンジン室

「…………あれ……………。なんか音がしなかったか？」

空賊の一人が何かに気付いたように別の空賊に聞いた
だが聞かれた方は首を振る

「いや？聞こえなかったけど」

「妙だな。たしか船倉の方から…………」

気になった空賊は船倉の方へ降りて行く
だが船倉には自分達の荷物だけで他にはなにもない

「うーん…………ネズミでもいるのかな？ ヒマを見て掃除でもするか
ね」

そう言っつて自分の持ち場に戻っていった
誰かが乗っていたにもかわらず

空賊団アジト
アジトに到着すると次々と降り立っていったジョゼット、キール、
そして空賊達

「ふわ〜、眠い、眠い。ここに来てから昼夜逆転の生活だからな」

見張り役の空賊

ライルは欠伸あくびをしながら言った

見張りは二人で行われ後は部屋に戻っていったのだ

「まあ、もう少しの辛抱でこんな生活ともオサラバさ。ドルンのお頭に付いていけば間違いなしつてもんだぜ」

もう一人の空賊　ロイルが嗜めながら言う

「しかし最近のお頭……ちょっとばかり変じゃねえか？　おっかないつていうか気安く話せねえっていうか」

「お前ね……そんな滅多なこと言うなよ。兄貴やお嬢に聞かれたらぶっ飛ばされるぞ？」

「で、でもよ……」

「寝不足で疲れてるんだよ。とっとと片づけを終わらせて、ゆっくり休むとしようぜ」

これでこのおしまいとばかりに手を振るロイル
その時、

「今すぐ休んでもオツケーだけど？」

声が聞こえてきた

驚き慌てて振り向くとそこには既に得物を構えたエステルたちがにやっと笑いながらこちらを見ていた

「あ

「お前たちは……！」

空賊たちが驚いた
その刹那、

「すまねえが気絶^ねてくれ。

」

「すみませんね。絶影」

イクスとヨシユアが先行して二人を潰した
ヨシユアは一直線のなで斬りだと判断できたがイクスの技は名前と
共に音速で行われたため見えなかった
呆気なく空賊たちを片付けた

「フツ、無事、潜入できたようだね」

「まったく……こんなに上手くいくとはね。今回はかりはあんたに
感謝しなくちゃいけないわね」

シエラザードは苦笑交じりに呟く
そう、これは全てオリビエの案だった

「で、でもさ。メチャメチャ焦ったわよ。隠れてる所を発見され
たらどうするつもりだったの？」

「いや、発見されたとしても、その時は空賊艇を制圧すればいい。
飛行船の内部は狭いから多数との戦いにも有利に働くしね。オリビ
エさん……そこまで考えていたんですか？」

「いや、まったく」

ヨシユアの問いにオリビエが即答した

「敵地潜入というシチュエーションが単に面白そうだと思っただけさ」

「あ、あんたねえ……」

エステルが呆れ顔をした

「まあ、いいじゃない。こうして無事潜入できたんだし。それよりも……ここは《霧降^{きりふ}り峡谷》みたいね」

シエラザードは周りを見て断言した

「《霧降り峡谷》ってボースとロレントの境にある？ そっか……だから外が白く霞^{かすみ}んでるのか」

エステルは入ったところを見て納得した

霧降り峡谷は年中霧が深い、複雑な構造を持つ峡谷である。土地勘の無いものが迷うと餓死する可能性も否定は出来ない場所だった

「それと、大型船は侵入できない高低差の激しい入り組んだ地形……。シエラさんの推測、どうやら当たってたみたいですね」

「ま、せっかくの推測もあまり役に立たなかったけどね。さてと……あまりグズグズできないわ。空賊たちを制圧しつつ、監禁されている人質の安全を確保するわよ。もちろん……カシウス先生もね」

「うん……！」

「了解です！」

「ああ、行くっ」

イクスがそれだけしか喋らなかつたことに誰も気づきもしないまま
奪還救出作戦が幕を開けた

蒼空語り

イクス

「はい始まりました蒼空語り。司会は俺が担当してるぜ」

エステル

「アシスタントはアタシが担当してるわ」

イクス

「今回はいつにもまして長かったな。なんかあったのか？」

エステル

「別にないと思うわ。ただ風花が待たせた分ボリューム倍増でお届けしたいなあ、って呟いていたからそのせいかもね」

イクス

「なるほど。ま、この蒼空語りは相も変わらず少ないけどな」

エステル

「仕方ないわよ。これはあくまでオマケ。ほら、質問コーナー移りましょ」

イクス

「ういゝつす。そんじゃ今回はこれだけだ。HN『ガイア』さんから『今回も楽しかったです。』

まさかネタをばらすとは思いませんでした。

質問は、エステル達は最初、闇鍋を見てどう思いましたか。次も楽しみにしています。』」

エステル

「……………まさかあんな味だなんて思いもよらなかつたわ」

ヨシユア

「真っ黒だったよね……………」

カシウス

「一瞬で食べたくないと思ったださ」

イクス

「ひつで〜言われようだな。ま、こんな感想です」

エステル

「いやホントにそう思ったんだから仕方ないでしょ!？」

イクス

「はいはい。今回はゲーム主体ではなくマンガ主体でいくからな。それじゃあ」

イクス・エステル

「 1616 ~ 15」

第一章 く消えた飛行船く memory……? (前書き)

風花

「新年明けまして」

イクス

「遅せー！ー！ー！」

風花

「おぶえらっ!?!」

イクスの回転打撃の一撃に吹っ飛ばされる風花

風花

「何するの!?! ここは全員でおめでとーいなんですって言うのでしょ普通」

エステル

「文字数の割には遅いのが原因よ。反省なさい」

ヨシユア

「ははは……、あ、読者の皆さん、明けましておめでとーいございます。今年も『蒼空の軌跡 FC』をどうぞよろしくお願いします」

イクス

「あ、テメ、ヨシユア! 一人だけ真面目に挨拶してんじゃねえよ」

ヨシユア

「君達がしないからだろう」

風花

「ははは……今回は諸事情により蒼空語りはお休みさせていただきます。
では……」

全員

「『蒼空の軌跡 FC』始まります」

第一章 く消えた飛行船く memory…???

空賊アジト

そこは石造りの大きな遺跡だった

しかし遺跡と言ってもそれ自体は山に擬態しているため絶好の隠れ場所だ

そんなアジトの一室で空賊数人が遅めの夕食を食べていた。もうそろそろ食べ終わりそうな時、扉が開きそして

そのこの部屋のさらに奥の部屋。そこには服装も年代も男女比率もバラバラな者達がいた
全員、空賊に捕まった乗客乗務員だ
誰もが静かにもくもくと何かをしているその時、

「うわぁっ!?!」

「なっ、なんだおまえぶぁ!」

そんな叫び声と共にうるさい音が響いてきた
効果音として出すと……

バタバタバタ……

ピシィ!

ぱんぱん

ゴン!

ああ、もっとぶってください〜

マックがMに目覚めたー！
など危ないものだった
特に五つ目が一番危ない
それには驚く乗客乗務員達
静かになるとドアノブががちゃがちゃと回されそして、

「どっせいー！」

「どりゃー！」

掛け声と共に扉がぶち壊された
またまた驚いてしまい食事中だった乗客乗務員達は少しの者が喉に
詰まらせてしまった

扉を壊したのは棒術具を手にした少年少女　イクスとエステル
だった

エステルは部屋にいた乗客乗務員達の姿を見つけると笑顔を浮かべた

「良かった！　みんな無事！？」

声をかけるエステルの後ろには一輪の薔薇を片手にキラキラ輝いて
いるオリビエ。そんなオリビエに呆れているイクス。鞭を片手に手
を振るシエラザードに一人で気絶している空賊達を縛り上げている
ヨシユアがいた

「遊撃士協会の者です。皆さんを救出に来たわ」

「見張りの空賊は片付けたから安心してくれ」

シエラザードとイクスがそう告げると途端に乗客乗務員達の間で歓
声が沸き起こる

エステルとオリビエはそんな乗客乗務員達のいる部屋に入りエステ
ルはきよるきよると見渡す。そして何故か首を傾げた

「……………あれ？」

「どうかしたのかいエステル君？」

「あれれ？ ……ねえ、人質の人って、これで全部？」

エステルが船長らしき人物に尋ねる

そう、この場に父、カシウスの姿が見当たらないのだ
だがその質問を船長は答える事は出来なかった

「何の騒ぎだ！？」

「人質部屋の方からだよ！」

入り口から声が聞こえてきたのだ

すぐに入り口に眼を向けると慌てた様子でジョゼットとキール、空
賊達が入ってきた

もちろんこの場にいる遊撃士を見て驚き出す

「あいつらあの時の……………」

「遊撃士……………、どうしてこの場所に……………」

「何、言ってるんだ。お前達が連れてきてくれたんじゃないか
ねえか」

疑問に思うキールにイクスが笑って答える

「バカな……何をふざけたこと言ってる……いや、まさか」

「そういうこと。料金は払わねえぜ」

気付いたキールにまたまた笑顔で返すイクス

コホン、と咳払いをするとシエラザードが一步前に出た

「空賊団《カプア一家》！ 遊撃士協会の規約に基づきあなた達を逮捕するわ！」

ヨシユアも一步後ろで右腰に吊り下げた双剣を抜き構える
それを見た空賊も短剣を構えるがその顔は焦っていた

「キ……キール兄貴！」

「いや……、ここは場が悪い。一旦ひいて……」

ジヨゼットの肩を掴みながら言ったその時だった

ジヨゼット達の背後の入り口を抉りながら何かが放たれた

「きゃあっ!?!」

「シエラさん！」

それはシエラザードのすぐ脇の壁に直撃した。シエラザードも爆風に巻き込まれヨシユアがシエラザードの名を叫ぶ

「なーに言っただキールよお」

入り口から野太い声が響く

そこには巨大な導力砲を持った大柄の男が立っていた

「そんな奴らここで殺しまえばいいじゃねえか」

「ド、ドルン兄……」

「……てめえらが例の遊撃士か」

ドルンと呼ばれた男はシエラザードとシエラザードを心配するヨシユアを見下ろす。導力砲を向けながら

「直接乗り込んでくるとはいい度胸だ。全員血祭りにあげてやるぜ」

「シエラ姉！」

エステルもドルンの出現に気づき駆け寄ろうとする
だがその前にキールがエステルもとい人質部屋の前に立ち塞がる

「待てよ兄貴！ 場所を変えよう。ここじゃ戦闘は、無理だ！」

「なに？」

「そ、そうだよドルン兄！」

ジヨゼットもキールの前に立つとドルンを説得する

「ここには人質がいるんだよ！？ こんなところで導力砲なんか使ったら、人質のみんなまでケガしちゃうよ！」

「……………ああ、そうだな」

ドルンは普通に答える
だが、すぐにニヤツと笑い言い放つ

「……………それがどうした？」

「……………え？」

「いいじゃねえか、身代金は手に入ることになったんだ。人質なんざお払い箱よ」

「ド……………ドルン兄……………？」

「ちようどいい。みんなまとめてあの世に送ってやるぜ！」

そう宣言すると再び導力砲をいまだ立てていないシエラザードに向ける

そこに容赦しない、なんて生ぬるいものはなかった

「ドルン兄ッ！」

「よせ！ 兄貴ー！！」

ジヨゼットとキールが必死に叫ぶがドルンは聞き入れようとしな
いその間に、

「ヨシユア！ 《ダークカッター》！」

イクスがアーツを発動し黒い刃を飛ばす

ドルンはすぐに気づき避けるがイクスは別に当てようとしていたわ

けではない

イクスの狙いはただ一つ

本命のヨシユアが攻撃を当てるためだ

「はっ！」

ヨシユアはドルンの懐に入ると狙いの定められている導力砲を突き上に狙いを逸らした

だが驚いた拍子に放たれた導力砲はイクス達の上の壁に

「なっ！ 僕ッ子！」

イクスは慌ててスタッフでジョゼットを引き寄せる

「ちよっ……何すんだい!？」

「黙ってる!」

イクスはそのまま引き寄せたジョゼットとエステルの肩を抱き人質部屋に跳び込んだ

そのままガラガラと壁が崩れる

「エステル！ イクス！」

ヨシユアは崩れが収まると慌てて瓦礫に駆け寄る

「大丈夫かい、エステル！」

「ヨシユア！ しっかりなさい！ 敵はまだ眼の前にいるのよ!」

シエラザードが激を飛ばす
振り返るヨシユアの前には不敵な笑いを浮かべるドルンがいた

「……………ツ……………エステル、無事か？」

イクスは顔をしかめながら起き上がろうとする
だがそこで妙な手触りを覚えた

(……………あれ？ 地面ってこんなに柔らかかったっけ？ あれ、何で
エステルとジヨゼットがあんな怖い顔してんだ？)

イクスはおそろおそろ己の手を見ている
自分の手があった場所。そこは

二人の胸だった

「イクス……………」

「アンタ……………」

「待て！ 不可抗力だ！ 倒れた時にたまたま二人の胸があつてだ
な……………」

「「問答無用(だ) ああああああああ！！」」

「ぎゃあああああああああああああ！！！！」

悪気があって触ったわけではなかったのにエステルにはタコ殴りにされジョゼットには導力銃の出力を最大にされた（もちろん非殺傷）連弾を浴びせられるイクスだった

章変え。リセット

ケガもあら不思議と治りました

ちなみに既に胸を揉まれた二人の意識はエステルはジョゼットに、ジョゼットはエステルに向けられていた

「能天気女！ どうしてこんなところに！」

「じ、時間差でビックリするんじゃないわよボクっ子！ あんたたち空賊をやっつけに来たに決まってるでしょ！」

「へーんだ、やれるもんならやってみなよ！」

「あんですってーっ！？ あんた、自分が何やってんのかわかってんの？」

舌を出し挑発するジョゼットにそれに簡単に乗りむきーっ！ と、怒るエステル

「飛行船襲って街を騒がせて、拳げ句女王陛下まで困らせて……。関係ない人を巻き込んで！ こんなところに閉じ込めて！ あたしが……、残された家族がどんな辛い思いしてたのか、あんたには分かんないの！？」

そこで初めて言葉を詰まらせるジヨゼット
その後、そっぽを向きながら途切れ途切れに言う

「だ、だって……ドルン兄が……」

「ドルン!? 全部あいつの仕業なの!?!」

エステル勢は止まらない
相手の表情を見ずに感情のまま叫ぶ

「あいつが一番めちゃくちやよ! 遊撃士どころか人質のみんな
で傷つけようとするなんて……、どうしてそんな酷いことができる
の……」

「おい、くら」

「よくん!?!」

感情のまま叫ぶエステルを頭を殴ることで止めたのはイクスだった

「そこまでだエステル」

「イクス! だって……」

「感情のまま言っていた姉貴には分からないかも知れないけどさ……
…俺だって姉貴や兄貴が悪く言われるのは我慢できないんだよ」

イクスの言葉にハツとする

大切な事の時、イクスはエステルとヨシユアを呼び捨てではなく姉
貴、兄貴と呼ぶ

それくらい今のエステルは止める必要があったのだ

「だから……その話題は禁止だ。良いな、姉貴」

「う……うん」

「ありがとう、エステル。さて……」

イクスはエステルに笑顔を向けた後、ジョゼットとキールの方を向いた

「さて……キールさんよ。うちの姉貴とあんたはこの妹のケンカも終わったことだしこころは一つ、一時休戦といかないか？」

「おいおい、いいのかよ……、そんな簡単に俺達を信用して」

「気にすんな。俺……は良くてもエステルはどうだ？」

イクスの言葉にエステルは迷い無く、

「あたしは良いわよ。自分の勘を信じる！」

頷いた

さすがに呆れるカプア兄妹

「さすがはエステル君。それでこそラブ& amp・ピースだよ」

「テメエが一番働けやあ！」

周りが薔薇色、加えて女性乗務員の手を取りながら言うオリビエに

イクスの渾身の一撃（理不尽なエステルとジョゼットの二撃の怨みも込めて）に吹っ飛ばされるのだった

ヨシユア、シエラザードは長い通路を走り広い部屋に逃げていた
後ろからは、

「逃げてても無駄だぜ！」

導力砲を放つドルンと部下達が追っていた
爆風から逃れたシエラザードは腕を器用に動かし鞭を振るう
振るわれた鞭はドルンに向かっていくが命中したのは身代わりとして盾になった部下達だった

「兄貴、ここは俺達が！！！」

「良いぞてめえら！　しつかり守れよ？」

笑いながら導力砲を構えるドルン
その後ろから気配を出来るだけ消したヨシユアが双剣で斬りかかる
うとしていた

「兄貴、後ろっ！」

だがドルンには気付かれなかったが部下の一人に気付かれた

「おっと、残念っ！」

放たれた導力砲を空中で間一髪避けたヨシユアは舌打ちをしながらバックステップで距離を置く

「ヨシユア！」

「大丈夫です！」

「それにしてもなんて威力なの！？ これじゃ、不用意に近づけないわ」

導力砲によって破壊された壁を横目で見ながらシェラザードも舌打ちをする

「がははははは！ どうした、かかってこいよ！」

大勢の部下達に囲まれながら豪快に笑うドルン

「取り巻きの数も多すぎて、死角がないのが痛いですね。せめて一瞬、こちらへのマークが外せれば……」

ヨシユアは呟きながらアーツを発動し斬り込んだ
焦る気持ちを必死に抑えながら……

第一章 く消えた飛行船く memory:?? (前書き)

風花

「大変長らくお待たせしました。蒼空の軌跡再開します」

深々と下げて謝る風花

イクス

「どうでもいいけどよ、今回も蒼空語り、休みなのか？」

風花

「最近になって決めただけど章の最後ら辺はシリアスで押し進めたいなって思っ。だからこれからも終わりが近づくと休みに入り、新しく章が始まると復活するって決めた」

イクス

「ああ、そう……それじゃ、ま、始めるとしますかね」

風花

「はい。ではどうぞ」

第一章 く消えた飛行船 memory:???

一方、エステル達は今だ目の前の瓦礫を何とかしようと頑張っていた

「押しでもビクともしないし引いたら崩れてくるし……どうしたらいいのよ」

手元でスタッフをくるくる回しながらため息と同時に言うエステル
一回、キールの持つ爆弾で壊そうとしたがさすがに被害が大きいのか一回使ったあと、部屋の天井から砂煙が舞った
おそらく後一回でも使えば間違はなく崩れそうなので断念した

「つたく、そんじゃま……秘密兵器でも投入するかね」

「何よ秘密兵器って……?」

イクスは一度スタッフで瓦礫を突き、弾かれるとスタッフを回し構えた

スタッフの真ん中からやや上部を右手で握り腰に添えると左手をそれより上に手を乗せた棒術にはないであろう構え

エステルとカプア兄妹は不思議そうにその構えを見ていたがオリビエだけは構えの名前は知っているようだった

「ふむ……、『居合い』だね?」

「居合い? 何よそれ」

「居合いとは東方に伝わる剣術の一種で、剣を鞘に収めた状態で帯刀し、鞘から抜き放つ動作で一撃を加えるか相手の攻撃を受け流し、

二の太刀で相手にとどめを刺す形、技術を中心に構成された武術の一つさ」

「ふうん……。つてあれ？ イクスのはスタッフであって剣じゃないでしょ！？ スタッフごと居合いをするっていつの？」

「いや、どうやら彼のスタッフは……」

指を指しイクスに視線を向かせる

イクスは構えたまま動かさずジツと瓦礫を見ていたがその刹那

「吉式いっしき

斬鈍なまくら」

乗せていた左手を振った

いや、振るだけではない。振って、また戻したのである

その間、イクスの右手は動かさずスタッフを握っていた

ということとは……

「僕の予想が当たっているのなら、イクス君のスタッフ……中に刃を隠しているみたいだ。しかも端と直結しているみたいだから剣としても十分使えるみたいだ」

「あ、あんですって〜！？」

エステルは十分驚いたようだ

今まで自分と同じようにスタッフだけを振るってきたイクスがまさか別の武器を使っているとはビックリである
ただ、

「……刃の痕だけでどかせねえー」

「剣じゃ瓦礫は崩せないけどね」

イクスとオリビエの声が重なった

「つてえ、意味ないじゃないっ！」

ツッコんでしまうエステル

だがまあ誰にでもツッコミたくなるかもしれない
今の状況を考えれば

「あー、くそ。刃欠けそうじゃねえか。仕方ねえ、押すか。

おーい、男諸君、疲れてるかもしれないが手伝って」

イクスは今置かれている状況に出さない呑気な声で助けを呼ぶ
人質の中の男性陣は呆気にとられながらも頷きイクスと共に瓦礫を
押し始めた

やることのない女性陣の一人であるエステルはふと隣を見ると小さな女の子が自分を見上げているのに気が付いた
その眼は心配そうだった

「だーいじょうぶよ。あと少しでみんなお家に帰れるからね」

「……うん！」

女の子は笑いながら頷くと、ちよつど、

「それはよかったわ。人質でいるのも飽きてきたしどうしようかな
って思ってたの」

声が聞こえてきた
エステルが顔を向けると積み重ねられた木箱の上に紫色の髪をした少女が座っていた

「だってパパとママが一緒でしょ？ レンひとりならいつでも外に出られるんだけど……」

「へ……？」

「ほら、ここ」

自分をレン、と呼んだ少女は木箱の後ろに降りた。エステルも木箱に乗りそこを見てみるとそこには小さな穴があった

「こんなところに抜け穴が……」

「パパ達、大きな人は無理だけどお姉さんや銀色の髪のお兄さんなら通れるかもね」

確かに、とエステルは頷く

ジヨゼットはまさかこんな所に抜け穴があったとは考えていなかった、というか知らない様子で驚いていた
それを近くで聞いていた乗客は、

「よし、行ってこい遊撃士ッ！」

「空賊の頭をやつつけてくれ！」

応援した

「ちょ、ちょっとイクス、何してんのよ!? それ人でしょ!」

「気にすんなって。 うし、できた。ほらよ」

イクスは有り合わせの材料を使いぬいぐるみに細工するのを終わるとそれをレンに渡した

細工したぬいぐるみは普通のボムから天使の羽、わっかを付けたシヤニングボムになっていた

「なに?」

「協力してくれてサンキューな、という遊撃士のお兄さんからのお礼だ。なに、バレなきやいーんだよバレなきや」

「うふふ、お兄さんもなかなか悪^{わる}ね」

「さあな。……そんじゃレンちゃんはパパさんとママさんのところに帰ってな。すぐに解決してくっからよ」

イクスが頭を撫でながら言う。レンは嬉しそうに頷くと手を振りながら穴に入って戻っていった

「さて、と。んじゃ用意はいいなエステル」

「モチのロンよ。よし!」

「いつくぞー!」

「わひゃ!?!」

エステルは意気込んで行こうとしたが先にジヨゼットが声をあげた
それでエステルは吃驚

「どうしてジヨゼットが来るのよ!?!」

「べつ、別にいいじゃない!」

走りながら怒鳴り合う二人

イクスはうるせえ、と思いながらも何も言わず一歩後ろを走っていた

「あつ、そつだ、ジヨゼット!」

「なんだよ!」

「ごめんなさいっ!」

「……へ?」

突然体を九十度曲げて謝るエステル

突然の事で呆けてしまったジヨゼットにエステルは理由を説明する

「ドルン……あなたのお兄さんの事、悪く言い過ぎたわ。あたしだ
つてヨシユアやイクスの事悪く言われたら腹が立つもの。だから…
…さつきはごめんね」

エステルはヨシユアやイクス

ヨシユアはエステルやイクス

イクスはエステルやヨシユア

誰もがキョウダイ……いや、家族の事を悪く言われたら腹が立つ

さつきイクスに言われて反省していたがどうしても謝りたかったのだ

自分から出てしまった失言を消せなくても上書きできるように
ジヨゼットはふん、と顔を逸らした。やや赤いのは気のせいだろう
「ふん……。そうだよ、何も知らないくせに……。ドルン兄は本当に
優しい良い兄貴なんだから！」

「それはどうかなあ……。？」

「こいつには良い兄貴なんだろ」

小声で話すエステルとイクス

「だけど……」

その言葉で前を見る

ジヨゼットは悲しそうな顔をしていた

「だけど……。突然、人が変わっちゃったみたいなんだ」

「え？」

「どういう事だ？」

エステルは呆けた声を出しイクスはどうしてか訊ねた
ジヨゼットは答える

「飛行船を襲ったり……。人質を取ろうとするなんて……。あんなのい
つものドルン兄じゃないんだ……。！」

「　　なんだ、もう終いか？　なあ遊撃士さんよ」

導力砲を軽々と持ちながらドルンは余裕綽々と訊ねる

ヨシユアとシエラザードはあれから何度も避けては攻撃、避けては攻撃を繰り返していた。だが決定打になる一撃はまるで与えられず、逆に追い込まれていた

「まいったわね。どうしましょうか」

シエラザードも現在は万策なしといった風にヨシユアに問い掛ける。

その間も視線はドルンと空賊に向けられていた

ヨシユアも警戒しながら辺りを見渡す

　　何かないか。決定打に成りうるモノは……
と、その時だった

「……………」

ヨシユアの眼に何かが映った

それを見たヨシユアは自然と口端をわずかに上げる

「（…………シエラさん）」

「（…………何かしら。良い案でも浮かんだ？）」

「（僕が合図したら『全力全開』で左に走ってください）」

「（……………。なるほどね）」

シエラザードも分かったのか顔かす前だけを見た
睨み合いが続く

五……四……

……三……二……一……！

「いきますよ、シエラさんっ！」

ヨシユアの合図で共に走り出す

ヨシユアは右に

シエラザードは左に

「馬鹿め！ 今さら二手に別れたところでどうしようってんだ！？」

ドルンは豪快に笑う

周りで警戒していた空賊はほとんど均等に左右に別れ備えドルンは
ヨシユアを見ていた

「てめえらの動きなんてお見……」

言えたのはそこまでだった

何故なら 第三者が遮って叫んだからだ

「どこ見てんのあんた達！！」

「俺達は……こっちだあああああああつ！！」

声と同時に影が現れる。空賊達が振り返ると木箱を台にして落下し
てくるエステルが。すぐ後に一瞬にして斬り刻まれそこからイクス

が駆け出してきた
そう、これがヨシユアの狙いだっただけだ！

「な……なんだと!?!」

ドルンや空賊達も驚きに吼えながら後ろを向き、すぐに右を向き、左を向いた。誰からドルンを守ればいい、どこが最初に襲い掛かってくるのか、その考えが空賊達の次動を鈍らせ、遊撃士に決定打を与えることになった。

「やあああああああつ!」

シエラザードの鞭が踊り空賊達を一振りでなぎ倒す

「吉式 斬鈍ア・追蓮!」

イクスの駆ける速度をそのまま力にして連続で抜刀。『居合い』を仕掛ける。その全ての斬撃が空賊達を襲うが死ぬ者はいない。峰の方をぶついているのだ。

「はっ!」

ヨシユアも合図と共に駆け出した速度でドルンの懐に入ると双剣を下から上に斬り上げ導力砲を輪切りにした。これで撃てなくなった。しかし、

「がああああああつ!?!」

導力砲を破壊されたドルンは獣の如く咆哮を上げると手に持った残りの導力砲をヨシユアに叩き付けた

「ヨシユアッ！」

エステルが叫ぶ

ドルンは導力砲を投げ捨てると刃が柄に収納されるタイプのサバイバルナイフを取り出した

「てめえら、みんな……ここでぶっ殺してやらあ！！」

血走った眼で見るのはエステル

巨体ながらなかなか早いスピードでエステルに近づいたドルンはなりふり構わずナイフを振る

エステルはスタッフで捌いたり避ける

執拗に追ってくるドルン。とうとうスタッフを弾かれたエステルはしっかりと敵を見据えた

「がああああああ！！」

ドルンは両手でナイフを逆手で持つと天高く掲げ
振り下ろした
その刹那、

ターン！

乾いた音が響いた

次に響いたのはナイフが落ちた乾いた金属音だった

「ふ、遅れて申し訳ないね」

「お、オリビエ！？」

エステルの窮地を救ったのは導力銃を片手に優雅に髪をすくオリビエだった

「やめて……やめてよ、ドルン兄ッ！」

ジヨゼットが叫ぶ

同時に拳を握り締め今にも殴りかかりそうだったドルンの動きが止まった

「エステルッ！」

「っ！」

イクスが叫び出すと同時にエステルは弾き飛ばされたスタッフを拾うと水平に構えた

後ろではイクスも肩上にスタッフを構え投擲の格好をしていた

「時よ……加速しろ！」

《クロックアップ》！

さらに逆の手でアーツを発動する

掛けるのは人ではなく手に持つスタッフ。そのまま全力全開で投げる放つ場所は　ドルン

呆けていたドルンだがハッとすると紙一重で避ける
だが、

「はア！」

あくまでもそれは布石。本命はエステルだった
エステルは水平に構えていたスタッフを真っ直ぐに突いた
それは回避していたドルンの顎を的確に打つに至った
全員が黙って見守るなか、ドルンはゆっくりと、しかしダウン……、
という音を立てて倒れた

「ド……ドルン兄ッ！」

ジョゼットが心配そうに叫ぶ

「心配しないでジョゼット。少し気絶させただけよ」

「でもっ！」

「心配性だな。ほら、よく言うだろ。調子の悪い導力器は斜め四十
五度で叩きゃあ直るって」

「うちの兄貴を機械と一緒にするなあああー！」

「いてっ！」

かわされ壁に刺さっていたスタッフを抜きながら真顔で言うイクス
にジョゼットがどこから取り出したのかハリセンではたいた
すぐにドルンの下に駆け寄る

「ドルン兄ー！ー！ーッ！」

「兄貴イイイイー！」

それで思いだしエステルはシェラザードに抱えられているヨシユア

に向かって走り出していた

「大丈夫、ヨシユアッ!？」

「エステル……」

額からわずかに血を流しているが命に別状はないようだ。アーツで回復させようとしたが無理に回復させると脳の場合、後遺症が残る危険性があるためタオルで拭くくらいにとどめておいた

「珍しいわね。ヨシユアが気を抜くなんて」

「そうだな、ちょいとらしくなかった……あ、いや、ヨシユアらしいといつちまえばいいかあんときは」

壁からスタッフを抜いたイクスも言う

「……ごめん。エステルの事がずっと心配だったから」

ヨシユアはそう言って微笑む

エステルは一瞬呆けたがすぐに笑ってお礼を言った。隣でシェラザードがため息を吐いていたが
と、そこへ、

「みんな、無事か!？」

キールが走りながらやって来た

イクス達がジョゼットの方を見ると先ほどのような殺気を発していないドルンに空賊達が泣きながらくっついていた

どうやらジョゼットの言った元のドルンに戻ったのだろう

キールも嬉しそうにしていたがすぐに慌てる

「ば……馬鹿野郎！　まだ遊撃士いるっていつのにもほのぼのしてる場合かよ！？」

すぐに全員が自分の役割を思い出す

「撤収だ、山猫号に逃げ！！」

そう言ってキールが以前逃げたように煙幕で視界を覆う

「しまっ……！！」

「またかよっ！？」

「は、早く追わなきゃ！　じゃないと逃げられちゃうわよー……」
「っ……」

煙を風のアーツで吹き消すとエステル達は急いで後を追うのだった

第一章 く消えた飛行船 memory・fin(前書き)

風花

「やっと第一章が終わった……長かったよ」

イクス

「ごくろうさん。だが休んでた分はきっちり書いてもらうからな、覚悟しとけよ」

風花

「うわーん、馬鹿く(涙)」

イクス

「誰が馬鹿だ誰が。あつと、そつだ。読者のみんなに報告。第一章完結をもってアーツ募集は締め切らせてもらうぜ」

風花

「あ、そつだった。理由はたくさんアーツを考えてくれた事とあまりにも多すぎて記録しきれっていなく出せないアーツも出てきそうだからです」

イクス

「最終投稿は今話の感想だから最後に思い付いたのがあれば書いてくれよ」

風花

「それでは、どござ」

第一章 く消えた飛行船 memory・fin

エステルは駆ける

ヨシユアは駆ける

シエラザードは駆ける

オリビエは駆ける

イクスは

「面倒だあああー！ー！」

走るのを止めていた

突然吠えたので思わずエステル達も足を止めてしまった

「ちょ……いきなりなんなのよイクス？」

「走るのが面倒だあああ！ つーか飽きた！」

「はああああああつ！？」

突然の仕事放棄宣言に怒鳴ってしまうエステル
まあ、当然だが

「それじゃあ、空賊達が逃げちゃうじゃないの！ ここにきて仕事
放棄かあんたは！」

「だあれが仕事放棄なんて言った。走んのが飽きたつつつたんだ！」

イクスは宣言すると天井に指を突き出した

何か嫌な予感がしてならない三人

「ここは一番端っこだから穴ア開けりや一直線に繋がるだろ！」

《フレアラランサー》！」

天井に向かってアーツを発動するイクス。燃え盛る炎が槍の形を成しそれが真っ直ぐに放たれる

一瞬で辺りは砂煙で満ちるがすぐに晴れる

晴れるとエステル達は冷や汗を流しながら天井を見つめていた
天井には綺麗に穴が穿たれていた

「よっしゃ、空いた空いた。ほんじゃま、いくとすつか」

イクスは事も無げにそう言うのと近くの木箱を台にして上り始めた
それをただ見つめるエステル達
はつきりいつて……

イクス、（あんだ）（君）、やりすぎ（よ）（だよ）
こうハモるしかなかったのだった

イクス達がりきるとそこはちょうど飛行艇が置かれていた場所だった。規則外な気がしてため息を吐くヨシユア
同時にある事に気付く
それは……

「くそっ、まさか軍にここの場所を知られるとは！ あの野郎、話が違っじゃないか！」

「こ、こらっ！ 気安くボクに触るなよっ！」

「おいおい……何がどうなってるんだあ！？」

驚きや戸惑いの感情を露にしながら王国軍兵士に囲まれて拘束されたキール、ジヨゼット、ドルン、そして空賊達がいた

兵士はそんな言葉を軽くスルーして無理矢理飛行艇に連行していった

「へっ……」

「これって……」

「どゆこと？」

突然の出来事にポカンと成り行きを傍観するエステル、ヨシユア、イクスの三人。と、そんな三人の耳に聞き覚えのある声が入ってきた

「は、あの人たちが空賊さんたちのボスですか。女の子もいるなんて、なんかビックリですねえ」

「無駄口叩いてないで、とにかく撮りまくれっ！ こんなスクープ、滅多にあるもんじゃねえ！」

声のした方に顔を向けるとそこにはナイアルとドロシーがいた。ナイアルは無駄口を叩いてるドロシーを怒鳴り付け必死に写真を撮らせていた

さらにそこへ若い軍人と貫禄のある軍人　　リシャールとモルガンがやって来ていた

「どうだ、ナイアル君。いい記事は書けそうかな？」

「そ、そりゃあもちろん！ 連れてきてくれて、ほんつとーに感謝してますよ！ あっ、ついですから大佐も撮らせてもらえませんかねえ？」

図々しくナイアルはリシャールに迫る

リシャールは嫌な顔一つせず隣にいたモルガンに訊ねた

「ふむ……閣下、よろしいですか？」

「勝手にするがいい。今回の作戦はお前の立案だ。正直、大した手並みだったぞ」

「いや、情報部のスタッフの分析が正確だったからです。それと、そこにいる諸君の協力のたまものでしょうね」

と言った先にいた人物にモルガンは眼を見張った。眼の前にいるのは 遊撃士だった

「なに……！？」

気付いてもらえたエステル達は普通にリシャール達に近寄っていった

「えっと……まだ状況が掴めないんだけど。コレ、どうなっちゃってるの？」

「お、お前たちは……」

「わあ、エステルちゃんたちだ！」

モルガンが何かを言う前にドロシーが天然全開の笑顔で声をかける

「ゆ、遊撃士ども！？なぜ貴様らがここにいる！？」

次にモルガンがまた腹から唸り出しているような低い声で怒鳴り聞く

「念のため言っておくけど、また一足先に潜入していたの。このアシトもすでに制圧済みよ」

「逃げた空賊の首領たちをここまで追ってきたんですが……。まさか王国軍の警備艇が来ているとは思いませんでした」

今度は何も言わせまいとシエラザードとヨシユアが先に報告する
一瞬口を閉ざすモルガンだったがすぐに開く

「ぐぬぬぬ……また出過ぎたマネをしおって」

「お言葉ですが、閣下。彼らがいたから、我々の突入もここまで上手くいったのです。その功績は認めるべきかと」

そこへリシャールが止めに入る

「……………くつ。まあよい。後の指揮はおぬしに任せる。わしは一足先に船に戻って空賊どもを締め上げてくるわ」

何も言えなくなったのか、モルガンはそれだけを言っているとドシドシと飛行艇に戻っていった

「承知しました」

涼しい顔で頷くりシャル
そこにエステルが愚痴るように喋る

「相変わらず頑固オヤジね」

「悪い人ではないのだがね。いささか柔軟性には欠けるな。ところで、他の空賊たちと人質の方々はどこにいるんだね？」

苦笑しながら笑うリシャル

「人質たちには、監禁されていた部屋で待機してもらっているわ。あ、確か壁が崩れて出られなくなってなかったかしら」

「心配いらないよシエラ君。瓦礫なら既に僕や空賊君が通れるくらいにはどかす事はできたさ」

「そうか……。いや、本当にご苦労だった。人質や積荷の移送を含め、後のことは我々に任せて欲しい。行くぞ、カノーネ大尉」

「承知しましたわ」

シエラザードが思い出したように言いオリビエが自分が抜け出したので大丈夫だと報告した。リシャルは安心した様子でカノーネと呼んだ女性と共に下に降りていった

その際、何故カリシャルは階段ではなくイクスが空けた『穴』から降りていった。さすがにカノーネも驚いて声をかけたが「なに、飛び降りた方が近いと思ってね、つい」と階下から声が聞こえたカノーネはあたふたすると「い、今すぐそちらに参ります！」と言って『階段』から走ってリシャルの下に向かった

ナイアルもポカンとしていたが我に返ると慌てて階段を降りていった

「まったね〜！ エステルちゃん、ヨシユア君、イクス君。まってください〜い、ナイアルせんぱ〜い！」

ドロシーはエステル達に一声かけると同じように『穴』から落ちていった

「え、いや、ドロシー大丈夫なの！？ 今、落ちたわよね絶対！」

「いや〜大丈夫だろう。天然って身体の作りが違うし」

「作りが違う……ってどこが!？」

「打たれ強さ」

エステルとイクスがそんな漫才のようにポケッツコミをしている。シエラザードとヨシユアは軽くスルーして別の話題を話していた

「ところでシエラさん」

「分かってる、先生の事でしょ？」

「ええ……。父さんが今、どこにいて何をしているのか……。そしてどうして連絡しないのか。この二つですね」

「……ここで、あたしたちが出来ることはもう無さそうね。とりあえず、ボースに戻って事件の報告をしておきましょう。先生の事を考えるのはそれからよ」

「了解です」

ポケットツコミの嵐を吹かせているエステルとイクスをなだめると五人はポースに戻るのだった
こうしてポースを騒がせた事件は幕を閉じた
様々な謎や疑問を残して……

「 本当にご苦労さまでした。やっぱり、わたくしの目は間違っていないかったようですわね。みなさんだったら絶対に解決してくれると思いましたわ」

ポースに戻った次の日

つまりアジトに潜入してから二日後

職務のある程度終わらせ一息つけるようになったポースの市長、メイベルがメイドのリラを伴って遊撃士協会ブレイサーギルドを訪ねてきた
最初の言葉はエステル達に対してだ

「でも、軍に良い所を持っていかれちゃったしなあ。解決したとはいえないかも……」

「まったくだ」

エステルとイクスはため息を吐きながら少しへこんでいる

「そんなことはありませんわ。仮に、皆さんがいなかった場合、軍の突入も上手くいったかどうか。逆上した空賊たちに人質を傷つけられたかもしれせんから」

「うむ、お前さんたちが潜入してアジトを制圧していたおかげじゃ。胸を張ってもいいと思うぞ」

メイベルとルグランはそんなエステル達を褒め称える

それにエステルは恥ずかしいような嬉しいような、そんな顔をした

「そ、そっかな……えへへ」

だけだよ

照れているエステルとは正反対にイクスは難しい顔をしながらそう言った

「確かに人質は解放されて空賊達も逮捕されたけどよ、幾つかの謎が、解明されねえまま残ってしまったじゃねえか」

「そうね……。湖畔に現れた男達と空賊の首領の奇妙な態度。……この事件、まだ裏があると考えた方がいいかもしれないわね」

イクスの疑問にシエラザードも同意するように疑問点をいくつか挙げる

「まあ、そのあたりは王国軍に任せるしかなさそうじゃのう。連中の身柄を拘束された以上、こちらとしては調べようがない」

ルグランも気になっていたが調べられない事から諦めて、軍に頼ることにしている

暗くなったメンバーにメイベルが明るく話しかけた

「とにかく、人質たちが全員無事に戻ってきただけでも幸いですわ。空賊逮捕のニュースのおかげで街にも活気が戻りつつあります。感

謝の気持ちに、少しばかり報酬に色をつけさせて頂きました」

「え、まじっすか？」

イクスがメイベルに聞き返す

「ふふ、もちろんですわ。オリビエさんも……本当にありがとうございました」

「ふっ……《グラン＝シャリネ》分の働きが出来たのであればいいがね」

「ええ、お釣りが来るほどですわ」

そう言うのにこりと優雅に微笑むとわずかに頭を下げた

「それでは皆さん、ご機嫌よう。何かあったらまたお願いします」

「……失礼いたします」

最後の最後まで話さなかったリラを伴いメイベルは帰っていった

「うーん、何だかものすごく感謝されちゃったわね」

「あれ以上事件が長引いていたら流通はさらに混乱しただろうからね。市長さんが喜ぶのも当然かもしれないな」

「ま、俺達も頑張ったしな」

「えへへ、何だか嬉しいな。あたしたちが頑張ったことでみんなの

お役に立てたんだつたら遊撃士冥利に尽きるってもんよね」

三人は個人差はあれど素直に喜んでいた
シエラザードもそんな三人を見て嬉しそうな顔をしている

「ふふ、ナマ言っちゃって。でも、確かにあんたたちももう新人と
は言えないわね。正直、今回は色々驚かされたわ」

「えへへ、そっかな？」

「とりあえず、今回の事件の査定と報酬を受け取るがいい。市長が
言っていた分、報酬には色をつけておいたぞ。それと……これはわ
しからお前さんたちにじゃ」

ルグランも笑いながら報酬を渡すと共にエステルとヨシユア、イク
スに正遊撃士資格の推薦状を渡した

「これって……ボース支部の推薦状!？」

「あの、いいんですか？」

「ちょっと早い気がするな。あ、ロレントと同じか」

エステルとヨシユア、イクスは驚きながらルグランを見つめる

「うむ、これだけの事件を解決してくれたとあっては推薦せぬわけ
にはいかんじやる。どうか受け取ってもらいたい」

「ありがとう、ルグラン爺さん！」

「推薦状に恥じないよう、これからも頑張ります」

「全力全開でやっていきますよ」

礼を言う三人

これで二ヶ所目だ

「ふふ、良かったわね。カシウス先生が聞いたらさぞ喜ぶと思うんだけど……」

「そうよ！　うちの父さんはどうなっているのよお……」

エステルは一瞬でへにゃへにゃとなりテーブルに倒れた

「あーもう！　ちょっとあたし聞いてく……」

「イクス払い！」

「るんぴゃ！？」

バンとテーブルを叩きながら立ち上がったエステルだったがイクスの足払いに変な叫び声をあげながらまたテーブルに頭から直撃した
これは痛い

「ふぁにふんのよ、ふいくす〜（何すんのよ、イクス〜）」

「落ち着け馬鹿もん。今は事件の事後処理でどこもドタバタしてんだ。落ち着きや乗客だった親父の事くらい教えに来てくれるだろ？」

「むう〜……」

正論に口が出せないエステルと、その時

「こんにちは」

聞き覚えのあるのんびりした声と共に男女一組がギルドに入ってきた
ナイアルとドロシーだ

「ドロシー！ ナイアルも！」

「よっ。よかったぜロレントに帰ってなくて……」

「？ あたし達になんか用？」

「ああ、実は今朝例の飛行船の船長に会ってきたんだがちょうどこれを
お前達ん所に届けるみたいだったから持ってきたんだ」

そう言っつてナイアルがエステルに手渡したのは一通の手紙と小さな
小包だった

「これ……父さんの字……！」

「どうやら船を降りる直前に書いたものらしいね。父さん、ちゃんと僕
たちに連絡するつもりだったんだよ」

「そっか……」

エステルは安心したようにそっと胸を撫で下ろした

「ふふ、良かったわね。そっちの小包も先生から送られてきたもの？」

「ううん、他の誰かが父さんに送ったものみたい……でも差出人が書いてないみたい」

それらを見ていたナイアルとドロシーは「そんじゃ、確かに渡したからな」と言うとギルドを出ていった

「まさか、定期船の積荷に手がかりがあったとはのう。ここで読むのもなんじゃ。二階の休憩所を使うといい」

「ありがと、ルグラン爺さん！」

「フツ、それではさっそく中身を拝見させてもらおうか」

「　　って、テメエも見んのかよ」

二階の休憩所に着いたイクスがいの一番に訊ねた

「いやあ、純然たる興味さ。どうして君たちの父上が出発前に船を降りたのか……。このままお預けをくらったら、気になって夜も寝られないよ」

オリビエはいつも通りに返す

「そ、そんなこと言われても……」

「ああ、一緒に冒険したのに仲間外れとは何と薄情な……。アジトに潜入できたのは誰のおかげかな」と

オリビエはわざとらしく揚げ足をとる

「うぐっ……」

「まったくタチが悪い男だこと」

「仕方ありませんね……。ただ内容次第では席を外してもらいますよっ」

「ふっ、もちろんだとも」

「はあ、気を取り直して……」

諦めたエステルはまず手紙の封を切り内容を読み始めた

〃

エステル、ヨシユア、イクスへ

そろそろ代理の仕事を終わらせた頃合だろうか？

最初は躓く事もあるだろうが、一歩一歩確実にこなせばいいお前たちなら必ず出来るはずだ

さて、こちらの仕事のほうだが少々困ったことが起こってな
どうやら、しばらくの間家に帰ることが出来そうにない

そうだな……女王生誕祭が終了するまでは帰ってこられないと考える
てくれ

お前たちには申しわけないが、まあ、いまさら親の留守を寂しが
りような歳でもなからう

俺が戻るまでの間、お前たちがどう過ごすかはお前たち自身
で決めるといい

ロレントで仕事を続けるもよし

正遊撃士の資格を得るために旅に出るのもいいかもしれん

16歳という実り多き季節を悔いなく過ごすといいだらう

それではな。シエラザードとアイナによく伝えておいてくれ

カシウス・ブライト

〃

「……父さん」

「……先生らしい文面ね。軽そうだけど、あんたたちへの思いやり
に満ちあふれているわ」

シエラザードにそう言われエステルも無言でコクンと頷いた

「ふむ、女王生誕祭か。聞いた話によると、まだしばらく先のように
だね」

「2、3ヶ月は先のことよ。確かにちょっとした旅行なら出来そう
な期間だけど……。本当に、いったいどこで何をしてらっしゃるの
かしら」

シエラザードが心配そうに言いエステル達も無言になる

オリビエは紅茶を飲みながらそれと、と言う

「それはともかく……そちらの小包はどうだい？差出人不明というところが何とも興味深いじゃあないか」

「まあ、確かに気になるけど。父さん宛のものを勝手に調べるのもちよつと……」

躊躇いがちにエステルはテーブルに置いた小包を手にする

「しかし、考えてもみたまえ。父上の失踪の時と同じくして届けられた差出人不明の小包だ。何か関係があるかもしれないよ？」

「そ、そっかなあ……」

「ちよつとオリビエ……。自分が興味あるからってそそのかすんじゃないわよ」

シエラザードがそそのかそうとしているオリビエを注意するがヨシユアの意見はどちらかというオリビエ側だった

「いや、オリビエさんの言うことも確かに一理あります。父さんが帰ってくるまでずっと放っておくのも何だし……。調べた方がいいかもしれない」

「俺もヨシユアに賛成だ。エステル、お前が決めてくれ」

イクスもヨシユアと同じようだ

エステルはしばし考えると一つ頷いた

「わかった、調べてみよ！」

そう言つてエステルは小包を丁寧に破り中身を取り出した
中には漆黒に光る半球状の装置が鎮座していた

「こ、これって……」

「オーブメント、だな。用途はよくわかんねえがメモには、えつと
……?」

〵〵

例の集団が運んでいた品を確保したので保管をお願いする
機会を見て、R博士に解析を依頼して頂きたい

K

〵〵

「こ、これだけ?」

「ああ……他には何も書かれていない。シエラ姉さん、このKとか
R博士とかいう人に心当たりはありませんか?」

手紙を読み終えたイクスが唯一知つていそうなシエラザードに聞く

「うーん……残念ながら判らないわね。先生はとにかく顔が広いか
ら外国人という可能性もあるし」

「ヒントがこれだけじゃ正直、お手上げって感じよね。この黒いオ

ーブメント、いったい何なのかな？」

エステルはソレを持ち上げたり回したりして見渡すがまったく理解できない

「形状からいって一般的な用途に使われるものじゃなさそうね。戦術オーブメントあたりに少し雰囲気は似ているけど……」

「いや、それとも違うな。普通のオーブメントには結晶回路クォーツを嵌めるスロットが付いている……。だが、これには何もついていない。これはひょっとしたら……アーティファクト《古代遺物》かもしれないね」

シエラザードの意見を否定したオリビエがさらに近い意見を口にする

「アーティファクト？」

「現在造られているオーブメントの原型となった古代文明の導力器のことさ。たまに遺跡から発見されて七耀教会に保管されることが多い。まあ、いわば骨董品だね」

簡単にオリビエが説明した

「でもこれは、見たところそんなに古いものじゃないわ。最近造られたものみたいだけど」

「それは確かに……。ただ、訳アリの品であるのはどうやら間違いなさそうだね」

まだよく分からない代物だったが一応としてオリビエは結論付けたとすると……

「あゝまったくもう。あの不良親父ときたらっ！ 心配ばっかりかけてくれちゃってもう！」

エステルがいきなり大声を出した

「エ、エステル？」

「うおい、どした！？」

ヨシユアてイクスが驚いて訊ねた

「こんな差出人不明の怪しげな品が送られてきて……一体、どんな事件に首を突っ込んでるんだか……」

怒鳴ったかと思ったらエステルは悲しそうにそう言った

「エステル……」

「シエラ姉！ あたし決めたわ！」

「え？」

「あたし達、このまま旅を続けてみようと思う。父さんの手紙にもあったでしょ？ このまま王国を廻って正遊撃士の資格を目指すのもいいかと思うし……なによりそうしてればもしかしたら父さんの行方も分かるかもしれないわ！」

あまりにも突拍子もない宣言に誰もが啞然と聞き続けている

「だから……えっと、何て言えばいいのかな？」

「ふふっ、そうね。遊撃士なら守るべき場所を実際に見て把握するべきよぬ。いいわ、その眼でしっかり見てらっしやい！ あんた達がこれから守っていくリベールを。そして、正遊撃士、頑張りなさいよ？」

「シエラ姉……うん」

そうしてエステル達の正遊撃士になるための旅が実質的これから始まるのだった

第一章 　く消えた飛行船く　　f i n

第二章 ～白き花のマドリガル～ memory…? (前書き)

早くに投稿できました

では第二章 ～白き花のマドリガル～でも

第二章 く白き花のマドリガルく memory…?

ポーランド国際空港にはようやく再開した飛行船が乗客を今か今かと待っていた

エステル、ヨシユア、イクスはロレントに帰るシエラザードを見送りに来ていた

何故かそこにはオリビエの姿も

「それじゃ、あたしはこれでロレントに戻るけど……。うーん、やっぱり心配ねえ」

「もー、大丈夫だってば。一応、正遊撃士を目指す旅だもん。シエラ姉がいたら修行にならないよ」

「シエラさんまで帰らなかつたらロレント支部も大変でしょうし。大丈夫、何とかやっていけます」

「道中のメシなんかは俺がやりくりしますし、金もさっきの報酬がありますんで大丈夫ツすよシエラ姉さん」

三人が笑いながらシエラザードの心配を溶かす

「まあ、そこまで言うなら……。あんなたちの歳で正遊撃士を目指すのは珍しいんだからくれぐれも無茶しないようにね。それと、困ったことがあつたらロレント支部に連絡するのよ。あんなたちがどこに居ようとすぐに駆けつけて行くからね」

「うん……。ありがとね、シエラ姉。シエラ姉の方こそあんまり飲み過ぎないでよね。あたし、それだけが心配なんだから」

「タハハ……まあ、気を付けておくわ」

シエラザードは苦笑しながら曖昧に答える

ああ、こりゃ飲む気だな

そうイクスは心の中で思ったが口にはしなかった。よく見ればエステルとヨシユアも同じように考えているのか苦笑いしていた

「ふっ、心配しないでくれたまえ。何といってもシエラ君にはこのボクが付いているのだから！」

「……で、どうしてあんたもロレントに行くわけ？ しかもシエラ姉と一緒に……」

「ふっ、ボースの郷土料理はとりあえず全部味わったからね。そろそろ他の地方に足を向けてみようと思ってるね。ロレントの料理は、野菜が絶品と聞いているから今から楽しみだよ」

「あー、確かに美味しいよな野菜」

「てな感じで、美味しい店を紹介しろって言うって聞かないのよ。あんまりしつこいから居酒屋で酒に付き合っのを条件に付けてくることを許可しちゃった」

てへへ、と可愛い子ぶって舌を出すシエラザード
歳とのギャップで可愛いなと思っちゃったイクス

「イクス、帰ってきたらゆっくりみっちりお話ししましょうか？」

どうやら顔に出ているらしい

「は、ははは……全力全開で遠慮させていただきやす」

嫌な汗を流しながら断るイクス

もしお話をしようものならそれこそ『お話』になりそうだからだ
一方エステルとヨシユアはオリビエを心配して話していた

「オリビエさん……あの、本当に大丈夫なんですか？」

「ふっ、このオリビエ、美人と美食のためなら死ぬるさ。本当は、
ヨシユア君にも付いていきたいところなのだがね。迷った拳句の苦
しい選択だった……」

「迷われても困るんですけど」

「まったく懲りないヤツ……ロレントの治安を乱さないでよね。あ
と、仕事明けのシエラ姉って本当にリミッター外れちゃうから。マ
ジで注意した方がいいわよ」

ため息を吐きながらエステルは軽く忠告しておいた
それを聞いてシエラザードは口を尖らせる

「なによう、失礼ねえ。アイナは付き合ってくれるもん」

「あの人だって底ナシでしょ！」

「リミッターが外れる？ ああ、それって……この前よりもスゴイ
のかい？」

思わず冷や汗をたらつと流しながらオリビエが聞き出した

「……比較になんねえと思う。あん時は、あれだ、仕事だったから3割くらいだ」

プライベートでなんべんもシエラザードに付き合ってるイクスが明^あ後^{きう}日^{にち}の方^{かた}を向^むき類^{るい}を搔^かきながら答^{こた}えた

「ふーん……」

オリビエは相づちを打ち、しばらく無言

1秒

……2秒

……3秒

「え！？」

どうやら状況を理解したようだ
冷や汗が尋常ではないほど流れている
と、ちよつとそこへ案内放送が流れた

ロレント方面行き定期飛行船、まもなく離陸します
ご利用の方はお急ぎください

「あら、もう出発か。ほらオリビエ、急がないと」

シエラザードはそう言つとオリビエを鞭で『掴んだ』

「シエ、シエラ君！？ ちょっと待つてくれたまえ。少し考える時間をくれると嬉しいな〜って……ぐえええ〜！」

「出発直前になって、な〜にを言ってるのかしら？
男だつたらグダグダ言つな！」

「ひぐええええ〜っ！！」

そうして、オリビエはシエラザードに引きずられていきましたとさ

「シエラ姉、まったね〜！ ロレントのみんなによろしく！」

「2人ともお元気で！」

「お酒には十二分に気を付けなよ〜」

エステルとヨシユアとイクスがシエラザードにとって別れの挨拶を、オリビエにとつて生死の別れになりそうな（予定）挨拶をした
そうして定期船は飛び立つて行つたのだった
定期船が見えなくなるとエステル達は歩き出した

「さてと、王国全土を回るなら次の目的地はルーアン地方ね。どう
いうルートで行けばいいのかな？」

「それなんだけど……本当に定期船は使わないのかい？ 歩いて行
つたらかなりの遠回りになると思つけど」

「シエラ姉が言つてたじゃない。まずは自分が守るべき場所を實際

に歩いて確かめてみるって。あ、これって父さんの言葉だっけ？」

エステルは「ま、どっちでもいいや。どっちが言っても大事な言葉だし」と続ける。案外、軽く考えているようだ

「まあ、確かに時間はあるからのんびり行くのも悪くはないか。定期船の運賃も節約できるしね」

「ソーソー、運賃が浮いた分はボースマーケットで買い物しましょ。なにせ空賊騒ぎの時は落ち着いて買い物できなかったし。出発はそれからでもいいんじゃない？ あ、イクス、出来れば食材と薬を多く買うから目利きよろしくね」

「了解、節約してたつぷり買い込んでやるぜ。……つと、ちなみに、ルーアン地方に入るには西のクローネ峠を越えるから買い物か済んだら西口から出るからな」

「了解」

時を同じくして場所は天空を往く定期船《セシリア号》
雲の上を滑るように滑らかに飛ぶ船の甲板に一人の男が一人で居た

「……以上が王国北方で起こった空賊事件の顛末さ」

『……………』

「ああ、没落したカプア一家の連中がこんなところに流れてくると

はね。王国から問い合わせがあるかもしれないから適当にあしらってくれ」

誰かと話しているようだが甲板には他の乗客は誰もいない
だが男は構わず話す

「うん、結局彼には会えなかった。どうやらトラブルが発生したらしい。空賊事件との関係はいまだ不明だが別の勢力が動いているのは間違いない」

『……………』

「ふっ、そうでもないのさ。面白い連中と知り合いになれたよ。料理も美味しいし、美人も多い。この国はなかなか肌に合ってる。いつそ永住しちゃうおうかな〜なんて」

『……………』

「わかった、わかった。そんなに恐い声をださないでくれ。そちらの方は引き続き頼む。くれぐれも宰相殿に気付かれるな」

『……………』

「また連絡するよ……親友」

最後に隠すように笑うと男は手に持っていた何かを押ししてコートの内ポケットに大切そうにしまいこんだ。おそらくソレで『親友』と呼ぶ誰かと話していたのだろう

「ふふ、相変わらずからかい甲斐のある男だな。融通の利かないと

ころが可愛いというか何というか……」

と、その時だった

「……携帯用の小型通信機ね。ずいぶん洒落たものを持ち歩いているじゃないの」

後ろから声をかけられた

いつも通りのゆっくりりさで男 オリビエ・レンハイムは振り向いた

振り向いた視線の先には共にロレントに行くことになった女性

シエラザード・ハーヴェイがこれまたいつも通りの表情で立っていた

「しえ、シエラ君……」

さすがのオリビエも驚いたようだ。だが、それも一瞬の内に元の涼しげな表情に戻っていた

「ツアイスの中央工房ですら実用化していないオープンメントを持っているなんて……。あんた、いったい何者なの？」

「ふっ、水くさいことを言わないでくれたまえ。漂泊の詩人にして天才演奏家、オリビエ・レンハイムのことはキミも良く知っているはずだろう？ だが、もっと知りたいのであれば所謂いわゆるピロートークというやつで……」

やはり、というべきだろう。オリビエはまったく表情を変えずに馬鹿な事をリユートを取り出しながら言う

これも一種のポーカーフェイス、というべきなのだろう

だがシエラザードは真剣な目付きでオリビエを睨む。その手は既に腰に提げてある鞭に伸びていた

「悪いけどマジなの。道化ゴツコは通用しないわよ。エレボニア帝国の諜報員さん」

「………………。ふふ、《銀閃》の名はどうやらダテじゃなさそうだね。エステル君たちの前では気付かぬフリをしていたわけか」

観念したのか今までになく真面目な口調で言うオリビエ

「これ以上、あの子たちに余計な心配をかけたくないもの。それじゃ、詳しいことをサクサクと喋って貰おうかしら。あんたの目的は？ どうやってリベールに潜入したの？」

鞭に伸ばしていた手を引っ込め腰に当てると一息に訊ねるシエラザード

「その前に…… 2つほど訂正させてくれるかな。まず、道化ゴツコはしていない。ボクの場合、これが地の性格だね。擬態でも何でもなかったりする」

「あー、そうでしょうね。ワインをダダ飲みしたのだから飲みたいからやったんでしょうよ。ただしその後、門に連行されて情報を集めることまで計算してね。あたしたちと合流する事まで狙っていたとは思えないけど……」

ため息を吐きながらシエラザード予想を口にする
いくら馬鹿と言っても過言ではないこのお調子者がそこまで計算していたとは考えたくもないのだ

「ふふふ……そのあたりは想像にお任せするよ。訂正するのはもう1つ……この装置はオーブメントじゃない。帝国で出土した《古代^{アーティファクト}遺物》さ。あらゆる導力通信器と交信が可能で暗号化も可能だから傍受の心配もない。忙しい身には何かと重宝するのだよ」

「アーティファクト……七耀教会が管理している聖遺物か。ますますもって、あんたの狙いが知りたくなってきたわね」

「イヤン、バカン。シエラ君のエッチ。ミステリアスな美人の謎は無闇に詮索するものじゃなくてよ」

「……………ふっ」

そんな発言

一息の静寂の後、シエラザードは静かに、とーっても静かに、ゆっくりと鞭を持ち構えた

「本物の女に近づきたい？ あたしの鞭で手伝ってあげるけど。っていうかちよっと『お話』しない？」

「や、やだなあシエラ君。目が笑ってないんですけど……っっていうか『お話』は復活できるけど、確実に死ねるんで勘弁してください」
やはり『お話』は苦手なのか、オリビエは体をぶるぶる震わせながら謝った

「ま……まあ、冗談は置いとくとして」

「あたしは冗談じゃなかったんだけど……。つたく。最初から素直に話なさいよ」

「それは別の意味で危なくないかい!？」

シエラザードの言葉に慌ててツツコムオリビエだが、こほん、と一息吐くと真剣に話始めた

「お察しの通り、ボクの立場は帝国の諜報員のようなものさ。だが、仕事を仕掛けたり、極秘情報を盗むつもりはない。ある人物に会いに来ただけなんだ」

「ある人物……?」

「キミも良く知っている人物だよ」

静かに眼を瞑りながらオリビエは言う

「王国軍にその人ありと謳うたわれた最高の剣士にして、稀代の戦略家。大陸に5人といない特別な称号を持つ遊撃士」

彼に関わりを持った者が知らぬはずのない彼の者の名を

「《剣聖》 カシウス・ブライトその人さ」

場所は移り、地上

ラヴェンヌ村へと行った折りに歩いた西ボース街道

今回はそこよりさらに先には続く山道　クローネ山道に向かつて歩いてた

ボースマーケツトで買い物を終えたエステル達三人は時間を考え今日中には峠の中間に位置する関所に着くことを目標としていた
クローネ山道に足を踏み入れたエステル達は様々な旅行者で踏み鳴らされた道を歩きながら話をしてた

「それにしてもイクスの秘密兵器って言うのが隠し刀だったのは驚いたわ」

「そうか？　そんなに意外だったかな……」

話の内容はイクスのスタッフに隠されていた刀についてだった

「だって、そうでしょ。あたしと同じ得物を使っていると思ったら実はヨシユアと同じ得物を使っているんだもん」

「確かに刀剣類としては同じだけど使い方はちょっと違うんだよ」

「？　どゆこと？」

「つまりね　イクス、ちょっと刀を貸してくれるかい」

「ん、いいぜ。ほい」

イクスは何の躊躇いもなく頷くとスタッフの先の部分をわずかに横に回した。カチリ、と音が聞こえるとイクスはそのまま引っ張る。すると先の部分だけが外れ中から陽の光に反射して輝く刀身が現れた

それをイクスはヨシユアに差し出す

「ありがと。そしてこれが僕の剣」

何も持つてない手で自分の剣を取り出した

「うーん、形が違うぐらいしか分からないわね」

「イクスの刀は、東方から伝わった物なんだけど、一つの金属を鍛えて作られているんだ。それによって色々な物を斬ることが出来るんだ。達人級にもなれば鉄板だって斬れるようになる。一方、僕の剣は複数の金属を鍛えて作られているから切れ味はそこそこ止まり。だけどその代わりに刃零れしにくいからメンテナンスもそこまですなくていいんだ」

「え、えーっと……つまり、イクスの刀は強いんだけど体力がなくて、ヨシユアの剣は弱いんだけど体力はある……みたいなの？」

ちよつと分からなかったエステルは一先ず人に例えて言ってみた
ヨシユアは「まあ、あながち間違っではないないね」と苦笑していた

「でも、どうしてイクスは刀を使ってるの？」

「いや、なんとなく」

「……………そりだけ？」

「そりだけ」

「聞いたあたしが馬鹿に思えてきたわ……………」

思わずといった様子で頭を押さえるエステル

イクスは別にいいだろ、と言っていた

そんなこんなで話を続けながら歩いていく三人

もうそろそろ日が沈みそうな頃にようやく峠の関所に到着したのだ
った

蒼空語り

イクス

「うーっす、久しぶりの蒼空語り。司会はこの俺、イクスだぜえ」

エステル

「ホントに久しぶりね。打ち切られたかと思ってた」

イクス

「さ、さすがに失礼極まりない言葉だな。シリアスにポケ満載の蒼空語りを書いちゃ興が殺がれるってもんだぜ」

エステル

「間違えてる！ 漢字間違えてるから！ 確かに読み方あってるけどホントは削がれるだから！」

イクス

「と、このようにポケツッコミばっかな蒼空語りですので蒼空語り

が読みたい方は章の最後ら辺はすっ飛ばして読んでください」

エステル

「それじゃあ、本編が分からなくなるじゃない」

イクス

「まあいいやろ。それじゃあ、溜まった質問を答えていくぞー」

エステル

「おー」

イクス

「HN『ガイア』さんから『今回も楽しかったです。まさかネタをばらすとは思いませんでした。質問は、エステル達は最初、闇鍋を見てどう思いましたか。次も楽しみにしています』……感想は」

質問は、エステル達は最初、闇鍋を見てどう思いましたか。

次も楽しみにしています』……感想は」

エステル

「真つ暗な中で、食べて一瞬で気絶したから覚えてませーん（棒読み）」

イクス

「偉く適当だなオイ。だそうなんです『ガイア』さん、真つ暗な中で、食べるのはやめましょう」

エステル

「それじゃあ、次？ 最後？ どっちでもいいや。HN『漆黒の牙』さんから『空賊の基地来たな。あそこザコ無視した。データ収集以外でだが。リ「確かあんたは、三兄弟戦でドルンにぼこられて回復アイテム

尽きた拳匂リセットしたんだっけ。」

レ「そして闇鍋の見た目にびっくりするわね。」
リュウガはどう思った。

リ「………………。 (ガタガタガタ) 」

レ「うわっ、青ざめた！もしかしてトラウマ？」

リ「いや、あの時 (ゲスト出演した時) のエステル反応思い出して……………。」

あー、なるほどな。質問は、後々の話になるが王都の武術大会の人数どうすんの？確か四人で出場だから一人多くね。

レ「そこは気にしちゃ駄目！」

ゲシュ (残り回数一回のキック。ダメージ1200ぐらい) サガ2的にオーバーキル。)

がはっ！

リ「そ、それじゃ、また。」……………そう言えばそうね。風花は考えているのかしら？」

イクス

「確か考えてるらしいぜ。だけどネタバレに繋がるからまだ秘密だとよ。」

エステル

「へえ、そうなんだ。だ、そうよ。まだ二章始まったばかりだし教えられないってさ。」

イクス

「………………。 ……うん、今回はこれでおしまいだな。」

エステル

「久しぶりだとなんか肩が凝ったわね。」

イクス

「そつだなー……それじゃあ、今回は「」まで」

エステル

「待ったね」

リベール通信 第4号

【特集】空賊団を逮捕！ 《リンデ号》事件解決！
人質全員を無事に保護

王国軍の発表によると、軍情報部の部隊がボース地方の山岳地帯にて空賊団の隠れ家を発見。潜伏していた空賊団を逮捕し、同所に監禁されていた人質全員の無事を確認した。

空賊団逮捕の瞬間

《リンデ号》はラヴェン又廃坑に

犯人逮捕に先立つこと数日、《リンデ号》はラヴェン又村北部の廃坑にて発見されていた。乗客らの姿はなく、すでもぬけの殻となっていたが、この発見を境に捜査は急速に進展を見せることとなる。

光る活躍 新設部隊「情報部」

《リンデ号》の捜査情報を分析し、空賊団の潜伏先を割り出す

この大仕事をやりとげたのは近年新設されたばかりの情報部だった。若手将校のリーダー的存在であるリシャル大佐に率いられたこの部隊は、この部隊は、名前の通り情報の収集と分析を専門とする。今回の事件ではモルガン將軍の指揮する国境師団が犯人の足取りを追い、情報の分析を情報部が担当。新旧両世代の将官のタッグが、見事捜査を成功へと導いた。

犯人逮捕の瞬間 突入作戦に本誌記者も同行

「王国軍だ！ 手を上げる」 飛行艇での逃亡を試みる空賊団の前に、兵士が立ちふさがる。抵抗もむなしく次々と捕縛されていく一味。前代未聞の大犯罪《リンデ号》事件解決の瞬間だった。アジトに王国軍が乗り込んできたことが信じられないのか、頭目ドロン容疑者一（32）の表情は最後まで虚ろなままだった。

作戦には遊撃士も参加

作戦の成功は情報部の手腕によるところが大きいが、その裏にある遊撃士の貢献も見落とすわけにはいかない。軍の作戦開始に先立つこと数時間、数名の遊撃士が巧みな方法で空賊団アジトに潜入。内部で空賊団との激しい戦いを繰り広げ、これが結果的には王国軍の作戦の大きな助けとなった。待ち望まれていた両者の協力だが、最後の最後に凶らずも実現された形だ。

容疑者はレイストーン要塞へ

ドルン容疑者以下の空賊団幹部はレイストーン要塞へ護送され、取り調べも同地にて行われる予定。また、空賊団が使用していた帝国製の小型飛行艇《山猫号》も証拠品として軍に押収された。

人質は無事 胸撫で下ろす家族

心待ちにしていた知らせを聞き、乗客の家族達も久しぶりに晴れやかな表情を見せた。「最高の結果。関係者全員に感謝を捧げます」人質全員の無事が確認された直後、本誌の取材に対しポー市長メイベル女史はそうコメントした。その「最高の結果」をもたらしたのは、連日連夜で陣頭指揮に当たったモルガン將軍をはじめ、多くの関係者の努力に他ならない。これまでの労をねぎらい、感謝を捧げたい。

【社会】デユナン公爵 ルーアン地方をご視察に

女王陛下の甥に当たるデユナン公爵閣下が、ルーアン地方をご視察に訪れる。私的な視察ということで特にご訪問先は公表されていない。

【社会】あきれた帝国人 レストランで無銭飲食

ボース市北街区の高級レストラン《アンテローゼ》が無銭飲食の被害に遭った。現行犯で逮捕されたのは自称音楽家を名乗る帝国人旅行者。即日ハーケン門に護送されたが、無銭飲食での地下牢入りは極めて異例。被害額が高額な上に計画的犯行であることなどを考慮した結果と軍関係者は説明している。

なお、音楽家を名乗るだけあり演奏の技量は持ち合わせていたが歌声の方に問題があったとか。

第二章　く白き花のマドリガル　memory…?

辺りは深い常闇に覆われていた

その中で唯一、優しい人工の光で照らされた場所があった
クローネ峠のちょうど中央に位置する関所。毎晩王国軍の兵士が番
をして魔獣を見張っている。もっとも数の多い魔獣避けのライトに
よって滅多に近づく魔獣はいないが
その関所の一室にエステル達はいた
ちよとど夕食を食べ終えたところらしく笑顔で手を合わせ合掌して
いた

「は、お腹いっぱい。期待しないでとか言ってたわりには、かな
り美味しかったと思わない？」

エステルが満足そうに笑顔で言った

「そうだね。軍で出る食事とは思えないな」

「ああ、本当に美味かったな。あとで作り方でも教えてもらおうか
な？」

ヨシユアとイクスも満足しながら話していた

エステル達三人は最初、ベッドを借りるだけで食事は自分達で賄お
うと考えていたのだが、気前の良い兵士に誘われてごちそうになっ
たのだ。イクスは最初、軍でよくある薬膳料理や味気のない携帯食
料みたいな物を考えていたが、出てきたのは街にある店に負けない
くらいの料理だったのだ。しかも味も良かった

閑話休題

そうやってのんびりしているとノックと共に一人の兵士が部屋に入ってきた

「ちょっと失礼するよ」

入ってきたのは食事を進めてくれたこの関所の副隊長を勤める男だった

「あ、副長さん。すっごく美味しかったわよ」

「ご馳走さまでした」

「兵士なのになかなかやるじゃん。マジで美味かったぜ」

エステルたちが口々に礼を言う

「お粗末さま。口に合ったようで何よりだ。ところで……もう一人客が来たんだが、相部屋でも構わないかい？」

副隊長がエステル達に訊ねる

「どうやらエステル達と同じように泊まらせてもらう人が来たのだろう」

「来客……こんな夜中にですか？」

「ずいぶん度胸がある人ねえ。あたしたちは構わないけど？ タダで泊めてもらってる身分だし」

「そう言ってくれると助かるよ。ま、嬢ちゃん達の同業者だから気兼ねする必要はないだろうけどな」

副隊長が笑いながらドアの向こうに声をかける。待たせていたようだ

「え？」

「同業者？」

「なんか嫌な予感……」

エステル達は首を傾げイクスだけは変な予感がしてた
そしてその予想は 決して外れなかった

「フン……どこかで見たような顔だぜ」

男性が部屋に入ってきた。真っ赤に猛る焔のような赤毛の髪。そして背中に背負う重剣
間違いなく同業者だが一目会っただけの奴だった

「あ、あなた……」

「《重剣》の……」

「アカゲ・クロスナー……」

「オイコラ、今名前間違えたよな？ わざとか？ わざとだよな？」

そう正遊撃士、《重剣》の二つ名を持つアカゲ・クロスナーだった

「地の文まで間違えんなや！ 馬鹿か？ 馬鹿の集まりかコノヤロ
ー供！」

「ああ、すまんすまん。ええと……タロット・クロスナー」

「誰が占いの道具だ。銀髪……わざと間違えてるだろ」

「バレた!? 赤毛100%のくせに!？」

「……おい、こいつ叩つ斬っていいか? いいよな」

「ごめん、あたしから謝るわ。ほら、イクス、茶化すのはやめなさい。馬鹿つて事が分かっちゃうでしょ」

「……………。こいつら(怒)」

あまりにも数が多いボケについていけずアカゲ……こほん、アガツト・クロスナーは重剣を抜いていた

もちろん振り下ろされる事は決してなかったが、それにはヨシユアの必死の謝罪があったからだ

10分後……

「で、何でオツサンの子供たちがこんな場所に泊まってやがる? シエラザードはどうしたんだ?」

落ち着きを取り戻したアガツトがエステルに訊ねる

「シエラさんはロレント地方に帰りました。今は僕たち3人で旅をしています」

「正遊撃士を目指して王国各地を回ろうと思ってるの。修行を兼ね

て自分の足だけでね」

「正遊撃士？ 歩いて王国一周だあ？ ずいぶんと呑気なガキどもだな」

理由を聞いたアガツトは呆れた口調でわずかに笑った
「どうやらなれるわけないと思っっているらしい」

「あ、あんですってー！？」

さすがにエステルは頭にきたらしく怒りを露にしている

「お前らみたいなガキが簡単に正遊撃士になれるわけねえだろ。常識で考えるよ、常識で」

「こ、これでもあたしたち空賊逮捕で活躍したんだから！ 推薦状だって貰っているし、子供扱いするのやめてよねっ！」

「その話か。ルグラン爺さんから聞いたぜ。それじゃあ聞くが……
仮にお前らしかいなかったらその事件、解決できたと思うか？ シ
エラザードの手を借りずにお前たち自身の力だけでだぞ？」

その問い掛けに押し黙ってしまうエステル
「答えなど考えなくても出てしまっているからだ
だが……」

「そ、それは……」

「……難しかつ「出来たぜ」イクス……？」

ヨシユアの言葉を遮ってイクスが答えた
出来る、と

その答えにアガットは片眉を上げる

「なんだと？」

「だから出来ると言ったんだ。ただし、条件はあるけどな」

嘘偽りのない堂々としたイクスの姿にエステルとヨシユアは言葉が
でないでいた

「ほお……どんな条件なら解決できんだ？」

「簡単な事だ。 殺せば良い」

あまりにも冷たく、冷酷に告げるイクス

「なん……だと？」

「向かってくる空賊を全て殺せるなら俺は一人でも解決出来るんだ
よ。……もっとも遊撃士になった今じゃ無理だけどな」

元の空気に戻ったイクスは首を横に振りながら最後に無理と言った
だが出来ない、とは言っていない。行動できるなら殺^やれる。そん
な感じだった

「……………。お前、人を殺^くした事があるのか？」

思わずと言ったようにアガットは訊ねる
だがイクスは苦笑しながらベットに歩いていった

「さあな……ま、こんな時間に峠を出歩いてるところその野郎なら殺れると思うぜ」

「アホ、鍛え方がテメエとは違うんだ。物見遊山のお前らと一緒にするな」

「そーかい。そんじゃ、俺は寝ようつと。エステル、ヨシユア、お休みー」

そう一方的に告げるとイクスはベットに横になり眼を瞑った
エステルとヨシユアは呆けていたが「お、お休み」とは言っておいた
あまりにも気まずい雰囲気の中、ヨシユアが場を変えようと話題を振ってみた

「そ、そういえばアガットさん。さっきの話なんですけど、仕事ですか？」

「ん、あ、ああ……お前らの親父に頼まれたな……！」

「父さんから……!？」

アガットは言った直後にわずかに「口が滑ったな」という顔をした
がエステルに問われた時には既に元の表情に戻りベットに寝転んだ
「……さてと、明日は早いし、とっとと休ませてもらっぜ。お前らも喋ってないで寝ろや」

「あー、ごまかした!？」

「そこまで露骨すぎると余計に気になるんですけど……」

エステルたちは追求したい気分だったがアガットは鬱陶しいように声をあげる

「あーもう、うるせえな。ガキが余計なことに首を突っ込んだら火傷するぞ。とっととルーアンに行って掲示板の仕事でもしていやがれ。それが……ふああ……お前らにはお似合いだぜ。……………」

そのまま、アガットは黙る。すぐに寝息が聞こえてきたので寝てしまったのだろう

「ちょ、ちょっと……」

「もう寝ちゃったみたいだね。エステル、イクス並みに寝つきがないなあ」

「一緒にしないでっば！　　もー、何なのよコイツ！？　ケ
ンカ売ってると思えないんですけどっ！？」

エステルは疲れたように言う

「まあまあ。僕たちが新米なのは確かだし。ひよっとしたら、心配してわざとキツク言ってるのかも……あ、でもイクスが作った空気がから逃げたかったっていうのもあるかも」

「ヨシユア……後者は分かるけど、前者があり得ると思う？」

「ごめん、あまり自信ない。でも、そろそろ僕たちも寝た方がいい

のは確かだよ。明日の峠越えがあるんだし」

「うー、ムシヤクシヤが納まらないけど仕方ないか……。あ、せめてアガツトとイクスの顔にラクガキしてから寝るのはどう？ 安眠間違いなしだと思うけど」

「お止めなさい……ただの『お話』じゃ済まないよきつと」

峠の関所・ボース側

「待たせたなカドルス。そろそろ交替の時間だぞ」

関所から出てきた兵士がカドルスと呼んだ兵士に声をかけた

「ああ、もうそんな時間かよ。しかし、誰も通らないのに見張りをする必要があるのかねアツシャー。いつそ夜はゲートだけ閉めときゃいいんじゃないかねえか？」

カドルスが面倒そうにアツシャーと呼びながら言った

「決まりだからしょうがないさ。この前の空賊騒ぎといい、最近、なにかと物騒だからな……。ん？」

「なんだ、どうした？」

カドルスが何かに気付いたアツシャーに訊ねる

「なんか音がしないか？ こう、ザワザワと……」

カドルスも耳を澄ます。しかし、彼の耳には何も聞こえない

「風の音じゃないのか？」

その時、峠側から唸り声が出た
そこにいたのは

「お、狼、の群れ！？」

だった

しかも何匹も

「おいおい、マジかよ！？」

「ねえ、今何か聞こえなかった！？」

何か物音が聞こえたエステルがヨシユアに聞く
ヨシユアも軽く頷きながら答える

「何かあったみたいだね」

エステルたちが話していると突然アガツトがバツと上体を起こし側に立て掛けていた重剣を背中に背負った

「様子を見てくる。お前らはとっとと寝とけ」

そう言うと、エステル達の返答を聞かずさっさと出て行ってしまった

「あ……ちょ、ちょっと待ちなさいよ！」

「念のため、僕たちも行った方が良さそうだね」

「うん、モチのロンよ！ あ、イクスを起こさなきゃ！」

「起きてるよっと」

イクスは眼が覚めていたのかエステルの声を聞くと腕の反動だけでベットから飛び起きた

「よし、行きますか！」

イクスがスタッフを握り三人でアガットの後を追った

扉の向こうでは兵士と狼の戦いが繰り広げられていた。兵士の数も峠の関所だけあり少なく、一人一匹だが勇敢に奮闘していた

「狼の群れ……！」

「何で、こんな場所にいるんだ!？」

「た、大変！ 早く加勢しなくちゃ！」

「……コラ、やめとけ」

エステル達が慌てて助けに入ろうとしたがそれをアガットが片手を
エステルの前に出すだけで止めた

「な、なんで止めるのよ!? あんた、それでも遊撃士なの!?!」

エステルが怒鳴る

だがさらりと受け流された

「勘違いするんじゃないやねえ。関所を守るのは軍の仕事だ。ここの連中
は錬度も高いからすぐに撃退できるだろうよ。余計なお節介ってモ
ンだろうが」

「そ、そんなこと……」

エステルは納得できないようだったがそれに返したのは副隊長だ

「彼の言う通りだ! これは自分たちの仕事……っさ!」

「嬢ちゃんたちは……あ中に入ってな!」

狼らを蹴り飛ばし兵士達が口々に言う

「で、でも……」

まだ渋るエステルだがその時、ルーアン側の方から警報が鳴り響いた

「……ちいつ!」

それを聞くやいなやアガットが扉の中に飛ぶように入り反対側に向

かっ行って行った

「ど、どうなってるの!?!」

「エステル、反対側だ。ルーアン方面の出口でも何かが起こったらしい」

「ちいつ! 迎撃で反対が少なくなった時に襲ったのか!?! 悪知恵が働きすぎだ」

「あ、あんですって!?!」

驚きながらエステル達はルーアン側の出入口に向かったアガットを追いかけていった

エステル達が着いた時には、

「おらあああああああつ!?!」

アガットが重剣で一匹の狼を噛みついてきた口から横に真っ二つにした時だった
よく見ると出入口の壁に一人の兵士が凭れ掛かっていた。気を失っている所からアガットが助けたのだろう

「ひゅっ、やっるっ」

「凄い一撃だね」

イクスとヨシユアも感嘆を上げる

そうこう言っている間に狼達がアガットを取り囲んだ

「ハッ、包囲するつもりかよ。犬ツコロのくせにわりと知恵が働くじゃねえか」

アガットはそれでも余裕綽々の様子で重剣を担ぐ
その時、一匹が跳びながら襲い掛かってきた。それをアガットが叩き墜とす前に、

「うおうらっ！ 白虎撃！」

イクスが真下から腹部に一撃を打ち、跳ね返るように回しながら背中の一撃を与えて狼を潰した

「……加勢するわよっ！」

エステルとヨシユアもアガットに加勢する

「コラ、引っ込んでろ！」

「ふうんだ。あたしたちの勝手だもんね」

「邪魔にならないように手伝わせてもらいますから」

「チッ、勝手にしゃがれ……。せいぜい、俺の《重剣》に巻き込まれないよう注意しとけよ！」

「だあれがそんな剣に巻き込まれるか！ そっちこそ棒術に巻き込

まれるなよ!」

そう叫びイクスは狼の群れに駆けた

蒼空語り

イクス

「はい、始まりました蒼空語り。司会はこの俺、イクスが」

エステル

「アシスタントは毎度あたしが勤めるわ」

イクス

「遅い! 短い! 殺させる!」

エステル

「えー……いきなり何言い出すのよあんたは」

イクス

「だって、更新は遅いし内容は短いし……まったく、これじゃあ、自分で計画してるもんが出来ねえじゃねえか」

エステル

「それ、時々聞くけど一体何を考えてるのよ?」

イクス

「さー、質問に移ろうか」

エステル

「わーい、久々のスルー」

イクス

「HN『漆黒の牙』さんから『あー、オリビエ哀れ。後でどうなったか分かるけど。』」

リ「ああ、確かに。そしてクローネ峠は一応事件が起きるな。何か言わんがな。」

レ「そしてオリビエ、アーティファクト持ってたらずいんじや。一回投獄されてるのに、また捕まりたいの？」

まあ、大丈夫だろ。あと話の相手はまだまだ出ないね。登場遅いから仕方ないか。

リ「つか質問。アイテムどんだけ買いこんだんだ？教えてくれ。」

レ「あとどうでもいい事だけど食材ってなんで腐らないんだろ？ゲームだからかな。」

よくあることだ。それじゃ、また。『……だとよー』

エステル

「そうよね、何で腐らないのか不思議よね。でもそれはあれよ、ゲームのお約束的なあれよ」

イクス

「わっけわかんね……マーケットで買ったのは基本的な食材だ。魔獣の〜とかは自然に手に入るからな」

エステル

「どうやって魔獣から採れるのかあたしでも不思議だわ」

イクス

「んじゃ、これ以上する事もないし終わりますか」

エステル

「そうね」

イクス・エステル

「ばーい」

第二章　く白き花のマドリガル　memory…?

「……これでよしと。それじゃあ　　青い海と白い花に彩られたルーアン地方によっこそ！」

そんな言葉と共に開閉装置を操作し扉を開けた副隊長
エステル達はお礼を返しながらルーアンに踏み入れた
関所までは上り坂だったがここからは下り坂。自然と歩くスピード
も早くなつてゆく

このぶんなら昼ぐらいに麓に着きそうだ
エステル達は談笑し合いながらも昨日の事を軽く思い出していた

昨晚

「ラストオオオオオ！」

イクスが最後の一匹の目の前にスタッフを叩き下ろした。狼はビクツと身体を震わせ怯えた素振りを見せると一目散に逃げ出した。既に他の狼は逃げていたのでよく頑張っていた方だろう

「ふう……なんとかやつけたわね」

「うん、数も多かったしなかなか手強い相手だった」
戻ってこない事を確認したエステル達は一息ついた

「……………ふん……………思ったよりもやるみたいだな。ま、あのオッサ

ンの手解きを受けていたんだったら当然か」

それを息一つ乱さず、汗を一滴も垂らさずに重剣を背中に背負ったアガットがエステルたちに言った

「え………？」

「勘違いするなよ。あくまで新米としてはだ。まだまだ正遊撃士には遠いぜ」

まるで自分に言い聞かせるようにアガットは訂正しておいた

「おーい！ そっちは大丈夫か！？」

その時、隊長と副長が来た。その腕には隙無く導力銃が握られていた

「ああ、問題ない。一匹残らず片付けたぞ。気絶していたヤツはどつだ？」

「思ったよりも軽傷だ。お前がいてくれて助かったよ」

「さすが《重剣のアガット》だぜ」

兵士達が口々に言うがアガットは照れた様子もなく

「大したことはしてねえよ。それに、このガキどもがそこそこ働いてくれたからな」

と逆にエステル達を誉めた

「そうなのか……嬢ちゃんたち、ありがとくな」

副隊長もそれに合わせてお礼を言った

「う、うん……」

「自分たちは、念のため周辺をパトロールするつもりだ。君たちは中に入ってゆっくりと休んでくれ」

「ああ、気をつけるよ」

アガットがそう言うと、兵士達はパトロールを始めた
それを見届けるとアガットは欠伸をしながら足を関所に向けた

「さてと、寝直すとするか。もう危険は去ったはずだ。お前らも大人しく寝ておきな」

そう言ってアガットはさつさと関所に入っていった
しばらく動けずにいるエステル。ヨシユアとイクスはエステルの固まり様に首を傾げていた

「ど、どうなってんの？ あの口の悪いヤツがあたしたちを誉めるなんて」

心底エステルが意外そうに二人に問いかける

「少しは、僕たちの実力を認めてくれたのかもしれないね。思ったよりも真っ直ぐな人なんじゃないかな？」

「うーん……とてもそうは思えないんだけど。……まあ、たしかに

デカイ口を叩くだけはあるわね」

「確かにな。ありゃ強いわ」

イクスも同感といった様子で頷く

そして、エステルたちも関所に入って寝直した
これが昨晚の出来事だった

さて、回想している間にエステル達はクローネ山道を無事歩ききり、
マノリア街道で海を眺めていた

「青くてキラキラしてメチャメチャ広いわね。それに潮騒の音と
一面に漂う潮の香り……。うーん、これぞ海って感じよね」

「エステル、海を見るのは初めて？」

はしゃぎっぱなしのエステルにどうどうと落ち着かせながらヨシユ
アは訊ねる

「昔、父さんと定期船に乗った時、ちらつと見た記憶があるんだけど……。こんなに間近で見るのはひょっとしたら初めてかもしれない」

「そっか……。僕も海は久しぶりだな……。定期船を使わずに歩いてきた甲斐があったね。イクスはどうだい？」

「んあ？ そうだな……。一度だけ見たことあっけどエステルほど感

動はしなかったな。どつちかつつーと今、見た方が綺麗に感じるわ」
イクスは近くの柵にもたれ風によって乱れる横髪を押さえながら遠くを見て言った

「そうなの？ あたしてつきりイクスは海を見たことないって思ってた」

「そりやまあ海とは無縁のロレントにいたからな。そう思われて当然か」

「………………。さ、そろそろ行くっか。もうすぐでマノリア村に着くよ」

ヨシユアが切り上げを告げ歩き出す。エステルとイクスもまだいくらでも見れるんだしと思い後に続いて歩き出した

ヨシユアが言っていたマノリア村は崖付近に作られた小さな村だった。周りには色鮮やかな白い花が咲き誇り、崖の先には太陽の光を反射しきらきら輝いている海が視界一杯に広がっていた

「は〜っ。やっと人里に着いたわね。なんだか、白い花があちこちに咲いてるけど…………ここって何ていう村だっけ？」

「さっきも言ったけどこの村はマノリアだよ。街道沿いにある宿場村さ。あの白い花は、木蓮の一種だね」

簡潔にヨシユアは村と花の説明をした

「ふーん、綺麗よね。それに潮の香りに混じってかすかに甘い香りがするよ。うーん……何だかお腹が空いてきちゃった」

「あはは、花の香りで食欲を刺激されるあたりがエステルらしいって言うか……。まさに花よりダンゴだね」

「だって、育ち盛りなんだもん。ちょうどお昼だし、休憩がてらにランチにしない？」

「それは構わないけど……イクス、何か手持ちの食料はあった？」

「あ、イクスちよつとタンマ。どうせだったら落ち着ける場所で、できたての料理を頼まない？ せっかくルーアン地方に来たんだし、荷物をごそごそと探すイクスにエステルが待ったをかけ、食べ物を買って食べないかと誘う」

「お、それはいいな。俺は賛成だ。ヨシユアは？」

「うん、僕も構わないよ。それじゃあ、酒場で何か買おうか」

彼らも賛成するとさっそく三人で酒場を探し始めた

宿酒場 白の木蓮亭

「ようこそ、《白の木蓮亭》へ。見かけない顔だけど、マノリアには観光で来たのかい？」

食事受け付けに立っていた男性がこちらにやってきたエステル達に声をかけた

「ううん。ルーアン市に向かう途中なの」

「ボース地方からクローネ峠を越えて来たんです」

「クローネ峠を越えた！？ は、あんな場所を通る人間が今時いるとは思わなかったな。ひょっとして、山歩きが趣味だとか？」

本当に驚いたように男性は感嘆の声をあげた。確かに越えるまで、兵士や同業者あかげ以外には会わなかった

「うーん……。そういう訳じゃないんだけど。ところで、歩きっぱなしですっごくお腹が減ってるのよね」

「何かお勧めつてあるか？」

「そうだな……。今なら弁当がお勧めだけど」

「お弁当？」

男性のおすすめ商品にエステルが聞き返した

「町外れにある風車の前が景色のいい展望台になっていてね。昼食時は、うちで弁当を買ってそこで食べるお客さんが多いんだ」

「あ、それってナイスかも　聞いてるだけで美味しそうな感じがするわ」

「それじゃ、そうしようか。どんな種類の弁当があるんですか」

エステルとヨシユアは賛成した。だがイクスだけは、

「あ、そうだ。おっちゃん、もし良かったらで良いけどさ……弁当の中身の作り方を教えてもらえないか？」

「スモークハムのサンドイッチと魚介類のパエリアの？　そりゃ俺は構わないよ」

ちやつかり料理のレパトリーを増やそうとしているイクス
エステル達は苦笑しながら今、男性が言った料理の中から選ぶ

「うーん、あたしはサンドイッチにしようかな」

「それじゃ、僕はパエリアを。……イクスは？」

「俺は教わりながら作るからいいや。二人で食べてこいよ」

「君は料理の事になるとマイペースになるね……、あ、以上で願います」

「まいどあり。しめて120ミラだよ」

エステル達はお金を払い、特製ランチボックスを手に入れた

「お、そうだ。ついでにサービスでハーブティーもつけておくよ。」

「これもウチの名物だね」

「わ、ありがとう」

「それじゃ、展望台に行こうか？」

「うん！ イクスも出来たら早く来なさいよね」

「わーった、わーった。入り口まで送るわ」

そういうことでエステルとヨシユアは展望台へと向かいイクスは見送るために酒場を出た

「ここはさっき調べたばかりね。雑貨屋さんにも居なかったし……困ったわ……どこに行っちゃったのかしら」

一人の少女が何かを探すかのようにきよろきよろと辺りを見渡している

どこかの学園の制服を綺麗に着こなした蒼髪の少女だった

「ヨシユア、ほらほら早く！」

「ちょっとエステル。前を向いて歩かないと……」

そこへ後ろを向きながら入り口を飛び出したエステルがいきなり前を向いたため、制服の少女とぶつかってしまった

「あつっ……………」

「きゃっ……………」

二人とも地面に手をついた

その拍子にエステルはランチボックスを投げてしまったがイクスが何とか受け止めてくれた

「あいたた……………。ご、ごめんね、大丈夫!? あたしが前を見ていなかったから……………」

先に立ち上がったエステルが少女の手を握り立たせた

「あ、いえ、大丈夫です。すみません、私の方こそよそ見をしてしまった……………」

「あ、そうなんだ。じゃあ、おあいこって事で」

エステルは笑う

それに釣られて少女も微笑んだ

エステルの笑顔が太陽なら少女の笑顔は夜空に輝く星みたいだな、とイクスは不覚ながらそう思ってしまった

「まったく……………エステル、何やってるのさ」

ヨシユアはため息を吐きながらエステルの横に並ぶと、同時に少女を見るとわずかに首を傾げた

「……………?」

「ヨシユア、どうしたの？」

「い、いや……。ごめんね。連れが迷惑かけちゃって。どこにもケガはないかな？」

頭を振ったヨシユアは少女に謝る

「はい、大丈夫です。私も人を捜して……。それでよそ見をしてしまっただけです」

「え、誰を捜してるの？」

「帽子をかぶった10歳くらいの男の子なんですけど……。どこかで見かけませんでしたか？」

少女は探している子供の風貌を教えた。だが三人ともこの村に来てからそういう子供には会っていないかった

「帽子をかぶった男の子……。ヨシユア、イクス、見かけたりした？」

「いや、ちょっと見覚えがないな」

「残念ながら俺も」

「そうですか。どこに行っちゃったのかしら……。私、これで失礼します。どうもお手数をおかけしました」

そう言って少女はぺこりとお辞儀をすると足早に去って行ったヨシユアとイクスはその少女を見続けている

「ヨシユア？ イクス？ おーい、二人ともってば」

「え、ああ……どうしたの」

「何だエステル」

呆けていたかのように応える二人
さすがにエステルも呆れる

「どーしたもこーしたも……あ、もしかして……。なるほど、そー
ゆーことか」

だが突然、エステルが一人で相槌を打った

「……なんか、激しく勘違いしてない？」

「照れない、照れない 一目会ったその時から恋の花咲くこともあ
るってね。いやーそれにしても二人同時に同じ相手に恋の花って……
……激闘の予感!？」

……早とちり過ぎるのもどうかと思う

「ち・が・い・ま・す。ただ、昔の知り合いにほんの少し似ていた
だけだよ。それで、ちよつと驚いただけさ」

「へえ、ほう、ふーん。昔の知り合いに似ているね。口説き文句
としては30点かな？ それじゃあイクスは何点を取れるか……レ
ツアンサー」

「あ？ あー……エステルとは真逆のやつだなあ、と」

「へ？」

「さーで、そんなじゃま、おっちゃん待たせても悪いし俺は戻るわ」

イクスは「しまった、ポケ考えときゃよかった」みたいな顔をして誤魔化しながら酒場に戻っていった

「あ、ちょ、ちよつとイクス？」

「（ははは、イクス逃げたな）……ところでエステル。あの子の制服、見覚えない？」

ヨシユアは心の中で苦笑しながら今の制服の事を訊ねた

「そういえば……。ジョゼットが変装に使ってた何とか学園ってところの制服！？」

「ジェニス王立学園だよ。このルーアン地方にあるらしいから見かけても不思議じゃないけどね」

「ふーん、今のが本物なんだ。なんか清楚で礼儀正しくて頭も良さそうだったわね。生意気ボクっ子とは大違いだわ」

「何言ってるんだか。ジョゼットと最初に会った時、完全に騙されていくせに」

先ほどのお返しなのかヨシユアは意地悪そうに言い返す
覚えているのかエステルは言葉を詰まらせる

「うっ……」

「そういや、あの時も僕達の事をからかっていたよね。ま、それでまんまと騙されたら世話ないんだけど」

「うっ……」

「人をからかう暇があったら、もうちょっと観察力を養った方がいいんじゃないの？」

「わ、わかった、わかりました！ もう、からかったりしません！」

降参とばかりに両手を上げて降参の意を示す
それに少しだがヨシユアは満足したようだ

「分かればよろしい。……さてと、それじゃ展望台でお昼ご飯にしようか？」

「ふあ〜い」

元気なさそうな声で返事をするエステル
そんなエステルを見てくすりと忍び笑いをすると並んで展望台に歩いていった

蒼空語り

イクス

「遅すぎなんじゃ、このバカチーーン!!!」

風花

「ごめんなさい! (涙)」

イクス

「謝っても許すかあああああ!」

全力全開でぼこぼこ殴るイクス

『雷刃の襲撃者』姿の風花は『バルディッシュ』と同じ杖で防ぐ

(注・雷刃の襲撃者やバルディッシュが分からない方はリリカルなのはをお調べください)

数分後

風花

「ふおふお〜……ふおめんふあふあいい〜 (涙)」

(訳・うう〜……ごめんなさい〜)

どこからか現れた《パテルⅡマテル》が風花を縦に横にびみょーんと伸ばしていた

エステル

「何でパテルⅡマテル!? 次回作登場機体をこんなところで出しちやった!」

風花

「ふえくん……伸ひひゃうよ〜」

イクス

「罰だ罰！先輩のばっか更新しやがって、こっちも一週間に一回ペースでいいから出しやがれよ！」

カシウス

「そうだぞ。かの『週刊少年 ヤンプ』の作者だつてとても短い締め切りを守っているんだぞ」

エステル

「父さん！？え、何で父さんが普通にここにいるの！？」

カシウス

「おー、エステル久しぶりだなあ。さあ、父さんの胸にどーんと飛び込んでこい」

エステル

「んなもんするかあ！そうじゃなくて何でここにいるのよー！」

カシウス

「何でつて、そりゃあ出番が少ないからに決まってるだろ」

エステル

「父さんの出番なんかないに決まってるでしょ！あんだ、自分の強さ分かってんの！？あたしは知らないけど！」

カシウス

「……エステルがぐれちまった。昔は後ろをよちよち付いてきて、

『あたし、将来パパと結婚する』とか言ってたのに……。ああ、レナ、すまない。俺は育て方を間違ってしまっただらふあああああああ！?!?」

エステル

「勝手に過去を捏造してんじゃないわよ中年駄目親父がああ！?!
あたしは昔っから父さんって呼んでたし、夢はミストヴァルトの伝説のアレを捕獲することだったわ！ もう叶っちゃったけどね！?!」

ふざけた事を喋る駄目親父にエステルの腰の入ったスタッフの横薙ぎの一撃が綺麗に決まる

イクス

「おいおい、てめえらだけで漫才してんじゃないよ。本題が空気になっちゃうじゃねえか」

風花

「ひゃめれよふあてる＝まふえる。ふえんな風におっふいくなっちゃうよ」

（訳・止めてよパテル＝マテル）。変な風におっきくなっちゃうよ）

未だにびみょーんと伸ばされ続けてる風花

その眼は既に涙目だが、泣かないところは凄かった

イクス

「さーてと、そろそろお仕置きのお時間といきますか」

風花

「ふえ！?!」

エステル

「……なら今やってるのは何なのよ？」

イクス

「前菜。あと、親父登場の時間合わせ。あ、親父はもう本編にしか出なくていいから。お疲れ」

カシウス

「酷い扱いだ……」

そう言いながらカシウスはとぼとぼ帰っていった

イクス

「そんじゃ、いくぜ……ん？ あ、どうも。何々……」

突然、黒子が現れたかと思うとイクスに紙を渡してすたこら消えてしまった

エステル

「い、今の何？ ってか誰？」

イクス

「黒子」

エステル

「それは分かるわよ」

イクス

「ヨシユアから連絡。お仕置き小道具が出来てないださ」

エステル

「は？ 何よそれ」

イクス

「つまりだな……」

イクスはそう言うとカメラ視線になり

イクス

「今回はここまでだ！ 次回蒼空語り、『ぶっちゃけ罰ゲームは与える奴には楽しい遊戯』……テイクオフ」

エステル

「初めて続くを使っちゃったわこいつ！」

風花

「ふあらふふふの〜（涙）」

（訳・まだ続くの〜）

第二章 く白き花のマドリガル く memory…? (前書き)

そつえばそろそろ蒼空を投稿し始めてから一年が経とうとしている事に気づきました

何か一周年記念で書こうかな……? ?

第二章 く白き花のマドリガル memory…?

風車小屋前 展望台

「うわっつ、絶景ねえ！」

「うん、海が一望に出来るね」

そこは、青い海に囲まれているかのような場所だった
なかなか絶景だ

「こんな場所で食事なんて、すっごく贅沢な気分じゃない？」

「確かに、気持ち良さそうだ。さっそくランチをいただくか？」

「うん あゝ、お腹空いちゃった！」

さっきまでのへこみようが嘘みたいになくなったエステル。こっぴ
うのを現金というのだろう
エステルとヨシユアは近くにあったベンチに腰掛けてランチボック
スを開いた

「あたしのはスモークハムのサンドイッチね。うーん、香ばしい匂
いがする」

「僕のは……魚介類のパエリアだね。サフランのいい香りがするな」

「それじゃ、いっただきまーす」

「いただきます」

二人は手を合わせ合掌したのち、ランチを食べ始めた

「それじゃ、まずは一口と……」

エステルがサンドイッチを頬張る

「もぐもぐもぐ……。わ、香ばしくて美味しい！ レタスもシャキシャキしてる」

「パエリアも美味しいよ。サフランの香りが利いてて。バーテンさん、いい腕してるな」

「あ、ちょっと一口ちょうだい。あたし、お店のパエリアって食べたことないのよね」

エステルが何気なくヨシユアのパエリアに興味を示す
イクスのパエリアは時々食べる時があったが本場の店の味は味わった事がなかったからだ

「いいけど……ランチボックスを交換しようか？」

「うーん……手が塞がってるから面倒だし。ヨシユアが食べさせてよ」

さらりとエステルはとんでもないことを言い放った
うら若き十六歳が言う言葉ではない

「食べさせてって……」

「もちろん、あ〜ん」

さすがにヨシユアはひくが、エステルは躊躇いなく口を開く

「それは……ちょっと恥ずかしいんだけど」

「いいじゃない。誰も見てないんだし。子供っぽいことしても笑われる心配はないってば」

「……そういう意味で恥ずかしいんじゃないんだけど。まったく仕方ないな……」

諦め口調のヨシユアは一口掬うとエステルの口にパエリアを運んだ。エステルが口を閉じると同時にスプーンを引いた

「むしゃむしゃ……。うーん、デリ〜シヤス　これぞ海岸地方の代表料理よね。なんていうか、独特の香りが食欲をそそっちゃうと
いうか……」

「はいはい、よかったね」

ヨシユアはどうしても良さそうにあしらいながらスプーンを使うことに躊躇したがため息と共にパエリアを掬った

「あ、なんか投げやり。えーい、これでも喰らえっ！」

その瞬間、エステルはヨシユアの口にサンドイッチの残りを突っ込んだ

「むぐつ……！　モグモグモグ……。……いや、美味しいんだけどいきなり口に突っ込まないでよ」

「ふっふっふっ、参ったか」

得意気な顔をしてエステルはまたサンドイッチを頬張る。ヨシユアはそんなエステルを見てまたため息を吐き掬ったパエリアを自分の口に運んだのだった

「　　は、美味しかったあ」

食べ終えた二人は満足そうにハーブティーを飲んでいた

「サービスでもらったハーブティーも絶品だね」

「うん、身体が温まって軽くなってくるっていうか……。潮風も気持ちいいし……。なんだか眠くなってきちゃった」

「食べた直後に寝ると牛になるよって言いたいところだけど……。食シエスタ後の昼寝もたまにはいいかもしれないね」

ヨシユアは言った

「うんうん……」

エステルは頷く

その時、

「……あれ？」

大きな白い鳥が目の前を滑空するように飛んでいった

「ねえねえ、今の鳥！ カモメにしては大きくなかった？」

「そうだね。翼の形も違うし、嘴も鋭くちはじかった。タカかワシなんじゃないかな？」

「白いタカ……珍しいものを見ちゃったね。うーん、何か良いことが起こりそうな気がしてきたわ」

エステルが楽しそうに言った

「はは、そうだといいいね。ところで……眠気は無くなったんじゃない？」

「あ……。うーん、残念ながら」

「なら、そろそろ出発しようか。今日中にルーアン支部で所属変更の手続きがしたいしね」

「それもそっか……。うん、わかった。名残惜しいけどイクスを連れて出発しましょ」

エステル達は、主にエステルが重い（？）腰を上げしげぶ展望台を後にした

風車小屋から全部に続く坂道を降りていると、

「あっっ……」

「わわわっ！」

エステルは別方向から走ってきた少年とぶつかった

「な、なんだか今日はやたらとぶつかる日ねえ」

エステルはよろけた拍子に地面に手をつきたため息を吐きながら言った

「ゴメンゴメン。ちょっと人捜しをしててさ。あれ、姉ちゃんたちこの辺で見かけないカオじゃん？」

深めに帽子を被った少年が言った

「そりゃそうよ。この町の人間じゃないもん。あれ、それよりキミって……」

「……な、なんだよ？」

「さっき制服姿のお姉ちゃんが帽子をかぶった男の子を探しているって言ってたけど……。キミ、なんか心当たりある？」

「あー、そうそう。オイラが捜してる人と一緒だよ。どこで会ったの？」

「宿酒場の近くだけど……。ちょっと前のことだから、どこに行っ
たか判らないわよ？あたしたちも一緒に捜してあげよっか？」

「い、いいよ。どこに行っただか見当つくしさ。そんじゃ、バイバイ
！」

早口にそう言うと少年はさっさと行ってしまった

「元気な子ね。ロレントのルックに少し感じが似ているような…
…。あの子たち、今頃何してるのかな」

エステルが久しぶりに想いを馳せていると、ヨシユアは黙って何か
考え込んでいた

「あれ、ヨシユア、どうしたの？」

ふとエステルが気がつき、ヨシユアに尋ねた

「うん……。気のせいならいいんだけど。エステル、なにか失くし
てない？」

「失くす？ 何を？」

「身に付けている物だよ。財布とかアクセサリとか」

「なによ、やぶから棒に？ 財布は……。ある。髪飾りも……。OK。
遊撃士の紋章は……」

エステルが突然手を止めた

ヨシユアの方を見てえへへと笑い掛けるとまたがさがさつと探し始

める

最後には肩を落としたエステルだった

「やっぱりね……」

「ええええ！？ 一体どうなってるの！？ 峠越えをする時に落と
しちゃったとかっ！？」

「落ち着いて、エステル。ランチを食べていた時にはちゃんと左胸
に付けていたよ。失くしたとすれば……この場所では考えられな
い」

「で、でも……どこにも落ちてないけど」

エステルが周りを見たが、どこにもない
まあ、当たり前だが

「ま、まさか……」

「たぶん、さっきの子だろうね。不自然なぶつかり方をしたから、
もしかしたらとは思ったけど……」

「あ、あんですって〜！？ ど、どうして遊撃士の紋章なんかを！
？」

エステルはヨシユアの考えを聴いて怒り始めた

「確かに、子供が持つってても何の意味もないものだからね。イタズ
ラの可能性が高そうだ」

「おい、人の事は無視ですか？ 放置プレイですか？ 意味分かんずに言ってますが何か？」

「帽子をかぶった男の子……。ああ、王立学園の生徒さんの連れがそうだったかしら。銀髪くんは買い物して試食をしてくれって言ってパエリアサンドをくれたわよ」

女性は親切に答え、全部報告した

「うん、まさにその子よ！ よかったわねイクス、無実で」

「……………」

「どこの子かご存知ありませんか？」

「この町の子供じゃないわね。孤児院の子だと思っけど……………」

「孤児院…………？」

エステルは首を傾げる

「『マーシア孤児院』と言ってね。テレサ院長っていう女の方が運営してらっしゃる福祉施設よ。東のメーヴェ海道途中にあるわ」

「あの子、孤児院に住んでるんだ……………」

少し複雑な気持ちになるエステル

「さっそく訪ねてみようか？ あ、どうもありがとうございました」

「いーえ。銀髪くんもパエリアサンド、美味しかったよ」

「そっか。また食いたくなったら酒場のおっちゃんに言ってくれ。作ってもらえるから」

軽くお礼を述べたエステル達はその『マーシア孤児院』に向かった

エステルたちは看板を見つけた
確かに『マーシア孤児院』と書かれている

「……………」

エステルは看板の前に立ち尽くしながら眼を閉じている
イクスも眼は瞑っていないが何か看板ではなく虚空を見つめていた

「どうやらこの先にあるみたいだね」

「うーん……………」

「どうしたの、エステル？」

ヨシユアはいつもと違うエステルに首を傾げながら訊ねた
エステルはしばらく考えていたが息を吐くとよしつと意気込んだ

「うん、決めた！ 境遇うんぬんは関係ない！人の物を取るのはい悪いこと！ 見つけたらきつちりお仕置きしてやるんだから！」

「はは、悩んでそう結論するのがエステルらしいってどうか……。とりあえず、お手柔らかにね。イクスはどうする？ 『お話』する？ それともお話？」

ヨシユアはエステルの宣言に呆れながらイクスに知らない人が聞いたら訳のわからない問いをした

「いや……俺は今回は関係ないからな。傍観しとく」

「やっぱり。ならエステルの事だからあんまりないけど、やり過ぎてたら止めよう」

「ん、了解」

マーシア孤児院

エステル達が孤児院に入ると、視線の先に三人の子供達がいた。わいわい話している

「クラムつたらどこに行つたのよ、もう！ クローゼお姉ちゃん、すごく心配してたんだからね！」

子供の一人 名前をマリイと言いマリイはさきほどの帽子を被った少年を怒っていた

「へへ、まあいいじゃんか。おかげでスツゲエものが手に入ったんだからな」

クラムと呼ばれた帽子の少年はまったく反省の素振りを見せずにしし、と笑い返す

「なんなの、クラムちゃん？」

近くにいたもう一人の子供、ダニエルは指を加えながら訊ねた

「にひひ、見て驚くなよ。ノンキそうなお姉ちゃんから、まんまと拝借したんだけど……」

とまあその時だった

「……だ〜れがノンキですってえ？」

地の底から唸るような声が聞こえてきた

「へっ……」

クラムが振り返ると、そこにはエステル達が入って来たところだった

「げえッ！ ど、どうしてここに……！」

「ふふん。遊撃士ブレイサーをなめないでよね。あんたみたいな悪ガキがどこに居るのかなんてす〜くに判っちゃうんだから！」

エステルは得意気に言った

その遊撃士がガキにすられてどうする、とイクスはツツコミたい気

分だったが口には出さない

「く、くそー……。捕まってたまるかってんだ！」

「くらっ、待ちなさい！」

そう言って逃げ出すクラム

そう言って追いかけるエステル

「あのっ、お兄さん達……。どうなっちゃてるんですか？」

「クラムちゃん、また何かやったの？」

マリイとダニエルが不安げにヨシユアとイクスに近寄り訊ねた

「ええっと……。騒がしくしちゃってゴメンね」

「あ、嬢ちゃん、坊主。おやつ食べる？ さっきパエリアサンド作
ったんだけど」

ヨシユアが肩身狭そうに言い、イクスは苦笑しながらマリイ達にパ
エリアサンドを渡した

その時、エステルがクラムを捕まえたようだ

そこは遊撃士もとい元気娘。行動が早い

「ちくしょー！ 離せっ、離せつてばっ！ 児童ギャクタイで訴
えるぞっ！」

「なぐにしゃらくさい事言ってくれちゃってるかなあ。あたしの紋
章、さっさと返しなさいってのー！」

「オイラが取ったっていう証拠でもあんのかよ！」

クラムがエステルの腕の中でもがき抵抗しながら言った
これもまったくの無意味だが

「証拠はないけど……。こうして調べれば判るわよ！」

エステルは抵抗を続けるクラムの脇腹を思いっきりくすぐり始めた

「ひゃ、ひゃははは……。！ や、やめるよ！ くすぐったいだろ！

エッチ！ 乱暴オンナ！」

「ほれほれ、抵抗はやめて出すもの出さなさいっての……」

内心楽しんでるエステル。更にくすぐりがエスカレートする
と、その時、

「
ジーク！」

決して高くないが凜とした声が響いた

「エステル、ガキ離してしゃがめっ！」

「ふえ？」

イクスが何かを察したのかエステルに注意の声をあげる

瞬間、エステルの目の前を高速で鳥が通り過ぎた

その拍子にクラムを離してしまうエステル

「わわっ！？ なんなの今の！？」

「その子から離れて下さい！ それ以上、乱暴をするなら私が相手になりま……」

声を発したのは、家から出てきた制服の少女だった。エステルに襲い掛かった鳥　　白ハヤブサは静かに少女の伸ばした腕に降り立つだが、エステル達を見ると言葉を閉ざした

「………………。あら？」

「あ、さっきの……」

エステルも同じ様に思い出したようだ

「マノリアでお会いした……」

「ピュイ？」

白ハヤブサも首を傾げている
おお、可愛い

「助けて、クローゼお姉ちゃん！ オイラ、何もしてないのにこの姉ちゃんがいじめるんだ！」

クラムはこの隙をついてエステルから離れるとクローゼと呼んだ少女の後ろに隠れた

「な、なにが何もしてないよ！ あたしの紋章を取ったくせに！」

「へん、だったら証拠を見せてみるよ！ あ、くすぐるのは無しだかな」

「うぬぬぬ……」

エステルは悔しそうにしている

「やあ、また会ったね」

「ういつす、おひさ」

「あ、その節はどうも……。すみません、私てつきり強盗が入ったのかと思って……。あの、それでどういった事情なんでしょう？」

クローゼも乾いた笑みを浮かべながら二人を交互に見る

「クローゼお姉ちゃん。そんなの決まってるわよ。どーせ、クラムがまた悪さでもしたんでしょ」

「ねー、銀色のおにいちゃん。さっきのサンドイッチもう一個ちょうだい？ あ、おねえちゃん、もうアップルパイできた？」

マリイは呆れながら年不相応のため息を吐き、ダニエルはイクスとクローゼに訊ねた
食いしん坊さんである

「おう、悪いな。材料はあるけどもう品切れだ」

「あ、もうちょっと待っててね。焼き上がるまで時間がかかるの」

イクスとクローゼは微笑みながらダニエルに謝る

「この悪ガキ！」

「乱暴オンナ！」

その横ではエステルとクラムが言い争いが続いていた

「まったく、クラムってばいつまで経ってもガキなんだから」

「アップルパイ、まだかな。サンドイッチおいしかったな」

「あ、サンドイッチをありがとうございます」

「いいって。作るのも食われるのも好きだからな」

各自、他人を気にせず自由気ままに話している

「……なんだかややこしい事態になってるね」

「あ、あはは……」

「ピュイ」

白ハヤブサは「そうだね」と言う風に鳴いた

「あらあら。何ですか、この騒ぎは……」

その時、孤児院の中から女性が現れた。何か料理をしていたのか、

はたまたいつでも着けているのかは不明だが東方の国で服を汚さないように着る前掛けをしていた東方大好きなイクスはそれが『割烹着』^{かつほうぎ}と呼ばれる物だと一瞬で見抜いた

「テレサ先生！」

どうやらこの女性が孤児院運営者らしい

「詳しい事情は判りませんが……。どうやら、またクラムが何かしでかしたみたいですな」

テレサ先生と呼ばれた女性は困った様子で、しかし仕方無いという様子も含めた微笑で言った

「し、失礼だなあ。オイラ、何もやってないよ。この乱暴な姉ちゃんが言いがかりをつけてきたんだ」

「だ、誰が乱暴な姉ちゃんよ！」

「あらあら、困りましたね。クラム……。本当にやっていないのですか？」

「うん、あたりまえじゃん！」

この期に及んでまだそう言えるのがすごい。実際盗んでいないのかもしれない

「女神様^{エイドス}にも誓えますか？」

「ち、誓えるよっ!」

「そう……。さっき、バッジみたいな物が子供部屋に落ちていたけど……。あなたの物じゃありませんね?」

テレサは割烹着のポケットをこそこそと探り始めた
それにびっくりしたのはクラム

「え、だってオイラ、ズボンのポケットに入れて……。はっ……」

そう言っつてポケットに手を突っ込むがカマをかけられたと知ると一瞬で固まる

「や、やっぱり!」

「まあ……」

「見事な誘導ですね……」

「あはは、馴れてる〜」

クローゼとヨシユア、イクスが感心するように声を上げた

「クラム……。もう言い逃れはできませんよ。取ってしまった物をそちらの方にお返ししなさい」

とっても静かだがやや怒気をはらんだテレサの言葉にクラムは俯く

「うつうつう……。わかったよ! 返せばいいんだろ、返せば!」

クラムは悔しそうに紋章を取り出すとエステルに投げつけた

「わつと……」

「フンだ、あばよっ！」

最後にクラムは威勢だけの言葉を吐き捨てるのとどこかに行ってしまった

「あつ、クラム君！」

「大丈夫、頭が冷えたらちゃんと戻ってくるでしょう。それより……ここで立ち話をするのも何ですね。詳しい話は、お茶を飲みながら伺わせていただけないかしら？」

エステル達は、お茶とアップルパイとイクスがキッチンを借りて作ったパエリアサンドをご馳走になりながら自己紹介をして先ほどの出来事について説明した

「そうですね……そんな事を。あの子も、悪気はないのですがイタズラ好きに加えて無鉄砲で……。本当にすみませんでした。保護者としてお詫び申し上げます」

「あは、もういいですよ。紋章もちゃんと戻ってきたし。美味しいハーブティーとアップルパイ（一応パエリアサンド）でチャラつてことで」

「おい、何が一応だ何が」

エステルが笑いながら言っけてイクスは笑いながらも怒っていた

「ふふ、ありがとう。エステルさん、ヨシユアさん、イクスヴェリアさん」

テレサも微笑んだ

イクスは「ヴェリアは無しにしてください。短い方が言いやすいですし」と言っけておいた

「でも、本当に美味しいお茶ですね。町の酒場で淹れてもらった物と同じような味がしますけど……。ひよっとして表で栽培されているものですか？」

「ええ、ハーブの栽培は私の趣味のようなものでしてね。それを、宿酒場のご主人がご好意で仕入れて下さるんです」

「そうなんだ……。さっき食べたアップルパイもすごく美味しかったんですけど」

「ふふ、あれは私ではなくこの子が作ったものなんですよ。それにイクスさんのパエリアサンドも凄く美味しかったわ」

「ども」

テレサは横に座るクローゼを見ながら言う

「え、クローゼさんが？」

「恥ずかしながら……。あの先ほどは本当に失礼なことをしました。

私、とんでもない勘違いをしまして……」

クローゼがまたすまなさそうに言った
律儀な子である

「気にしなくたっていいつてば。あたしもあの子を捕まえた時にちよつと荒つぽくしちゃったし。でも、さすがにあの白いタカには驚いたけどね」

「あ、ジークのことですね。あの子、白ハヤブサなんです」

「白ハヤブサ……たしかリベールの国鳥だったね。よく訓練されているみたいけど、君のペットなの？」

「いえ、私が飼っているわけじゃありません。仲のいいお友達なんです」

「は、すごい友達もいたもんね。そういえば、クローゼさんってジェニス王立学園の生徒よね？　なのに、ここに住んでるの？」

驚きながらエステルは制服を指差しながら訊ねた
クローゼはいいえ、と返す

「いえ……私は学園の寮に住んでいます。あまり遠くないので、休日などについて遊びに来てしまっんです。ご迷惑かとは思うのですが……」

「あらあら。迷惑だなんてとんでもない。あなたが来てくれるおかげで私も、色々と助かっていますよ。子供たちも喜んでいきますしね」

「テレサ先生……」

「でも、こちらに構いすぎて学園生活を疎かにしないようにね。まあ、あなたに限ってそんな心配はないでしょうけど」

「はい、肝に銘じておきます」

クローゼは苦笑しながらも頷く

「うーん、学園生活か……。そういうのも一度は経験してみたかったわね」

「確かに、教会の日曜学校は週に一回しかなかったからね。でも、王立学園の入学試験はかなり難しいっていう話だけど？」

「あう、あたしには逆立ちしたって無理か……」

「ふふ、そんな事ないです。遊撃士になる方がはるかに難しいと思いますよ。しかも、その若さで……。私の方こそ懂れてしまいます」
嘘偽りのない口調でクローゼが言う。やはりというか以前ジョゼツトも似たような事を言っていたが本当に難しいのだろうか

「えへへ……何だかくすぐったいわね。遊撃士とは言ってもまだ見習いみたいなもんだし」

「一人前の遊撃士を目指して王国各地を回っている最中なんです。しばらく、このルーアン地方で活動することになると思います」

「テレサ先生も何か困ったら言ってくれ。初回はパイの礼に無料だ

から」

エステル達は多少照れながら言った

「だったら、何かの機会にお世話になるかもしれませんがね。あの子たちも喜ぶでしょうし、是非、また来て下さいな。お菓子とお茶くらいはご馳走させてもらいますよ」

そうして、エステル達は名残惜しいが時間も有限なのでここでお暇いとますることにした

「うーん、テレサ院長ってあったかい感じのする人よね」

「そうだね……お母さんって感じの人かな」

「だな。俺は好きだが、ああいう人」

「ふふ、子供達にとっては本当のお母さんと同じですから」

家から出たエステル、ヨシユア、イクス、クローゼはテレサに対しての感想を述べた

その時、白ハヤブサが鳴きながら降りてきた

「ジーク。待っていてくれたの？」

「ピュイ」

「うん、そうなの。悪い人たちじゃなかったの。エステルさんとヨシユアさんとイクスさんっていつてね。あなたも覚えていてくれる？」

「ピューイー！」

「ふふ、いい子ね」

クローゼはジークと呼んだ白ハヤブサとまるで友達と会話しているかのように話し合っていた

「す、すごい。その子と喋れるの？」

「さすがに喋れませんけど、何が言いたいのかは判ります。お互いの気持ちが通じ合ってるっていうか……」

「ほえ……」

「以心伝心ってやつだな」

エステルはただただ感心するばかりだ

「相思相愛ってわけだね」

「そうですね、その通りです」

クローゼはきつとそうだと信じ頷いた

「こんにちは、ジーク。あたしエステル、よろしくね」

「ピユイ？」

エステルは早速友達になろうとジークに近寄ると自己紹介をし始めた
ジークは首を傾げていたが、

「ピユイーーーーーッ」

ジークは飛び立って行ってしまった

「ああっ……。しくしく、フラれちゃった」

「はは、残念だったね」

「くく、どんまい」

「クスクス。そういえば、エステルさん達はルーアン市に行かれる
んですよね？」

「うん、ギルドの支部で転属手続きをするつもりなの。そうしない
とお仕事できないし」

「ルーアンのギルドでしたら私、何回か行った事があります。よか
ったら案内しましょうか？」

「わ、いいの？ すごく助かっちゃうけど」

「クローゼの方は大丈夫なのか？ すぐに学園に戻らなくて」

「はい。今日一日は外出許可を貰っていますから。夜までに戻れば
大丈夫です」

「それじゃ決まりね　ルーアンに向けてレッツ・ゴー！」

元気一杯にエステルが拳を空に突きだし、歩き始めた
そんなエステルに三人は苦笑しながら着いていくのだった

蒼空語り

「ぶっちゃけ罰ゲームは与える奴には楽しい遊戯」

イクス

「はい、始めました蒼空語り。進行役は俺」

エステル

「アシスタントはあたしが」

ヨシユア

「風花お仕置きは僕が」

イクス・ヨシユア

「担当せめい（します）」

エステル

「色々待ったあああああ————！！！」

イクス

「何だよエステル。いきなりでけえ声出して」

やだめよ。聞いちゃだめよ！」

イクス

「うーっす、それじゃあ回転水車劇やってる風花はほっという質問に移るぞお」

エステル

「何か罰がかっこいい名前なんですけど……しかも悲鳴が聞こえないかのような口振り」

イクス

「HN『空牙刹那』さんから」どうも、おひさしぶりです！

久々に読みにきましたがかかなり面白いことになってますね……！面白すぎて最新話まで読みきりました……！！！！

(イクスがハーケン門でオリビエを『お話』し始めたところから)

大体読みましたが、おまけは飛ばしてます、すみませんm」

— m

理由は、ストーリーでのイクス達のカッコいい活躍を見たくてたまらなかつたからです……！！(事実

それにしてもイクスがスタッフに刀をねえ……もしかして大太刀見たいな奴かな？

風花ちゃん(たぶん女の子だと思うから)は零の軌跡も書いちゃうのかな？

そこらへんお兄さん(12月9日生まれの18歳なので)に聞か

せて？WWW

では、また次回に『……まず俺の仕込み小太刀は両端に短めの刀身が組み込まれてんだ。抜いて二刀にもできるし、鞘でもあるスタッフに差し込めば槍や両刃のスタッフにも出来る優れものだけ』

エステル

「へえ……。じゃあ二つ目、風花ー」

風花

「ごほつ、ごほつ……ひどいよイクスう……。質問の答えははいです。何年後になるか分かりませんが絶対に書きたいと思っています」

イクス

「はい、おつかれちゃーん。次イ、HN『漆黒の牙』さんから『やつとクローゼ出たー！話の流れだから仕方ないが。リ「確かにな。つかイクスお前素晴らしいな。酒場のおっちゃんに料理教わるとか」

レ「確かに。あとカシウスさんドンマイ。いつか活躍すると思うから。」

今回の質問。現在のレベルと装備クオーツを教えてください。

リ「お前またその質問かい。」

ネタが無い。思いつかない。だからまた使うという状態。

レ「あとイクスに零の軌跡に登場した料理のレシピ送るわ。」

リ「大丈夫かそれ？」

きにするな。それじゃ、また『……Lvは十五、六ぐらいでクオーツはボースの店で作れるまでの構築してるぜ。俺は適当、エステルは攻撃型、ヨシユアは術式型だな』

エステル

「はい、質問はこれでおしまい。……イクス、そろそろ許してあげたら？」

イクス

「……次回が一週間以内に出すことが出来たらな」

エステル

「……………無理ね」

ヨシユア

「それではこれで。お疲れさまでした」

第二章 く白き花のマドリガル memory:?

マーシア孤児院を出たところで草むらから少年の声が聞こえた

「…………クローゼ姉ちゃん」

四人が声のした方を向くとちょうどクラムが草むらから出てきた

「クラム君？」

「あ、イタズラ小僧！」

クローゼとエステルが同時に声を上げた

当たり前だが君付けがクローゼ、小僧がエステルである
間違える者はいないだろうが念のために補足を

「もう…………こんな所で遊んだらダメよ。魔獣に襲われたらどうするの？」

「オイラ、クローゼ姉ちゃんにどうしても謝りたくってさ…………。何もしてないなんて嘘ついたりしてごめんなさい」

先程とは打って変わった素直さでクラムはぺこりと頭を下げた

「ふふ…………怒ってないから安心して。それに、本当に謝りたい人は他にもいるんだよね？」

「ギクツ…………。そ、そんなことないもんね！」

クローゼに見破られ、ちらちらとエステルを見る
凶星だったようだ

「????」

当の本人は何も分かつちやいなようだ

「あなたが良い子なのは私、よく知ってるから。ね……ちゃんと謝ろう?」

静かに、優しくクローゼはクラムに謝罪を勧める

「クローゼ姉ちゃんの頼みなら仕方ないや……。悪かったよ。遊撃士の姉ちゃん。ゴメン……。なさい」

今度こそ本当に謝るべきエステルに対してぺこりと頭を下げたのだ

エステルは面食らっていたが、

「あ、あはは……。あたしに謝りに来たんだ。素直なところ、あるじゃない」

皮肉で返してしまった

「か、勘違いすんなよ!? クローゼ姉ちゃんに頼まれたからだってば! 大体なあ、遊撃士のくせに注意力が足りないんじゃないの? オイラみたいな子供に簡単に取られてどうするのさ?」

「うぐっ……」

「はははは！ 確かにその通りだな。すられたらすりかえすぐれえやんなきゃな」

「うっさいわよ馬鹿イクス！」

エステルは反論できない

代わりにイクスを怒鳴って反論代わりにした

「バイバイ！ せいぜい修行しろよな！」

駄賃代わりに最後にまた嫌みを言うとかラムは孤児院に帰っていった

「や、やっぱりイクス並みに可愛くない！」

「むしろ格好良くありたい！」

「まあまあ二人とも。ただの照れ隠しだつてば。それに、あの子の言う通り注意不足だったのは事実だしね。修行が必要なのは確かだと思つよ？ イクスに必要なのは格好良さより強さだ」

「うっう……。ヨシユアはもっと可愛くない！」

「ヨシユアの毒舌は回避も盗めもしねえよ……」

ヨシユアにダメ出しを食らったエステルとイクスはうなだれながらため息を吐いた

「クスクス……。エステルさんとヨシユアさんってとっても仲がいんですね。まるで本当の姉弟みたいです」

それを眺めていたクローゼはくすくす口を押さえて笑う

「そ、そうかな？」

「面倒を見る割合からいうと姉弟っていうより兄妹だけだね」

「む、失礼しちゃうわね」

「失礼も何も弟にたしなめられる姉ってどうよ？ 俺的にはよろしくないと思っぜ」

「むう……」

弟に散々言われエステルはむくれた。確かにそうだな
反論できないのが証拠だ

「ふふ、うらやましいです。私は一人っ子でしたから。だから、あ
そこの雰囲気は懂れてしまっんですけど……」

「え？」

「あ、いえ……。それではそろそろ出発しましょうか。このまま、
海岸沿いにまっすぐ行けばルーアンです」

何かを小さく呟いたクローゼだったが次には何事もなかったかのよ
うに言った

「オツケー。それじゃあ、行きましょ」

海港都市ルーアン

エステル達が辿り着いた街は色で表すなら
白と青の二色で済んでしまう

建物は基調を白として清潔感が感じられ、海の青は爽快感が感じられた

この街を一言で表すなら
心地よい
これだけで十分だ

「うわ〜……。ここがルーアンか。なんていうか、キレイな街ね」

「海の青、建物の白……。眩しいくらいのコントラスト。まさに海港都市って感じだね」

「なんか陽射しが暑く感じる……。あれか？ 南国みたいだから？」

エステル、ヨシユア、イクスは初めて見る海港都市に見惚れていた

「ふふ、色々で見所の多い街なんです。すぐ近くに、灯台のある海沿いの小公園もありますし。街の裏手にある教会堂も面白い形をしているんですよ。でも、やっぱり1番の見所は《ラングランド大橋》かしら」

「《ラングランド大橋》？」

「こちらと、川向こうの南街区を結ぶ大きな橋です。巻き上げ装置を使った跳ね橋になっているんですよ」

「跳ね橋か……。それはちょっと面白そうだな」

「あと、遊撃士協会の支部は表通りの真ん中にあります。ちょうど大橋の手前ですね」

「オツケー。まずはそっちに寄ってみましょ」

エステル達は遊撃士協会ルーアン支部に向かった

遊撃士協会ルーアン支部

「こんにちはは、つて。あれ、受付の人は？」

中に入りながらエステルは挨拶したが、受付には誰もいなかった
エステルの声は反響することなく空に溶ける
と、そこへ、

「おや、お嬢ちゃん達。なにか依頼でもあるのかい？」

掲示板を眺めていた女性がこちらに気づき近寄ってきた

「あ……」

「受付のジャンは二階で客と打ち合わせ中なんだ。困ったことがあるならあたしが代わりに聞くけど？」

「えっと……。客じゃないんだけど」

エステルが説明しようとしたが女性はそれよりも早く、胸元に付いていた遊撃士の紋章に気づいた

「ん、その紋章……。なんだ、同業者じゃないか。あたしの名はカルナ。このルーアン支部に所属してる。見かけない顔だけど新人かい？」

「うん。あたしは準遊撃士のエステル」

「同じく準遊撃士のヨシユアです。よろしくお願いします」

「右にもなずく。準遊撃士のイクスヴェリアです。ハジメマシテ」

自分をカルナ、と名乗った女性にエステル、ヨシユア、イクスが自己紹介を返した

「エステルとヨシユア、イクス……」

知っているのか、カルナは顎に手を当て考え始めた
思い出したのか、指を鳴らす

「そうか、あんたたちがロレントから来た新人だね？　ボースじゃ、シエラザードと大活躍したそうじゃないか」

「あ、あはは……。それほどでもないけど」

「僕たちが来ることをご存じだったんですか？」

「ああ、ジャンのやつが有望な新人が来るって言ってたからね。しかし、転属手続きをするなら彼の用事が終わらないとダメだねえ。しばらく、街の見物でもして時間を潰してきたらどうだい？」

どうやら、すぐには転属するのは無理なようだ
カルナは時間を潰してくる事を提案する

「そうっすね……。ただ待っているだけでも何ですし。俺はそれに賛成です」

「あ。あたしも賛成！ あ、そうだ……。ね、良かったらもう少し付き合ってくれないかなあ？ せっかく知り合いになれたのにここでお別れも勿体ないし……」

イクスの言葉にエステルも同意してからクローゼの方を向いて頼んだ
クローゼはすぐに頷く

「あ……喜んで。お邪魔じゃなかったらぜひ一緒に一緒にさせてください」
「やった」

「決まりだね。それじゃあ僕達、ルーアン見物に行ってきます」

「しばらくしたらまた来るわね」

「ああ、楽しんでおいで」

カルナも笑顔で言ってくれた
エステル達は暇潰しのため、ルーアン見物をする事になったのだ
った

いや〜な人物に会ってしまふのはまた、後の話

ルーアンの街の高いところならば確実に見ることでできるリベール最大の大橋　　ラングランド大橋
全長108アージユという壮大な長さを誇るこの跳ね橋には工房都市ツアイスで作られた造られた特製オーブメントが搭載されているため巻取りが出来るのだ

閑話休題

「これがラングランド大橋……やっぱり大きいわねえ。ヴェルテ橋の倍くらいはありそう」

「この橋が作られたのは40年ほど前のことだそうです。それまでは、渡し船を使って兩岸を行き来してたんですって」

何も知らないエステル達にクローゼがガイドよろしく解説してくれたクローゼの説明に疑問を持つエステル

「え……。どうして橋を作らなかったの？」

「このルビーヌ川は海と湖を結ぶ唯一の川だからね。湖畔にある王都に向かう船が通れないと困るからじゃないかな」

「はい、ご明察です。50年前の導力革命によって、これほど大規模な跳ね橋を建造することが可能になったそうです」

「なるほどね……。オーブメント様々ってわけか。しかし、それは実際に跳ね上がる所を見てみたいな。俄然興味がわいてきた」

「跳ね橋が上げられるのは日に三回と決められています。今からだ

「つたら……夕方には見られると思いますよ」

イクスの要望にクローゼがさらっと丁寧に教えてくれた
エステルも興味があったらしく、

「よし、それは絶対に見逃さないようにしないと！」

のりのりだった

「だな」

「だね」

そこから、ホテルやオープンメント工房、教会などの北街区。市長邸
や倉庫が集まる南街区をクローゼにガイドをしてもらいながらツア
ー（仮）を楽しむ遊撃士ご一行なのでした

そんなこんなで歩いているといつの間にか倉庫が集まり通称、倉庫
区画の一番奥まで来てしまった

誰もいないと思っていたそこには、ちゃっかり人がいた。赤いバン
ダナを着けたヤンキーそうな少年。長いのでチャラ男と略して置く
ことにしよう

「誰がチャラ男だ！ そんなことより……どうしてこんな場所に若い
女の子たちが……。やいやい、ここは立ち入り禁止だ！ て、て
めえらみたいながキどもが入っていい場所じゃねえんだよ！」

チャラ男は緊張しながらも目一杯強がりながら怒鳴った

「いや、別に入りたいなんて一言も言っていないし。っていうか最初、誰にツッコんだんだ？」

「ところでお兄さん、なんでそんなに緊張しちゃってるわけ？」

イクスがツッコミを入れ、エステルが純粹な疑問を投げかけた
チャラ男はそれを聞くとわずかに強がるのをやめた

「や、やっぱり緊張してるように見える……？　じゃなくて、とにかくここは立ち入り禁止だ！　とっとと向こうに行っちまえ！　むしろ帰って。な？」

相変わらず緊張しているようで、歯切れが悪そうに怒鳴る。しかも最後には頼み込んでいる始末

「（これは、そっとしておいてあげた方がよさそうだね……）」

「（うーん、カッコも妙だし、いったいどういう人なのかしら？）」

「（ヤクザ系にしちゃあ若すぎるよなあ）」

ヨシユアとエステル、イクスは聞こえないように囁き合う

「（……………）」

それをクローゼだけが困った様子で見つめていたのは気づかなかった
チャラ男の立场上帰って欲しいいらしかったので一先ずエステル達四人はその場を後にするのだった

それなりに楽しめたのでエステル達はギルドのある北街区に戻ろうとした時、

「待ちな、嬢ちゃん達」

突然、三人の男がこちらに来た

チャラそうなので次に喋っていく順にチャラ男A、B、Cとしていこう

「え、あたしたち？」

エステルが振り向く

「おっと、こりゃあ確かにアタリみたいだな」

エステル達……主にエステルとクローゼの顔を見てチャラ男Aが言った。一応名前はデイン

「ふん、珍しく女の声が聞こえてきたかと思えば……」

チャラ男Bが悪そうに言う

ちなみに名前はロッコ

「あの、なにか御用でしょうか？」

「へへへ、さつきからここらをブラついてるからさ。ヒマだったら俺たちと遊ばないかなって」

下品な口調で喋りかけるチャラ男A。^{ディン} どうやら、先程のチャラ男と同じくタイプみたいな奴だ。もっとも弱気ではないが

「え、あの……」

「なによ、今時ナンパ？ 悪いけど、あたし達ルーアン見物の最中なの。他をあたってくれない？」

困惑するクローゼをよそにエステルは呆れたようにチャラ男達に言う

「お、その強気な態度。オレ、ちょっとタイプかも」

そう言ったのは最後の一人、チャラ男Cである
どうでもいいが名前はレイス

「ふえっ？」

エステルは思わず素っ頓狂な声をあげてしまう

「見物がしたいんだったら俺たちが案内してやるっじゃねえか。そんな生っちょろい小僧達なんか放っておいて俺たちと楽しもうぜ」

チャラ男Bがヨシユアの方を見て嘲笑うかのように言う

「……………」

「……………」

ヨシユアとイクスは何も言わない。むしろ言いたくない

「ちよ、ちよつと！ 何が生つちろい小僧達よ！？ あんたたちみたいなド素人、束になってもヨシユアとイクスには……」

「いいよ、エステル。別に気にしてないから。君が怒っても仕方ないだろ？」

「そうそう。こういうの相手にしたらきりがなくなるぜ。ここは穩便に済ませよう」

弟達の事を馬鹿にされたエステルはかちんと来たがヨシユアとイクスにたしなめられ大人しくする

「で、でも……」

まあ逆にうるさくなる奴が出てしまうが

「なに、このボク……。余裕かましてくれてんじゃん」

「むかつくガキどもだぜ……。上玉二人とイチャつきやがって」

「へへ、世間の厳しさってヤツを教えてやる必要があるそうだねえ」

チャラ男A、チャラ男B、チャラ男Cがヨシユアとイクスに歩み寄るとへらへら笑いながら肩に手をおいた

「ちよ、ちよつと……!!」

「や、止めてください……!!」

エステルとクローゼは止めさせようと声をかけるが、ヨシユアとイクスに止められる

「……僕らの態度が気に入らなかつたら謝りますけど」

静かに とても静かにヨシユアが喋りだす

「もしこいつらに手を出したらよ……」

イクスも抑えた声音で言い
そして

「『全力全開で』お話お話し』（しますよ？）（すぞ？）」「

殺気を込めた睨みと圧力をチャラ男三人にぶつける
フレッシュヤー
犯罪者や魔獣を日頃相手取っている二人にとって、こんな睨みはいつもの事だ

「なっ……」

「な、なんだコイツ……」

「ハ、ハツタリだ、ハツタリ！」

予想通り二人の威圧に呑み込まれそうになる三人。思わず肩に乗せていた手を離して一歩二歩下がってしまう
だが、

「ヘッ、女の前でカツコ付けなくなる気持ちも判るけどな。あんまり無理をしすぎると大ケガすることになるぜ……」

強がるのもチャラ男の特権だ
チャラ男Aがそう言って二人に襲いかかるうとしたその時だった

「お前たち、何をしているんだ！」

青年の声がラングランド大橋の方から聞こえた

「ゲツ……」

「うるせえヤツが来やがったな……」

今までうるさくしていた三人だったが青年の声が聞こえると途端に
面倒そうな表情を浮かべた
やってきたのは青髪を中央でわけた青年だった

「お前たちは懲りもせず、また騒動を起こしたりして……。いい年
して恥ずかしいとは思わないのか！」

「う、うるせえ！ てめえの知ったことかよ！」

「市長の腰巾着が……」

忌々しそくに悪態を吐いていく三人

「なんだと……」

青年が怒りに駆られ何かを言おうとした時、

「……おや、呼んだかね？」

またラングランド大橋の方から壮年の男性が現れた
それを見てまたぎよっとする三人

「ダ、ダルモア!？」

「ちっ……」

エステル達には面識がないので誰だか分からないが偉いということ
はだけはわかった

「(だ、誰なのかな……。すごく威厳ありそうな人だけど)」

「(ルーアン市長のダルモア氏です。お若い方は、秘書をされている
ギルバードさんといったかしら……)」

「(市長とその秘書、ね……。そりゃ不良には苦手な奴らだわな)」
クローゼが囁いて教えてくれイクスがふーんといった様子で呟く
その間にもルーアン市長・ダルモアは三人に説教……。もとい、話し
をしていた

「このルーアンは自由と伝統の街だ。君たちの服装や言動について
とやかく文句を言うつもりはない。しかし他人に、しかも旅行者に
迷惑をかけるというなら話は別だ」

「けっ、うるせえや。この貴族崩れの金満市長が。てめえに説教さ
れる覚えはねえ」

「ぶ、無礼な口を利くんじゃない！ いい加減にしないと、また遊撃士協会に通報するぞ!？」

青年改め、秘書のギルバードが脅すように言う
だが彼らには慣れている事らしく鼻でそれを笑う

「フン……何かというと遊撃士かよ。ちったあ自分の力で何とかするつもりはないわけ？」

「たとえ通報されたとしても奴らが来るまで時間はある……。とりあえず、ひと暴れしてからトンスラしたっていいんだぜえ」

「悪いんだけど……。通報するまでもなくすでにここに居たりして高笑いしそうな雰囲気キャラ男達にエステルは残念とばかりに話しに加わった

「な、なにい？」

「はあく、この期に及んでこの紋章に気付かないなんてね。あんた達、目が悪いんじゃない？」

そう言ってエステルは、左胸に飾った遊撃士の紋章を指差した

「そ、それは……!？」

「遊撃士のバッジ!？」

「じゃあ、こっちの小僧達も……」

「そういう事になりますね」

「ま、観念しとけ」

ため息を吐きながらヨシユアとイクスも紋章を見せつける
それを見て慌てたのはチャラ男三人組だ。すぐさま円陣を組み、ひそひそと話を始める

「（ど、どうすんだ？ まさかこんなガキどもが遊撃士なんて……）」

「（なあに、構うもんか！ 遊撃士とはいえただの女子供じゃねえか！）」

「（ば、馬鹿野郎！ 見かけで判断するんじゃないやねえ！ ついこの間、3人がかりで女遊撃士と戦ったのされちまったのを忘れたのか！？ そ、それに何と言っても……『あの人』と同じなんだぞ！？）」

三人は揃って顔を青ざめると、

「きよ、今日の所は見逃してやらあ！」

「今度会ったらタダじゃおかねえ！」

「ケツ、あばよ！」

そんな捨て台詞を吐き捨てどこかに行ってしまった。それ、古いやり方だよ？ とイクスは言いたかったがあえて黙って見送った

「なんて言うか……。めっちゃめっちゃ陳腐な捨て台詞ね」

「まあ、ああいうのがお約束じゃないのかな？」

同じように思ったのか、エステル達も呆れている

「済まなかったね、君たち。街の者が迷惑をかけてしまった。申し遅れたが、私はルーアン市の市長を務めているダルモアという。こちらは、私の秘書を務めてくれているギルバード君だ」

「よろしく。君たちは遊撃士だそうだね？」

そこへダルモアとギルバードが話しかけてきた

「あ、ロレント地方から来た遊撃士のエステルっていいいます」

「同じくヨシユアといいいます」

「同じくイクスです」

簡単に挨拶をしておくエステル達

挨拶するに越したことはない

と、ダルモアはふと何かを思い出したようだ

「そういえば、受付のジャン君が有望な新人が来るようなことを言っていたが……。ひょっとして君たちのことかね？」

「えへへ……。有望かどうかは判らないけど」

「しばらく、ルーアン地方で働かせて貰おうと思っています」

「おお、それは助かるよ。今、色々大変な時期でね。君たちの力を借りることがあるかもしれないから、その時はよろしく頼むよ」

ダルモアは微笑みながら言う

「大変な時期……ですか？」

「まあ、詳しい話はジャン君から聞いてくれたまえ。ところで、そちらのお嬢さんは王立学園の生徒のようだが……」

先程から気になっていたのか、ダルモアはクローゼの方を見ながら訊ねる

「はい、王立学園2年生のクローゼ・リンツと申します。お初にお目にかかります」

「そうか、コリンズ学園長とは懇意にさせてもらっているよ。そういえば、ギルバード君も王立学園の卒業生だったね？」

「ええ、そうです。クローゼ君だったかい？ 君の噂は色々聞いているよ。生徒会長のジル君と一緒に主席の座を争っているそうだね。優秀な後輩がいて僕もOBとして鼻が高いよ」

「そんな……恐縮です」

「ははは、今度の学園祭は私も非常に楽しみにしている。どうか、頑張ってくれたまえ」

「はい、精一杯頑張ります」

ダルモアの言葉にクローゼも笑いながら頑張ると宣言する
そこで懐から銀時計を取り出し時間を確認すると、

「うむ、それじゃあ私たちはこれで失礼するよ。先ほどの連中が迷惑をかけたら私の所まで連絡してくれたまえ。ルーアン市長としてしかるべき対応をさせて頂こう」

そう言つて、ギルバードを伴い市長邸に去つていった

「うーん、何て言うかやたらと威厳がある人よね」

「確かに、立ち居振る舞いといい市長としての貫禄は充分だね」

「ダルモア家といえはかつての大貴族の家柄ですから。貴族制が廃止されたとはいえ、いまだに上流貴族の代表者と言われている方だ
そうです」

「ふーん……俺はクラウドのじーさんやメイベル市長の方がいいな。
気軽に話せるし」

「確かにそうだね」

クローゼの説明に色々感想を持つ

「ほえ……。なんか住む世界が違うわね。しかし、それにしても
ガラの悪い連中もいたもんね」

「そうですね。ちょっと驚いちゃいました。ごめんなさい、不用意
な場所に案内してしまつたみたいです」

「君が謝ることはないよ。ただ、わざわざ彼らを挑発に行く必要はなさそうだね。倉庫区画の一番奥を溜まり場にしていみたいだからなるべく近づかないようにしよう」

「ま、それが妥当だな」

「一先ず、見れる所は見えて回ったのでエステル達は一旦ギルドに戻ることにしたのだった」

蒼空語り

イクス

「うーっす。蒼空語り始まるぜ。……久し振りに一週間投稿できたな風花」

風花

「ええ、今回はかりはしなくちゃいけない勉強ほっぽって書きました。おかげで数学が判らなくなっちゃった」

イクス

「いや駄目だろう！ てめえの本分は勉強なんだから勉強は捨てるなよ！」

風花

「むう、うるさいなあ。日曜学校時代、いつも眠ってばっかで怒られてたイクスに言われる筋合いはないよ」だ」

イクス

「何で人の過去をここで曝露してんの!? 痛くも痒くもないけどさ!」

風花

「じゃあ質問に移ろっか」

イクス

「久し振りのスルー無視!? やっぱされると傷つくんだけど……」

風花

「それじゃあ早速 HN『ガイア』さんから『最新話読みました。』

風花さんヨシユアのお仕置き、きつかったですか?」

質問は、ミラに余裕があったら何買っていますか?」

次の本編、蒼空語り、楽しみにしています。』 当たり前ですよ あんちきしよおおおおおおお!」

お仕置きを思い出したのか震え上がりながら叫びだす風花
よほど恐かったらしい

イクス

「ははは んで……そうだな。基本は次の街まで腐らない程度の食材とか治療薬だな。それでも余った時は三人で分けて好きなように使わせてもらっぜ。ちなみに俺は調理関係や服飾関係の物だ」

ちなみにエステルやヨシユアに訊いてみると、

エステル

「そうねえ……持ってないストレガー社製のスニーカーがあったら迷わず買っわ!」

ヨシユア

「書物ですね」

という答えが返ってきた

イクス

「そんじゃあ次つっつーか最後。HN『漆黒の牙』さんから『お仕置きはいつたい何があったんだか。』

リ「分らんな。つかヨシユアの担当に笑ったな。」

レ「確かにね。それよりイクスが新しいレシピ覚えたね。」

リ「パエリアサンドだったっけ? うまいのか?」

知らん。しかしエステルが地味に魔王化したな。

リ&レ「あはははは(苦笑)。「」……あれ? 今回『漆黒

の牙』さんから質問は無かったよな?」

風花

「ああ、これは私が一応出したんだよ。イクスにパエリアサンドの効果を教えてもらいたいから」

イクス

「なるほどな。んじゃあ作り方とかは省いて、材料と食べた時の効果を下に書くか」

パエリアサンド

魔獣の甲殻	1
三色玄米	1
辛口アンチョビ	1
挽きたて小麦粉	2
フレッシュハーブ	1
できたてチーズ	1

【携帯】HP500

パンに固めたパエリアを挟んで食べる珍しい一品
冷めても美味しくいただけます

イクス

「こんな感じか？」

風花

「おー」

イクス

「とまあ、こんな感じで今回は終わるけど……ぶっちゃけ次回はこれぐらい早く出せるか？」

風花

「うーん……わからん」

イクス

「頼りないな……まあいいや。それじゃあ次回、また会おう」

風花

「see you again」

イクス

「間違えてないことを祈るよ」

第二章 く白き花のマドリガル memory…?

「いらっしやい。遊撃士協会へようこそ！ おや、クローゼ君じゃないか」

遊撃士協会に戻ってきたエステル達を出迎えたのは、カルナではなく受付の男性だった

男性はやってきたのがクローゼと知ると知り合いのように声をかける

「こんにちは、ジャンさん」

クローゼも知ったように挨拶を返す
ジャンとはこの男性らしい

「また、学園長の頼みで魔獣退治の依頼に来たのかい？ ああ、判った！ 学園祭の時の警備の依頼かな？」

「いえ、それはいずれ伺わせて頂くと思うんですけど。今日は、エステルさん達に付き合わせて貰っている最中なんです」

早合点するジャンに苦笑しながら今日来た理由を説明するクローゼ

「あれ、そういえば……。学園の生徒じゃなさそうだけど。……待てよ、その紋章は……」

クローゼの後ろから前に進んだエステルとヨシユア、イクスの三人は受付の前に立った

「初めまして。準遊撃士のエステルです」

「同じく準遊撃士のヨシユアです」

「もなずく準遊撃士のイクスヴェリアっす」

「ああ、君たちがエステル君とヨシユア君とイクス君か！ いや、ホント良く来てくれた！ ボース支部から連絡があつて今か今かと待ちかねていたんだ」

エステル達の名前を聞くと嬉しそくに感動の意を示すジャン
今にも飛び上がりそうな勢いだ

「そっか、ルグラン爺さん、ちゃんと連絡してくれたんだ」

「感謝しなくちゃね」

「あながと、じーさん。 よし、感謝終わり」

「あんたは早すぎ」

感謝と言つてここで感謝するイクスにツツコムエステル

「僕の名前はジャン。ルーアン支部の受付をしている。君たちの監督を含め、これから色々とサポートさせてもらうよ。2人とも、よろしくな」

ずれた眼鏡をくいと直しながらジャンは自己紹介と挨拶を一緒にする

「うん！ よろしくね、ジャンさん」

「よろしくお願いします」

「よろしく頼むぜ」

「はは、君たちには色々と期待しているよ。何といっても、あの空賊事件を見事解決した立役者だからな」

「空賊事件って……。あのボース地方で起きた？ 私、《リベール通信》の最新号で読んだばかりです。あれ、エステルさん達が解決なさったんですか？」

クローゼはかなり驚いている様子で訊ねてくる
だがエステルは苦笑しながら一応言っておく

「あはは、まさか……。手伝いをしただけだってば」

「実際に空賊を逮捕したのは王国軍の部隊だしね」

「謙遜することはない。ルグラン爺さんも誉めてたぞ。さ、さっそく転属手続きをするから書類にサインしてくれるかい？」

謙遜するなと言うジャンはテキパキと受付の下から書類を出した

「さあさあ、今すぐにも」

多少、強引そうに突き出すのは気のせいか

「う、うん……？」

「それでは早速」

「さらさらさらっと」

エステルとヨシユア、イクスは強引さに少し驚きながら出された転属手続きの書類にサインした

「うんうん、これで君たちもルーアン支部の所属というわけだ。いやあ、この忙しい時期によくルーアンに来てくれたよ。ふふ……もう逃がさないからね」

転入手続きの紙を確認しながらジャンは不気味に笑う
瞳の見えない眼鏡の奥で眼がきゅぴんと輝いたのは気のせいではないだろう

「な、なんかイヤな予感」

「ちょ、ちょい怖いんだけど……」

エステルとイクスは少し恐くなり一歩後ずさった

「先ほどから聞いてるとかなり人手不足みたいですね。何か事件でもあつたんですか？」

まったく動じてないヨシユアはそんな二人に代わり訊ねた

後ろで「ヨシユアすげー」などとデュエットしているのは気にしない

「事件という程じゃないけどね。実は今、王家の偉い人がこのルーアン市に来ているのさ」

「王家の偉い人……。も、もしかして女王様!？」

「はは、まさか。王族の1人であるのは間違いないそうだけどね。何でも、ルーアン市の視察にいらっしやっただとさ」

「へー、そんな人がいるんだ。でも、それがどうして人手不足に繋がっちゃうの？」

「何と言っても王家の一員だ。万が一の事があるといけないとダルモア市長がえらく心配してね。ルーアン市の警備を強化するよう依頼に来たんだよ」

「なるほど、先ほど2階で話し合っていた一件ですね。それにしても市街の警備ですか」

ヨシユアは納得したとばかりに頷く

「まあ、確かに港の方には跳ねっ返りの連中がいるからね。そちらの方に目を光らせて欲しいという事だろう」

「跳ねっ返りって……。さっき絡んできた連中のことね。うーん、確かにあいつら何かしでかしそうな感じかも」

「なんだ、知っているのかい？」

ジャンが不思議そうに尋ねる

実は、とエステル達は先ほどの出来事を簡単に説明した

「そうか……。倉庫区画の奥に行ったのか。あそこは《レイヴン》と名乗ってる不良グループのたまり場なんだ。君たちに絡んできた

のは、グループのリーダー格を務める青年たちだろう」

「《渡りカラス》^{レイサン}ねえ……。なーにをカッコつけてんだか」

呆れた様子のエステルは投げやりに言った

「少し前までは大人しかつたんだが最近、タガが緩んでるみたいだね。市長の心配ももつともなんだが、こちらら、地方全体をカバーしなくちゃならないんだ。とまあ、そんなワケで本当に人手不足で困っているね。君たちが来てくれて、感謝感激、雨あられなんだよ」

「あはは……。期待に沿えるといいけど。それじゃあ、明日からさっそく手伝わせてもらおうわ」

エステルが照れたながら頑張る旨を伝える

「何かあったら僕達に遠慮なく言いつけてください」

「あ、いや、きゅぴんは止めてな？ きゅぴんは」

「ああ、よろしく頼むよ！ ふふふ……。いつでもしてあげるよー。きゅぴん」

外に出たエステル達を待っていたのは、夕陽が照りつける港町夕陽が海に反射して、青とは違った美しさを出している

「わあ、もう夕方か……。すっごくキレイな夕陽ねえ！」

「この夕陽は格別だな。白い町並みに良く映えてる」

「ふふ、私も大好きです。そうだ……。そろそろだと思えますよ」

「ん？ 何がそろそろなんだ？」

イクスが聞き返したその時、ラングランド大橋がゆっくりと跳ね上がった

それに驚く三人

「はあく、なんていうか圧巻ね。あれ、どのくらいの間跳ね上がっているものなの？」

「30分くらいだと思います。早朝、昼前、夕方の3回、通る船が無くなるまでですね」

「なるほど、比較的人通りの少ない時間帯なんだな」

「ふふ、初めて来られた方は最初は戸惑われるみたいですけど。あ、そういえば……。エステルさん達は今夜の宿はどうされるんですか？」

今気づいたようにクローゼが訊ねる

それは考えていなかった

「うーん、ギルドの2階に泊まらせてもらう手もあるけど。やっぱり最初くらいは優雅にホテルに泊まりたいかも」

「だったら、急いで部屋を取った方がいいかもしれません。今は観光シーズンですからすぐに一杯になってしまうと思います」

「そうか……。だったら急いだ方が良いな。急ぐか」

「そうだね、ホテルに急ごう」

エステルの希望にイクスとヨシユアは賛成しルーアン入り口近くに
あったホテルに向かった

ホテル・ブランシエ

「いらつしやいませ。ホテル・ブランシエへようこそ。ご予約のお
客様でいらつしやいますか？」

受付の男性がマニュアル通りにエステル達に対応する

「うっん。そうじゃないんだけど……」

「今からでも部屋は取れますか？」

エステルとヨシユアは部屋が空いているかどうか訊ねる
すると男性は嬉しそうに微笑むと良い情報を伝えた

「お客様、いいタイミングでしたね。つい先ほど、最上階の部屋が
キャンセルされたばかりなんです。よろしかったら、そちらにご案
内しますが如何いかがでしょう？」

「最上階の部屋……。うーん、いいかもしれない」

「でも、最上階ともなるとかなりお高いんじゃないですか？」

「キャンセル空きですから通常料金と同じで構いません。それに拝見した所、お客様がたは遊撃士でいらっしやるご様子……。いつもお世話になっているのでサービスさせて頂きますよ」

男性はそう言った。遊撃士がこんな所で有利に働くとは思っても見なかったのでエステル達は喜び驚いた

「えへへ、そこまで言われたらお言葉に甘えちゃうしかないわね」

「それじゃあ、その部屋をお願いします」

「かしこまりました」

男性は頷くと受付の下から手続きの紙を取り出しさらさらと何かを記入していった

「ふふ、良かったですね。エステルさん、ヨシユアさん、イクスさん。それでは私、そろそろ学園の方に戻ろうかと思えます。急がないと、寮の門限に間に合いそうにないので……」

「あ、そっか。夕方までって言ってたよね。うーん……名残惜しいけど仕方ないか」

エステルが名残そうに呟いた
クローゼも「そうですね」と返す

「よかつたら学園まで送ろうか？」

「ああ、そうだな。魔獣が出ないとは限らねえし。どうするクローゼ？」

「ふふ、大丈夫です。通い慣れている道ですから。今日は付き合わせてもらってありがとうございます。お辞儀をしながらクローゼはお礼を言う

エステルはその言葉にぱたと手を振る

「えへへ、やだな。お礼を言うのはこっちだってば」

「そうだね。案内してくれてありがとう」

「今度何かあったら遠慮なく俺達に相談してくれ。絶対に力になるから」

「はい、その時にはぜひお願いします。そうだ、皆さんはしばらくルーアン地方にいるんですね？ よかったら、来週末にある学園祭にいらっしやいませんか？」

「「ガクエンサイ？」」

「名前から察するに何かの行事みたいだね」

エステルとイクスは異口同音し合いヨシユアは名前からそれを予想して訊ねた

ヨシユアの予想にクローゼは頷く

「ええ、学園側の許可を貰って、生徒が自主的に開くお祭りです。王立学園の伝統行事なんですよ」

「あ、そーいうのあたしメチャメチャ好きかも！ 出店とか演^だし物はあるの!？」

「ふふ、もちろんです。けっこう本格的なんですよ」

「行く行く、ぜーったい行く！ ていうか、あたしも一緒にお祭りの準備がしたいくらい!！」

予想だけの所もあるが聞いただけでもうノリノリのエステルちゃん
元気娘は祭りが大好きだ

「ちよいとエステルさんや。さつきギルドで、忙しくなるって聞いたばかりだぜ。遊べると思うか？」

「うっ。うっ、それがあつたか……」

イクスに言われ途端に気落ちするエステルちゃん
体力は多い割りに撃沈^{ダウン}は早い。その代わり、復活^{リスポーン}も早いのだ

「まあ、学園祭の当日だけならいい息抜きになると思うし……。それまでしっかり仕事しようね」

「ふあゝい」

「クスクス……。エステルさん、ヨシユアさん、イクスさん。それでは私、そろそろ失礼しますね。近いうちにまた……」

「うん、またね!！」

「気をつけて帰ってね」

「ん、また会おうぜ」

そうして、クローゼは学園に帰って行った

また会う時まで

だが……この時は誰も知らなかった。まさか再会があんなに早くに訪れよう等とは

「うーん、可憐な雰囲気なのに凜とした所もあつて頼もしい……。あたしが男だったら間違いなくホレちゃってるわね」

クローゼが見えなくなつてから品定めするような言い方をするエステル

その眼がどことなく酔っぱらつたおっさんに似ているとヨシユアとイクスは思った

「まあ、それはともかく……。何か企んでいそうな様子もないし、いい子であるのは確かみたいだね」

「そんな、どこぞの空賊娘じゃないんだから」

「と言いたいけどさ、俺達、現に騙されてんだ。疑うのは仕方ねえよ」

的確に判断したヨシユアにエステルがジョゼットの一件を思い出し、
眩く

イクスは仕方ないと首を振った

「でも、出会いには恵まれたし、最上階の良い部屋も取れたし……。

やっぱり、マノリアの展望台でジークを見たのがよかったのかも」

「はは、そうかもしれないね。……それじゃ、さっそく部屋に荷物を置いておつか？」

「おう、最上階だな」

「うわゝ、ひつろーい！」

三人の視線の先に広がっていたのは、三人で使用するにはもったいないくらい絢爛豪華な部屋だった。早速、部屋を見て回るエステル

「へえゝ、こつちが寢室なんだ」

「最上階で、しかもスイートか。通常料金で泊まらせてもらつのが申しわけなくなつてくるね」

「ま、せつかくの申し出だし、せいぜい堪能させてもらおうぜ」

ヨシユアとイクスもポーチや得物を立て掛けたり机に置きながら辺りを見渡す

バルコニー

「すごいな……。こんなバルコニーまであるんだ」

さすがのヨシユアもこれには驚きの声を上げる

「うん……。さすが絶景よね。でも確かに、あたし達だけで使うにはもったいない部屋かも……。……父さんも一緒だったら良かったのに」

「そうだな……。本当に……。どこで何をしてんだろうな」

エステルとヨシユア、イクスの顔が少しばかり翳ると、その時、部屋の中から声が聞こえた

「ほほう……。なかなか良い部屋ではないか」

少し高いが男性の声のようだ

「なに、今の？」

「うん、部屋の中から聞こえてきたみたいだけど……」

エステル達は気になりバルコニーから部屋に入った部屋には、

「それなりの広さだし調度もいい。うむ、気に入った。滞在中はここを使うことにする」

貴族風の服を纏ったいかにも『貴族』らしい男性が執事服を纏った

老人を伴っていた

ちなみに『貴族』らしいというのは、威厳とか物々しいとかいうわけではなく、体型や身に付けている装飾品の数々から判断した結果だ。体型は良いモン。この場合、身体に良いものではなく味や見た目重視の脂っこいものや甘いものを指す。を食べまくっているのだが運動と比例しないデ……ぽっちゃりとしている。加えて様々な七耀石の欠片セレスをふんだんに使った指輪や耳飾りを着けているからなのだ。
まあとってもいいが
閑話休題

「閣下、お待ちくださいませ。この部屋には既に利用客がいるとのこと……。予定通り、市長殿の屋敷に滞在なさってはいかがですか？」

老人がすでにエステル達に気付いているらしく、こちらをちらちらと見ながら焦って言っていた

「黙れ、フィリップ！ あそこは海が見えぬではないか。その点、この海沿いのホテルは景観もいいし潮風も爽やかだ。バルコニーにも出られるし……」

ぽっちゃりした男性は寝室を出て、バルコニーに向かおうとした。そこでエステルとヨシユア、イクスがいることに気付きぎよっと仰け反った

「な、なんだお前たちは！？ 賊か！？ 私の命を狙う賊なのか！？」

めちやくちゃだな、このおっさんとイクスは思ったが口には出さなかった

「何をいきなりトチ狂ったこと言ってるのよ。おじさん達こそ何者？ 勝手に部屋に入ってきたりして」

エステルが慄然とした様子で言った

「オ、オジサン呼ばわりするでない！ フン、まあよい……。お前たちがこの部屋の利用客か？ ここは私が、ルーアン滞在中のプライベートルームとして使用する。とっとと出て行くが良い」

過去初めての自己中心的発言炸裂！？ どんな自己チューなおっさんだよ！

イクスは心の中でツツコミを入れておいた

「はあ？ 言ってることがゼンゼン判らないんですけど。どうして、あたしたちが部屋を出て行かなくちゃならないわけ？」

「事情をお伺いしたいですね」

エステルとヨシユアが警戒しながら訊ねた。イクスは黙って心の中でツツコミを入れる事にした

「フツ、これだから無知蒙昧な庶民は困るのだ……。この私が誰だか判らぬというのか？」

自信たっぷり背を反るぽっちゃりした男性

ちなみに反っても威厳はまったくくない。むしろ腹の辺りの服が今にも破れそうだった

「うん、全然。なんか変なアタマをしたおじさんにしか見えないん

「だけど」

「ぶふっ！」

だがエステルはその自信をいとも簡単に粉々にした
アタマとは髪型のことか、それとも中身のことか？
イクスはツッコミを入れながら吹き出し床に蹲すくまった

「へ、変なアタマだと……！」

「エステル……。いくら何でもそれは失礼だよ。個性的とか言っ
てあげなくちゃ」

「なるほど、物は言いようね」

「ふっ、あははははは！ い、言ってる！ へ、変なアタマ……。ぶ
はははははははははは！！」

イクスは笑いすぎだということさえ気付かず思い切り大爆笑してい
たよほど笑えるのか涙さえ浮かべてる

「ぐぬぬぬぬ……。フッ、まあ良い。耳をかつぽじって聞くが良い。
……私の名は、デユナン・フォン・アウスレーゼ！ リベール国主、
アリシア女王陛下の甥にして公爵位を授けられし者である！」

威厳たっぷり（ないけど）に言ったぽっちやりした男性

「……………」

「……………」

「う、う、こやつら……」

「……誠に失礼ながら閣下の仰ることは真実です」

と、後ろに控えていたフィリップと呼ばれていた老人が口を挟む

「え……」

その静かな言葉にエステル達は笑うのを止めた

「これは申し遅れました。わたくし、公爵閣下のお世話をさせて頂いているフィリップと申す者……。閣下がお生まれになった時からお世話をさせて頂いております」

フィリップは恭しくお辞儀をしながら名乗り上げる

「は、はあ……」

「そのわたくしの名誉に賭けてしかと、保証させて頂きます。こちらにおわす方はデュナン公爵……。正真正銘、陛下の甥御にあたられます」

フィリップは断言する。このぼっちゃりは間違いなく女王陛下の甥である

「（し、信じられないけど……。そのオジサンはともかく、あの執事さんはホンモノだわ）」

「（そういえばジャンさんが言ってたね……。ルーアンを視察に来ている王族の人がいるって……）」

「（おいおい、嘘だろ。その王族の人間がこんなおっさんなんて！）」

三人で驚きながらひそひそと話し合う

「ふはは、参ったか！ 次期国王に定められたこの私に部屋を譲る栄誉をくれてやるのだ。このような機会、滅多にあるものではないぞ！」

人の気も知らずデユナンはがははと逆に笑う
さすがにかちんと来るエステル

「ふ、ふざけないでよね！ いくら王族だからといっておじさんみたいな横柄な……」

そこまでエステルが言ったその時、

「あいや、お嬢様がた！ どうかお待ちくださいませ！」

慌ててフィリップが駆けつけてエステルを制した

「え？」

「しばしお耳を拝借……」

フィリップはデユナンに聞こえないように壁際までエステル達を誘導すると何故か頼み込んできた

「失礼ながら、お嬢様がたにお願いしたき儀がございます。これで

部屋をお譲り頂けませぬか？」

フィリップは、札束になったミラを懐から取り出して差し出した

「し、執事さん……」

「何もそこまで……」

「……………」

「閣下は一度言い出したらテコでも動かない御方……。それもこれも、閣下をお育てしたわたくしめの不徳の致すところ……。どうか、どうか……」

フィリップは、土下座せんばかりの勢いでエステル達に頭を下げてきた

面食らうエステル達

「ふう、仕方ないか……。あんまり執事さんを困らせるわけにもいかないし」

「部屋はお譲りします。ただ、そのミラは受け取れません」

「し、しかしそれでは……」

「いいっていいって あたしたちにはちょっと豪華すぎる部屋だし。あのおじさんのお守り大変とは思っけど頑張っつてね」

「お、お嬢様がた……。どうも有り難うございます」

フィリップはエステル達の優しさに深々と頭を下げた

「こら、私をのけ者にして何をコソコソ喋っているのだ？」

「別になぐんにも」

「どうもお騒がせしました。部屋は公爵閣下にお譲りします」

「おお、そうか！ わはは、最初から素直にそう言えばいいのだ
その謙虚な心がけをこれからも忘れるでないぞ」

「ちっ……………」

イクスは調子の良いデュナンの言葉に小さく舌打ちを打つ

「まったくもっ……………」

疲れた顔をするエステル
ため息の一つや二つ、吐きたい気分だった

「それでは失礼します」

エステルとヨシユアは部屋を後にしようとする
だが、イクスだけは動こうとしない

「イクス？」

「……………悪い、すぐ行く。先に行つててくれ」

「……………？？」

エステルは首を傾げたがヨシユアが促し「待つてるからね」と言っ
て下に降りていった

「何だ？ まだ何か用があるのか？ さっさと出ていくがよい」

「……………せえよ」

「？」

「うるせえつつつてんだよクソ野郎」

実はイクス、我慢してたのだ

あまりにも自己チューな振る舞いや発言に我慢できなくなっていた

「な……………無礼であろう！ 私は次期国王……………」

「嘘だ。^{ダウト}次期国王と誰が決めた。てめえはまだ次期国王『候補』だ
ろう。いくら王族でもな、好き勝手やってんじゃねえよ。次やつて
たら」

全力全開でぶち殺すぞ

本気の怒りをデュナンに叩き付けて部屋を出ていくイクス

デュナンはへなへなと座り込んでしまう

フィリップは怒らせてしまった事に心の中で謝罪をしながらデュナ
ンを起き上がらせるのだった

「ふふ、繕つくろいものが多いのは元気な子が多い証拠かしら……。さてと、そろそろ休みますか」

所は変わりここはエステル達が昼に立ち寄ったマーシア孤児院リビングではテレサが微笑を浮かべながら子供達の服を繕つくろっていた。それが終わると裁縫道具を片付け服を畳み眼を閉じた

「女神エイドスよ、あの子たちに健やかなる明日を与えたまえ」

と、ここで少し人間の身体について話そうと思う

人間の身体は様々な学者や医師が研究を続けているが、未だに分からないことが多い。例えば視力を失った者はよく『遠くの音が聴こえるようになった』と言う。これは失った視力の代わりに耳が活性化され聞こえやすくなると言われている。逆に聴力を失った者は視力が良くなったと言われる

人間とは凄い生き物だ

さて 結局、何が言いたかったのかと言うと

眼を閉じたテレサはわずかだが耳に力が入り聞き取れてしまった
薪をくべたようなパチパチという音が
薪を燃やしたかのような焦げる臭いが

「!」

「みんな、起きて!」

テレサは火事だと分かると一目散に二階の子供達の寝室に駆けつけた

「わわわっ……。ゴメン、もうしませんっ！」

真っ先にクラムが跳ね起きた。どうやら夢とごっちゃになっているようだ

「……………あれ？」

寝ぼけていたことに気が付くと辺りを見渡す

「クラムったら……。なに寝ぼけてんのよう」

「ポーリイ、ダニエル！ 早く起きなさい！」

「うみゅ〜……………」

「どうしたのぉ……。先生、ちょっとコワイよう」

テレサの普段出さない鋭い声にポーリイとダニエルも眠そうに起き上がる

「……………火事です！」

「え」

「ほ、ほんと!?!」

「1階に降りますよ！ 慌てず、大急ぎで先生に付いて来なさい！」

1階に降りたときは既に火の手があちこちに飛んでいた。火は容赦なく五人の行く手を阻んでいる

「わわっ、なんだコレ！」

「けほけほ、煙くさ〜い」

「こ、こわいよ〜!」

「うみゆ〜……。まだねむい〜……」

クラム、マリイ、ダニエルは驚き、怖がっていたが、ポーリイだけはまだ頭が覚醒しておらず呑気な事を言っていた

「さあ、みんな出口に急いで!」

テレサは素早く出口に向かって走った
だがその時、
屋根の梁が落下してきて出口を塞いでしまった

「わああっ!」

「きゃあああっ」

「そ、そんな……。ああ、女神よ!^{エイドス}どうかこの子たちだけでも……」

テレサはなす術もなく、ただ祈るだけ
そして

躍り狂う炎は……

蒼空語り

イクス

「はい始めりました蒼空語り！ 司会は俺が」

エステル

「アシスタントはまだあたしがやります」

イクス

「残念だったな風花。一週間投稿が出来なくて。……よし、シメよう」

エステル

「ちよつと待ったあああああ！ いくら一週間投稿が出来なくてもこれ書いているの八分過ぎた頃に出上がったのよ。それぐらいいいじゃない！」

イクス

「甘い！ 甘いぞエステル。そんな風に甘やかしているから風花は遅れるんだ。ここはビシツと……。あー、ごめん、やっぱめんどい。質問に移ろっか」

エステル

「おいしいおいしい！！ 中途半端に終わったんですけど！！？
なんかそれすごく腹立つんですけど！！！！？」

イクス

「別にいいじゃんよ、別に。 んじゃあいくぞお。HN『空牙

刹那』さんから』質問」

・風花は女の子？男の娘？

・イクスって女装させるとしたら何が似合いそうかな？（奇跡シリーズの女性陣（全員）に聞いてみた

・イクスって劇の時キスシーンやるの？主にクローゼと（笑）…
…問一は後回しにして問二からはマジで軌跡キャラ全員に聞くぞ」

エステル

「もう滅茶苦茶ね。 ……そうね、着物かしら」

シエラザード

「エステルみたいな運動着」

ジヨゼット

「し、知らないよ！ あんな奴の事なんか！」

クローゼ

「ヘアピースを着けドレスなんかどうでしょう」

テイータ

「え、えっと……エステルお姉ちゃんと同じ着物が似合うと思うな
（ドキドキ）」

アネラス

「猫耳とかにくきゅうスリッパのパジャマなんてどう?」

ユリア

「む、すまないがそういうのには疎いのだ」

ドロシー

「魔女っ娘なんてどうかな」

リース

「……修道衣はどうかと」

レン

「くすくす……イクスは魔法少女の服を着てもらいたいわ」

イクス

「………………。はい、ありがとうございます。問三については考えてないと思っぜ。俺はどっちかつーと、服飾とかの裏方だから」

そして問一の答えとして風花は

風花

「ふふ、どっちなんでしょうね。いつか分かる時が来るかもしれませんが」

ぼかしていた

イクス

「結局風花は性別秘密なんだよな。……よし、殴っとけ」

エステル

「理不尽だよね！」

イクス

「ま、それは後にして……次回はヨシユアにアシスタントをしても
らいます」

エステル

「やっと交代ね……それじゃあまたね！」

第二章　く白き花のマドリガル　memory:?

「今……なんつった……？」

イクスは受付で内容が書かれているらしき紙を見ているジャンを見ながら呆然と呟いた

いや、イクスだけではない。エステルもヨシユアもだ

昨日

部屋から出ていった（追い出された）エステルとヨシユアは受付の男性に事情を説明して別の部屋を借りようと頼んだのだが、生憎他全ての部屋は、借りられてしまっていると言われてしまった。こちらとしても何とかしたい男性とエステル達が悩んでいたら、思わぬ所で助け船が出た

なんと、休暇を利用してバカンスを楽しもうとルーアンにやって来ていたナイアルだった

ナイアルは事情を聞くとスクープをモノにすることが出来たお礼と《リベール通信》がバカ売れした事によってたんまりと上司から貰ったボーナスの太っ腹さも兼ねてエステル達を自分が泊まっている部屋に泊めてあげたのだ

その誘いがありがたく乗せてもらおうエステル。男性もホテル側から夕食はタダにしようと言言した

二人は最初断ろうとしたが男性の「これぐらいしなくては我がホテルの名が廃ります！」と鬼気迫る勢いで言われ、また頭を下げたと、そこでイクスがやって来てから四人で宴会さながらの夕食を取ったのだった

翌日、酒の飲み過ぎで二日酔いを起こしかけているナイアルと別れたエステル達はギルドに向かうと、ジャンから報告があった

これが冒頭のイクスの一言に繋がる

「だから今さつきマノリア村から、連絡が入ったんだ。昨夜、メーヴェ海岸沿いで火災があった。出火元はマーシア孤児院らしいって」

「っ」

「向こうの通信機の状態が悪くてね、状況があまりつかめていないんだ。火元の居住者の安否もまだ……」

「っ!」

そこまで聞いたイクスは、突然踵を返し扉に近付くとバキィッ!!

蹴りの一撃の下、扉を蹴り壊しながら外に飛び出した
それを見てエステルも同様に駆け出す

「ジャンさん！協会に連絡があったということは、火災の調査を依頼されたと受け取っていいでしょうか？」

ヨシユアだけが焦る気持ちを抑えながら依頼として受ける
ジャンは「君達に頼めるかい？」と言いながら無言で頷く
行きなさいという合図だったのだろう。ヨシユアはい、と返すと
先に行ったエステル達を追いかけるために飛び出していった
一人残ったジャンは紙をしまうと、

「まずは……扉を直すかな……」

ぽつりと呟くのだった

「……うん。モチのロンよ！」

怒りも嘆きも今は必要ない

あるのは、遊撃士としてできることをする事

だから二人は素直にヨシユアの言葉を聞き、調査を
時間の経過と共に見つけにくくなる手掛かりを

「まず、出火場所なんだけど……。どうやら建物の中じゃなさそう
だ。屋外の可能性が高いと思う」

「屋外？」

「うん、こっちだ」

ヨシユアが扉付近、右側の石壁に近付く
そこで指を差す

「……ちようどこの辺りから建物全体に火が回ったんだろう」

「あ……。石壁が崩れ落ちちゃった場所ね。でも、どうしてここが
出火場所だつてわかるの？」

「地面の焦げ方が他の場所よりも激しいからだよ。周りで見比べれ
ば判るはずさ」

そう言われ周りを見渡す。確かにその付近の地面だけが他より黒く
なっている

「あ、ほんとだ……」

「建物外部の、この場所から火が広がったという事実……。これが何を意味するかわかるかい？」

「おい、それは……」

「まさか……」

二人も答えが見つかったのか、嘘であつて欲しいと願いながらヨシユアを見る

ヨシユアが頷いた時だった

「 エステルさん！ ヨシユアさん！ イクスさん！」

三人が振り向くと、そこにはクローゼがエステル達と同じように息を切らせて走つて来た

「クローゼさん！」

「はあっ……こっ、孤児院が……んくっ、火事になったと聞いて……はっ……」

両手を膝に置きながら息を整える

「あたし達も今朝、協会で聞いて飛んできたの。でも……まだ……孤児院の安否が分からなくて……」

エステルがクローゼの呼吸が落ち着く間にこちらの情報を提示して

おく
落ち着いてきたクローゼは、最後に廃墟となってしまった孤児院を
見つめてからエステルに笑顔を向けた

「みんなは……全員無事だそうです。ここにいなければ……たぶん
連絡をくださったマノリア村の宿屋に……」

その言葉にやっとエステル達に安堵と笑顔が戻る
そうと分かれば、エステル達は疲れているクローゼのために走らず
早足でマノリア村に向かった

マノリア村に着いたエステル達はすぐさま宿屋に入る
そこは昨日、お昼を買った酒場でもあった

「おっちゃん！」

「ん？ おお、君は昨日の。どうした？」

料理を習ったイクスは男性に話し掛けると、遊撃士手帳を取り出した
「へ……？」

「遊撃協会の者だ。昨晚の火災で家族が来ていないか？」

「あ、ああ……来てるよ。今は二階にいるはずだ」

イクスが遊撃士だった事に驚きながら男性は指を差しながら場所を

教える

イクスはお礼を言うとクローゼにちらつと目配せした。頷いたクローゼは急いで階段を駆け上がり、彼らがいる部屋の扉をバンツと開けた

中にはテレサ、マリイ、ポーリイ、ダニエル、クラムがいた

「く、クローゼお姉ちゃん……!？」

全員がクローゼの事に気付くと張り詰めていた線が瓦解したのだから。クラム以外の皆がいつぺんに泣き出しながらクローゼに抱き着いた

それを見てクローゼも三人を包み込むように抱き締める

だが、次の瞬間には笑顔になって顔をあげていた

「みんな、そんなに泣いちゃってどうしたの？」

抱き締めながら訊ねる

子供達は口々にクローゼに言う。「恐かった」、「熱くて真っ赤」、「大きな音すごいのー」などと。クローゼは一人一人の言葉に頷きながら聞いていく

聞き終わると

「……でも、大丈夫。もう何も心配いらないよ」

花が咲くような美しい笑みを浮かべた

「あのね……みんな聞いて？ 来週末に学園祭があるのは知ってるよね？ 実は私、その学園祭で演劇の主演をやる事に決まったの」

「主演……?」

「あ……でも困ったわ。学園祭はとっても楽しいお祭りだから、そんな悲しい顔をしてる子を学園に入れてもらえないかも……」

困ったような顔をするクローゼに三人が泣き止む
それから眼をごしごしとこすった

「私はみんなのために一生懸命演じるつもりよ。みんなは私の劇を……見に来てくれるかしら？」

「うん！」「」

笑顔で頷く三人

そっかどクローゼは返すとポーリィとダニエルの手を握りながら立ち上がった

「それより私、お腹ぺこへこのの。みんなも何か食べたくない？」

「あつと、なら俺が作るよクローゼ」

「本当ですか？　じゃあみんなで行こうか」

そう言っつて子供達と下に降りていくクローゼ

イクスはエステルとヨシユアに近付くと、

「（報告は頼むぜエステル、ヨシユア）」

「（モチのロンよ。イクスはうんと美味しい料理を食べさせてあげなさい）」

「（こっちは任せて）」

報告をエステルとヨシユアに任せて下に降りていった

「良いお子さんばかりですね」

「ええ……ふふ、良い子に恵まれて私は本当に幸せ者です……。それで、調査に来たんですね。どうぞ、何なりと聞いてください」

「ご協力、感謝します」

「えっと、それじゃあ……」

エステル達はテレサに先ほどの調査の結果を伝えるはつきり言っただが、伝えた方がいい

「火災現場を調査した結果なんですが……。何者かによる放火の可能性が極めて高いことが判明しました」

「そうですね……。やはり。火には気を付けていたのでおかしいとは思っていたのですが」

「そこでお聞きしますけど……。犯人には心当たりはありませんか？ こっついう事をしそうな動機があるという意味ですけど」

ヨシユアは訊ねるがテレサはすぐに横に振る

「……見当もつきません……。ミラにも余裕はありませんし恨まれる覚えもまったくない……。あの方は関係ないでしょうし……」

「あの方？」

「火に包まれた建物から私たちが脱出しようとした時……。天井の梁^{はり}が落ちてきて、玄関から出られなくなってしまうんです。ですがその時、扉を破って助けにきてくれた方がいて……。梁^{はり}をどけて私と子供たちが逃げるのを助けて下さったんです。象牙色のコートを纏った20代半ばぐらいの男性で、イクスさんのような見事な銀髪をなさってました」

自分達を助け出してくれた男の特徴を説明してるとき、ヨシユアはえ、という顔をした。だが誰も気付かない

「でも、人を呼んでくると言っただけでいなくなってしまうって……マノリアの方々に聞いたのですが、誰も心当たりはないそうです」

「銀髪……。イクスは違うし、男性だからシエラ姉なわけないわよね。でも助けてくれたんだし……。犯人の線は薄いかしら……。？　ね、ヨシユア？」

「……………」

だが何故かヨシユアは反応しない

「ヨシユア！」

「っ……………あ、ああ、そうだね」

は、と我に返ったヨシユアは頷いた。が、エステルがテレサに声をかけている間もヨシユアは悩むような顔をしていたのだった

その日は導力通信を借りジャンに一日こちらに入ると伝えた。ジャンは構わないよ、と疲れた様子ながらも言ってくれた。閑話だが、ジャンが疲れていた理由はもちろんイクスがぶち壊した扉の修理をしていたからである

短い閑話休題

「……………」

その日の夜

学校に一日休んで構わないと言われたクローゼは残骸となったマーシア孤児院の前にいた

しばらく放心したようにぼうつと見ていると、

「クローゼ」

その声をかけられた

振り向くとそこには、導力灯を持ったテレサが歩いてきていた

「テレサ先生……………」

「いつまでもこんな所に入ると風邪をひいてしまいますよ」

「……………」

クローゼは微笑を浮かべながら視線をテレサから孤児院に戻す

「でも……………私はここが大好きなんです。ジョセフおじさんとテレサ

先生と　一緒に過ごしたこの場所で……私は、初めて家族の暖かさを知ることができました」

微笑が張り付いた顔はだんだんと俯き、笑顔がなくなってくる
しかしクローゼは言葉を繋げた

「ここは……マールシア孤児院は、私にとって思い出が一杯つまった
……とても、とても大切な場所だったんです……」

嗚咽を隠すために口を隠す

涙を流すまいと思いつつもぼろぼろ流れ落ちてしまう

「なのに……どうして？　どうして……こんな事に……」

崩れ落ちそうなクローゼの肩をテレサが優しく持つ
どうしてこうなってしまったのだろう
問うても問うても分からなかった……

クラムは普段では考えられないほど早く眼を覚ました
いや、本当は寝てなどいない。眠れないのだ
自分達の家が燃え、自分達を励ましてくれたクローゼの涙を見てしまった
昔から決めていた

家は、家族は、オイラ自分が守るんだ
と

だが結果はどうだ。何一つ守れないばかりか、失ってしまった

何が守るだ。肝心な時にオイラは守られてるじゃないか……！

クラムは眠れず、下に向かっていると話し声が聞こえてきた。エステルとヨシユア。イクスとクローゼ。そしてテレサだと分かる。それをクラムは思わず隠れるように身を潜めながら聞き耳を立ててしまった

「それから、火災の犯人の件なのですが……」

「あの……そのことなんですけれど……あの火事は本当に」

放火……なんででしょうか？

え？

「……テレサ先生に失火の心当たりがなければ……十中八九、間違いないと思います」

「でも……あの孤児院を燃やして、一体誰が何の得になるといえるでしょうか。……いいえ、そんなことより」

そう訴えかけるテレサの声はぐさりぐさりとクラムの心に突き刺さっていく

クラムにはテレサが見えないが……いや、見えないから泣いているように思えてきた

「あの火事で……あの子どもは、天に召されてしまうところでした。そんな……恐ろしいことをするような人がいるなんて……私には、とても……信じられないんです……」

「テレサ先生……」

「すみません。話の腰を折ってしまいましたね……」

「……強盗などの犯罪とは違って、放火の場合は犯人に明確な動機がないこともありますから……」

「愉快犯、ということですか？」

「その可能性もあるいは……ですが、もう少し手掛かりが欲しいところですね……」

と、そこまで言った時だった

カランと軽快な鐘の音を立てながら扉が開いた

「お邪魔するよ」

そう言って入ってきたのは、以前街で会ったルーアン市長・ダルモアと秘書のギルバートだった

「お久しぶりだ、テレサ院長。ご無事で本当に良かった」

「ありがとうございます、市長。お忙しい中を、わざわざ訪ねてくださって恐縮です」

「いや、これも地方を統括する市長の勤めというものだからね。それよりも、誰だか知らんが許しがたい所業もあつたものだ。ジョセフのやつが愛していた建物が、あんなにも無残に……。心中、お察し申し上げます」

ダルモアが何か不自由ないかね、と訊ねるとテレサはいいえ、と返す

「いえ……。子供たちが助かったのであればあの人も許してくれる

と思います。遺品が燃えてしまったのが唯一の心残りですけど……」

「テレサ先生……」

「遊撃士諸君。犯人の目処はつきそうかね？」

ダルモアはそうかと言ってからエステル達に向き直って真剣な表情で訊ねた

「調査を始めたばかりですから確かな事は言えませんが……。ひよつとしたら愉快犯の可能性もあります」

簡単にだがまとまっている情報を報告するヨシユア

「まだ分かってなくてごめんなさい……。ギルバートさんは犯人に心当たりはあるかしら？」

「ん？ 心当たりか……。こんなことしかすのはあいつらぐらいしか……」

「あいつらって誰……!？」

「ほら、君達も絡まれたらどう？ ルーアンの倉庫区画にたむろしている《レイヴン》どもだよ!」

レイヴン……

その声は誰にも何にも届かない
だが呟かれた

「昨日　いや、もう二日前か　もそうだったが……。奴ら、いつも市長に楯突いて面倒ばかり起こしているんだ。市長に迷惑をかけることを楽しんでるフシもある。だから市長が懇意にしているこちらの院長先生に……」

「憶測で決め付けんじゃないよ！」

ギルバートが推測で犯人を決め付けようとした言葉にイクスがスタッフを突き付けながら怒鳴った

「ひっ!？」

「真実は言葉にした瞬間から疑わしくなる。てめえは不良というだけで冤罪を被せようとしてるかもしれないだぞ!?　んなもん言葉だけなら後で理由を付けるだけで俺達や市長を犯罪者にすることができるんだ。もちろん言葉だけならテレサ先生だって怪しくなる。理由はそうだな……古くなった家を新しく建てかえるってのはどうだ」

「イクスッ!！」

ふざけた事を言うイクスに今度はエステルが怒鳴る
イクスはふん、と鼻を鳴らしてスタッフを下ろした

「彼の言う通りだよギルバート君。言葉だけなら私達だって犯人に仕立てあげる事が出来る。滅多な事を口にするのはやめたまえ」

「も、申し訳ありませんでした……」

ギルバートは謝ると一歩下がる

イクスはやれやれといった様子で残っていた眠気覚まし用のコーヒ
ーを一息に煽るのだった

「なんと……酷いことだ……ジョセフの奴があんなにも愛していた
場所が……」

日も昇り始めてきた頃、ダルモアは先ほどのメンバー全員でマーシ
ア孤児院に来ていた
あまりにも酷い光景に悲しそうな表情を浮かべる

「テレサ院長……今、こういう事を聞くのは心苦しいのだが……貴
女がたはこれからどうなさるおつもりだね？」

「……………。…………。いちまでも白の木蓮亭に居座って迷惑を掛け続け
るわけにはいきません。でも……再建などとても望めず……正直、
困り果てています……」

そうかと仰ぎながら呟く
しばらく静寂が包み込んでいたが、またダルモアがそういえば、と
静寂を切り裂いた

「ギルバート君。王都の屋敷は今、どんな状況かね？」

「は？ 現状のままですが……」

「？」

「ああ、こんな時に失礼。いや、実はね……王都グランセルに我がダルモア家の別邸があるのだが、長いことそこが空き家同然になっていてね。そこで少し前からその屋敷に入居する形で管理をお任せできる人を探しているのだよ」

「……………！」

「もちろん家族全員で住み込んでくれて結構。もともと使っていない家だから管理人の自由にしてくれて構わないのだが……」

それを聞いてテレサは口元を押さえる

きつと　それは本当に『少し前』だったのだろう

きつと　知人の妻の家が無くなってしまった頃だったのだろう

「市長……………」

「どうだろうテレサ院長。どなたか、いい人をご存知ないだろうか？　もし、引き受けてくれる方がいたら気軽に申し出てください……伝えていただきたい」

それを最後にダルモアはギルバートを引き連れてルーアンに戻っていった

深々と頭を下げるテレサ

「……………。……………ヨシユア、イクス」

「うん」

「犯人探しと洒落込みますかね」

こちらの事は当人に任せの方がいいと判断した三人は犯人探しに集中する事に決めたと、その時

「……ちょ……せい……院長先生ーっ!!」

大声でテレサに呼び掛けてきた人物が現れた
全員が振り返ると、マリイが息も絶え絶えに走ってきた

「まあマリイ。どうしたの？ そんなに慌てて……」

「クラムが……クラムがいなくなっちゃった!」

「クラムがまた?」

「違うの!いつもの事なんだけど違うの!」

何が違うのか

マリイは欲しがっている空気を吸い込むと話し出した

「あいつ……何かぶるぶる震えて、真っ赤な顔して……『絶対に許さない』って叫んで飛び出して行っちゃったの!」

「」「」「」「」「」

「あの……馬鹿ッ、あそこの部分だけ聞いてやがったな……!」

イクスは馬鹿と吐き捨てる

テレサに至っては抱き着いてきたマリイを抱き止めながら顔面蒼白

になっていた

つまりクラムはギルバートの話を聞いて《レイヴン》がやったと勘違いしたのだろう。そして 乗り込んだ

「ま、まだ……間に合う……急いで行けば、まだ間に合うはずよ！」

エステルは叫びながら駆け出す

ヨシユアもイクスもクローゼも同じく走り出す

その時、四人は見逃さなかった

残る二人の内、一人が……

蒼空語り

イクス

「ういっす、始めました蒼空語り。司会は俺、イクスが」

ヨシユア

「アシスタントは僕、ヨシユアが勤めさせていただきます」

イクス

「やーっと、半分近くまで来たな、第二章も。最近は一週間投稿が守られて気分もいいな」

ヨシユア

「そうだね。それに物語全章から見ても半分近くまで来た。何とか

連載二周年目に続編が書かれる事を期待したいよ」

イクス

「それは天のみぞ知るってな。……次回はあれか。面倒くさい」

ヨシユア

「そんな事言わないの。……ちなみに風花から報告が来てるんだけど、君……今回、どの章よりも多くキレるみたいだよ」

イクス

「おいおい、マジかよ。全力全開で否定してえんだが……もうすでにキレちまつてるんだよなあ……ふう、よし、んじゃあ気分変えるために質問に移るか」

ヨシユア

「残念だけど……一つもないよ」

イクス

「ずるべしいっ！……何だよ！何でエステル以外のキャラがアシスタントする時に必ずと言って言いほど質問が来ないの!？」

ヨシユア

「知らないって……都市伝説ならぬ蒼空伝説だね」

イクス

「うまく言っなや。本気で納得しちまいそうになっただぞ」

ヨシユア

「そうか。……じゃあこれで終わりにするか」

イクス

「はあ、しゃあねえ……質問がなけりゃああんまり長くは続かないんだもんな。うし……それじゃあ」

ヨシユア

「うん、次回もお楽しみに」

第二章 く白き花のマドリガル memory…?

エステル、ヨシユア、イクス、クローゼの四人は、マーシア孤児院から休みなしで走り続けていた

マリイからクラムが消えたと聞き、向かった先はある程度推測がついている

それすなわち ルーアン南街区、倉庫区画最奥

「まさか一人で連中の所に乗り込むなんて……！」

「どれだけ馬鹿真面目かつ猪突猛進なんだよ！」
エステルタイプ

ヨシユアとイクスは愚痴りながら先に行く

「無事でいてクラム君……！」

クローゼは願いながら

ルーアンに着いた四人。だが、クラムの姿はない

もう乗り込んでしまったのか、という不安がよぎりながらラングランド大橋に向かう

そして いた

「ああ、クラム君、待って！」

クローゼの大声もその時に鳴り響いた鐘の音により遮られてしまう

「しまった。もう昼前か……！」

「ちいっ！ エステルッ！ ヨシユアッ！」

「あたしは構わないわよ！」

「僕も。でも、彼女はどうするんだい？」

イクスが名前を呼び、何をするか察した二人
ヨシユアにどうするか訊ねられたイクスは迷わず、

「俺が運ぶっ！ 行けっ！！」

「きゃあっ！？」

クローゼを俗にお姫様抱っこで抱き抱えた
しかしスピードはまるで落ちていない。むしろ 加速している

「い、イクスさん！ 何をするつもりですか？」

「翔ぶ！」

「はい！？」

「掴まってるよクローゼ！」

そして

二人と一人を抱えた一人は、跳ね上がっているラングランド大橋を
駆け抜け、全力で跳んだ

「~~~~ツ！？！？」

無茶苦茶危ない事をする三人に驚きながら、クローゼはイクスの腕

の中で身を固くした

しばらくは浮遊感が続いたが、すぐにドン！ と、衝撃が走った

「いつつ……エステル、ヨシユア、クローゼ、無事か？」

着地の衝撃で痺れた足にしかめながらイクスはクローゼを下ろして
訊ねる

「だ、大丈夫よ」

「こつちも……。でも、二度とやりたくはないね」

エステルとヨシユアも痛む足を抑えて苦笑している

「な、何て無茶を……」

「無茶でも苦茶でもいいんだよ。それより急ぐぞ」

イクスは屈伸を二回して痺れを消してから催促した

それに反論できないクローゼはため息を吐きながらも頷き、奥へと
向かった

「……とぼけるなよ！ お前たちがやったんだろ！？ ぜったいに
許さないからなっ！」

そこは倉庫区画最奥。《レイヴン》の溜まり場の一際大きい廃倉庫
クラムはそこでレイヴンのメンバー達に有らん限りに叫び怒鳴る

その怒声をメンバー全員は呆れ顔や不機嫌顔で聞いていた

「なに言ってるんだ、このガキは？」

「コラ、ここはお前みたいなお子ちゃまが来るとこじゃねえぞ。とつとと家に帰って母ちゃんのオツパイでも飲んでな」

「ひやはは、そいつはいいや！」

幹部の、そして以前エステル達に絡んできたロッコ、デイン、レイスがクラムをせせら笑う

「うつつ……母ちゃんが居ないからってバカにすんなよっ！ オイラには先生っていう母ちゃんがいるんだからなっ！ その先生の大切な家をよくも、よくも、よくもおっ！」

顔を俯かせ、泣きそうな思いを怒りに変え、ロッコ達に走り出す

「うつつうつつ……。わあああああああっ！」

「な、なんだ……？」

「このガキ……なにブチギレてんだあ？」

あまりの行動にさらに呆れるロッコ達

「ちっ……」

ロッコは面倒くさそうに舌打ちするとクラムを組んでいた足でいとも簡単に蹴り飛ばした

「あつっ……！」

成長しきっていない不完全な身体はいとも簡単に吹き飛ばされてしまっ

蹲り、咳き込んでいる間にディンが襟首を掴み持ち上げる

「黙って聞いてりゃあいい気になりやがって……」

「どうやら、ちつとばかりオシオキが必要みてえだなあ」

「お尻百たたきといきますか？ ひゃーっはっはっは！」

レイスが笑うと同時にしたっぱのメンバーもあざけ笑う

ちくしょう……こんな……こんな奴等なんか……
敵うわけない彼らにグラムは涙が流れそうになる

その瞬間だった

タンタンタンタンタンタンタンタン！

「ん？」

「何の音だ？」

まるで何かを刻むような軽快なリズムな音
しかし

刻まれていたのは、何と

ドシヤアアアア……

倉庫の扉だった

「……なあっ!?!」「……」

あまりの事に声をなくして驚きだすレイヴン
扉が出した煙から入ってきたのは、エステル、ヨシユア、イクス、
クローゼの四人

「お、お前たちは……」

デインが嫌な奴に会ったとばかりな声をあげる
実際嫌な奴だが

「けほけほ……。クローゼ……姉ちゃん?」

クラムがかろうじて声を出す

「子供相手に、遊び半分で暴力を振るうなんて……。最低です……。
恥ずかしくないんですか」

哀れむような瞳でレイヴンを見つめながらクローゼは呟く
口々に文句を言うしたっば連中
そこでイクスが一步前に躍り出た

「おい、クラム」

「な、なんだよ……」

怒鳴りながら構えるイクス

その格好はまるでクラウチングスタートをするような前のめりの姿勢
構えに名はない

しかしこれはイクスが考えた技の前段階

結果の技の名は『肆式・掌突』
シキ ショウトツ

「イクス……」

「手エ出すなよ三人とも。今回ばかりは許せねえ……遊撃士として
ではなく俺自身として『お話』だ」

言い切ると同時に走り出す

「なめやがって……！」

「半殺しだっ！」

したっばもロツコ達もイクスを半殺しにしようとスタンロッドやナ
イフを持ち走り出す

この場合、素人ならば多数派であるレイヴンの勝ちだと言っだろう
しかし……

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお

！！！」

「ぎゃっ！！」

「ぐえっ！？」

突撃しながら腕全部を使い縦に振るった一閃をかわし、裏拳を顔面

「ぎゃあああああああああああああああああ……！」

最後に襲い掛かってきたロツコを殴り、怯んだ隙にさらに全力で殴り飛ばした

たった数分間の乱闘

しかしもうすでに、立っているのはイクスとクラムを掴んでいるデインだけだった

「こ、こいつ……強え」

最初に倒されたしたつぱが呟く
イクスは汗一つ、息一つ乱さずに倒れ伏したレイヴンを見下していた
その場の全員が動けないでいた

「………………。クローゼ」

「あ……あ、はい」

イクスに言われて呆けていたが、我に返ったクローゼは一步前に入る

「あの、これ以上の戦いは無意味だと思います。お願いします……。
どうかその子を放してください」

胸に手を当て、懇願するクローゼ
しかしデインは情けなくすぎる

「こ、ここまでコケにされて、はいそうですかって渡せるかよ……！」

掴んでいたクラムを胸に無理矢理抱き寄せると、所持していたナイフをクラムに突き付ける

「クラム君！」

「ちょっとあんた！　ちびっ子になんてことしてんのよ！」

「うるせえうるせえ！　ガキに怪我させたくなかったら武器を捨てて大人しくしな！！」

とにかく叫びと脅しでこの場を何とかしようとするデイン
エステル達も暴走するデインにこれ以上言えば何をしでかすかわからないので、下手に動けない
しかもこういった輩は必ず脅し以上になってしまふのだ

「いいぞ！　デイン！」

「け、形勢逆転ってか！？　ひやははは！」

いきなり気持ちが大きくなるレイヴン達
だが、彼らは気が大きくなりすぎた故に
すぐに興味のない奴を忘れてしまった

「姉ちゃ……………逃げ……………」

「クラム君……………！！」

「覚悟しろよ嬢ちゃん達……………思いつ切りかわいがってやるからよお
！」

しかし

レイヴン達が大きくできたのはここまでだった

イクスは再びクラウチングスタートの構えをとる

「勝手に馬鹿やって怪我する馬鹿なんて知らねえよ」

「……！」「」

助ける気などないと言っているようなイクスにエステル達は絶句する
レイヴン達も抑揚がない言葉に再度恐怖する

「もう一度問う。ガキを渡して無傷でいるか、ガキを渡さず死ぬか
選べ」

「う……うわあああああああああ！！」

恐怖のあまり、デインはナイフを振りかざしクラムに刺そうとする
しかし

「」

疾風迅雷。そう呼ぶが如く光速でイクスは駆けると全員がまばたき
をした瞬間にはデインの眼の前に迫っていた

「肆式シキ 掌突シヨウツツ・握アク！！」

光速の速さも上乘せされた一撃は迷うことなく、躊躇うことなく

「ああああああああああああああああああああああああああああ
あ！……！……！」

デインの顔面にめり込み鼻の骨を砕く音を立てながら吹き飛ばし
まるでおもちゃの壁を破壊するように後ろの壁を貫通し海に落とした
その際、イクスはデインが手離れたクラムをしっかりと抱き抱える

「大丈夫か、クラム」

「え……あ、うん……」

「そうか……ぐっ……」

途端膝を付くイクス

反動が来たのだろう。肌が見えている箇所には裂傷が現れ始めた

「がっ……くっ……傷は覚悟してたが……平衡感覚がきついでなくそ
……」

「イクス！」

「だから言わんこつちやない。大丈夫？」

「イクスさん！ クラム君！」

慌てて三人が二人に駆け寄る

クローゼがイクスに治癒魔法を掛け始めた

それを眺めていたレイヴン達は我に返ると、イクスが戦闘不能を良
いことにまた襲い掛かろうとしている
と、

「おいおい、そこまでにしとけや」

また乱入者が現れた
ただし、エステル達三人には聞き覚えのある声

「だ、誰だ!？」

「新手か!？」

また身体を緊張させレイヴン達が身構える

「やれやれ、久々に来てみりゃ俺の声も忘れていたとはな……」

斬り刻まれた扉から歩いてきたのは、赤髪の青年。背中には重剣を背負っている

「ア、アガットの兄貴!」

「き、来てたんすか……」

そう、アガットだ

レイヴン達はアガットが来たことに驚き、同時に喜んでいた

「……………」

アガットはエステル達に一瞥もせず近づくと

「ど、どうしてあんたが……。ていうか、こいつらの知り合いなの!？」

エステルは不思議そうに首を傾げて訊ねる

しかしアガットは答えない

「お久しぶりですアガットの兄貴！ いいところに来たっスね！」

「いいところ？」

「へへっ、実はおイタがすぎたお子さま達に現実つてのを教えてたところだよ」

……実際はフルボッコにやられていただけだけど
ちょうどディンが海から上がっていた

「これからひとつお仕置きタイムといこうかと！」

「ほっ？」

そこでやっとエステル達を見る
表情は笑っているが、瞳だけはしっかりとイクスの状態を把握していた

「おしおきか……だったら俺も参加させてもらおうか……」

「どっぞ、どっぞー！」

「やっちやっってくださいアガットの兄貴！」

「へっ、んじゃ遠慮なく……」

レイヴン達に笑顔で言われたアガットは、思い切り拳を握り振りかぶる

ドカアアアアアアアアアアン！！

思い切り殴った

レイスを

「お前ら……。何やってんだ？ 女に絡むは、ガキを殴るは……。ちよっとタルみすぎじゃねえか？」

アガットが周りを見渡しながら怒鳴る

一瞬、何が起こったのか分からずポカンとしていたレイヴン達だったが、怒鳴られた事が分かると逆に反抗した

「う、うるせえな！ チームを抜けたアンタにいまさら指図されたく……」

ダン！！

間に挟まれる断切音

それは一瞬の内に背中の中の重剣を振り下ろし、木箱を割った音だった

「……何か、言ったか？」

「す、すんませえええん！！」「」

一瞬で謝るレイヴン

どうやらアガットは彼らにとって畏怖べき存在らしい呆気に取り残されているエステル達

そんなエステル達にアガットがおい、と声をかける

「小僧、ガキを連れてさっさとここを引き上げろや」

「構いませんけど……。アガットさんはどうするんですか？」

「決まってるんだろ……」

一言言つと、ずいと一歩前が出る

「このバカどもが犯人かどうか締め上げて確かめてやるんだよ。たつぷりと、たつぷり急を据えてからな！」

「ひえええええつ。か、勘弁してくださいよ〜！」

「なるほど……。そういう事ならお邪魔したら悪そうですね」

ヨシユアは本当に見事に微笑みながらイクスに肩を貸し、クラムとクローゼ、エステルと共に倉庫を後にしたのだった

蒼空語り

イクス

「遅えええええええつー!!」

風花

「仕方ないでしょ、テストなんだからあああああ！」

ドッカーン！

バツコーン！

エステル

「おいしいiiiiiiii！　いくらここが壊れないからってやり過ぎよ
おおおおお！！！」

ヨシユア

「にしても風花、凄いな。今回のマジギレイクスを相手に対等に戦
ってるなんて……」

エステル

「ヨシユアも冷静に解析してないでツッコんでよ！　あたしだけが
ツッコミするのは嫌なのよ〜〜！」

ヨシユア

「ははは、やだなエステルは。僕は滅多な事じゃ壊れないよ」

エステル

「うう、ヨシユアがいぢめるよお〜」

ヨシユア

「はいはい」

イクス

「重ね《クロックアップ》 and 《フォルテ》！」

「白虎撃！」

風花

フラッシュ
「花の妖精、エクサルマティオ武装を解け！」

イクス

「うおおっ！？ ワケわからんもん使うなあああああ！」

風花

「ワケわかんなくないもん！ 立派な魔法だ！」

エステル

「そういえば今回のイクス、一味も二味も怒り方が尋常じゃなかったわね」

ヨシユア

「きつとそういうことが大嫌いなんだよ。あれのギャグ系が『お話』に繋がってくるし」

エステル

「ふーん……あ、じゃあ名物の『不可抗力だけど人の胸を触っちゃう特性』はやるの？」

エステル

「す、少し長いかな……やると思うな。一章に一回はやるって風花は決めてるらしいし」

風花

「我が名風花メイネム・フランスの元、逆巻く風パリエースよ暴風障壁フルグリウェルテを!!」

イクス

「おおおおおおおおお!?」

ドシヤアアアア!

風花は イクスを 倒した!(ゲーム風に)

風花

「にゃっはっはっ、作者舐めんなですよ」

ヨシユア

「あ、イクス達の戦いも終わったし質問コーナーに移ろっか」

エステル

「本当に冷静ねヨシユア。まあいいわ。えーと……HN『漆黒の牙』さんから『クラムがあそこだけ聞いて勘違いするのに大納得。大切な家が放火で全焼して犯人が分かったら俺もするな。むしろその犯人を殺りに行くな。』

リ「殺るな殺るな。つかイクス扉壊すなよ。まあ、ジャンさんが修理したけど後で怒られるんじゃない?」

レ「でも銀髪の男の人って、やっぱりあの人だよな。SCで最強

の人。」

ナイトメアのあの人はトラウマだ。質問だが、現在のレベル・遊撃士ランクってどのくらいなんだ？前に使った質問ですまんがな。ネタ思い浮かばん。

リ「だそうだ。それじゃ、また。」……レベルはそうね……」

ヨシユア

「風花が面倒臭くなりレベル設定は止めました。ランクも然りです」

エステル

「ちよつとちよつと。人がせつかく考えてたのに真実を教えてくださいのよ」

ヨシユア

「人は時に残酷な真実に向き合わなきゃいけないんだよエステル」

エステル

「……クサイセリフなんですけど」

ヨシユア

「と、言うわけで『漆黒の牙』さん。貴方はもっと黒神さんという方の作品、『リリカル銀魂StrikerS』『攘夷戦争鎮魂歌』の『教えて銀八先生』の質問を見て僕らをぶち壊してください」

エステル

「ズバツと言ったわねあんた」

ヨシユア

「………………。まあ今回はこれまで。次回もお楽しみに」

エステル

「それじゃあまっただね」

第二章 く白き花のマドリガル memory…? (前書き)

ずいぶんお待たせしました

短い上に蒼空語りはなしですがどうぞっ

第二章 く白き花のマドリガル memory…?

「おお、ご苦労さん。どうやら男の子は無事助けられたらしいな」

ジャンが笑顔でエステル達を迎えた
ヨシユアはイクスを壁に凭れさせ身体を話す

「うん、何とかね。それよりも、驚いたわよ。あの赤毛男が来るんだもん」

「はは、アガツトのことか。別件でルーアンに来た所をむりやり頼んだってわけさ。何せヤツは《レイヴン》のリーダーを務めていたからな」

「やっぱりそうでしたか」

「どつりでガラが悪いと思ったのよね」

ヨシユアとエステルは納得したように頷く
イクスも頷く代わりに顔をしかめた

「といつても昔の事だけどね。君たちくらいの年齢でこのルーアンに流れて来てね……。荒っぽい連中を引き連れてずいぶん暴れてくれたもんさ。あの頃に較べたら今のメンバーは可愛いもんだな」

「そ、そんなヤツがよく遊撃士になったわね」

「まあ、ある人と知り合ったのがきっかけでね。それから遊撃士を

志して今じゃすっかり若手のホープだ。人間、変われば変わるもんだよな」

「……余計なお喋りはそのくらいにしておけての」

と、その時、嫌そうな顔をしながらアガットが戻ってきた

「あ、帰ってきた……」

「人がいないのを良いことに好き放題言いやがって……。相変わらず人を喰ったヤツだ」

ぎんとジャンを睨むアガット

だがジャンはまったく気にしてない

「はは、誉め言葉として受け取っておくよ。それよりも取り調べはすんだのかい？」

「ああ、一通りな。絶対とは言いきれんが……。多分、あいつらはシロだろう」

「ホントに？ まさか、昔の仲間だからって庇かばってるんじゃないでしょうね？」

「アホ、見くびるんじゃない。昨日の夜、船員酒場で飲んだくれてたって証言もある。そして、酔った勢いだけじゃあんな周到な放火はできない……」

的確な理由を言っていき彼らが無実だということを証明する

「むっ……」

「そういう事なら、とりあえず保留にしても良さそうですね。それに、放火までするほどの度胸がある人たちとも思えない」

もつともな意見を述べるヨシユア
イクスは黙って聞き続けている

「うーん、確かに……。イキがってるだけって感じよね」

「まあ、あいつらには俺が睨みを利かせておくさ。犯人捜しをする
ついでにな」

「へ……」

突然言われた言葉に呆気にとられるエステル

「事件の調査は俺が引き継ぐ。お前らには手を引いてもらおう」

「あ、あんですってっ！？ 後からやって来たくせになにふざけたこと言ってるの！」

「納得できる説明を聞かせてもらえますか？」

エステル、ヨシユアともにこのアガットの態度には不満を言う。もちろんイクスも睨みで聞いている

「お前らは私情を挟みすぎなんだよ。遊撃士に限らず、情が絡むと判断力は鈍るもんだ。ったく、ただの民間人を戦闘場所に巻き込みやがって……」

「あ……。すみません、私……」

クローゼが申し訳なさそうに謝る

「あんたが謝る必要はねえ。こいつらの心構えの問題だ。要はプロ意識が足りねえのさ」

「悪かったな意識が足りなくて……いてて」

イクスは痛みを耐えながら嫌そうに謝っておく

「な、なんでそこまで言われなくちゃいけないわけ!? 何と言われたって、あたしたちは院長先生と約束してるんだから……」

「おい、ジャン。正遊撃士と準遊撃士が同じ任務を希望した場合、規約で優先されるのはどっちだ?」

余裕の笑みを見せながらジャンに訊ねるアガツト

ため息を吐きながらその答えなくても分かる問いを答えるジャン

「やれやれ……。わかっててそれを聞くかい? 言つまでもなく正遊撃士さ」

「うぐっ……」

「僕たちもそれなりの戦力にはなると思います。せめて手伝いくらいは……」

「ただの調査に人数は必要ない。話は終わりだ。悪く思うんじゃないね

「ぞ」

アガットはヨシユアの提案を簡単に一蹴すると、ギルドを出て行った

「な、な、な……。何様のつもりよ、アイツ!？」

「悔しいけど、彼の言い分は間違っではないからね……。反論できないのが辛いな」

「本当にすみません……」

「気にすんな。元はといやあ俺がケンカ始めたからだからな」

「まあ、悪気はないからどうか大目に見てやってくれ。不器用なヤツでね。あんな言い方しかできないのさ。それにどうやら今回の件……ヤツが追っている事件と関係があるかもしれないからね」

「え……」

「アガットさんが追っている事件？」

「詳しいことは話せないが……。犯人捜しはヤツに任せてほしい。僕の方からもお願いするよ」

そう言われると手を引くしかできない

「そ、そんな……」

「そうですね……。では、これまでの捜査状況を報告しておきます」

「ああ、よろしく願いますよ」

エステルたちは残念に思いながらこれまでの経緯を報告した。ついでにイクスは今まで黙っていたクラムを外に連れていった

ルーアンの入り口近く

そこまでクラムを連れてきたイクスは息を吐きながら柵にもたれかかる

クラムはその隣で座り込み、話し出した

「最近、孤児院の周りに知らない大人がよく来るんだ……兄ちゃん達が来た前の日も黒い服を着た二人組が何か調べててさ……オイラ、火をつけたのはそいつらじゃないかと思うんだ」

「……そいつらはレイヴンにいたか？」

イクスの問い掛けに首を振るクラム
違う、という意味だろう

「オイラ……バカだよな……。関係ないやつらのところに殴り込んだり……弱いくせに皆が泣いてるからって仕返ししようとするなんて……ほんと、みっともないよな……」

「……。ああ、そうだな。かなりみっともない」

「っ……」

「だけど、格好よかつたぜ」

「え……?」

いきなり格好よかつたなんて言われて顔を上げるクラム

「自分の大切なもん守るために身体を張って立ち向かおうとする…
…んなこたあ、簡単に出来やしないんだ」

「兄ちゃん……」

「泣いてもいい。情けなくなつていい。最後まで自分を貫き通せ。
そうすりゃあ守りたいもんなんていくらでも守れらあ」

イクスの言葉に少し間を置いてから頷くクラム
ちらつと足音が聞こえ、イクスはちらりと眼だけを向ける
クローゼが走ってきていた

「なあクラム」

「何、兄ちゃん」

「さっきお前は皆が泣いてるつつつたけど、その中にテレサ先生は
入ってるか?」

「……先生は泣いたりしないよ」

さも当然のように言うクラム

「テレサ先生はさ、いつだって強くて優しくして……オイラ達の自慢

の母ちゃんなんだから」

「そうか……なら」

そう言ったイクスは躊躇うことなく、

ゴン!

クラムの頭を殴った

これには驚きだすクローゼ

「……っ、何すんだよ!？」

「いいかクラム。てめえの母さんはひどい火事にあってつらい思いをしてんのに、いつも周りの奴を気遣って気丈に振る舞っていた。

俺だって強い人だと思う。けどな? その強い人がさっき

俺達の前で泣いたんだ」

「……………え?」

「てめえがいなくなっただってマリイから聞いた途端、まるで崩れるようにその場にへたりこんで……泣き崩れてたんだぞ」

だからその罰だ

言葉を続けながらクラムの視線までしゃがむイクス

「クラム。ここから先は俺達がやる。お前はお前にしか出来ないことをやれ」

「オイラにしか……出来ないこと……」

「ああ、そうだ。てめえにしか出来ない……先生を笑顔にしてやれ

んのはお前だけだ」

「……………」

「クラム。お前はこれからも家族を、家族の笑顔を護れ。お前だけのお前にしか出来ない方法で」

真剣な表情で言われる言葉を真剣に受け止めながら自分でも呟いていく

そんな二人をクローゼは優しく見守ると、そこへ

「クラム」

声が聞こえた。聞き慣れた声だ

振り向くとそこには、息を切らし、顔を涙で濡らしていたテレサ

「せ、先生……………」

「クラム…………ほ、ほんとに…………ほんとにこの子は…………！」

ヒュツと動く手

ぶたれることを覚悟したクラムは眼を瞑ったがテレサが動かしたのは手だけではなかった

一瞬のうちにクラムは眼を開けた

テレサに抱き締められていた

「よかった……………」

「先生……」

「本当によかった……」

「……ごめんな、先生。もう、大丈夫だよ」

そっと抱き締め返すクラム

その後、クラムとテレサは家族が待つ宿屋に戻っていった
イクスと約束を交わして

「……………」

「……… 凄いですね」

二人が去ったあと、イクスの隣に並ぶクローゼ

「別に凄かねえよ。ただ言葉だけなら例え嘘でも想いは伝えられる
からな」

「それでも、です」

「そうかい。クローゼみたいな美少女に褒められんなら何だってい
い、や……」

その言葉を紡ぎ終わると同時にふらつとよろけるイクス
どうやら怪我はまだ癒えてはいらしい

「あっ、イクスさん！」

「悪い……」

「つと……きゃっ!」

よろけるイクスを支えようと抱き止めたクローゼだったが、脱力した人間は思いの他重く、二人仲良く倒れてしまった

「つてて……わ、悪い! ……つて」

「あ、ああああの……!」

クローゼの上に倒れ込んでしまったイクスの頭は、間違いなくクローゼの胸に乗っかってしまっていた
赤くなりながらクローゼはどもってしまう

「え、えつと……その、案外……でかいんだな……」

「~~~~ツ!! / / /」

「つて、悪い! すぐどく!」

今自分が出せる最大の筋力で頭をどけると柵まで下がるイクス
クローゼも顔を真っ赤に染め、片手で胸を隠すように構えながら上体を起こす
正直さっきの感触が未だに頭に残っており、まともにクローゼを直視できない

「そ、その……すまん。えつと……怒ってないか? びんたの一発、二発なら甘んじて受けるぞ?」

つていうかエステルなら間違はなくスタッフの一撃が飛んでくる
以前はジョゼットから導力銃

「び、びんた!？」

裏返った声を上げ、クローゼが驚く

「あ……や、やっぱりそれだけじゃ足りないか？ 出来んならそのレ
イピアの一撃やアーツは勘弁してほしいんだけど……」

「イクスさん、ち、違います。私、怒ってませんから。恥ずかしか
ったけど……悪気がなかったって、分かってますから……っていう
かレイピアを見抜いていたんですか？」

予想外のセリフにイクスは呆ける

エステルの過剰報復を日常的に受けてきたイクスには、まるでクロ
ーゼが空の女神エイトスのように思えた

「ほ、本当か？ 油断させてから、後ろから不意打ち、なんてしな
いよな？ 何となくだ」

「わ、私、そんなことしませんよ……イクスさん、よく分かりませ
んけど苦労したんですね」

哀れむような眼差しで疑心暗鬼に陥っているイクスを見つめるクロ
ーゼ

「まあな……前世の因縁並みにこういう事故が起こるんだよ。だが、
サンキユ。びんたがなしならそうだな……よし、なら頼み事がある
ば必ず手伝うよ」

「はい、お願いします」

とは言ったものの

気まずさはあまり取れず、エステルとヨシユアが来るまで、ずっと意味のない世間話をしているイクスとクローゼなのだった

第二章 く白き花のマドリガルく memory…? (前書き)

どうもお久しぶりです、風花です

えー、以前活動報告にも書きました通り、これから二、三ヶ月休載
致します

勝手に申し訳ありませんが必ず戻ってきますので、どうかお待ちく
ださい

第二章　く白き花のマドリガル　memory…?

「あ？　学園祭の劇……？」

追い付いたエステル、ヨシユアを加えた四人で歩きながらイクスは訊く

今向かっているのは、クローゼが通っているジェニス王立学園

「ええ……。来週末の学園祭で私達、お芝居をやるんです。でも、人手が前々足りなくて……主役さえ決まってる始末なんです。このままじゃ……劇は中止になってしまいます」

さっきまでの恥じらいは既になく、眉を潜めながら話すクローゼ
これはイクスがクラムと出て行った後で話し合われた事なので、当然エステルとヨシユアは知っている

「そんな事になったら……あの子達に申し訳なくて……」

「なるほどね……。俺アいいぜ。さっきやれることがあれば必ず手
伝うって約束したし」

「ありがとうございます、イクスさん」

「おう。……っと……っと？」

お礼を言うクローゼに頷き返すイクス
だが、その拍子に、またよるける

「あ、ちょっ、大丈夫イクス!？」

「あ、ああ……あれえ。すっげえ一瞬だけど、世界が歪むな……」

「当たり前だよ」

よろめき、片膝をついたイクスに、さも当然のように言うヨシユアは、魔法でイクスを治療すると腕を自分の肩に回して立ち上がらせる

「当たり前……どういうこ……ッ、またか……」

「はあ……。イクス。君だけじゃなくエステルにも教えとくけど、魔法は決して使い方を誤っちゃいけない諸刃の剣なんだ。今のイクスは《クロックアップ》を多用したせいで時間の感覚が鈍っているんだよ」

「時間の感覚？」

「《クロックアップ》の効果は対象者の素早さ　つまり時間を速めるものつてのは知ってるね。でも実際そんな事をすれば、確実に世界の時間とその人の時間にズレが生じる。その差が効果が消えた後、その人にやって来て酔いみたい感覚を引き起こすんだ。それが今のイクスの現状」

「確かに……そんな感じだわな」

「普段、僕達が強化出来るのは二段階まで。それまでだったら自動的にオーブメントが時間のズレから保護してくれるんだけど……さつきみたいに百余回も連続発動すれば、かなり長い間、君の平衡感覚はズレてさつきみたいになるよ」

やはり、自業自得である

内心でため息を吐いておくイクス
本当に仕方がない

「……ま、いいさ。何とかなるし、時々だからな。ヨシユアから見
て完治するのはどれくらいだ？」

「あくまで予想だけど……一週間から二週間はかかると思っよ」

「………………。何とかなる」

間が空いたがそれでも断言しておいた
断言しておかないと何か言われそうだ
そここう話していると、目の前に大きな門が見えた

「では改めまして ようこそ！ ジェニス王立学園へ！」

エステル達がやって来た時間はちょうど授業中だったため、まずは
学園長に挨拶することになった
ドアを叩き、返事が返ってからドアを開けるクローゼ

「学園長。ただいま戻りました」

「クローゼ君、戻ったか。おや、そちらの君たちは……」

「初めまして、学園長さん」

「遊撃士協会から来ました」

エステルとヨシユアが挨拶した。まだ少しふらつくイクスは片手だけを挙げて挨拶の意を示しておく

「ほう、まだ若いのに遊撃士とは大したものだ。孤児院で火事があったそうだがもしや、その関係で来たのかね？」

「はい、実は……」

クローゼは学園長　　コリンズに放火事件を含めた一通りの事情を説明した

事情を聞き、コリンズもわずかに表情を悲壮に崩す

「そうか……。大変なことになったものだ。わしらも、何らかの形で力になれるといいのだが……。まずは、学園祭を成功させて子供たちを元気づけること……。そこから始めるしかないだろうな」

「はい……。そこで、お芝居についてはエステルさんとヨシユアさん、イクスさんに協力していただこうと思ひまして」

「いい考えだと思うよ。エステル君、ヨシユア君、イクス君。どうかよろしく願ひする」

「あ、はい！」

「微力を尽くさせて頂きます」

「はは、迷惑かけちまつかもしんないけどな……」

コリンズに頼まれ、慌てて返事を返すエステル。ヨシユアは相変わらず丁寧を受け答え。イクスは身体も考え、少し抑えめだった

「劇に関しては、生徒会長のジル君に全てを任せている。監督も担当しているから詳しい話を聞くといいだろう。わしの方からは……寮の手配をしておこうか」

「え……」

「寮、ですか？」

「何と言っても学園祭までほとんど時間がない。おそらく毎日、夜遅くまで練習する必要があるだろう。そうなると、泊まる場所が必要になるのではないかな？」

「あ、なるほど……」

「それは助かります」

と、その時、学園のチャイムが鳴り響く
すぐに廊下からざわめきの声が聞こえてくる

「ちょうど授業も終わりだな。さっそく、生徒会長に紹介してあげる」といいだろう」

「はい。エステルさん、ヨシユアさん、イクスさん。次は生徒会室に案内しますね。この本館の右手にあるクラブハウスの二階にあります」

「うん、それじゃ行きましょ」

コリンズに退室の挨拶をしてからエステル達は生徒会室に向かった

生徒会室

クローゼの案内の下、溢れかえる廊下を通り四人はクラブハウス二階の生徒会室に来た

「は、忙しい、忙しい。各出店のチェックと予算の割り当てはOK……。招待状の発送も問題なしと」

学園祭の予定が事細やかに書かれた紙に眼を通す眼鏡の少女
彼女がジルである

「残る問題は、芝居だけか……。このまま見つからなかったら俺たち
ちがやる羽目になるのかね」

椅子に座り、ため息を吐いている少年は同じ生徒会のハンス

「私はともかく、あんたは問題外でしょうが。衣装合わせをした時
のおぞましい恰好かっこうといったら……」

「言うなつての……。俺も思い出したくないんだから」

「あはは……。ただいま。ジル、ハンス君」

そんな言い争い(?)の中、クローゼたちが生徒会にいたの二人に
声をかけた

「あ、クローゼ!? 火事の話、聞いたわよ。大変だったそうじゃない」

「院長先生とチビたちは大丈夫だったのか?」

「ええ……。一応、みんな無事でした。ただ、孤児院の建物が完全に焼け落ちてしまっ……」

「そうか……」

「元気出しなさいよ。悩んでいたって仕方ないわ。チビちゃんたちが楽しめるように学園祭を成功させないとね」

元気付けるように肩をバシバシ叩きながら励ますジル

「うん、テレサ先生にもそんな風に注意されちゃった。だから、全力で頑張るつもり」

「あんたが本気を出せば百人力だから期待してるわよ。ところで、さつきから気になってるんだけど……。その人たち、どちらさま?」

さつきから気になってたのが、ジルがクローゼの後ろにいたエステルとヨシユア、イクスを指差しながら訊く

「初めまして。あたし、エステルっていうの」

「ヨシユアです、よろしく」

「イクスヴェリア、イクスって呼んでくれ」

「それじゃ、あんたたちがクローゼの言ってた……！」

「ふふ、約束通り連れてきたわ。三人とも協力してくださるって」

驚きだすジルにクローゼが微笑みながら言う

それに喜ぶジル

「いや、助かったわ！ 初めまして、エステルさん、ヨシュアさん、イクスさん。私、生徒会長を務めているジル・リードナーとい
います。今回の劇の監督を担当してるわ」

「俺は副会長のハンスだ。脚本と演出を担当している。よろしくな、
三人とも」

「うん、こちらこそ」

「よろしくお願いします」

「よろしくな」

二人の挨拶をしっかりと返す三人

「うん、それにしても……」

ジルがエステルとヨシュア、イクスをじっくり見ている

「な、なに？」

ジロジロ見られて落ち着かないエステル

「さすが遊撃士だけあってスポーツも得意そうな感じね。エステルさん、剣は使える？」

「まあ、それなりには……。棒術がメインだけど父さんに習ったこともあるし」

「よっしゃ、これで決まりね。あなたには、クローゼと剣を使って決闘してもらおうわ」

「け、決闘!？」

突然の宣言に驚きだすエステル
ヨシユアとイクスもポカンとジルとハンスを見つめる
そこでクローゼが付け足した

「もちろんお芝居で、ですよ」

「クライマックスに二人の騎士の決闘があるのよ。まあ、劇の終盤を彩る迫力のあるシーンなんだけど……。クローゼと勝負できるくらい腕の立つ女の子がいなくてねえ。この子、フェンシング大会で男子を押しつけて優勝してるし」

「へへ、すっごい!」

「ちなみに、決勝で負けたのはそこにいるハンスだけどね」

「悪かったな、負けちまって。ちなみに俺が弱いんじゃない。クローゼが強すぎるんだよ」

「あ、あくまで学生レベルの話ですから……。本職のエステルさんには足元にも及ばないと思います」

照れながら謙遜するクローゼ

だがイクスとヨシユアは彼女の實力に気付いていた

護身用のレイピアを持っていたりするのは大して関係ないが、彼女の足運びで理解は出来る。余程熟練した者から教わったのがよく分かった

「またまた、謙遜しちゃって。でも、そういう事ならちょっとは協力できるかも。クローゼさん、頑張ろうね」

「はい、よろしく願います」

「ふーん、それにしても……。女騎士の決闘なんざ、なかなか面白い内容だな」

素直に感想を述べるイクス
だが、返ってきた返事は、

「女騎士？ 二人に演じてもらうのはれっきとした男の騎士役だけ？」

で、あった

「え」

「しかし、ヨシユアさんとイクスさんの方は文句のつけようがないわね……。どっちにするハンス？」

ジルの眼が妖しくキラんと光る
ハンスも光りはしなかったが、考えるように食い入る

「ああ、悔しいが同感だぜ」

「?????」

「えっと、その劇……どういふ筋書きなのかな？」

(嫌な予感しかねーから訊くなヨシユア)

嫌な予感がしてならないヨシユアは思わず劇の内容を訊いていた

「題名は『白き花のマドリガル』。貴族制度が廃止された頃の王都を舞台にした有名な話なの。貴族出身の騎士と平民出身の騎士による王家の姫君をめぐる恋の鞘当て……。しかもこの三人、身分は違うけどお互い幼なじみの関係にあってね。それに、貴族勢力と平民勢力の思惑と陰謀が絡んできちゃうわけよ。まあ、最後は大団円、文句なしのハッピーエンドだけどね」

「へ〜、面白そうじゃない」

「そ、それで……。なんで女が男役？」

「それが、今回の学園祭ならではの独創的かつ刺激的なアレンジだね。男子と女子が、本来やるべき役をお互い交換するっていう趣向なのさ」

「男女が役を入れ替える？ へ〜、そんなのよく先生たちが許してくれたわね」

「性差別からの脱却！ジェンダーからの解放！」

エステルの言葉に反射するようにジルが叫びながら机を叩く
まるでその言葉がきたらそれを言えるように

「とかなんとか理屈をこねて無理矢理押し通したちゃったわ。本当
は面白そうっていう、それだけの理由なんだけど」

「ジルったらもう……」

クローゼは諦めているかのようにため息を吐く

「ほんと、こんなヤツが生徒会長とは世も末だよな」

「あはは うん、確かに面白そうかも」

「ちょ、ちょっと待った！ その話の流れで言ったら……」

「俺達のどちらかが演じなくちゃいけない『重要な役』っていうの
は……」

青ざめながらヨシユアとイクスが想像してしまう

「いやあ、ホント助かったぜ」

「クローゼ、ありがとね。いい人たちを紹介してくれて」

「あ、あはは……。ごめんなさい、ヨシユアさん、イクスさん……」

お、お姫様役かあああああああああああ！！！

本気でシャウトする二人なのだった

蒼空語り

イクス

「はあ〜い、蒼空語り始めるよ〜……って、やっぱり一ヶ月更新か」

ヨシユア

「しかも短いね。アシスタントのヨシユアです。エステルは現在風花を殺りに行っております」

イクス

「そうか……。にしてもどうすつよ？ 蒼空語り人気ないしよ。投稿も遅くなるし……。廃業すつか？」

ヨシユア

「そうだね……。現に感想欄にも書かれてたし、何より現実リアルで見せたら『オマケがつまらない』って言われてたし」

イクス

「うわっ、もしかしてへこんで投稿しなかったとか？」

ヨシユア

「一番ありそうな理由だね」

イクス

「ふう……んじゃあストックするために二、三ヶ月休むって言うし、これを機に打ち切りますか」

ヨシユア

「残念だけどね。最後の質問いつてみようか」

イクス

「りょーかーい。やつぱ最後も一件だけだったな……HN『ガイア』さんから『今回も楽しく読みました。』

イクスが本気で怒るとあんな風になるんですね。

質問は、風花さんは零の軌跡の実績を全てコンプしましたか？

碧の軌跡たのしみですね。

次も楽しみにしています。

頑張つて下さい。』……なっちゃった」

ヨシユア

「いや、なっちゃった　じゃないよ……風花はまだコンプリートしていません。攻略サイトをまったく見ずにやっているので苦労しているそうですよ」

イクス

「変なこだわりもってんのな。　　つーわけで『ガイア』さん最後にありがとうございます」

ヨシユア

「……では、これで蒼空語り、終了します。これまで質問を下さった皆様、ありがとうございます」

イクス
「それじゃ、これで」

第二章 く白き花のマドリガル memory……？

イクスとヨシユアは二人、講堂の真ん中辺りで互いに互いを睨み合っていた

「はっはっは……まさかヨシユアとこんな事で決着がつかんなんて特に思っ
て無かったな」

「ははは……僕もいつかこんな日が来ると常々特に思っ
て無
かったよ」

笑顔で受け答えしている二人の様子を事情の知らない者が見たら何
があつたのか知りたくなるであろう

その答えは 劇の姫役を掛けた勝たねばならぬ戦いと知ればた
め息が零れるだろうが

何と言う幼稚で些細な問題、と女子は思うだろう

否 これは幼稚な、ましてや些細な問題なのではない

この戦いは、男子として失つてはいけないモノを掛けた戦いなのだ

！

「はあ……ホント、何してんだかヨシユアとイクスは……」

愚痴を零しながら、審判役となつた少女 エステルはため息を吐く

その上 斜めから当てるスポットライトを置いた二階には観客
としてクローゼ、ジル、ハンスがそれぞれこれから始まるであろう
戦いを眺めていた

「あはは、クローゼにはいい人材を連れてきてもらったわ。どっち

も主役にピッタリの中性的な顔じゃない」

「否定は出来ないけど……でも、何でこうなっちゃったのかな？」

「いや、まあ……二人の気持ちは男子である俺には分かるぞ。痛いほどよく分かる」

女子二人は放つて置いてハンスは二人に同情しながら合掌している何故なら、もし二人が来なかったら主役は自分がされていたはずだから

一先ず、もう一度二人に向けてやっておいた

合掌

「っていうかよ……俺は身体が時々使えなくなるんだ。こんな身体でやったら劇は失敗するだろ」

「それは大丈夫だよ。さっきも言ったけど約二週間ぐらいで治るんだし、来週末の劇には十分間に合う。だから 君が主役をやってくれ」

「ふざけんな。俺は主役は嫌いなんだよ。どっちかってーと、脇役……否、舞台裏の裁縫系が俺の戦場だ！」

「それも大丈夫。僕も裁縫に関してはある程度出来るから。だから君は主役に専念してよ」

「はっ、ある程度？ 否！ 断じて否！ 裁縫や料理に一切の妥協は許されない。故にある程度と抜かす馬鹿者にはそれに関わることすら許さん！」

「ふふ、馬鹿者はどっちだよ。 シェラさんとアイナさんに女装させられた時、君かなり似合ってたじゃないか」

「いやいや。君の似合う姿には負けるよオ。だからな？ うん、
テメエがやれ」

「君がやれよ」

「……どうしても引き下がらねえってか？」

「君も同じでしょ」

「ははははは……」

「ふふふふふ……」

「エステル！」

二人同時にエステルの名前を叫びながら、自分の得物に手を掛ける腰に提げた布の鞘から出さずに手だけ添えるヨシユア
今回は隠し小太刀を使わないのか、棒術具スタッフとしての構えを取るイクス
エステルは、もう一度ため息を吐くと、ルールだけ確認する

「 講堂が壊れちゃうから、導力魔法アーツは強化魔法のみ。出来る限り武器で暴れて。これで、いい？」

「「応ッ」」

「ふう……。それじゃあ尋常に 始め！」

棒術具スタックで搦り上げるように打つ一撃を一太刀目で受け止め、二太刀目スタックに薙ぐ攻撃を逆方向に回した棒術具で防ぎ返す
今更だが、ここでヨシユアとイクスの戦歴を上げておこう

五年前から今まで 対戦数247回

ヨシユアの勝利回数 123回

イクスの勝利回数 120回

引き分けた回数 4回

つまり、現在ヨシユアが一步リードしているということになる
閑話休題

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

「せいやああああああああああああああああ!!」

疾風迅雷

どうやら久し振りに戦ったのでボルテージが上がっているようだ
その言葉が当てはまるほど、二人の周りは嵐と化している

斬っては避け、防いでは斬る。よく研いだ刀身で流すように捌き、
断つ様に斬る

打っては避け、防いでは打つ。丸みを帯びた芯で滑らすようにいな
し、壊すように打つ

距離を置かずに自分の範囲だけで得物を振るう

避ける時は、跳ぶか、しゃがむか、前転するかの三つ

その嵐のような戦いを四人は見ている

「今日は一段と荒れてるわね」

と、エステル

「凄い……！」

と、クローゼ

「これが本場のブレイサーの力かあ……すっごいわ」

と、ジル

「おいおい……どんな鍛え方したらそんな嵐になるんだよ」

と、ハンス

ってというか何でこんなにも壮絶な戦いをしているというのに、学生達は気付かないのだろうか

その答えは 昼食時でした

さて、戦闘の方はどうなったかと言うと

ものの見事にイクスが倒れています

これで248戦中124対120。4引き分け

さらにヨシユアがリードしました

「……はい。ヨシユアの勝ち」

「ふ、ふふ……貞操は守れた……」

ヨシユアは、普段の冷静沈着な性格からは思いもよらない笑みを、壊れたように続けていた

クローゼ達も降りて来て、三人の下へやってくる

「お疲れ様でしたヨシユアさん。凄かったですよ」

「ああ、そうだな。やっぱり特殊な訓練でも積んでるのか？」

「いや……昔からイクスとこうやって戦り合ってたら、いつの間にかイクスと戦う時だけ……」

双剣を鞘に納めながらいつもの口調で言い、立ち上がるヨシユア
クローゼはイクスに近付き、代わりにジルが話しかけた

「おめでと。これでやっとお姫様役が決まったわ！」

そう言っただけは主役となった者の手を握る
何故かその手は

「あれ？」

ヨシユアの手を握ってたが

「あ、あの……握る手、間違っただけかい？」

「全然、これであってるわよ。お姫様役はヨシユア君に決定」

「何でさあああああああああああ……！」

思わずシャウトしてしまうヨシユア
だが、当たり前かもしれない
何故なら

「い、イクスさん、大丈夫ですか？」

「あ、クローゼさん大丈夫よ。この馬鹿ならすぐに治るから。まっ

ルとクローゼが出て来ていた
ちなみにイクスは、エステルと言う通りすぐに復活して胡坐で座っ
ている

エステルは基調を赤とした王室親衛隊の服装。ツインテールにして
いた髪はおろし、垂らしている。その上に白い羽が付いた赤い帽子
を被っていた。腰には模造刀が鞘に納まって提げられている

クローゼはエステルと同じ親衛隊の服装。唯一違う点と言えば、基
調が青なところだ

「うーん、これが舞台衣装か。騎士っていうから鎧でも着るのかと
思ってたけど」

「さすがに甲冑かちぢうだと演技に支障をきたすからね。現在の、王室親衛
隊の制服をアレンジする方向で行ったのよ」

舞台裏から出てきたジルが答える

「ふーん、そうなんだ。クローゼさんはショートだし、ハマリ役っ
て感じがするけど」

「ふふ、ありがとございます。エステルさんもとても良く似合っ
てますよ」

「えへへ、そうかな？　ところで……。なんで色違いになってるの
？」

「私が演じるのは平民の《蒼騎士オスカー》。エステルさんが演じ
るのは貴族の《紅騎士ユリウス》。それぞれの勢力のイメージカラ
ーなんです」

「は、なるほど。……ねね、イクスどうかな？」

エステルはイクスに見せ付けるようにくるっと一回転する
普段はドレス姿こそ似合うのだが 何故か騎士装飾でも様にな
っていた

それを見て、イクスは、

「……似合ってる。が、少し装飾が足りねえな」

「え？」

「……………あ」

イクスの言葉にクローゼは呆気に取られ、エステルはしまったと後悔する

舞い上がり、浮かれて訊いてしまったが イクスは主夫だ

それもそんじゃそこの主夫ではない。一切の妥協を許さぬ主夫だ

ロレント 強いてはボースの街に住む主婦達からは最大の敵と認定されている

曰く、彼が出現した日は 安く上質な品は買えないと言う

故に畏怖され、二つ名が付けられた

それが 『鷹の眼』

ちなみに、イクスはそれをまーったく知りません

だ
め
い
い
で
す
ね
閑話休題

上記に上げたとおり、イクスが妥協を許すはずが無い

腰のポーチから糸やら針やら何やら取り出すと一歩詰め寄る

「なあジルさんよお……ちよつとこれ、装飾とか追加していいか？」

「そ、それは構わないけど……一応ウチの部が作った傑作品なんだよね。出来ればあまり」

「これが傑作？ うわははは！ 戯言を抜かすでない。俺からしてみれば 赤子同然よ！」

「いや、例えがわかんないから。あと、口調変わってない？」

「まあ見てろ。派手すぎず、地味すぎず 最上のモノを作つてご覧に入れよう！！ つーわけでエステル後で脱げよ？」

「はいはい。……二人に言っとくけど、主夫となったイクスを止めるのは不可能だからね。覚えといて」

ため息を吐きながら忠告しておくエステルと、そこへハンスが舞台裏から声を掛けてきた

「さあ、待たせたな。二人の騎士の身を案ずる王家の《白の姫セシリア》だ。ささ姫、どうぞこちらへ」

「ちょ、ちよっと待った。……まだ心の準備が……」

「ええい、黙らっしゃい！ とにかくその姿を見てもらえ！」

そう言つてハンスがヨシユアを無理矢理舞台に引き出した

「……………」

舞台に引き出されたヨシユアは視線を逸らしたまま。

ただ、その姿は とても男とは思えないほどの美しさを持つ美

少女だった

「……」

エステル、イクス、クローゼ、ジルはその光景に言葉を失っている

「頼む……頼むから何か言って……。そのまま放置されるのはちょっとツライものがある……」

ヨシユアがたまりかねて言った

「いやあ、何て言うか……。ぜんっぜん違和感ないわね」

と、エステル

「これは……やらなくてよかったな」

と、イクス

「びつくりしました。はあ、すっごく綺麗です……」

と、クローゼ

「うんうん、自身持っていていいぞ。事情を知らずにあんたを見たら、俺、ナンパしちやいそうだもん？」

と、ハンス

「正直な感想、ありがとう。ぜんぜん嬉しくないけど……」

「ムフフ……。まさに私の狙い通り……。この配役なら、各方面からウケを取れること間違いなしね……。みんな、一致団結して最高の舞台にするわよっ！っ！」

「「「「おおっ！っ！」「」「」

「しくしく」

その夜

エステルはクローゼとジルの部屋に、ヨシユアとイクスはハンスの部屋に決まり、それぞれの寮に帰っていった

「では……。エステルさん。手前のベッドを使ってください」

使っていなかったベッドを整え、エステルに譲るクローゼ

ここは元々、三人で使えるのだが、以前の同室者はクローゼが入学すると同時に卒業して行ったそうだ

「サンキュ　でも、クローゼさんとジルさんって同じ部屋なんだ。道理で仲がいいわけね」

「ふふ……。学園に入って以来の仲です」

「ルームメイトにして腐れ縁ってところかしらね。ところで、エステルさん。一つ提案があるんだけど……」

「何？」

「私のことは、ジルって呼び捨てにしてくれるかな？　さん付けされるとなんだかムズ痒いかゆのよね。代わりに私も、エステルって呼び捨てにさせてもらおうから」

「あはは……。うん、そうさせてもらおうわ」

「でしたら、私のこともどうか呼び捨てにしてください。その方が自然な気がしますし……」

「そう？　だったら遠慮なく……。ジル、クローゼ。しばらくの間、よろしくね」

素直に言った言葉に二人はふわりと微笑み、返事を返す

「はい、こちらこそ」

「まあ、女所帯だし気軽に過ごしてもいいわよ。建物の中にいる限りは男子の目も気にしなくていいし」

「だからと言って、だらしないのは感心しないけど」

切り込むようにクローゼがジルに言う

ジルは首を振りながらため息を一つ零す。といっても悪いものではない

「はあ、これだからいい子ちゃんかは困るのよね。カマトトぶつちやってもう」

「あ、ひどい。そんな事を言う子にはお菓子焼いてもあげないから」

「あ、うそうそ。クローゼ様。私が悪うございました。」

「だーめ、反省なさい。」

敬語も使わず二人は仲良さそうに話し合っている

それをエステルは嬉しそうにその様子をじっと見ていた

「あら……?」

「どうしたの、エステル? まじまじと見詰めたりして……」

「あはは、いやあ……。なんだか羨ましいなって。」

「羨ましい?」

クローゼとジルの言葉が重なる

うんと頷いてからエステルは話し出す

「あたしもロレントに仲のいい友達はあるけど……。せいぜい、お互いの家にお泊りするだけだったのよね。こんな風に、気の合う友達と一緒に暮らせていいなって思ってる。」

「………………。奥さん、どう思います?」

「どつって言われても……。エステルさんに羨ましがられるのはちよつと納得いかないような……。」

「ほへ?」

エステルはその言葉の意味が分からない様子で首を傾げている

「あ、やっぱり？ 何言ってるんだこのアマは、って感じよね」

「な、何で!？」

「あんなねえ……。自分が、誰と一緒に旅をしているのかわかってる？ 自宅では、一つ屋根の下で暮らしていたんでしょーが」

「え……。それって。もしかしてヨシユアとイクスの話？」

自宅や旅で気付き、答えを言ってみる

「もしかしなくてもそうですよ」

クローゼが当然とばかりに頷く

「あんな上玉の男の子達といつも一緒にいるくせに女所帯を羨ましがるとは……。もったいないオバケが出るわよ？」

「も〜、何言ってるかなあ。ヨシユアとイクスはあたしの兄弟みたいなものだってば。何年もの間、家族同然に暮らしてきたんだから」

「ほほう、家族同然ね……。あんたがそのつもりでもヨシユア君やイクス君の方はどうかしら？」

「え……？」

「あの年頃の男の子って抑えが利かないって言うし。まして、あんたみたいな健康美あふれた子が側にいたら色々とつらかったりして

……」

延々と喋り続けそうなジルを見てクローゼはそろそろ止めようと声を掛けようとしたその時、

コンコン

扉が叩かれた

「はーい、開いてるわよ」

ジルは女子かと思い、簡単に入室を許可する
ただし、入ってきたのは女子ではなく……

「んじゃ、お邪魔するぞー」

「つて、男子が何勝手に女子寮に入ってんじゃあああああああ
—————!?!?!」

「ぼふっ!?!」

イクスだった

思わずジルは手元に置いてあった枕をイクスにぶつけ、ツッコんでおく

「ちよっ、危なっ!?! いきなり何すんの!?!」

「いやいやあんたこそいきなり女子寮入って何考えてんの!?! 掴
まっても文句は言えないわよ!」

「失敬な! ちゃんと寮母さんの許可はもらってるぞ。会長さんに
これを使う許可が欲しくしてきたんだよ」

そう言っつてイクスが手渡してきたのは、紙束
ジルはさっさと眼を通すと、ああと頷いた

「何だ、これぐらいなら別に良いわよ。会長判断で許可するわ」

「サンキユ。じゃ、俺はこれで」

「あ……ちょっと待って！」

「ん？」

いきなり呼び止められて、イクスはドアノブに掛けた手を戻し、振り返る

ジルは何か良い事を思いついたのか、訊ねてみた

「イクス君、ちょっと質問していいかしら？」

「おう、答えられることなら何でもいいぜ」

「じゃあ……エステルのこと、どう思ってる？」

「じ、ジル！？」

「ふえ！？」

突然の質問にクローゼはジルの名を叫び、エステルは驚く
さっきの話の続きのようだ

イクスも少しばかり驚いていたが、顎に手を当て、考えている

「うん……それって家族愛とかじゃなく、恋愛方面？」

「「明察。で、どうなのよ？」

「……………」

ドキドキと胸を高鳴らせるエステル

止めたい気持ちがあるのに、聞きたい気持ちがそれを逆に止める
そして

「生憎とエステルの事は家族として愛してるからなあ。恋愛
方面としては見てないや」

そう、はっきりと告げた

「あ、愛と来るかこの少年は」

「あはは、凄いですねイクスさん」

ジルは恥ずかしい台詞をさらっと言ってのけたイクスに苦笑し、ク
ローゼは素直に凄いと言う

当のエステルはわずかに頬を赤らめている。当たり前だ。自分の事
を話しているのだから

「そうか？ 俺はエステルや親父にとてつもなく感謝してるからな。
これぐらい当たり前前の言葉だと思うけど……………」

首を傾げながらまあいいや、と呟き今度こそ部屋を出ようとする
そこで、

「ああ。ヨシユアは違つかも知らないぜ。よおく意識してみな、く
くつ。 んじゃお休み」

とんでもない爆弾発言をかますのだった

無言となる女子寮

こうして夜は明けていく

家族以外の同世代の仲間とともに起き、学び舎に行く朝

午前中は、他の生徒と一緒に授業に参加させてもらい

昼はランチを共にしながら他愛のないおしゃべりを楽しみ

午後からは一部の生徒が主夫の餌食となり

そして、放課後は厳しい稽古が夜まで続く

忙しくも楽しい学園生活は瞬またたく間に過ぎていった

第二章 く白き花のマドリガルく memory…???(後書き)

という訳で、大変長らくお待たせしました
今宵より、蒼空の軌跡復活ですっ

一ヶ月、二ヶ月なんて遅更新はしないと思いますが、それでも遅い
と思います

これまでどおり、のんびり見ていってください
では、最後に、質問に答えたいと思います

……え？ 蒼空語りがなくなってもするのか？

ええ、質問があれば、空いた箇所ですべて答えていきます
何か質問などがあれば、お気軽にどうぞっ

グミさんから

イクスの出身はどこですか？

イクス

「ん？ それは内緒だ。俺の素性は本編で明らかになっていくから
な。待っててくれ」

だ、そうです

それではこれで

第二章　く白き花のマドリガル　memory……？

「わが友よ。こうなれば是非もない……。我々は、いつか雌雄を決する運命にあったのだ。抜け！　互いの背負うもののために！　何よりも愛しき姫のために！」

ピンとレイピアを空に向けるように構える紅い騎士

「運命とは自らの手で切り拓くもの……。背負うべき立場も姫の微笑みも、今は遠い……」

だが、蒼い騎士は構えず立ち尽くしている

「臆したか、オスカー！」

「……だが、この身に駆け抜ける狂おしいまでの情熱は何だ？　自分もまた、本気になった君と戦いたくて仕方ないらしい……」

そして、蒼い騎士も静かにレイピアを抜き、構える

「革命という名の猛き嵐たけが全てを呑み込むその前に……。剣をもつて運命を決するべし！」

「おお、我ら二人の魂、空の女神もご照覧あれ！　いざ、尋常に勝負！」

「応！」

叫び、顔の横で水平に構える二人

そこで　　ほう、と息を吐くと静かにレイピアを下ろし、鞘にしまう紅い騎士と蒼い騎士
否　　エステルとクローゼ

「やった〜っ　　ついに一回も間違わずにここのシーンを乗り切ったわ！」

「ふふ、迫真の演技でしたよ」

わずかに浮かんだ額の汗を近くに置いておいたタオルで拭いながらエステルを褒めるクローゼ

「えへへ、クローゼにはぜんぜん敵わないけどね。セリフを間違えたこと、ほとんど無かったじゃない？」

「私はずいぶん前から台本に目を通していましたから。私もようやく、エステルさんの動きに付いていけそうです。色々、稽古をつけてくれて本当にありがとございました」

「ううん、クローゼの場合は基本がしっかりしてたからね。その気になれば、いつでも遊撃士資格を取れると思うよ？」

「ふふ、おだてないで下さい」

共に相手を褒め称えると、ゆっくりと前を向く

普段は運動のために使う講堂も学園祭を前日に控えた今は数多くの椅子で並べられていた

「いよいよ、明日は本番ですね。テレサ先生とあの子たち、楽しんでくれるでしょうか……」

「ふふ、本当に院長先生たちを大切に思ってるんだ……。まるで本当の家族みたい」

「……………」

家族。その言葉を聞くと、突然黙り込むクローゼ
エステルは禁句に触れたかと思い、慌てて謝る

「あ、ゴメン。変なこと言っちゃった？」

「いえ……。エステルさんの言う通りです。家族というものの大切さは先生たちから教わりました……。私、生まれて間もない時に両親を亡くしていますから」

「え……………」

「裕福な親戚に引き取られて何不自由ない生活でしたが……。家族がどういうものなのか私はまったく知りませんでした。十年前のあの日……。先生たちに会うまでは」

その頃を思い出すように遠くの方を眺めながら語るクローゼ

「十年前……。まさか《百日戦役》の時？」

と、言う事はクローゼも同じ、

「はい、あの時ちょうどルーアンに来ていたんです。帝国軍から逃れる最中に知っている人ともはぐれて……。テレサ先生と、旦那さんのジヨセフさんに保護されました」

《百日戦役》の被害者だった

「そうだったんだ……」

「戦争が終わって、迎えが来るまでのたった数ヶ月のことでしたけど……。テレサ先生とおじさんは本当にとても良くしてくれて……。その時、初めて知ったんです。お父さんとお母さんがどういふ感じの人たちなのかを。家族が暮らす家というのがどんなに暖かいものなのかを……」

「クローゼ……」

「す、済みません……。つまらない話を長々と聞かせてしまって」

「ううん、そんな事ない。明日の劇……頑張って良い物にしようね
！」

「……はい！」

エステルが励ますような言葉に静かに、だがはっきりと頷くクローゼ
そこでふふ、とエステルは笑う

「あたしが言うのも何だけど、絶対面白くなると思うわよ。ジルと
ハンスも色々頑張ってくれたしね」

「ふふ、そうですね。でも、最大の功労者はヨシユアさんじゃない
かしら。あんなに演技が上手いなんて……。あ、イクスさんもです
ね。まさか部活の子よりも繊細に装飾してくださって」

「う、うん……。乗り気じゃなかったクセに見事なまでのお姫様っぷりよね。イクスには家事とか任せつきりだったから……。努力の賜物よ」

「凄いですねお二人とも。それにしても、発声といい、間の取り方といい、プロの役者さん顔負けですよ。ヨシユアさんって演劇の経験がおりなんですか？」

「あ、うーん……。二人の事はあたしも、出会ったまでの事は良く知らなかったりするのよね。何があったのか知らないけどあんまり喋りたがらないし……」

苦笑しながらも暗い表情を浮かべる

「あ……。すみません……。失礼なことを聞いてしまって」

「あはは、いいわよ別に。うーん、確かにヨシユアは何でも完璧にこなすタイプかな。ホント、いつも余裕しゃくしゃくで可愛くないっていうか……。たまに慌てたりする時なんかは可愛かったりするんだけどね。イクスはどっちかって言えば家庭系ならヨシユア以上に完璧にこなすタイプね。週の半分以上料理の当番で、私やヨシユアが着ている服とかもあいつお手製なのよ。まあ、たまにおちよくるのが許せないんだけどね」

二人しかいないからといって散々愚痴を並べるエステル
それを聴いていてクローゼはクスクス笑っていたが、最後にポツリと言った

「……私たちの役、逆だった方が良かったかもしれませんね……」

「えっ？」

「ユリウスとオスカーですよ。エステルさんがオスカーの方が良かったような気がして……」

「え、どうして？ 確かにあたしが貴族出身のユリウスっていうのもちよっと似合わない気がするけど……」

「いえ、そういう事ではなくて。……あの、劇のラストで……」

その言葉でエステルも気付いたようだ
思い出すように呟く

「あ、ああ……。姫様がオスカーに、ってやつね」

「は、はい……」

そこでしばらく沈黙が続いたが、エステルがそれを笑い飛ばした

「よ、ヨシユアも役得よね。クローゼ、ひよっとしてヨシユアにされるの嫌とか？」

「と、とんでもないです！」

あわてて否定するクローゼ

「でも、何だかお二人に申し訳ないような気がして……」

「や、やだな。ジルみたいなこと言わないでよ。どうせヨシユアだってイクスみたいにしかなかったしを見ていないんだから……」

「そう……なんですか？　そう言えばイクスさんも凄いこと言ってみましたね」

「うう……ああ言ってくれるのは家族として嬉しいんだけど……それをあたしの前で言わないで欲しいわ……」

「何が言わないで欲しいって？」

ぬんと横からイクスの顔が現れる

いきなり眼の前がイクスの顔で一杯になり、慌ててエステルは飛び上がるように後ろに下がった

「うひゃあっ！？　……い、イクス驚かせないでよ！！」

「そこまで驚くことか？　……まあいいや。二人とも、動きに支障はないか？」

どうやら着ている衣装の最終チェックを聴きに來たらしいエステルとクローゼは一度ふう、と息を吐いてから答える

「ぜんぜん無いわよ。むしろ最初着たときよりも動きやすいわ」

「そうですね。ありがとうございますイクスさん」

「いいって。それが俺の仕事なんだし。　と、ヨシユア達だ」

その返答に笑顔で応える

それからすぐに入り口の方を向いた。入り口は開いており、ヨシユアとハンスがやって来ている

二人はエステル、ヨシユア、イクスの三人が寮に泊まるのが最後なのと、明日の景気づけに皆で夕食を食べないか、と誘いに来たのだ

「あ、そうなんだ。うん、あたしも賛成！」

「うー緒させて頂きます」

「俺も構わないぞ。……ところでヨシユア、ドレスの方は大丈夫か？」

「ふう……うん、装飾の重さも気にならないし、動きにも支障はない。はつきり言って完璧だよ」

まだ少し抵抗があるのか、ため息を吐きながら答えていく
イクスはうんうん頷きながら自分の服の評価に満足していた

「ところで……。ジルさんは一緒じゃないの？」

ヨシユアが気になっていた事を尋ねた
そう言えば、さきほどから誰も見てない

「つい先ほど学園長に呼ばれましたけど……。私、ちょっと呼んできませんね」

「あ、あたしも行く！ ヨシユア達は先に食堂で席を取っててよ」

「うん、判った。それじゃ、イクス、ハンス、食堂に行こうか」

「了解。あの人、料理上手いもんな。しかも美味しい」

「がってんだ、大将」

「誰が大将だよ……」

最後にハンスにツツコンでから、ヨシユアとイクス、ハンスは一足先にクラブハウスにある食堂に向かった

それを見てまた微笑むエステル

「ふふ、あの三人も仲良くなったみたいね。ヨシユアって、なかなか人を寄せつけない所があるからちよつと心配だったけど……」

「くす……」

「え、どうしたの？」

「いえいえ、何でもありませんよ」

「んー、まあいいや。とりあえず着替えましょ。この恰好で歩き回ったらさすがに恥ずかしいもんね」

「ふふ、そうですね」

そう言つて舞台裏で制服に着替えた後、エステルとクローゼはジルを迎えに行くのだった

「なるほど……。それはいいアイデアですよ！ さすが学園長、冴えてますねえ」

コリンズとジルしかいない学園長室でジルが黒い笑みを浮かべながらくくく、と笑っている

コリンズはいつも通り穏やかな顔で笑みを返す

「ははは……。おだてても何も出んよ。それでは、リストの方は君に任せても構わないかね？」

「はい、任せてください！」

と、二人の会話が一段落した時、

「失礼します」

「あ、すみません……。まだお話中でしたか？」

エステルとクローゼが入ってきた

会話中だった事に気付き、部屋を出ようとする二人にコリンズは止める

「いやいや。ちょうど終わったところだよ。実はなあ……」

「ああ、学園長！ 喋っちゃダメですつてば！ 明日の楽しみが減っちゃうじゃないですか！」

ジルが慌ててコリンズに口止めの釘を刺す

「な、なんなの？ あからさまに怪しいわね」

「ジルったら……。また何か企んでいるの？」

「ふっふっふ……。それは明日のお楽しみよん。それより、どうしたの？ ひよっとして私に用？」

「ええ、実は……」

二人はヨシユア達から明日の景気づけを兼ねて食堂で夕食会に誘われた事を説明した

「あら、いいじゃない。それじゃ、明日の学園祭の成功を祈って騒ぐとしますか。パーツとやりましょ、パーツと！」

「ふふ、あまり羽目を外して明日に差し障りがないようにな」

「はい」

「それじゃ、ジル。食堂に行こっか」

「うん、行きましょ」

最後にコリンズに一礼してから三人は部屋を後にした

「やつほ　連れてきたわよ」

「ふっ、みんなお疲れ」

「お疲れ、ジルさん」

「よう、待ってたぜ。さっそく料理を注文するか？」

待ってた三人は既に六人分の席を用意して待っていた

「あゝ、もうお腹ペコペコよ。劇の仕上げに加えて、今日も一日、学園中を走り回ってたし……」

「ふふ……。でも、それも今日で終わりね」

「そうよね、ホント。気合を入れ直さなくちゃ。新しい仕事も入ったことだし……」

「新しい仕事？　なんだそりゃ？」

生徒会の仕事だと思い、ハンスが訊ねる

「うん、あとで相談するわ。　じゃ、学園祭の成功を祈って今日はパーツと騒ぐわよ！　エステル、ヨシユア君。明日はよろしく頼んだからね！　イクス君だけは悪いけど今日中に衣装の最終チェックをお願い！」

「うん、任せておいて！」

「精一杯頑張らせてもらおうよ」

「委細承知。やっと反動も引いたし、日付が変わる前に終わらせてやるぜ」

その夜、エステルたちは食堂でにぎやかな一時を過ごし

最後に、劇の成功を祈ってソフトドリンクで乾杯した
寮に戻ってから、明日のためにイクスを除き、早めに眠りにつくエ
ステル達だった

そして、学園祭当日

待ちに待ったお祭りに学生も一般人も浮かれそうなほど笑顔で園内
を散策していた

ある者はメイド衣装に扮し、呼び込みを

ある者は制服のまま自分の担当時間までゆっくりと楽しみ

ある者はメイドが働く喫茶店にメイドがいて驚いたり

ある者はアレが食べたいと親に頼み

ある者は祭りだからと財布の紐が緩くなっていたり

華やかな一日を楽しんでいた

一方　そんな華やかさとは裏腹に、生徒会室は戦場と化している

「大変なんだ生徒会長！　実は　」

「会長！　　が　　なんです！　　どうしたらいいんですか!？」

「会長！」

「会長！」

これからどうすればいいか、生徒会に訊きに来る生徒が後を絶たない
だが、生徒会長　　ジルはハンスと協力してその全ての事態に対
応していた

「じゃあ……警備役の子を二人そっちに移動してちょうだい！ 足りないなら倉庫から取ってきて。 の在庫は左から二番目。それは〳〵にして。 ああ、ちょっと貴女、三十分後に来客来賓へのアウンズをお願い！」

普段からは信じられないほどの確な指示にエステルとヨシユアはクローゼと共に部屋の端っこで啞然と見ていた
ちなみにイクスは朝から姿を見せていない。 どうやら衣装の方で何かあったらしい
と、そこへジルが素早く三人に近寄る

「ごめんねー。 やっぱ私達は無理だわー。 劇の時間までそっちで楽しんできて」

「や、やっぱり……分かった」

「あ……うん、ごめんね」

「ま、俺たちもヒマを見て適当に楽しませてもらうさ。 あ、そうだヨシユア……。 来場者の中に俺好みの女性を見かけたらこっそり教えに来てくれよ？ 抜け出して口説きに行くからさ」

ハンスもヨシユアに近寄ると、思い切り女性陣に聞こえる声量で耳打ち（？）する

「はいはい、分かったよ。 美人で背が高くて大人の魅力を備えたお姉さんね」

「おお、それでこそ我が友だ」

「まったく、男ってやつは……」

「うーん、理解に苦しむわね」

「クスクス……」

女性陣は呆れて苦笑している

ジルとハンスの好意を受け、楽しく見て回っている三人
クローゼの所属するフェンシング部の出店で甘い物を堪能したり、
喫茶店でメイベル市長やメイドのリラ、ナイアルに再会したり、社
会化教室で研究を覗き、エステルは頭が痛くなったり
楽しい一時を過ごしていた
次にどこに行こうか話し合っていると、

「あ、クローゼお姉ちゃん！」

後ろから声を掛けられた

振り向くと、そこにはクラム、マリイ、ダニエル、ポーリイ、そし
てテレサがやって来ていた

「皆！ 来てくれたの？」

「あつたり前じゃん！ クローゼお姉ちゃんの劇、楽しみにしてた
んだから」

クラムが満面の笑みを浮かべながら当たり前だと言い切る

「よく来たわね、チビっ子ども」

エステルも嬉しそうに駆け寄る

「どう、楽しんでるかい？」

「うんー！ すっごく楽しいよ」

「ぼく、いっぱいお菓子たべちゃった！」

「あんたはちょっと食い意地はりすぎだつてば」

ポーリイはえへ、と頷き、ダニエルは相変わらず食中心の事を言い、マリイがそんなダニエルを嗜める

「ふふ、こんにちは」

「先生……こんにちは」

「今日は招待してくれて本当にありがとうね。子供たちと一緒に楽しませてもらってますよ」

いつもの笑みを浮かべながらテレサはお礼を言う
それに釣られて、クローゼも微笑む

「なあ、クローゼ姉ちゃん。姉ちゃんが出る劇っていつぐらいに始まるのさ？」

「あたしたち、すっごく楽しみにしてるんだから」

クラム達が訊ねる

「そうね……。まだ、ちょっとかかるかな。ちなみに、私だけじゃなくてエステルさんたちも出演するのよ？」

「ほんと？ わあ、すっごく楽しみ〜！」

「ヨシユアちゃん、どんな役で出るのー？」

ポーリイがヨシユアが一番嫌なことを訊いてきた
それに少しピシッと笑みが固まる

「えっと……。何て言ったらいいの……」

ヨシユアは答えることができない。っていつか答えたくないだろう

「あれ？ イクス兄ちゃんは？」

唯一いないイクスに気付いたクラムがイクスの所在を訊く
と、そこへ、

「ふえ〜……。呼んだか〜？」

やっとイクスが現れた

いかにも眠そうと言った様子で眼を擦っている

「ちょっとイクス、今までどこに行ってたのよ？」

「昨日の時点で衣装に穴が開いててな……。すぐさま直してたん

だよ。つーか、穴開けたんなら正直に言いやがれってんだ」

ぶつぶつと文句を並べるイクスに苦笑する面々

「イクスちゃんはどんな衣装着るの〜?」

「あはは……。俺は出ないけど、衣装は見てのお楽しみな
それよりテレサ先生。まだ、マノリアにいるんスカ?」

「はい、宿の方のご好意で格安で泊めて頂いています。ですが……」

そこで言葉を区切る

やはりまだ子供達には言い出せてないのだろう

ヨシユアはちらりとイクスに目配せすると、子供達に話しかけた

「ねえ皆。劇の衣装、見たくない? 綺麗なドレスとか騎士装束が
いっぱいあるよ」

「綺麗なドレス!?!」

「騎士しょーぞく!?!」

マリイとクラムが誰よりも早く反応した

「おいおいヨシユアあ、今さっきお楽しみと言った俺の言葉を破壊
する気か?」

「いいじゃないか。この子達ぐらいならサービスしたって」

「ふう、まあそうだな。いいぜ。あ、でも俺も行くからな」

「分かった。それじゃあ皆、特別に劇の前に見せてあげるよ」

二人の見事な演技に喜びだす子供達

「やったあ！」

「ポーリイもいくー」

そう言っつて全員を連れて行き、エステルを隣を通ろうとした瞬間、そつと耳打ちした

「（舞台の控え室にいるからあとからゆっくり来てよ）……それじゃあ付いて来て」

ヨシユアとイクスは子供達を連れて講堂に向かうのだった
残されたテレサは察してくれた二人に心の中でお礼を言う

「ふふ、ヨシユアさんは本当に気が利く子ですね。ちよつと、子供達の前では言いづらいことだったので……」

「それじゃ、ひよつとして……」

エステルもようやくわかったようだ

「ええ、市長のお誘いを受ける決心がつきました。これ以上、マノリアの方々に迷惑をかけられませんから。今日の学園祭が終わったらあの子たちにも打ち明けます」

「そう、ですか……。寂しくなるけど……仕方ありませんよね……」

クローゼが俯く

やはり納得は出来ても寂しくは感じるのだろう
そんなクローゼにやはりテレサは微笑む

「ふふ、そんな顔をしないで。王都とはいっても飛行船を使えばすぐの距離です。それに私、王都に行ったら仕事を捜そうと思っています。ミラを貯めて、いつかきつと孤児院を再建できるように……」

「院長先生……」

「さてと……。あの子たちの後を追いますか。ヨシユアさん達に任せておくわけにはいきませんかからね」

また後でね、と言い残し去っていくテレサ

しばらく周りの喧騒がはつきりと聞こえてくる

エステルはクローゼの気持ちを察しているのか、ただ一言、

「行つてらっしゃい」

と、告げた

「ッ！ すみま……」

エステルに感謝しながらクローゼは口元を押さえながらどこかへと走っていく

分かつている　泣きたければ、泣けば良いんだから
そんな後ろ姿を眺めていると、不意に、

「おや……エステルさん？」

そう名前を呼ばれた

振り向くと、喫茶店が使用している外テーブルに座った男性が手を振っている

近付いてみると、何とロレント、ボースで出会ったアルバだった

「あ、アルバ教授？」

「驚きました。むぐむぐ……まさか、君がこの学校の生徒さんだったとは」

食事中のようで話の合間にスプーンを口に運んでいる

「違うのよ、これは仕事で……。教授こそこんな所で何を……って訊かなくてもいっか」

「もぐもぐ……そんな事言わずに訊いてくださいよ。実はこのルーンアン地方にも四輪の塔の一つ、《紺碧の塔》がありましたね」

「あー……やっぱり……で、謎は解けないと」

「ご明察です。そこで何か資料はないかはこの学園に来たんですが……学園祭でお財布の心配なしに食事に取りつけました」

「あはは……本当に熱心ねアルバ教授」

「当たり前ですよ、何年もずっと研究を続けてましたからね」

それからエステルは他愛無い話をクローゼが戻ってくるまでアルバと続けた

それが寂しそうなエステルを明るくさせようとしたアルバなりの方法と気付いたのは、彼と別れてからだった

数十分後

衣装を見せてあげていたヨシユアとイクスに合流したエステルとクローゼは子供達と別れ、舞台裏に集まっていた

既に講堂は暗くされ、観客が集まっている

それを舞台の袖から覗いていた

「うつわ……。めちゃめちゃ人がいる……。あう、何だか緊張してきた」

戻ってくると、バクバク鳴っている胸を押さえ深呼吸をする

「大丈夫ですよ、エステルさん。あれだけ練習したんですから」

「それに、劇が始まったら他のことは気にならなくなるさ。君って、一つの事にしか集中できないタイプだからね」

「むっ、言ってくれるじゃない。でもまあ、そのカッコじゃ何言われても腹は立たないけど」

「う……」

それはこの場の全員が同感した

「じゃあイクス君、手筈通りお願いね」

さらに端っこではジルがイクスに何かを頼んでいる

「まあ……ヨシユアみたいに顔を出すわけじゃねえしいけどさ…
…好きにして良いんだよな？」

「もちろん」

じゃあ、承知

そう言っただけイクスは誰もいない反対側の物置き場に向かう
それを見て、パンパンとジルが喋っている者達を静かにさせる

「はいはい。痴話ゲンカはそのくらいで。……今年の学園祭は大盛況よ。公爵だの市長だのお偉いさんがいるみたいだけど私たちが臆することはないわ。練習通りにやればいいとのこと」

「俺たち自身の手でここまで盛り上げてきた学園祭だ……。最後まで、根性入れて花を咲かせてやるとしようぜ！」

「「「「おっつー！」「」「」

大変お待たせしました

ただ今より、生徒会が主催する劇、《白き花のマドリガル》を上演
します

皆様、最後までごゆっくりお楽しみください

第二章 く白き花のマドリガル memory…… (前書き)

今回は久し振りに悪戦苦闘でした

最初は二人を姫としてダブルハッピーエンドにしようと思いましたが……

それ、もうやっちゃってるっ

投稿直前になって気付きました

それから二ヶ月程考えましたが、思い浮かばず、先に二章完結を済ませてしまいました(完成には程遠い箇条書き状態ですが)

最近になってようやく思いつき、こんな風になりました

それではどうぞっ

第二章 く白き花のマドリガル memory…???

未だざわめきが支配する中、まだ誰もいない、幕も上がっていない舞台の中央にスポットライトが点きました

そこへ観客達の視線が集中します

ですが誰も出て来ません

誰もが奇妙に思ったその時、舞台の袖から一人の語り手が現れます
白いローブを纏い、長い銀髪に顔を隠したその語り手は、ライトの点いた場所まで静かに歩いて行きます

そこで立ち止まると、

「さあさ、お立ち会い」

パン、と手を一つ叩き、いかにも大げさな口調と身振りで、話し出しました

その光景とあまり聞いた事がない言葉遣いに観客は言葉を失っていきます

「これから始まるのはね、貴族と平民の争いに巻き込まれた二人の騎士と一国の姫による恋の物語さ」

観客からは語り手の顔ははっきり見えません

だけど、その立ち振る舞いはまるで シエロ 道化のようです

呆気を取られながら、語り手の口上に耳を傾けています

「争いの中にある恋はいつも叶う事はないと思うかい？ いやいや、そう思っただけだろうねえ。二つの勢力の対立は日増しに激化して誰にも止められない。王家や教会の仲裁もいつも水の泡。これじゃあどんな事が起きても二つの勢力はぶつかると思うだろう？ でも

ね、あったのさ。この恋があったから……いいや、この恋じゃないと出来なかった世にも奇跡な、そんな物語が、さ」

くるりとその場で回ってその場に片膝だけでひたひた跪きます

「さあさ、始めましょう、始めましょう。七耀暦1100年代、格蘭セルの空中庭園からこの物語を始めましょう」

そう言い残し、語り手は顔を見せずに舞台の袖に消えていくのでしたその瞬間、淡く舞台全体を照らし出します

その中央には白い……光に反射され、眩しくない程度の銀色を放つドレスを纏ったお姫様がいました

このお姫様こそ、白き姫 セシリア姫でした

セシリア姫は黙ったまま後ろを向き、お月様を見ています

「街の光は、人々の輝き……。あの一つ一つにそれぞれの幸せがあるのですね。ああ、それなのにわたくしは……」

憂いを帯びたような声で悲しみに浸るセシリア姫

そんなセシリア姫に、お付きの侍女が二人近寄ってきました

その二人を見て、観客はビックリ。何と侍女達は 二人とも男だったのです

これには語り手の時とは違った意味で言葉を失っています

「姫様……。こんな所にいらっしやいましたか」

「そろそろお休みくださいませ。あまり夜更かしをされてはお身体に障りますわ」

「いいのです。わたくしなど病にかかれば……そうすれば、この国

の火種とならずに済むのですから」

ですがこの二人。そんな事は気にしないとばかりに言葉を紡いでいきます

セシリア姫も同じように言葉を紡ぎました

これに困ったのは観客の皆様。何て表現すればいいか分からないのです

「そんな事をどうか仰らないでくださいませ！」

「姫様はこの国の至宝……よき旦那様と結ばれて王国を統べる方達なのですから」

「わたくし、結婚などしません。亡きお父様の遺言とはいえこればかりはどうしても……」

ですが、ご安心を。固まってしまった観客は誰かが何か行動すればすぐにそれを真似ると言うもの

その言葉どおり、誰かが吹き出した途端、釣られるように爆笑、失笑、苦笑の渦が講堂を包み込みます

「どうしてでございますか？ あの立派な求婚者が二人もいらつしやるのに……一人は公爵家の嫡男にして近衛騎士団長のユリウス様……」

「もう一人は平民出身ながら帝国との紛争で功績を上げられた猛将オスカー様……」

やっとここで少し侍女達の頬にも赤みが差して来ました
ただそこは物語の人物。しっかりと自分の言葉は言っています

例え、後ろから

「何あれ！？ 男！？」

「何で！？ どうして女装してるの！？」

「ええつ、男女逆転！？」

などなど言われても気にしません

じゃあ、あのお姫様も？ と言う声が上がります

そこでやっとセシリア姫は動きました

「ええ……彼らが素晴らしい人物であるのはわたくしが一番良く知っています」

振り向いたそのお顔は、正にお姫様です

清流のように清らかに流れる御髪^{おくし}。見るものを魅了するお顔

これがセシリア姫です

「ああ、オスカー、ユリウス……わたくしは どうすればいい
のでしょうか？」

胸の前で手を祈るように絡め、祈るように座り込んだセシリア姫

その美しさに、見た人達は老若男女問わず、頬に赤みが差しています

舞台は変わり、どこか薄暗い路地の裏

そこに隠れるように語らう二人の騎士がいました

「覚えているか、オスカー？ 幼き日、棒切れを手にしてこの路地裏を駆け回った日々のことを」

紅い騎士服を纏っているのが、近衛騎士団長ユリウス

「ユリウス……。忘れることができようか。君と、セシリア様と無邪気に過ごしたあの日々……。かけがえのない自分の宝だ」

蒼い騎士服を纏っているのが、猛将と言われるオスカーです

お二人は、敵同士という間ながらこうして度々、お忍びで話をされています

「ふふ、あの時は驚いたものだ。お忍びで遊びに来ていたのが私だけではなかったとはな……」

「舞い散る桜のごとき可憐さと清水のごとき潔さを備えた少女……。セシリア様はまさに自分達にとっての太陽だった」

昔を思い出すように微笑みながら懐かしく話されるお二人ですが、それも次の話題で暗くなってしまいます

「だが、その輝きは日増しに翳^{かげ}りを帯びてきている。貴族勢力と平民勢力……。両者の対立は避けられぬ所まで来ている。姫の嘆きも無理はない……」

「そして……。ああ、何という事だろう。その嘆きを深くしているのが他ならぬ我々の存在だと……」

自分達の争いのせいで愛するセシリア姫を苦しめていると分かって

いるお二人は悲しげに呟きます

ですが、言葉にしても、何かを変えることは出来ませんが、それが分かっているからこそお二人は悩みました

どうすればセシリア姫の嘆きを癒して差し上げられるか、と

「ユリウスよ、判っておろうな。これ以上、平民どもの増長を許すわけにはいかんだ。ましてや、我らが主と仰ぐ者が平民出身となつた日には……。伝統あるリベールの権威は地に落ちるであろう」

しばらくが経つたある晩

貴族勢力筆頭のラドー公爵　　つまりは紅騎士ユリウスの父

が敵かに言いました

「お言葉ですが、父上……。東に共和国が建国されてから十年ほどの年月が流れました。最早、平民勢力の台頭も時代の流れなのではないかと」

紅騎士ユリウスはどうにか争いを止めたい思いで父、ラドー公爵を説得しようとしてました

しかしラドー公爵は、紅騎士ユリウスの言葉を聞いた途端、怒り出しテーブルに置いてあったワインを壁に叩き付けました

「おぞましいことを言うな！　何が自由か！　何が平等か！」

紅騎士ユリウスに詰め寄り、怒鳴り続けるラドー公爵
そこに父としての面影はありません

ただ、貴族としての面目を守りたいだけに動いたお人形みたいでした

「高貴も下賤げせんもひとまとめにして伝統を捨てるそのあさましさ。帝国の軍門に下った方がはるかにマシと言うものよ！」

「父上！」

同じ頃、平民派の部屋でも同じやり取りが行われていました

「オスカー君。君には期待しているよ王家さえ味方に付けられれば貴族派を抑えることができる。そうすれば、我々平民派が名実ともに主導権を握れるのだ」

平民派代表のクロード議長がどこか含むように言いながら蒼騎士オスカーの肩を叩きます

ですが蒼騎士オスカーは納得できません。いくら戦いであっても関係ない人を巻き込みたくはないからです

「しかし議長……。自分は納得できません。このような政治の駆け引きにセシリア様を利用するなど……」

「フフ、なんとも無欲な事だな。いくら名目上の地位とはいえ王となるチャンスだというのに。君が拒否するといっているのであれば流血の革命が起きるといっただけ……。貴族はもちろん、王族の方々にも歴史の間に消えて頂くだけのことだ」

「議長！」

「流血の革命だけは起こさせるわけにはいかない……。ユリウスもセシリア様も死なせるわけにはいかない……。自分は……。いったいどうしたらいいんだ」

あれからクロード議長を説得しようとは何度も話し合った蒼騎士オスカー

ですがクロード議長は考えを変えません

そんな困り果て悩む蒼騎士オスカーのところにふらふらと酔っ払いが踊りながらやってきました

「ういっく……。うつつ……。だめだ……。気持ち悪い……」

「おっと、大丈夫か？」

元来、お優しい性格であった蒼騎士オスカーは酔っ払いの元に寄り、と彼の背を優しくなでました

「あまり飲み過ぎるものではないな。いくら春とはいえこんな所で寝たら風邪を引くぞ」

「うつつ……。親切な騎士様……。どうもありがとうござえますだ」

「騎士様はやめてくれ……。自分は大した人物ではない。何をすべきかも判らずに道に迷うだけの未熟者だ……」

ため息を吐きながら弱音も吐く蒼騎士オスカー

その時でした

「まったくその通りだな」

「なに？」

突然、酔っ払いが擦っていた蒼騎士オスカーの腕をナイフで切ったのです

驚きながらも蒼騎士オスカーは後ろに跳び、レイピアを抜きます

「くっ、利き腕が……」

「けけけ……。こいつには痺れ薬が塗ってある。大人しく観念してもらおうか」

「貴様……。何者かに雇われた刺客か!？」

「あんたが目障りというさる高貴な方のご命令でなあ。前払いも気が良かったし、てめえには死んでもらうぜっ!」

軽快な動きで蒼騎士オスカーに詰め寄ります
蒼騎士オスカーの運命は……

時を同じくして、ここはグランセル城
その玉座で紅騎士ユリウスは何年か振りにセシリア姫にお会いしました

「久しぶりですね、姫」

「ユリウス……。本当に久しぶりです……。今日は……。オスカーと一緒にではないのですね。お父様をご存命だったころ……。宮廷であなた達が談笑するさまは侍女たちの憧れの的でしたのに」

思い出すように語るセシリア姫

ですが紅騎士ユリウスの顔はまったく変化しません

「……姫もご存じのように王国は存亡の危機を迎えています。私と彼が親しくすることは最早、かなわぬものかと……」

「……………」

「今日は姫に、あることをお願いしたく参上しました」

「お願い……ですか？」

彼には珍しい頼み事

セシリア姫としては彼の力になってあげたいと思いだんな願いか訊ねました

ですがそれは、

「私とオスカー……。近衛騎士団長と若き猛将との決闘を許していただきたいのです。そして勝者には……。姫の夫たる幸運をお与えください」

「!?!?!」

叶える事の出来ない願いでした

「さあさ、お立ち会い」

また突然と言うように語り手がパンと手を叩きながら出てきました

「貴族と平民の争いが酷くなるに重なるように、二人の騎士はついに決闘をすることになったのさ。やめさせたいお姫様もなんにも言えない。だって二人の騎士の眼にはもう、相手しか映ってなかったから」

舞台には上がらずただ満足いくまで話す語り手はどこか楽しそうです
ですが、その顔は見えません。だから、本当にどんな感情が浮かんでいるのか分かりません

喜んでいるのでしょうか？ いいえ、不幸を喜べません

怒っているのでしょうか？ いいえ、怒る理由がありません

哀しんでいるのでしょうか？ いいえ、言葉に哀しみは微塵も感じられません

楽しんでるのでしょうか？ いいえ、戦争は楽しむものではありません

はい、分かりません。分かるのは語り手本人だけです

「さあさ、終わりましたよ、終わりましたよ。王立競技場で雌雄を
決する決闘を最後にこの物語を終わらせましょう」

格蘭アリーナ

「わが友よ。こうなれば是非もない……。我々は、いつか雌雄を決する運命にあったのだ。抜け！ 互いの背負うもののために！ 何よりも愛しき姫のために！」

ピンとレイピアを空に向けるように構える紅騎士ユリウス

「運命とは自らの手で切り拓くもの……。背負うべき立場も姫の微笑みも、今は遠い……」

しかし、蒼騎士オスカーは構えず立ち尽くしています

「臆したか、オスカー！」

「……だが、この身に駆け抜ける狂おしいまでの情熱は何だ？ 自分もまた、本気になった君と戦いたくて仕方ないらしい……」

燃えるような思いに頭かぶりを振るいます

そして、蒼騎士オスカーも静かにレイピアを抜き、構えました

「革命という名の猛たけき嵐が全てを呑み込むその前に……。剣をもつて運命を決するべし！」

「おお、我ら二人の魂、空の女神もご照覧あれ！ いざ、尋常に勝負！」

「応！」

叫び、顔の横で水平に構える二人

どんな多くの観客がいようと、もう二人には眼の前の敵しか見えておりません

そして 決闘が始まりました

滑るように芝生を駆けると、レイピア 刺突剣の名前に恥じない鋭い突きを放つ紅騎士ユリウス

蒼騎士オスカーはその突きを磨き上げられた実力を以って突きで防ぎます

後ろに跳んだ紅騎士ユリウスを追うように蒼騎士オスカーは追撃を仕掛けますが、紅騎士ユリウスは軽やかに舞い、防いでしまいました

「やるな、ユリウス……」

「それはこちらの台詞だ。だが、どうやら……いまだ迷いがあるようだな！」

紅騎士ユリウスはそう言うと、レイピアを弾くと、先ほどよりも素早く、猛攻に蒼騎士オスカーに斬りかかります

閃ッ！

煌

戟ッ！

躊躇していた蒼騎士オスカーは防戦一方になってしまいました

「どうしたオスカー！ お前の剣はそんなものか！？ 帝国を退けた武勲はその程度のものだったのか！」

「くっ……おおおおおおおおおおおおおおおおおおおお

っ!!」

そう言われては自分の誇りが泣いてしまいます。蒼騎士オスカーは叫びながら猛攻を弾き、飛び退ると、すぐに攻勢に回ります

煌

戟ッ!

それが防がれると今度は自分達をぐるりと囲む壁を使って後ろに回りこんで、斬り掛かりました

煌

煌ッ

戟ッ!

ですが、紅騎士ユリウスはそれを背後を見ずに防いでしまいましたそしてどちらにも同時に距離を置きました

「さすがだユリウス……なんと華麗な剣捌きな事か」

親友の腕を褒め称える蒼騎士オスカーと、突然顔を顰め、腕を押さえました

「く……」

「オスカー、お前……腕に怪我をしているのか!？」

「問題ない……かすり傷だ」

「いまだ我々の剣は互いを傷つけていない筈……ま、まさか決闘の前に……」

カスリ傷と言い張る蒼騎士オスカーでしたが、その腕はわずかに震えています

彼ほどの騎士の腕が震えるという事はかすり傷では説明がつきません
すぐに紅騎士ユリウスは、痺れ薬であると共に誰の差し金か分かってしまいました

彼の視線で怒ったのはクロード議長でした

「卑怯だぞ、ラドー公爵！ 貴公の謀り事か！？」

「ふふふ……言いがかりは止めてもらおうか。私の差し金という証拠はあるのか？」

ラドー公爵は笑いながら答えます

例えラドー公爵が差し金だったと言えども、その証拠がなければこれ以上追求できません

「父上……なんということを」

「いいのだ、ユリウス。これも自分の未熟さが招いた事。それに、この程度の怪我、戦場では当たり前なものだろう？」

「……………」

「次の一撃で全てを決しよう。自分は……君を殺すつもりで行く」

「オスカー、お前……」

紅騎士ユリウスは蒼騎士オスカーの気持ちを理解し、

「わかった……私も次の一撃に全てを賭ける」

理解したからこそ決着を望みました

誰のためでもない、自分達だけの決闘として終わらせるために
そう言くと二人は一番端まで下がってレイピアを自分の前に掲げま
した

「さらなる生と、姫の笑顔。そして王国の未来さえも……生き残つ
た者が全ての責任を負うのだ」

「そして敗れた者は魂となって見守っていく……それもまた騎士の
誇りだろう」

「ふふ、違くない」

それが二人にとって最後の会話でした
静かに二人は眼を閉じ、自分の想いを廻めぐらせます

「……………」

そして、剣を構えると叫びながら

「はあああああああああああああああああああ……」

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおお……」

想いを突き出しました
その時でした

「だめー……っ!!」

という聞き覚えのある少女の声が聞こえた気がしました
紅騎士ユリウスと蒼騎士オスカーは互いに背を向け合っており
その真ん中にはなんと セシリア姫がいました

「あ……」

「セシ……リア？」

二人は振り向きすぐに驚きだし、倒れそうになるセシリア姫を蒼騎士オスカーが抱きとめます

「ひ、姫……っ!!」

「セシリア、どうして……君は欠席したはずでは……」

「よ、よかった……ユリウス、オスカー……あなた達の決闘なんて見たくありませんでしたが……どうしても心配で……戦うのを止めて欲しくて……ああ、間に合ってよかった……」

二人の一撃をその身に浴び、痛みが彼女自身の身体を蝕んでいこうとセシリア姫は二人の身を案じました

それを見て、もう誰も争いの事なんか頭にありません
あるのは眼の前で倒れたセシリア姫の事だけ

「セシリア……」

「ひ、姫……」

セシリア姫は民衆の方を向くと、

「皆も……聞いてください……。わたくしに免じて……。どうか争いは止めてください……。皆、この地を愛する大切な仲間ではありませんせんか……。ただ……。少しばかり……。愛し方が違っただけの事……。手を取り合えば……。必ず分かり合えるはずです……」

そう凜とした声で諭しました

「王女殿下……」

「もう……。それ以上は仰いますな……」

ラドー公爵とクロード議長はそれぞれ頭（カブ）を垂れながら嘆きます

「ああ……。眼がかすんで……。ねえ……。二人とも……。そこに……。いますか……。?」

「はい……」

「君の側にいる……」

「不思議……。あの風景が浮かんできます……。幼い頃……。お城を抜け出して遊びに行った……。路地裏の……。オスカーも……。ユリウスも……。ティアもあんなに楽しそうに笑って……。わたくしは……。二人の笑顔が

『……確かに私はあなた達に器としての肉体を与えました。しかし、人の子の魂はもつと気高く自由であるはず。それを貶めおとしているのは他ならぬ、あなた達自身です』

「ま、眩しい……」

「なんて綺麗な声……」

「おお……なんたること！ 方々、恐れ多くもエイドスが降臨なさいましたぞ！」

司教様が辺り一体に向かって限界ギリギリの声で叫びます

「これが女神……」

「なんとという神々しさだ……」

『若き騎士達よ。あなたたちの勝負、私も見せてもらいました。なかなかの勇壮さでしたが……肝心なものが欠けていましたね』

「仰るとおりです……」

「全ては自分達の未熟さが招いた事……」

静かに慟哭する騎士達

『議長よ……あなたは身分を憎むあまり貴族や王族が同じ人であることを忘れてはいませんか？』

今度はクロード議長に話しかける女神エイドス

「……………面目次第ありません」

『そして公爵よ……………』

今度はラドー公爵に話しかけます

『あなたの罪はあなた自身が一番良く判っているはずですね？』

「……………」

ラドー公爵は黙っていましたが深く頷きました

『そして今回の事態を傍観するだけだった者達……………』

最後に全ての者に話しかけました

『あなた達もまた大切なものが欠けていたはず。胸に手を当てて考えてごらんなさい』

そう言われ全ての人が胸に手を当てて考え始めます

『ふふ、それぞれの心に思い当たるところがあったようです。ならば、この国にはまだ未来が残されているでしょう。今日という日のことを決して忘れることがないように……………』

そう最後に呟くと、声は光と共に消えていってしまいました
その時でした

「……………ん……………」

奇跡が起こりました

何とセシリア姫が眼を覚ましたのです

「あら……………ここは……………」

「ひ、姫!?!」

「セシリア!?!」

その場にいた全員が驚きの声をあげたました
当然です。セシリア姫は死んでしまっていたのですから

「まあ……………ユリウス、オスカー……………まさかあなた達まで天国に来て
しまったんですか?」

「…………………………」

「こ、これは……………これは粉う方なき奇跡ですぞ!」

司教様が驚きと歓喜が混じった声で叫びます

「姫様!?! 本当に、本当によかった!?!」

立ち上がったセシリア姫に泣き叫びながら抱きつく侍女達

「きゃっ……………!?! どうしたのですか二人とも……………あら……………公爵……………
議長までも……………わたくし……………死んだはずでは……………?」

セシリア姫は辺りをきよろきよろしながら見渡します

そこは王立競技場であり、様々な人達が泣きながら喜びを表しています

セシリア姫にはもう何が何だか分かりません

「おお、女神よ！^{エイドス} よくぞ我が国の至宝を我らにお返しくださいました！」

「大いなる慈悲に感謝しますぞ！」

ラドー公爵もクロード議長も互いに互いを抱きしめながら喜んでます
もう争う気はないのでしょうか

「オスカー、ユリウス……あの、どうなっているのでしょうか？」

「セシリア様……もう心配する事はありません。永きに渡る対立は終わり……全てが良い方向に流れるでしょう」

静かに蒼騎士オスカーが言いました
ですが、

「甘いオスカー。我々の勝負の決着はまだついていなはずだろうか？」

紅騎士ユリウスがそれに反論しました

「ユリウス……」

「そんな……まだ戦うというのですか？」

「いえ、今回の勝負はここまでです。何せ、そこにいる大馬鹿者が
利き腕を怪我しておりますゆえ。しかし、決闘騒ぎまで起こして勝
者がいないのも格好が付かない。ならば、ハンデを乗り越えて互角
の勝負をした者に勝利を！」

「待て、ユリウス！」

蒼騎士オスカーが止めようとしたが、逆に紅騎士ユリウスに無
言で止められます

「勘違いするな、オスカー。お前の傷が癒えたら、今度は木剣で決
着をつけようではないか。幼き日のように、心ゆくまでな」

「そうか……ふふ……わかった、受けて立とう」

「もう二人とも……わたくしの意見は無視ですか？」

「そ、そういう訳ではありませんが……」

「ですが姫……今日のところは勝者にキスを。皆がそれを期待して
おります」

そう言いながら自分は離れる紅騎士ユリウス

あの怪我で自分と互角に渡り合ったのです。今回の勝者は蒼騎士オ
スカーに決まりです

「……判りました」

そう言うとセシリア姫は蒼騎士オスカーと静かにキスをしました

「きゃあきゃあ。お二人ともお似合いです」

侍女の黄色い声援に顔を赤くする蒼騎士オスカーとセシリア姫
それを見ながら紅騎士ユリウスは大声で叫びます

「空の女神もご照覧あれ！ 今日という良き日がいっまでも続きま
すように！」

「この国に永遠の平和を！」

「この国に永遠の栄光を！」

そんな大団円に観客が見蕩れている時でした

入り口近くで立っていた象牙色のコートを着た青年がそつと踵を返
します

あの語り手と同じ見事な銀髪です

「フフ……やはり最後は大団円か。だが……それでいい」

そう言って立ち去ります

こうして《白き花のマドリガル》は大好評のうちに幕を閉じました
同時に、学園祭の終了を告げるアナウンスが鳴り響き
来場客は、みな満足した表情で学園を後にするのでした

第二章　く白き花のマドリガル　memory……？（前書き）

遅くなりましたが、最新話お届けです

最近『crisis』、つまり『リリナのcrime』の番外編以外の作品が書けません

おかげで遅くなっていますが、少なくとも本作、二章まではもう少し早く出したいと思っています

それでは、どうぞっ

第二章 く白き花のマドリガル memory……？

舞台裏ではジルが出演者達をこれでもかって言うほど褒め称えていた

「いや、ほんとお疲れ！監督の私が言うのも何だけど、最高の舞台だったわよっ！」

「最初、男女が逆ということで笑われてしまったけれど……。みんな、劇が進むに連れて真剣に見てくれて本当によかった」

「うん、そうだね。あんな恰好した甲斐があったよ。もう二度としないけど……」

こりこりとはかりにヨシユアが未だにお姫様格好のため息を吐く

「はは、そんなこと言うなよ。写真部の連中が劇のシーンを何枚か撮っていたけど……。お前さんの写真がどれだけ売れるか楽しみだぜ」

「ハア、勘弁してよ……」

「エステル達の写真もすっごく売れると思うわよ。男子はもちろんだ。下級生の女の子あたりにもね。『お姉さま』なんて呼ばれちゃったりして」

「もう、ジルったら……」

「……………」

クローゼは苦笑する
が、エステルは下を向いたままだ

「あれ……。どうしたの、エステル？」

「ふえっ……。え、あの、何の話!？」

「いや……。大した話じゃないけど……。劇が終わってからボーツと
してるみたいだけど大丈夫かい？」

「ま、ハードな決闘だったから疲れちまったのも無理ないさ」

「調子悪いんだったら医務室に案内するわよ？」

「だ、大丈夫だってば！ これでも遊撃士なんだからこのくらいの
疲れ、日常茶飯事よ。ただ、気が抜けたっていうか、頭が混乱して
るっていうか……」

「あ……。エステルさん、もしかして……」

何かにクローゼが気付く

最後のアレのせいかもしれないと

「ち、違うんだからね？ 全然、そういうんじゃない……。あー
もう、とにかく全然問題ナシ！」

無理矢理話題を切り捨てるとそれよりも、と話題を変える

「ジルってば凄いな。あんな珍しい語り方をするなんて……」

それは白いコートを纏った銀髪の語り手の事だろう
元から語り手はジル担当だったのでエステルは感想を言ったが、

「へ？ ……ああ、あれね。あれ、私じゃないわよ」

「……………え？」

あっけからんと違うと言われポカンとするエステル
クローゼやヨシユア、ハンスまでも驚いている

「私じゃないって……………語り手はジルの担当でしょ？ 誰かと代わったの？」

「うん。 ほら、帰って来た。 お疲れー」

そう言っつて労う声を掛ける先には
何とイクスだった

「よっす。 成功してよかったな。 最高だったぜ」

「い、イクス!?!」

「そ。 やっぱもうちょっとインパクトが欲しくてイクス君に何かないか訊いたら、さっきの語り手をさらっとやってのけたのよ。 で、急遽語り手を代わってもらったの」

「そゆこと。 ヘアピース使って顔隠してたから男だとは思わなかっただろ」

イエイ、とブイサインをしながら笑うイクス

まさか裏方のイクスも出ていたとは
素直に驚くしかないエステル達

「ちょ、ちょっとイクス。じゃあもう一回やって見せてよ」

「別にいいけど？」

白いコートとヘアピースを物置に置くと、その場で片膝を着き、片腕を胸に、片腕を広げて
戸惑うエステル達に構わずイクスは話し出す

「さあさ、お立ち会い」

その台詞はお約束なのだろう
同じ台詞を言うがその後が異なっている

「今に続いている物語はね、二つの目的を持った少年少女の物語さ」

「え……それって……」

「ふふ、二つの目的を共に達成出来ないと思うかい？ いやいや、
そう思っただけで当然だろうねえ。一つの目的でも大きいのに、それを二
つ。誰から見ても無理があると思うだろうねえ。でもね、達成でき
るのさ。この少年少女なら……いや、少年少女だからこそ達成させ
ることが出来るのさ」

息を吐きながら立ち上がるイクス

その眼は「どう？」と問い掛けているようだ

思わずクローゼを最初にその場にいた全員が拍手をしてしまう
それほど彼の演技に無駄は無かったのだった

劇が終了し、着替えを済ませたエステル達は外で待っていたテレサ達と合流した

「テレサ先生！ 皆！」

一番早くクローゼがテレサ達に近寄っていく
クラムやマリイも同じように走って駆け寄る

「かつこよかったぜ姉ちゃん達！」

「ヨシユアちゃん、とっても可愛かったのー」

「うっとりしちゃった」

クラムとマリイはエステルとクローゼにそう言い、ポーリイとダニエルはヨシユアにそう言う
騎士組みはえへへ、と笑っているのだが、お姫様は嬉しいのか悲しいのか分からない笑みを浮かべる

「ははは、人気者だねーヨシユア姫」

「……そうそう、実はね、白いコートを着た語り手……イクスなんだよ」

「あっ、」

「えー、本当？」

「知ってるよー。イクスちゃんも可愛かったー」

「……………あはははは……………」

ポリーイには語り手がイクスだと分かっていたようだ
なかなか鋭い子である
そんな中、クローゼはテレサに話しかけた

「テレサ先生……………」

「ええ、クローゼ。本当に……………本当に素晴らしい劇でしたよ……………！
ルーンでのいい思い出になりました」

「ッ、先生……………！ 王都なんて飛行船に乗ればすぐの距離ですよ。
それにいつか……………きつとまた……………」

泣きそうになりながらも、必死に堪えるように言葉を紡ぐ
テレサも涙を堪えている
と、その時だった

「……………失礼するよ」

コリンズが校舎の方から現れた
後ろにはジルとハンスを伴っている

「まあ、コリンズ学園長……………」

「久しぶりだのう、テレサ院長。せっかく来て頂いたのに挨拶が遅

れて申しわけなかった」

コリンズはちらりと子供達を見る

彼らはヨシユアとイクスによって少し離されていた
そこで楽しく話している

二人の心遣いに感謝しつつもう一度テレサを見る

「とんでもありません……。本当に素晴らしいお祭りに招いていた
だいて感謝しますわ」

「ふふ、生徒たちも頑張った甲斐があるというものだ。……事情は
クローゼ君から聞いた。本当に大変なことになったものだ。そこで、
わしらも微力ながら力になればと思っただけ……」

「え……」

「ジル君」

「はい」

ジルはなにやら封筒を持っている

それをコリンズの声と共にテレサに手渡した

「どうぞ、お受け取りください」

「これは……？」

「来場者から集まった寄付金でちょうど百万ミラあります。孤児院
再建に役立ててください」

「ひ、ひやく万ミラ!!」

エステルはすつんとんきょうな声を上げる
百万ミラと言えば、以前オリビエがタダ飲みした《グランシヤリ
ネ》の二倍だ

「ど、どうしてこんな……?」

「今回は、たまたま公爵やボース市長など多くの名士が来場したか
らのう。たまたま例年よりも多く集まったのだよ」

「学園長……」

「そんな、いけません! こんなものは受け取れません!」

テレサが大慌てで封筒を返そうとする
が、コリンズが静かに手で制す

「遠慮する必要ありませんよ。毎年、学園祭で集まった寄付金は福
祉活動に使われているんですから」

ハンスも正当な理由を述べて言葉で制する

「孤児院再建に使われるのなら寄付した方々も納得しますって」

「でも……そんな……。ここまでして頂くわけには……」

「先生……どうか受け取ってください」

クローゼはテレサの手を自分の手で包み込む

困惑気味のテレサ

「クローゼ……………ですが……………」

「先生が戸惑う気持ちも判ります。でも……………どうか考えてみて欲しいのです。それだけのミラがあつたら孤児院を再建するのはもちろん、王都に行く必要もありません。あのハーブ畑だつて放つておかなくてもいいんです」

「……………」

「クローゼ君の言う通りだ。亡きジョセフ君と何よりも子供たちのために……………。あなたは拘こたわりを捨ててそのミラを受け取るべきだろう」

「ああ……………。もう……………何とお礼を言っているのか……………。ありがとう……………。本当にありがとうございます……………」

クローゼとの会話でも泣かなかつた涙が今、こぼれる
思わずエステルとクローゼも貰い泣きする

「グス……………よかつたあ……………」

「よかつ……………つく、先生……………」

「よしよし。あんたもよく頑張つたわねえ」

クローゼの頭を自分の胸に抱くジル

クラムは何故泣いているのか分からず、マリィに諭されている

「よかつたあ。これで一件落着よね、ヨシユア、イ……………」

二人の名を呼ぼうとするエステル
だが、振り向いた先には誰もいない
逆を見ても いない

「………………。ヨシユア!? イクス!?」

「ヨシユアちゃんとイクスちゃんはここにいないよエステルちゃん
?」

「え…………?」

そう言ったのは ダニエル
慌ててダニエルと近くにいたポーリイに事情を訊く

「あのねー、ヨシユアちゃんとイクスちゃん、銀色のお兄ちゃんを
探しに行ったんだよー」

「ぎ、銀色のお兄ちゃん…………?」

「うん。火事の際にポーリイ達を助けてくれたお兄ちゃんだよー。
さっきね、劇の所で見かけたのー。そう言ったらヨシユアちゃんと
イクスちゃん、慌ててどこかに行っちゃったー」

「ッ…………!」

ポーリイの正確な言葉に絶句する

二人は、訳の分からない、もしかしたら危ない『銀髪のお兄ちゃん』
を二人だけで探しに行ったというのか!?

シルの胸で泣いていたクローゼはそんなエステルに気付き、近寄る

「エステルさん、どうかしたんですか？」

「じ、実は……」

たった今ポーリイから聞いた事をクローゼに伝えるエステル
それを聞いてクローゼも少なからず顔を険しくする

「とにかくヨシユアさんとイクスさんを探しましょう」

「う、うん……嫌な予感がするわ。でもどこに行ったのかしら？」

「ちょっと待ってください。……ジーク！」

空に鋭く響く声

それを聞いてか、空からクローゼの腕に舞い降りて来る白ハヤブサ
のジーク

「ピユイ？」

「聞きたいことがあるの。ヨシユアさんがどこに行ったかわかる？」

「ピユイ」

心得た、とばかりにジークは一声鳴くと飛び上がり、真っ直ぐに目
的地に翔ける

その飛び去った先は 校舎裏

「相変わらず凄いわね。あれ、あっちの方角って……」

「ええ……。本館の裏手にある旧校舎の方です」

ジークを信じているクローゼに着いて行くようにエステルは旧校舎へと駆けた

元はテラスだった旧校舎の一箇所

そこは手入れが行き届いてないせいで雑草が荒れ放題に生え、昔の面影を消している

そんな誰も寄り付かないような場所にイクスとヨシユアはいた

「せつ！」

打ッ！

ヨシユアの双剣を振るう過程で鍛えた拳打が旧校舎を徘徊していた魔獣にめり込む

背中合わせにイクスが別の魔獣に蹴りを放つ

一般人ならば危険な魔獣もヨシユアとイクスに掛かれば大した事は無い

しばらく交戦を続けていれば、あちらから逃げ出していく

「ふう……大丈夫かいイクス？」

「ああ。だが、素手にアーツ無しはかなり不便だわ」

二人は自分の得物を寮部屋に置いてきている
だが、今の彼等に関係のある事は別にあった

「それより……気付いている……?」

「ああ……さっきまでであった気配が
無かったようになくなっ
ている」

「うん。……でも、まさか……」

「……心当たりがあるのか？ 俺は頭痛がしたから付いて来たが……」

立ち尽くしたまま考えるヨシユアとイクス
そこへ、

「ヨシユアーツ！ イクスーツ！」

聞き慣れた声が飛びこんで来た

振り返ると、エステルとクローゼがこちらに向かって走って来ている

「エステル……」

「クローゼ……」

「この〜！ アホちゃんがああああっ！！」

撃ッ！

走り寄ってきたエステルはあろうことか
そのスピードのまま 二人に飛び蹴りをかましてきた
ちなみに、中はバツチリ見えてしまった二人

「ほびゆらええええ!!?」

「よ、ヨシユアさん!? イクスさん!?」

思わず呆気に取られていたクローゼだったが、すぐに復活すると慌てて二人に駆け寄る

ヨシユアとイクス、両方とも呻いているが大怪我を負った様子は無い

「もう、あんまり心配かけないでよね! 銀髪男を追いかけたつて
いづからビツクリしちゃったじゃない。今のは勝手に追いかけた罰
よ!」

「いたた あれ……。何で知ってるんだい?」

「ポーリイちゃんが教えてくれたんです。あの子も見ていたらしく
……」

「ああ……鋭い子だったなあいつ。悪イ。それらしい後ろ姿を見か
けたからヨシユアと二人でここまで追ってきたんだが……。撒まかれ
たようだ」

イクスの謝罪と共に伝えられた言葉にエステルとクローゼは眼をま
ん丸にする

「まあ……」

「ヨシユアとイクスを撒くなんて、そいつ、只者じゃないわね。い
つたい何者なんだろ?」

「……わからない。ただ、孤児院放火の犯人じゃなさそうな気がする。あくまで、僕のカンだけどね」

「そっか……。それにしても……どうして二人で行動するかな？」

「本当にそうですよ。私たちに伝言するなりしてくればいいのに……」

「ごめん。心配かけたみたいだね」

「悪い。ちょっと焦ってな」

二人に詰め寄られ、もう一度謝るヨシユアとイクス

「べ、別に心配してないってば。あくまでチームワークの大切さを指摘しているだけであって……」

「うふふ、ウソばかり。さっきは、あんなに慌てていたじゃないですか？」

「そ、そんな事ないってば。そういうクローゼだって真剣な顔してたクセにさ」

「そ、それは……」

互いに顔を赤らめて喋る姿にヨシユアとイクスは苦笑する

「はは……。二人ともありがとう」

「んじゃ戻るか。着替えなきゃなんねえしな」

そうやって四人は旧校舎を後にするのだった

着替え、片付けを終えた頃、すでに日は傾き、空は紅に染まっていた
そんな中、校門の前にエステル、ヨシユア、イクス、クローゼ、ジ
ル、ハンスの六人がいた

「……せっかくだからもう一泊して行けばいいのに。これから学園
祭の打ち上げだってあるのよ？」

ジルとハンスは見送りに来ていた

「あはは……。残念だけど遠慮しとくわ。新米のクセに、あまりギ
ルドを留守にするのもなんだしね」

「今日中に報告したいから悪いけど、これで失礼するよ」

「今日までサンキューな」

三人ともそれぞれお礼を述べる

「ほんと、あんたたちってば一緒にいて退屈しなかったわ。また何
かあったら遠慮なく遊びに来なさいよね？」

「もちろん泊りがけでな」

「うん……ありがとう」

「ぜひ寄らせてもらおうよ」

「今度はもう少しゆっくりさせてもらおうよ」

「ふふ……。それでは行きましようか。早くしないと日が暮れてしまいますから」

「あなたはこれからマノリア村に行くのよね？」

「ジルはクローゼに訊ねる」

「クローゼはマノリア村にいるマリア達と会ってくるのだ」

「うん、先生たちと話したい事が一杯あるし……。外出許可を貰ってきちゃった」

「せっかくの打ち上げに揃って主役がいなくなるのはちょっと残念だけど……。ま、仕方ないよね。ゆっくり過ごしてきなさいな」

「そういや、院長先生達……。あんな大金を持ち歩いてちよつと危なくなかったか？」

心配そうに呟くハンス

それは心配いらないとばかりにエステルが答える

「あ、それは心配しないで。警備に来てた遊撃士のカルナさんが護衛を引き受けてくれたから」

「わざわざ学園長さんが頼んでくれたみたいだね」

「さすが学園長。やることにソツがないぜ。……よし……それじゃ

あ……」

「元気でね。エステル、ヨシユア。頑張って修行して正遊撃士を目指しなさいよ?」

「うん、まっかせて!」

「君たちも勉強、頑張ってね」

こうしてエステル達はしばらく寝食を共にしたジル、ハンスと別れた
また会う約束をして

「うーん……。数日間だけだったけどすごく楽しかったわね!」
もちろん授業を除いてだけだ

「おい……」

「なにムシのいいこと言ってるんだか……。本来は、授業が主で学園祭の方が特別なんだから」

エステルの言葉にすかさず弟達がツッコム
ここらへんはどんな所においても変わらないブライト家クオリティである

「そうなのよね。はあ、学生っていうのも意外とラクじゃないわ」

「ふふ……。……あら……?」

三人の様子を見て苦笑していたクローゼ
その時、何かに気付き、辺りを見渡した

「おろ……どうかしたかクローゼ？」

「いえ……。ジークがいる気配が近くに感じられなくて……。どこ
に行っちゃったのかしら？」

「ゴハンでも取りに行ってるんじゃないの？」

「はい……。そうかもしれません。すみません。変なことを言って……
。では海道に出るまで一緒にさせていただきます」

「うん のんびり行きましょ」

ゆっくりと数日の思い出を話しながら歩いていくエステル達
気が利くというわけではないが、それを邪魔する魔獣は一匹たりと
も現れなかった
歩き続けて数分
四人はメーヴェ街道に出た

「さてと、ここでお別れだね」

「はい……。この数日間、本当にありがとうございました」

「あはは、いいって。あたしたちも楽しかったし。それじゃあ……
先生とあの子たちによろしくね」

「今度来た時は俺がご馳走するよ」

「はい、必ず伝えます」

そうして別れようとした時

マノリア方面の街道から足音が聞こえ、

「おお、あんた達は！」

声を掛けられた

この場にいるのはエステル達だけだったので、振り向く
声を掛けてきたのは、マノリア村にいた青年

「あれ……」

「あなたは……確かマノリアに住んでいる……」

「そういうあんたたちは確か遊撃士だったな！ た、大変な事にな
ったんだ！」

かなり慌てていたのか膝が笑い、息も絶え絶えになっていた

「大変なこと……？」

「はあ、はあ、はあ……。ちょ、ちょっと待ってくれ。い、息が切
れて……。ふーっ、ふーっ……」

数秒間、息を吸い、吐いてを繰り返していた青年

呼吸が落ち着くと、一気に本題を捲し立てた

「……テレサ先生と子供たちがマノリアの近くで何者かに襲われた

んだ」

その言葉に一同は驚愕する

「あ、あんですってー!?!」

「……………あ……………」

「危ねっ!」

青年の言葉を聞いて糸が切れた人形のように崩れ落ちたクローゼを慌ててイクスとヨシユアが脇から支える

「大丈夫かいクローゼ?」

「え、ええ……………大丈夫です」

「しっかりしろ。倒れてる場合じゃないんだ」

「すみません……………もう、大丈夫です」

二人の言葉に深く頷いてから自分で立つ

一度深く深呼吸すると、胸の前で手を合わせ青年に問いかける

「お願いします……………。詳しいことを教えてください」

「あ、ああ……………。学園祭から帰って来る途中で変な連中に襲われたみたいでな。子供たちにケガは無かったがテレサ先生と遊撃士の姉ちゃんが気絶させられたみたいで……………」

「ええつ、カルナさんも!？」

カルナはシエラザードより先輩　つまりかなりの腕だ
それが倒されたという事はかなりの敵だという事
青年は通信器で遊撃士協会に連絡しようとしたのだが、生憎と壊れていた
のでこうして走ってきていたとの事だった

「そうですが……。協力、感謝します。ただ、できればこのままルーアンに行ってくれませんか？　僕達はこのままマノリアに急ぎますから」

「ああ、わかった!」

青年は手を上げてからルーアンに向かって再び走っていった
見えなくなる前にヨシユアも三人に声を掛ける

「さあ、僕達も急ごう!」

「う、うん!」

「おっつ!」

「……………はい!」

数日前、火災の報告を受けた際と同じく全力の速度でマノリア村に
飛びこんで来たエステル達
部屋も前と同じ

部屋に飛び込んだエステル達が眼にしたのは

「あ……………」

「お姉ちゃん達……………」

ベッドに寝かされたマリアとカルナと
瞳に涙が溜まっていた子供達だった

「みんな……………」

クローゼの姿が子供達の眼に飛び込んだ瞬間
全員のダムが決壊した
火事の時以上の涙。あの時、泣かなかったクラムでさえクローゼに
飛び込み、泣き始めた

「わああああん!!！」

「恐かったのー!!！」

「良かった。あなたたちは無事みたいね」

「すみません。先生たちの容体は？」

ヨシユアは看護をしていた女性に状態を訊く

「安心しなさい。二人とも大した怪我じゃないわ。ただ、目を醒ま
さないからちよつと心配なんだけど……………」

「……………イクス、頼めるかい？」

「任せろ。少し失礼します」

ヨシユアに促されたイクスは眠っている二人に近付くと、顔を寄せそのままの状態の数秒

「わずかに刺激臭。種類としては鉱石系よりも植物……他の毒素は無いタイプだ」

「そっか。……なら睡眠薬のようだね。それも副作用がない安全な」

「……出た、イクスの犬以上の嗅覚」

クローゼと看護していた女性が首を傾げる中、エステルが簡単に説明する

「えっと……イクスは嗅覚がとっても良いの。私が基本の一だとするとヨシユアが三。それに対してイクスが十」

「そこまでじゃねえよ。　　クラム、話してくれるか？」

「……………」

イクスがクラムに話してもらおうと頼むがクラムは黙ったまま代わりに声を上げたのはマリィだった

「あたしが説明します……………」

「……………頼む」

「うん。　あたしたち……遊撃士のお姉さんと一緒に北海道を歩いていたんですけど……。いきなり、覆面をかぶった変な人たちが現れて……。遊撃士のお姉さんが追ひ払おうとしたけど……。覆面の人たちにすぐに囲まれちゃって……。先生もあたしたちを守ってあいつらに向かっていった……。それで……。ヒック……」

説明を終えたマリイは嗚咽を漏らし始める
それをエステルが慰める

「……あいつら……先生からあの封筒を奪ったんだ……。オイラ……取り戻そうとしたけど思いつき突き飛ばされて……。イクス兄ちゃん……オイラ……守れなかったよ……」

血が流れ出そうなほど拳を握り締めるクラム

彼はまた守ることが出来なかった

それがさらにクラムの傷を深めているのだ

「いや、お前はよくやった。誇れ。怪我なんてしたらまたテレサ先生が悲しむ。だから　自分を責めるな」

「でも……オイラ……ヒック……」

クラムの嗚咽に釣られてポーリイとダニエルもまた泣き始める

エステルは今にも叫びだしそうだったが、子供達が恐がると思い必死で耐えていた

「はつきりしているのは……犯人たちは相当の手練ということですよ。遊撃士の方がなす術もなく気絶させられたわけですから……」

「クローゼ……」

「そしてもう1つ……。計画的な犯行だと思います。狙いはもちろん先生の持っていた寄付金……。孤児院を放火したのもおそらくその人たちでしょう」

「うん、その可能性が高そうだ」

「クローゼ……。やっと落ち着いたみたいね」

心配していたエステルはクローゼに声を掛ける

彼女がまた崩れ落ちないか心配だったのだ。だがそれは杞憂に終わった

「はい……。落ち込んでいても仕方ありませんから。今はとにかく、一刻も早く犯人の行方を突き止めないと……」

「……そいつは同感だな」

クローゼの言葉に同意したのはヨシユアでもイクスでもない、別の声
全員が慌てて扉の方を見ると、そこにはアガットが立っていた

「あーっ！」

「アガットさん……」

「アガット……何のようだ」

「話はギルドで聞いたぜ。ずいぶんと厄介な事になってるみたいじゃねえか」

「ひ、他人事みたいに言わないでよ！ カルナさんだってやられちゃってるんだから！」

落ち着きすぎているアガットにエステルが食って掛かる
そんなエステルを同じ口調で制す

「判ってる……。きゃんきゃん騒ぐな。確かにカルナは一流だ。相
当、やばい連中らしいな。大ざっぱでいいから一通りの事情を話し
てもらおうか」

「はい……」

エステルたちは寄付金が奪われたことも含めてアガットに一通りの
事情を説明した

「ふん、なるほど……。妙な事になってきやがったぜ」

「妙つて、何がよ？」

「ああ、実はな……。《レイヴン》の連中が港の倉庫から行方をく
らました」

「そ、それつて……。やつぱりあいつらが院長先生を襲ったんじゃ
！？」

「いや、それはどうだ？ 奴ら程度に、カルナさんが遅れを取るな
んて思えない。俺が瞬殺した奴らだぞ」

イクスが冷静に言う

冷静すぎて 冷たい程に

「そつか、確かに……。あの連中、口先だけでろくに鍛えてなかったもんね」

「しばらく睨みを利かせて大人しくなつたと思つたが……。今日になつていきなり姿をくらしやがって……。そこに今度の事件と来たもんだ」

アガツトが拳を手のひらに叩き付ける

彼自身相当むかついているのだらう

「犯人かどうかはともかく何か関係がありそうですね」

「ああ、だが今はそれを詮索してる場合じゃない。新米ども、とつとと行くぞ」

最初から扉の所にいたアガツトはくるりと背を向ける

「なによ、いきなり……。いつたい、どこに行くの？」

「わかんねえ奴だな。犯行現場の海道に決まってるだろ。あのバカどもがやつたかどうかはともかく……。できるだけ手がかりを掴んで犯人どもの行方を突き止めるんだ！」

「あ……。なるほど」

「分かりました、お供します」

「承知だ」

外に出ると、もう空は暗闇に染まっていた
多少先まで見えるが、昼間ほど見えるわけでもない

「わっ、もうこんな時間!？」

「ち……マズいな。これだけ暗いとどこまで調べられるか……」

舌打ちするアガット

と、その時。夜の静寂を切り裂くように鋭い鳥の音が響く
次に現れたのは、先程から姿が見えなくなっていたジークだった

「まあ、ジーク……。どこに行ってたの？」

「な、なんだコイツは」

「クローゼのお友達でシロハヤブサのジークよ」

「はあ……お友達ねえ……」

こんな時に何やんでんだか

そんな表情を隠さず、言葉にも滲ませながら呟く

「ピュイー! ピュイー、ピュイー!」

「そう……わかったわ。ありがとうね、ジーク」

「ピュイー」

笑顔（少なくともそんな感じ）でクローゼの褒め言葉に鳴き声を返すと翼を羽ばたかせ中空に停滞する

「まったく呑気なもんだぜ。で、お嬢ちゃん。そのお友達はなんだった？」

「先生たちを襲った犯人の行方を教えてくれるそうです。襲われた時にちょうど見ていたらしくて……」

真剣な表情のクローゼが言った言葉に一瞬呆ける
だが、次の瞬間にはぷっ、と吹き出した

「ははは！ 面白いジョークだぜ……」

多分エステル達も苦笑してるだろう、と思いつつながら笑うアガット
しかし笑い声は聞こえてこずおや、と振り向くと、

「やった！ さすがジーク！」

「うん、お手柄だね」

「やっぱりお前って凄いな。格好良いぜジーク」

一切、まるで疑わず停滞するジークを褒め称えていた

「ピューイ」

ジークも誇らしげに高らかに鳴く

慌てたのはアガットの方。分からないはずの鳥の言葉を一分も疑わ

ず信用するエステル達に声を掛ける

「ちょ、ちょっと待て！ お前ら、そんなヨタ話をしんじてるんじゃないねえだろうな！？」

「ヨタじゃねえよ。ジークは信頼できる」

「僕たちは何度かこの眼で確かめていますし」

「信じないんだつたら付いて来なけりゃいいのよ。クローゼ、ジーク、行きましょ！」

「はい！」

「ピューイ！」

アガットを放ってジークを追って駆け出すエステル達
残されたアガットは、また呆けてしまったが頭かぶりを振ると慌てて追い掛けるのだった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5109/>

蒼空の軌跡 FC

2011年12月11日22時57分発行